

を聞せ給ひ。又諸隣家を召され一々に事の實否を糺見るに諸近隣悉く無三四が説話せし事ども詳かに訴しかば秀家卿甚だ白倉が不義。ならびに諸高弟等が振舞を憤り給ひ實に彼黨の兇惡は人面獸心の所行。嘗て我國の風俗を失ひ。其惡臭を天下に流すといふものなり。殊に清正朝臣の慮ふ所も恥かしく。速かに奸謀の者共を捕へ首を刎ながく後來の庭禁とすべしと。のたまひ。忽ち福田十右衛門福島左十郎浮田源兵衛が如き奸人。一々召捕られ罪科究り或ひは刎刑を蒙り。自刃を賜りぬ。此の事繁多なるが故に略す

宮本討二兇賊於山中一事

行路難。不在水。不在山。祇在人情反覆間。とかや白倉が心術穩ならざるが故に備前國岡山の城外。すでに騒動に及びしかども日既に没し。無三四が行衛知れざるが故に。果して夜に入て靜りける。實に恐るべきは人情一時の反覆なり。此時宮本は危急の難を脱れ。播磨路さして奔りしが。忽然として思ひけるは。吾今日あまたの人を損ひしうへは。追人此還道に逐來る事疑ひなし其時追人に對し。膝を屈し。千萬言を盡して理解を説とも。分説は聆納まじ。道上多勢なるときは。一人の力をもつて敵しがたく。終に縲綆の辱めを蒙る事必然たりさらば道を更て逃んにはと北を臨んで駈けるが。嚴寒はだへを犯し。朔風皮肉を割がごとく殊に身上僅に一重の浴衣を着し。いまだ月色のぼらす。滿天曇りて雪は龍鱗を飛すがごとく。草鞋をだに履されば。兩足すべて露頭の石に跌踢やぶれ。血は踵につたひ。尋常の者なりせば。争か一足も進むべきされども鐵膽石心の豪傑なれば。少しも氣を落さず。直ちに美作國に超んところざしをかため。道路の善惡を云ず。山坂の峻易をも顧ず。ひたすら山路にさしかり。岩を踏み。苔に滑り。谷をわたり。峯を越。北山ふかく迷ひ入り。時に中多廿日ばかりの事なりしかば。山路さらに闇して。逕路一ツも見え

よひ。思はず嘆息して時刻を考ふるにはや三更の頃とおぼえて。銀盤はるかに登りたり。無三四古木の下に立て。呼れしや。斯る深山の中に分入のうへは。追人よも此所へは來るまじ。然れども身には僅の浴衣を着し。行李を失ひしのみならず。盤纏の貯へともあらざれば。明日よりは如何して身命を保つべき。誠に皇天皇土の神祇にも見放されけるが淺ましやと。暫し呆れて居たりしが。否々大丈夫なるもの。斯る窮路に迫りて。志を墜す所にあらず。大聖孔子に於てすら。猶陳蔡の困みを蒙り給ひし事あり。況や凡夫の身のうへ。如斯憂めは我壹人而已にあらず。世上はなはだ多し。何とぞ此山を越え。人里ある所に至り。一飯を請ひ求め。身を全ふして。實父の仇を報ずべしと。ふたゝび精神を勵まし。木陰を立出。また草木を押分て。兎角する程に一時ばかりにして。一つの峯に駈上り。月の光りにすかし見れば。此山の頂四方へ向ひて逕路あり。また側を顧みれば。草菅の辻堂あり。無三四心を安んじ。目を留て仔細に視るに。彼堂大約一間四方ばかり。東一面は板を張り。三方はことごとくとり放ちて。もとより戸もなく。堂内の板敷は。旅人及び樵夫。牧人などのために塵されて。沙土狼藉たり。無三四忽然こゝろ付。扱は此處は美作へ越る時とこそ覺れもし佛前に供物などの残りあらば。探出して賞翫し。今宵の飢を凌ぐべしと。堂内に這上り。徐々として搜し伺ふに。三尺餘りの厨子あり。三方に板を張り。前面一方には兩扇の隔子を構へ。隔子の内には布の戸帳を張其裡に一面の机を具へ。香爐華飾の類ひは備へたりといへども供物の類一ツもなし。猶仔細に探り試みるに。石軀の地藏尊を安置せり。無三四大きに精神を勞らし。嗚呼時なるかなかゝる艱難に逢ふこそくるしけれ。今日午の刻に少しの飯を喫し。今四更の時候にいたるまで飲食を斷て十餘里の道を奔り。燒火してあたらんにも火爐をだに用意せざれば。是とても心に任せず。よし莫遮もし一心轉動なき時は。死地に墜て活路を得るといふ所我流儀の極意なり此辻堂こそおのれが爲には金殿樓閣わづかに一夜の辛抱なりたとへ水火の中なりとも。一睡して能夢見んと心自迷心自悟し。厨子の中へ手をさし入。香爐机の類を取除け。石佛の本尊をかき抱き傍に居置。ゆるさせ給へ地藏菩薩。今夜は

かりは尊容に更りて。御厨子を守るべし。愛慕をたれて不孝の子。無三四を惡み給ふ事なかれと。信實に祈念し。佩刀を携へ。厨子の内に潜り入り。もとより身材普通に越たる大漢子の。小厨子の裏に座せしかば。頭を伸し膝を鬆める事能はずされども切瑳琢磨を身の娛みとする英勇。さらに少しも苦しみとせず。膝を抱き躬を踞りやがて睡を催しける。漢朝の蘇武がことを賦する詩に。渴飲三月窟水。飢餐三天。上雪と作れり。誠に忠臣孝子といへども。期に臨んては窮する處あり。既に無三四順孝の志しありといへども。圖らざる禍ひに罹り思はず一身倦勞れ。前後不覺に寢入しが忽ち必々剣々と火をたく音。耳に入りければ。兩眼を瞭ひらき。屹と見れば。戸帳の外に活と燎火のひかりあり。且驚き且疑ひながら。竊に戸帳を提げ覗ふに。兩人の大漢子。堂の前に火を燒て熾り居る。また一人の大漢子有て近邊より幾箇の枯柴を伐あつめ運び來り。三人一同に臂を露はし。股を開きて惣身を熾り。齊しく語りけるは。扱々今日は多くの道を走り。甚だ勞れり。疾飯を喰ふべし。此時一人立あがりて堂の板敷の上におろし置たる包裹より。三ツの飯筒とり出し。各々筒の蓋を開くとせしが。一人か申けるは。晦氣き女畜生。我脊中に負れながら。始終連泣。まづ這奴にも少しの食物を與すべしと云へば。兩人の漢子打黙き。側の園地より。年廿四五ばかりなる婦人を擧來り。縛めたる索をほどき兩肘をゆるめまた口をくよりたる猿轡を解きければ。女は大きに泣かなし三人に向ひ申けるは。我には夫あり。親あり。其うへ幼き子もあり。若宥て歸し給ふ事叶ずば速に殺して給れ此事をも聞入給はずば。今より長く食を斷餓死して死べし。三人の漢子ひとしく申けるは我儻は敢て汝に執心の情なきによつて。汝の望みに任すべけれども。我首頭先日汝が家に至りて汝を見せめ。殊外戀慕し何とぞ奪ひ來れとの分附。這一回三十日ばかり汝が他行するを伺ひ。辛苦して捕へたり汝只顧歸りたく思は首頭に對面して後。直々に願へ宵より數回此道理を理説といへども。嘗て少しも我等三人の詞を用ゐず。孩子の如く號泣は。利害にくらきものなり。まづ火にも熾り。少しの食をも喰ひ。心を醒めて故郷へ歸る分説の工夫せよと。三人互ひに目撃してぞなだめたる無三四等が説話

を悉く聞すまして思謂。さては盜賊ござんなれ。計るに此婦人を奪ひ來りしに究つたり。其儀ならば一ツには女を救ひ。二ツには渠等が衣服盤纏をも奪ひて。自用の調度にせんものをと。心中大きに歡喜ひそかに厨子より跳り出。三人が開かんとする飯筒を引掠り。堂内に投入たり。三人の盜賊等。おもひ設ざる事なれば。大きに驚ろき。一同に立あがらんとする處を。無三四電光の閃くが如く。兩刀をもつて。左右に二人を潑喇喇と斬る。二人の曲者頭上二ツに剪割れて二言と云ず倒れ伏す。此形狀に一驚を喫ひ。一人の盜賊たちまち魂魄天に飛び。手足齊しく痿て。走る事能はず。透さず引摺て大地に投着大きに惡聲を出して罵り。大膽なる賊畜。およそ三千世界の中貴きも賤きも人間ほど尊きものなし。貧苦に迫りて。金銀財寶に念を掛けるは。盜賊の所行なり。然るに夫ある婦人を劫し。色慾を恣まにせんとする暴惡無道。いま悉く碎肉に切ても飽たらじ。汝何國の山中に隠れ居る盜賊なるや。又最前我首領といひしは何なる者ぞ。其兇魁の名を云へ。半點も詭を云はゞ。忽ち汝が身に。三百の穴を鏝べしと。白刃吮にさし付くれば。賊人大きに戰慄き。何とぞ命を助け給へ少しも詭る事なく申すべし。某が魁首と申は。備前國三石の山中に寨を構へ。彼處に隱栖する盜賊。不動の權太郎と申者なり某どもは。其下風の草寇なり。然るにかの魁首權太郎。五六十日以前に美作へ參り。同國高田と申す驛にて。富貴なる郷士の家に忍げ入り。多くの金銀ならびに衣服のるゐを盜み取し所。はからず其家の女房を見初てより。忽然かの者に戀慕し。ひたすら此人を奪ひ取り山寨の内にて娛まんと思ひ。我儻三人に云附美作へ遣したり。是により我等さまに心をを用ひ。昨日此の婦人の親郷より歸る所を待て。劫かし歸りたり。更に我輩の惡心ありて劫し捕へたるにあらざと。地に平伏して申けるが。無三四また女に對ひ婦人安堵せよ某全く不良の徒にあらず。宮本無三四といふ者なり今日はからざる爾々の難を遁れ。飢寒を忍び。この堂内に一宵を待明す處に。婦人の哭聲に睡り覺て惡黨等が所爲詳かに見届け今兩人を害し婦人を救へり女は無三四が言を聞て大きに歡び。扱は憑しき人にて候か。われ今旅客の兩人の賊を殺し給ふを見て。悲さの上に駭を加へたる所に。ま

た唯今の芳意ある課を承り。驚愕の中に歡喜ひとへに夢かと思はれ待るなり賤妾は作州高田の在中。百姓の娘にて當年廿五歳なり同じ在中の郷士。富塚三郎左衛門と云ふ者の家に嫁づきことし三歳になる女孩もあり。昨日父の家に至り。黄昏に一人の婢女を連れて丈夫の家に立歸る折から。路次に於て此者三人。近邊に人無きを考へ婢女を捕へて路傍の樹に縛り着。又妾が口には聲を驚さるやうに物を啣ませ結び着。兩の肘をも厳しく縛り。山坂の間をば三人の漢子共更るゝ負ひ。又たは擧りなどして物をも云はず。千辛萬苦の憂目を見せ。此所まで連來りぬなほ此うへの御恵には。妾が家まで送り届け給らば丈夫も嘸雀躍申すべし。禮謝には旅客の衣料盤纏をも調へ奉るべしと。涙を流してかたりければ。無三四大きに笑ひを含み。夫は悦ばしく。然らば某は渠等が携へたる飯を食し。飢を凌ぐべしと。飯筒を開き飯を受用し。又かの小賊にも少計喫しめ。最前切倒したる死骸を捜し。腰間の盤纏ありしを收とり。次に彼賊に對ひ。汝すみやかに其着たる所の衣類を脱て。ことごとく余にあたへ汝は又た余が着たる所の此浴衣を着て。早く此婦人を背負ひ。我に従ひ高田迄送來るべし。若半點も背く事あらば。兩人の死賊のごとく屠殺さん。此時小賊大きに怨み憤るといへども。更に少しも争ふ事能はず。衣類を褫て無三四に與へ。己れは僅に一重の浴衣を着更。嚴寒堪へがたしといへども。敢て一言も發さず。無三四は綿衣をあたくかに累ね着て。呵々と笑ひ。あら笑止千萬。夢幻の世の中なり。賊人は剣れ。潔白の人は衣服を累ぬる。是ぞ冠履の轉動なり。去來夜の明るに間もあるまじ。疾道を急ぐべしと。婦人を小賊に負はせ數多の山坂を下り。人家ある所に至り。みな一食事を調へ。嶮岨を超。平地を趨り兎角して既に其日の暮に。高田近くぞ歸ける。小賊は終日無三四に責立られ。婦人を負ひ。難所の道を急ぎ。身體つかれて泥のごとく。纒無三四に對ひ最早日も暮れ脚踏くらくして。婦人を負參らせては。若過て谷へ墜る事もあるべし。是より高田へは纒一里ばかり。唯一筋の還道にして。外に遮路もなし願くは我に暇を賜らば。是より罷歸たしと。地に脚踏ねがひける。無三四答て無草臥つらん。速く婦人をおろすべしと。其まゝ婦人を下させ。側に懸せ改に

は莫大の褒美を遣すべしと。水もたまらず。拔打に小賊が眞額兩片を劈割。すぐさま谷へ懸込たり。婦人は大きに膽を消し。戦ひ懼るゝばかりなり。無三四婦人にむかひ。かならず愕き給ふ事なけれ此もの共初より。かく打棄んとは思へども。婦人を介抱させんため。一日の命を延しぬ。所詮這樣の悪黨を助け置とも。畢竟賊心をあらたむるもので無く。これ我殘忍に似て。殘忍にあらず。一惡を除き衆善を救ふといふ者なりと。懇に婦人を慰め。是より只管道を急ぎ。其夜初更の時黎に。高田の驛に着にけり。

繪本二島英勇記 卷之七

無三四發足美作一事

爰に美作國高田の郷土富塚三郎左衛門が家には。其妻を盜賊に奪れ。婢女は路頭の木にくより付られ居たりしを助け歸り。仔細を尋ね問に。賊は三人なりと申せしかば。富塚やがて近邊の郷民等を催し。諸方の山林へわけ遣し。盜賊の棲をさがし騒動大かたならざる所に妻は無三四に助られて家に歸りければ。父母親族。すべて手の舞足の踏所を忘れて歡び。又その蹻蹻を尋るに。彼妻涙を流し。始終つまびらかに物語りければ。富塚斜ならず歡び。まづ無三四を上座とし。急に藏を開き新しき衣服を取出して無三四に着替させ飽まで酒食を薦め。其夜はあたゝかに無三四を休ませける無三四は備前の危難を脱れ且旅行の勞れに依て。身體大きに惱みいたみ。十日ばかり病臥けるに。富塚夫婦心を用ひ醫師を迎へ。頻に藥湯を施し。十餘日にして全く快く治しければ。主三郎左衛門に向ひ此程よりの恩を謝し。この日はじめて白倉源五左衛門が家にて難に罹りし事ども。ならびに復讐の大望につき武術修行に詫て諸國經歷のおもむき逐一に語りける。富塚横手を打て驚きひとへに白倉が家の御働凡夫の所爲とは覺えず。これ全く天の孝心を感じて助給ふことうたがひなし。まづ我家に當年は輟り給へ。某ひそかに物慣たる者を。商人の形に出たせ備前岡山につかはし。委く落着の所を探り窺ひ。其後改名して宜敷は改名をし給へ。後難を防ぐばかりごと廻し給へ。た旅行に趨給はゞ。盤纏の類ひは某ともかくも賄ひ申べしと。懇に申にぞ。無三四も安堵の思ひをなし。今年はこゝに止まりける。三郎左衛門は己が腹心の者を撰び商人に置て備前國へ遣しける。その後十日ばかりを経て立歸り。我岡山の城下に至り。事の儀を同所所に。白倉が家にて。手紙を受しものども或ひは追討おもきは死罪に行れ。

秀家卿はなはだ白倉師弟の不義を憤り給ひ這樣的事は人倫の風俗を失ふ所なり。隣國へ聞えても。なほ國の恥辱なりとのたまひ。これにつけても宮本氏のはたらき。ひとへに鬼神の所變なりなどと。評判はなはだよろしく。中々彼國より追手を出さるゝこと決して候まじと申ける。富塚が家内大きに歡喜。いよく無三四を尊敬せり。年矢速に立て。其年もすてに暮。あら玉の年をむかへ。天正十九年の春になりぬ。正月十六日無三四申けるは。われはからずも貴宅に新春を迎へ恍惚す幾許の日を過せり。明日より當所を發足し。伯耆國に立越。因幡但馬を経て。丹後より及び北陸道に趨べし。三郎左衛門申けるは。世上いまだ餘寒も嚴ければ。今一月逗留し給へ。其内には山々の雪も消。手足あたゝかにも成申べしと。頻りに轍るといへ共。終に聽ず。又三郎左衛門も別れば惜きならひなれども。一回は別るゝ道なれば。ぜひなきことにおもひ多くの路費の金銀を用意し。すべて表袴の衣量を包袱一隻に拾收無三四が前にさし置申けるは。愚妻が命を救ひ給ひし厚恩に比れば。なほ家財半を分て奉るとも。謝し盡すに足らず。多くの衣量等を參らせなば。この後も行末遠き長途御難難をはゞかりて。這些の衣量盤纏を參らすなりこの後盤纏の絶たる事あらばいづれの所に在すとも一封の書をだに送り給はゞ。早速遣らすべし。いさゝか輕微の所といへども。これを笑納し給はゞ。満足ならん。無三四押いたゞき包袱をひらき見るに黄金一百兩碎銀二三百粒。多くの衣量あり。無三四黄金十兩碎銀五十粒衣服三ツをわけて包袱に收め。その餘はことごとく三郎左衛門に戻し。寔に芳志千萬かたじけなし。是にて我ためには十分の路用なり三郎左衛門何故に人の志を空しうしたまふぞ。無三四が曰。金銀多きときは艱難を忍ばず夫讐を討事の難きや。越王勾踐は薪に臥膽を嘗。晋の豫讓は漆を浴し炭を吞。徒に腰に黄金を纏ひ。勞れたる時は駕に乗り。倦たるときは馬に跨りなば。是ぞ遊參の回國なり。此十片の黄金も我ためには實は過たる賜なり。しかれども自然病患發りし時の用意なり。われいかでか人情をつとめて。そら辭義するものにあらずと言潔白と艶なかりしかば。三郎左衛門も深く感じ。強て言す。旅行の支度ことごとく調ひしかば。十七日の曉天に富

塚が家を辭し。伯州さして急ぎけり

編者曰無三四富塚が家を出て。後伯耆を経て因州鳥取に至り。宮部是祥坊が家臣貝田支蕃といふ者あり。これと比量をなせしに。貝田支蕃比量にうちまけ。憤り怨み密に無三四が旅宿へ押寄。門人大勢と俱に夜襲ふ。無三四憤激して。貝田を打殺し因州を去石見國へ趨き。そのち丹後を経て所々に於て武術の支妙を見せたる事多しといへども繁きが故に略しぬ

穴間山中に殺二鮫魚一事

斯て宮本無三四は諸國を廻りく。天正二十年六月。越後國大野郡を経て美濃國へ出んとおもひしかば。穴間の山中に入りぬ。されば穴間越と申は。人烟稀にして。山高き事。幾千仞といふ事をしらず。李伯が蜀道難の詩に。天梯石棧相勾連。黃鶴之飛尙不能過といひしは。げに此山の事ならん。むかしは棧を構へ谷をわたれる藤蘿を橋として。僅に往來を通せしとかや飛鳥枯木の中に號び。まことに遠近のたつきもしらぬ山路なり。此山をわたれば美濃飛驒兩國に越る逕路なり。且因に曰。飛驒國は。むかしは美濃國と一ツなり。美濃國大野郡。益田郡。荒木郡を割て飛驒國を置と國史に見えたり。もと彼國は山林たるが故に良木など多くあり。上古の世には朝廷内裏造營などの時。賦役にさゝれ。多くの大工を出したる所なり。これを飛驒の工といふ。飛驒の工といふは更に一人の名にあらず。然るを今の世の女童などの話に。其所の堂は飛驒の匠人の建たるなり。此所の社は飛驒の匠人の作りたるなどいふは。後の世の誤りなり。殊更穴間は美濃飛驒に境をまじへ。地は越前に屬すといへども。山脈は美濃の國に續けり。故に今美濃國長柄川といふは其源は越前國穴間の山中より出。岐阜の北を流れて長柄川といひ。下の方にては合渡川といひ。合渡の下流島といふ所にて木曾川と一ツに落合後伊勢國桑名の大野に入るなり。却て無三四は世の中に見

しき事をしらの豪氣の人なれども。かはかり人跡絶たる山中に入て。更に東西を分たず。岐路所々に有て。間んとすれども前後人なきにより。忙然として立たる所に。忽數十人の叫ぶ聲。山も崩るゝばかりに聞えければ。無三四大きに驚きこはけしからずの聲かな。人居まれなる山中に。斯大勢の號哭こと。合點ゆかずと首をめぐらす間もなく再び一齊にさけぶ聲耳につらぬき聞ゆるにぞ。いよゝ不怪と窺ふ所に。無三四が後の方より五六人の男共手毎に鎧を提げ。頭には鉢巻しめ。身には藤布を以て織たる帷子を着し。双身何も眞黒なり。此炎天に干れて山野を家とする故なるべし。無三四側に避て彼等に問けるは。汝等鎧を携へ何れに走るぞ。最後なる男申けるは。此山の後の方に一ツの鮫魚すみ人を撮事毎度なり。され共唯蟒蛇の所爲ならんと思ひしに。此頃鮫魚を見出し。今日村々より人數多く集り。彼鮫魚を撮なりと。いひ捨て急ぎゆく。無三四奇異の思ひをなし。こはけしからぬ珍説なり。鮫魚は鱈魚の種類にして。海中の惡魚なり。いま山中に住といふは心得がたし。韓文公が文章に感じ。眞淵の鱈魚その處を移したるといふは。海中とは思はれず。されども是とも水ある淵とこそきけ。山中に鮫魚の居るとは。何にもせよ不怪なり。我彼者共に従ひ。彼處に至りて。是を見んと山路の險阻を厭ひなく足にまかせ。郷民の後に従ひ驅行處に。人聲僅に間近く聞え。四方次第に闔く。虚空一面に曇り。陰雲谷を覆ひ。物すごき事いふばかりなく風の響々として。山谷鳴ひどき。人の毛孔を寒からしむ。これ數千百年の年功を経たるものには。老狐猫子といへ共。自然と造化の功を自在する處あり。今此鮫魚も幽谷の間に栖て山氣を吸ひ雲霧を起すの妙用あり。無三四巖上に立て遙に見下せば。一ツの谷あり山勢相陟り。數百年の老樹枝を垂て谷を覆ひ。此地かの惡魚の栖なり。すべて數十人の健民。手毎に猪鎧を引提。かけ向ひ。または鐵砲をもつて取かこむといへども。惡魚の猛惡すさまじく。霧を吹かけて近づきすゝむ事能はず。鐵砲をうちかけるといへ共。双身の鮫甲固くして鐵石に砂を投つけるがごとく。少しも肉に通らず。其上四ツの手足ありて谷の間をはひめぐる事自在を得。口を張牙を顯し飛かゝる勢ひ。物すさまじく。其形状大約七八間許り。

流石の健民も勢ひ避て互に人を楯とし。鎗を拵ながら突かくべき義勢はなかりける。無三四此ありさまを見てたまりかね。直に谷へ驅下り。いかに汝等。唯鐵砲を放つといへ共。目當の善惡を辨へず。みだりに甲上をうつによつて打とめる事あたはず。眼をねらうて放つべし。健民共此言を聞て心づき。眼をねらひ放つとはすれども。愈々心忙てうちかくれば。一ツもあたらず。無三四一挺の鐵砲を奪ひ。忽ち眞先にすゝみ。一聲の雷砲を放つに的當すこしもあやまらず。惡魚の左の眼に打あてたり。然ばかり猛き曲者も眼をうたれて。活動自在ならず。無三四は精しいよいよ加はり鎗一筋を引奪ひ。跳り上て右の眼を一筋に突留たり。健民共これに氣を得て。續て鎗を入。終に谷の内に突伏同音に歡びけり。此時無三四鎗を捨そのまゝ、鮫魚の上に飛あがり。尾より頭まで仔細に是をみるに。長さ八間餘。脊甲の鮫魚はなだ大きにして。大なる物は指の頭のごとく。頭の怪畏なること。まことは海中にすめる熊鰐に異なる事なし諸人悉く歡び。これがために親をとられ子を撮れしもの天に歡び地に躍年ごろの恨を晴したることの嬉しさよと。聲をはなつて泣もあり。無三四諸人に對して申けるは。我今この形をみるに。全く海中にすむ所の物と同じ此邊海に遠く殊に此谷を見るに。巖石の間老樹の陰齊しく。濕地にして。滿地濕ひあり。然は云へ淵川とてもなく。いかゞして如此ものゝ栖やらん萬物利を以て推がたし。一人の老人側にて有てこの事を聞きたへけるは。いやさして怪むに足すたまゝ此山中にて鮫魚をとる事あり七十年前以前にも此地にて。ひとつの鮫魚を撮たりとうけ給り候。其時の長さ五尺ばかりのものなりと老人どもかたり傳へ侍るなりそのみならず。此邊の山中木の葉などの下。又は竹林の中すべて落葉の下濕りたる處に自然と小さき魚を生ずる事まゝあり又此地川邊の篠葉水に漬り朽たるが化して魚となるは常の事なり。上方の水邊にて鮫と申小魚に似たり其外怪しき事幾らも候とぞ申ける。無三四は奇怪の不審解。健民にわかれていそぎゆく。

無三四逢天狗山伏一事

宮本無三四思はず。鮫魚を撮にひかれて。山中にひまどり。其日未のさがりより山路を急ぎ。家あるかたへと走るといへども。人跡いよゝ絶。日西山に沈みて。はや黄昏に向たり。無三四いたく後悔し。嗟呼これが過りなり。先刻の健民共に旅宿を請なば。渠等仔細なく。一宵を貸べきものを。其上土地の善惡また人里の遠近をも問はずしてひたすら道を走りしこそ。我ながら愚さよ。今宵は六月廿日なり宵のほどは黒闇なれば行がたし。宜布木陰もあらば。其所に一宿すべしと魍魎鬼神もおのが朋と心得たる大丈夫なれば。何の怖畏もあらばこそ彼方此方と見廻すうち。山路闇に朦朧として。はや世界冥々と晩果たり。されどもさぐりながら道を求め一ツの峠に上りみれば。此所は山頂すこし平かに。風よく吹通り蚊など少なかるべく見え。老樹枝こまやかなる松あり。是幸ひの所。ござんなれ。秦の始皇にあらねども。此松がえに宿求むべしと。包袱の中より雨具取出し松の根に布。草鞋を脱して膝打組。松の木にもたれかゝり。やがて睡を催しける。山路の睡眠ころよくや有けん。凡三更の黎まで一息に瞑み。忽ち兩眼を睜れば月色高く上りて。一天明朗とほがらかに照し。長空一片の雲もなく。微風徐に來りて肌ころよく。思はずしらず聲をあげて。あら面白の山路の有さまや。かゝる風景の地に月を翫ぶ事も。全く修行の徳なり。月の光も清ければ。山路くらくも有まじ。去來明日の炎天に照されて行んよりは。今宵のうちに難所を越んと。速に座具を納め。包袱を負峠を下らんとする所に坂の下より人影見えて。上り來るものあり。計らず礮と行逢たり。無三四左りにかはして行んとすれば。渠左りを塞ぎ。右に避て進んとすれば渠また右を遮り。無三四心に思ひけるは。是なん知れたる盜賊ならめ。打殺して捨んと笠を上げてその人物を見るに頭には檜木の笠を頂き。身には給の帷子を着し。身體六尺餘りにして眼の光星のごとく。亂髮肩に垂。大太刀前垂に佩。脊中に藤の笈を負ひ。是分明に山伏なり。無三四聲をかけ

て。いかに賊山伏汝何故に道を遮るぞ。彼者こたへて曰。汝こそ盜賊剪選の屬ならめ。某は天下の靈場仙蹟を尋ね。修驗苦行の山伏なり。汝が摸樣清白ともせず。其上斯深更に及び。深山幽谷の間に徘徊する事。山賊の類にあらざりて何者ぞ。無三四呵々と打笑ひ。汝靈地名山に分入て苦行するは。不借身命の佛道修行といふ者なり。然るに今往來の路頭をさし塞ぎ旅行の妨を働くは必定悪心あること明白なり。我は清潔の君子。天下廻國の武者修行。尋常の旅行と一様に意得。少しにても妨を做ば。兩片に斬屠べし。いまだ我佛意あるうちに。早々道を閉去れ。山伏は無三四が大言を聞て戯嘘。さればこそ某が推量に違す。今の時武者修行と稱して。天下を廻國する者。兇盜賊に等しき罪人なり。専ら少しばかりの武藝に慢心を生じ。自己の修行未練なるをもつて人の勝たるを憎み。暗計を構へ。善人の命を傷り。無益の殺生を成て樂とす。我ふかくこの輩を惡み。一々殺害し。天下の害を除かんとす無三四が曰。汝が説のごとく。某人の生命を絶事夥し。されども皆我殺たる者は。不善非道にして人を欺く惡人を亡したるのみ。一人も好人を傷らず損はず。山伏曰所詮論は無益なり。天下の衆生鳥獸虫魚の類ひといへども一ツとして佛生を具せずといふ事なし。まして人界は萬物の長不善といふ共豈輕々しく損ひ破るの利あらんや。一人を殺さば一佛生を絶し。汝が如き者を蕩まゝに放ち置ときは。行末幾許の佛生を斷んもはかり難し。這樣的惡人を殺すは一殺多生の功。佛の本懐に叶ふ道利なり。汝速に我慈悲道得の刀を受よとふよりはやく。笈を下して側。に置。跳り上りて切かゝる。無三四も憤り頭上より發し。忽ち兩刀を拔放して飛係り。是より兩勇手段を盡し。闘ひ神妙に入て。互ひに負す劣らず。既に夜半の時刻より曉天に至るまで。撃合切結ぶこと三時許。兩方一點の差りなし。無三四密に思ひけるは此者の武藝更に人間の業とは思はれず。されども渠が性。儼然なれば利害を説て和睦する共。まげて従ふ者にあらず。是非打倒さずんば却て禍ひを遁れがたしと。精心を抖擻し。一回死力を出し鋭と呼はる聲と共に。曲者が右手の肩骨の上。磐石も徹れと切付れば。あだかも鐵石を撃がごとく。手ごたへして山伏一聲わつと叫び。忽ち虚空に飛上り。何

國ともなく蹴さりしは不思議といふも不思議なり。無三四は身體倦勞れ忙然として立たる所に。篠目潮やくみえわかりて。日は扶桑を拂ふて出たり。やがて心づきあたりを見るに。かの妖怪の逃たるかた。所々に血したゝり。草葉をあけに染けるにぞ。扱は天狗の所爲なりとはじめて舌を卷きにける

編者曰。此のち無三四美濃國關といふ所に出。宇留女治左衛門が方に逗留し。危難をのがれ。信濃へ趨し事ありといへ共。繁多なるがゆゑ略す

宮本無三四逢笠原新三郎事

斯て宮本無三四越の國穴間を超。美の國に出。それより信濃路にさしかゝり。古しへ今の戰場など見廻り。ひたすら諸國の英勇に見え同年霜月中旬信濃國川中島に出。往し年永祿年間信玄謙信の對陣の地を只顧にながめ。海津の城地など尋ぬる内。はや中冬の天にあたり日は短く夜長き頃なりしかば。夕陽西山に没しける。無三四旅宿を借て一城地をあかさんと。彼方此方徘徊し。人家もがなと見たせども。近邊さらに人烟まれなり。無三四獨言して又今ばんも野宿なるべし。せめて雨雪を凌ぐべき堂社もあらん其所に入て休まん物をと。岡山に登りて見たせば。人烟遙に上りて一ツの破家あり。無三四歡びに堪ず。これ幸ひの人家ござんなれ。まづ此家に至りて夜をあかさすべしと足にかせて驅ゆく間に。はや黄昏と成にけり。無三四破家の裏に入て見れば。年餘六十有餘の老人爐火を焚て居たりしかば。慰撫に禮をなし。某は廻國の者にて候が。俄に暮にせまり。旅宿を取はづし難儀に及びぬ何とぞ一夜をあかさせ給は。莫大の厚恩ならん。老人答て廻國とのたまふからは。武術修行の方とぞ存すれ快よく泊り給へわれ獨身の老人なるが故に飯をこしらへ參らす事かなひがたし。米は澤山に候へば自身に炊て聞し召れよと心よく申にぞ無三四はなはだ歡び。まづ包袱を片方へおろし。足を洗ひ爐の邊にいたり。ともに火にあたり。さらば飯を炊くべし。老人やが

て米を取出して與へ。おのれもともく野菜など調へ。無三四にあたへ。食事畢りて後。木を運び來り。おびたゞしく爐の裏にくべ主人無三四も爐を圍んで休みける。烏鵲啾啄と鳴て夜明たり。無三四目をひらき急に起。戸をひらひて見るに。野も山も一面に雪積り夕の氣色と景光かはり。誠に銀世界となりにけり無三四仰天して。さても降たる雪かな。夕べこの處へ參りし時は。天色ほがらかにして。斯一夜の間に雪降るべしとは思ひよらざりしものを。老人申けるは。今年は時候暖和にして雪の來ること例年よりは遅し。夜前寂莫として物音しづかなりしははたしてこの雪の來るべきしるしなり二三日は發足し給ふ事かなまじ安心して逗留し給へ。無三四懊惱しく思へども。その日かつて發ことあたはず。忙然として居たりしが。忽然壁の上をみれば。二すぢの木刀一柄の太刀をかけた。無三四老人にむかひ申けるは。我夜前より足下の人物骨格をみるにひとへに尋常の人とおもはれず。又壁の上に二すぢの木刀を掛られたるは。さだめて武術鍛錬の御方とこそ存れ。願はくは其來歴を語り給へ某は肥後熊本の産にして幼時より劍術を好み。三ヶ年以前より武術修行のため。本國を出しかども。いまだ然るべき師を得ざるのみならず數多の難を脱れて爰に來る。もし自得し給ふ所の妙技もあらば。その奥囊を叩て致へ給はば。辱なからん。老人微笑として笑ひ答へけるは。某はもと當國にて古き家から。則笠原平五頼直が末葉代々郷士にて。此所に住居し。われ農を嫌ひ弟に家を譲り。獨り爰に來りて隱逸を好む。某が名は笠原新三郎頼種と申す。我も十一歳の時より劍術を好み。晝夜心を武術にゆだね師を求め。隣國を經歷して武術すてに一流の印可を得たり。其淺深得失を考ふるに。武藝には相氣といふものありて。この相氣をだに得るときは百發百中發千中。さらに勝を取ずといふ事なし。世間の武藝者比量をなして後。勝ものはからざるの勝にして。これは皆怪我の高名なり。百度比量て百度勝といへ共。畢竟實の勝にあらす。我年來此事を歎き。數年此弊廬に引籠り。相氣の工夫に寢食を忘れ。終に其玄機に通達せり。是によつて人と比量をするに人氣の起る所を知り。其劍の何れより來る。何れを打んとするといふ事。玉壺の中を見るよりも安し。無

三四飛しざり申けるは。實に先生の言妙論なり。我備前の國を始め所々の鬪争みな一命を棄捨て勝を得たるのみなり。必定の勝にあらず。ねがはくは此道を教授し給はば。生々世々を経るとも厚恩を忘れじ。新三郎答へて曰。然らばまづ試みに一回立會べし。無三四そのまゝ座をたち廬の外に出。深沓をはき。廬外の雪五六間ばかり足にまかせて踏かため。比量場となしければ。新三郎も立あがり。壁の上にかけて置たる木刀を二すぢながら無三四に遞し。足下兩刀を得たりと聞。まづこれを持べし我は木刀なければ是を持べしと。側にある處の鍋蓋を掬。やがて廬前に出。雪の堅庭に立あがれば無三四木刀を提さげ。直に新三郎に打てかゝる。新三郎見すまし。鍋蓋をもつて手もとへ入込。水もたまらずかの蓋にて木刀を地に押へて働かさず。無三四是れより精神を勵し。凡五六度の比量一度も勝を取事あたはず。そのまゝ木刀を棄。雪の上にひれ臥。寔に奇妙の御修練。中々人力のよく及ぶ所にあらず。長く先生の門下にあつて仕へ奉らん。新三郎悦び。われも此道を天下に施し。武藝をまなぶものゝ助とせんとおもふといへども更に傳ふべき人に値ず。學びても悟るものなしわれ汝が術を見るに。普く天下の一人なり。若相氣の術を相傳せばまさに天下に敵なかるべしと。是より無三四を廬中にとどめ。日々に教授に心力を盡せば。無三四も晝夜心氣を煉相氣工夫の外。他念なかりける。光陰は矢よりもはやく。白駒の歩隙なくして。既に五ヶ月の間を経て。文祿二年三月になりける。しかるに無三四は笠原が相傳の相氣の道。今は漸く發明する事を得たり。或日新三郎無三四を膝もとに招き。汝まことに天質の才と謂つべし。今は相氣の法。通徹して我と異なる事なし。此後は廻國修行して勞を蒙り何の益なき事なり。はやく本國に歸られよ。今印可を免すべしと。相氣の印書を一卷に書したゝめて。手にわたしければ無三四頭をたゞき歡喜しまことに此上は我何の道をか求ることあらん。此間頻りに養父が事心に掛り一回本國へ立歸らんと一決仕る。新三郎又曰われ汝に示す事あり。人は萬物の長天地とひとしきものなり。人命を損ふより罪大いなるはなしたとへ眞劍をもつてむかふ者ありとも。かまへて此後木刀より外に。もちゆる事なかれ。これより長く法を立

て。人は眞劍己は木刀とせよ。無三四利に伏し返す。先生の教誡胸に徹したり。以後誓て眞劍を用ひ候まじと誓を約し。是より旅行の用意を調へ此年ごろの恩を謝し。涙をながしていとま乞し。新三郎が庵を出。何となく古郷の方し。たはしく。殊に四年の年月を経たれども。いまだ敵の動靜を得ざるが故。今一應九州の地を委しくさがしみるべしと。ひたすら西へ向ひける。是ひとへに順孝天の感ずる所ありて本意を遂べき時節なり。

繪本二島英勇記 卷之七終

繪本二島英勇記 卷之八

無三四八人の壯士と争競を起す事

本邦の兵革すてに治まり。漸太平に歸し。天正二十年元を建られ。文祿元年と改りぬ。然るに豊臣の太閤。朝鮮を征伐し給ひ。干戈ふたゝび起りて。黍麻安き事を得ず。萱茨荏苒たちゆきて。文祿二年と成ぬ。然れ共朝鮮の役。ますく盛んにして。甲兵東西に奔走し。大八洲の外に。糧を運送し。何時はつべき軍とも知れず。豪傑英勇塞外に。苦しむ秋とはなりにける。爰に宮本無三四は。天正十八年五月よりこのかた。本國を出。おもては武術修行に言託。たしかにそれとは知らねども。佐々木嚴流を大かたの心充とし。彼方這方と徘徊に。數多の年月を過し。一まづ舊里に立歸り。養父が安否をも訪ひ。再び九州四國の諸藩鎮を搜し試みんと。同年六月下旬の頃。九州さして下りける。播磨國室の泊より。豊前國小倉に歸る船に。便りを覚め。やがて追風の順風おだやかにして七月廿日小倉の邊りに着岸し。乗合たる旅人。ことく船より上り。何れも海路の障なきを歡び。まづ無三四も小倉の城下に入同船の乗合十五六人。共に酒屋の内にいたり。盃をとばして酒をくみ。其後思ひに旅装し。面々少し宛の行李の包袱を脊負。互ひに暇ごひし。懇に離別を告。御縁も有ばかさねてと。或は三人あるひは五人。一群々々打連て。おもひくりに別れ行。無三四は唯一人衣類の包袱を肩にうちかけ。酒屋の内を立出る。時に乗合の中に年齡五十有餘の農民と覺しき男。四十餘りの女を誘ひ。無三四が後より來り。扱々墓なきものは船の乗合。昨日まで互ひに脚を交へ。憂つらさを慰さめ合。今日は船より上るとそのまゝ。早おもひくりに別れ行。一樹の陰に宿り。一河の流れを汲むも。他生の縁とこそ。説法にも聞つれ。御侍さまは何かたへ赴き給ふぞ。無三四答へて。某船中にも申ごとく。肥後國

熊本に兩親あり。父母の安否を訪んため立歸るなり。おの／＼は何れへ歸給ふぞ。夫婦の者こたへて。我等は筑前國名島の城下ちかき在中の農民。このたび大願のむねありて。讃岐國金毘羅へ參詣いたし。その叙なれば都へ上り。神社佛閣を拜み。廻り候。無三四聞て然らば宜しき同伴にてこそ侍れ。それがしも名島の城下へ立越。夫より肥後へは歸るなりと。三人一同に打連。たがひに四方山の物がたりをはじめ。ひたすら道を急ぎしが。頃しも七月の天氣。白日中午に照し。白雲四方にをさまり。虚空一むらの雲もなく。炎天焦がごとく熱りしかば。三人面に汗をながし。天晴よき樹陰もあらば。立寄休息すべしと眺望れば。還道の右手のかたに。蒼々たる大池あり。池頭には松樹の大樹枝葉大きに繁茂。日陰數多ありていと涼しげに見えしかば。無三四悦び。あれ見給へ。幸ひの水邊かな。かしこに至りて休息せん。農家夫婦も力を得。疾暑さをもうち忘れ。たゞちに池の方にかけて。仔細に此ほとりを見るに。池塘高く築めぐらし。塘のうへの樹木。何れも五六圍計。中にも老樹の大榎十圍あまりも有つべし。枝葉ことに周密。日の光を遮り覆ひければ。農夫一番に此木陰に立憩ひ。包袱をも下さず根笹をおしふせて。尻居にとつかと坐する所に。忽ち滅喇々々物碎る音。尻の下に響たり。農夫大きに周章。飛退て。押伏たる根笹を掻分。さがし見れば。一ツの食篋を網裏に入たるまゝに押つぶせり。こはいかにといふ間もなく。正ど大樹の後のかたに人ありて。大音を上り何者なれば我食篋を踏碎くぞ。一寸も身を動揺さば一打にすべし。逃る事なかれと呼はりける。農夫再び忙驚き。大樹の後の邊を顧るに人影もなし。あやしやと塘の下を覗れば。池の水際より一人の士。片手に釣竿を携へ。池塘の上に跳あがる。其時七八人の聲として。這奴捕候へ。我等もそれへ参りて。一慰みなくさむべしと。一同に罵にぞ。農夫いよく愕き。眼をとめて吃と見れば。塘の下にすべて七八箇所の木陰あり。その邊の涼しき所に。小さき床几を置。おの／＼其上に臂うちかけ。魚をつりて並び居る。元來周圍十町あまりの大池。むかしより何なる大早にも水濁する事なく。底深ふして藍を流したるが如く。大小の魚。其外の小魚。夥しく聚り居るといへど

も。人さらに釣するものなし。其所以は深淵のうちに水魔あつて。たま／＼釣するもの有る時は。人を劫して水中に引入。その腸を探り食ふが故に。敢て魚をとるものなし。たま／＼大膽の者ありて。或は五人或は七人。同伴を催し來て釣する時は。人氣に恐れて害をなさず。これによつて。俠勇を好む武士等。もとめて來り釣するも多かりける。然るに今日小倉城中の士八人。おの／＼早天より來り。面々携たる食篋を木の枝。又は草の茂みなど。日の照ざる地に隠し置。百念を忘れ釣する所に。すでに農夫がために食篋を損れ。人の足音に一驚を喫ひ。聚りたる小魚四方へ濺と離散しけるを見て。忽ち怒り心頭より發り。如此喧しく叫びたり。此時農夫は地に匍匐し。戰々と兢ひ出し。私は當地不案内の旅人。ひとへに暑氣の苦しさに前後をうち忘れ。此地の木陰を見つけ。疾く休息仕らんと存じ。興を妨げ申のみならず。尊篋を損ひ申せし事。幾重にも寛宥下されなば。廣大の御慈悲ならんと。兩手を合せて詫げれども。彼士少しも聽納ず。たちまち携る釣竿にて。農夫が頭面を續うち撃居たり。農夫が妻此體を見て。彼士の袂にとりすがり。誠に御憤り御道理千萬。ひとへにわが夫の倉忽。則ち我々どもは。筑前名島の土民。夫が名は七助と申て。生れのまゝの農民ゆゑ。すこしも世間を見ざる山猿。御詫の申やうをも存せず。御憤のうへに御怒りを加る事あるべし。此度宿願の事ありて。讃州金毘羅へ參詣仕り。その序に京都へ上り。歸りに男山八幡宮へも參詣仕るものなり。弓矢神さまへ參詣の者と憐み給ひ。八幡宮に免じて寛免あらば。生々世々の御厚恩と。涙を流して申すにぞ。彼士は女が一言に八幡宮へ參籠といふに。すこし思慮もありけん。猶豫して見えたる處に。池の渚より一人の同僚一跳到り馳來り。手ぬるき仕方かな。渠が輩には是を喫すべしと。尻敷の小床几を携へ來り。七助が額を照して撃んとするを。無三四最前より。側にあつて。此競ひを見たりしかども。敢て手を動さず居たりしが。既に同僚の壯士が手を下さんとするを見るに忍びず。直に中間に押隔り。七助を助け壯士が手を徐かに捕停めて申けるは。まづ暫く待給へ説話あり。渠も無三四が人物よのつねならざるを見て。敢て手を下さずといへども大きに怒り。我ともがら此旅

人が狼藉を働く故。撃んとするに。何人なれば此中間に遮り來りて。我々を戲弄にするや。無三四否おのゝを戲弄にするにあらず。此もの夫婦は某が同伴の人なり。我全く渠が輩と同郷の人にもあらず。計らず播州の海邊より同船に乗合。船中において渠夫婦の輩。はなはだ心を用ひ。朝暮某を憐み。羈旅の寂寞を慰め。猶名島邊まで導きくれんと云。其芳志にひかれて。今日この所まで同往仕り。はからず這樣的争ひを引出すといへども原來求めたる罪にあらず。畢竟農民の質朴。ひたすら前後を伺ひ見る事なく。尊器を損じ。又釣魚の尊遊を驚し奉ること。全く不案内の科なり。何事も田夫野人の失禮。愚直の妻が詫言に免ぜられ。御了簡に預りたしと腰を折て申候處へ。同僚ことごとく塘の上に聚まり。無三四が前後をとり圍む。中にも無三四に手を捕停られたる男。眼に角をたて。足下田夫野人は失禮をいたしても苦しからぬと思ひ給ふか。無三四答へて全く然様には存ぜず。たゞ田夫野人をとらへて。對手とし給ふとも取に足らざる者にて。杖をもつて打給へば杖を蒙り。棒をもつて打給へば棒を蒙り。ひたわびに身を匍匐して撃るゝのみ。然らば犬鷄を撃るゝに等しく。譬はば手を下し給ふとも。何某は豪傑英勇を打とりしなどと云るゝ時は。子孫に傳へても其名芳しく。土民を打殺したりなどと申時は。不仁の悪名を蒙るのみ歟。子孫に至るまで。臭きを傳ふるといふものなり。この時彼土いよいよ怒り。床几を放下し。無三四が前に詰寄。今足下の一言は。事を招るゝに近し。田夫野人は畢竟犬鷄同然にして。對手とならざる者を對手とせんより。己が如き武士を對手にせよと。我輩を辱めらるゝといふものなり。若足下野人に代て對手と成り給はゞ。速に勝負を遂んと云ければ。無三四答て。こは思ひ寄ざる憤りに預るものかなわれひとへに言語不辨にして。人々の嚴威を犯せり。申所さらに各を輕んずるにあらず。農夫が身にかはり。膝を屈し腰を折て。實情を以て罪を謝するといへども。假初の失言を質とし。土民に更て某を弄んとぞならば千萬言語を盡して罪を謝するも。畢竟言を弊すに似たり。此上は一言雙辭さららにわびごとは申まじ。渠等もと土民といへ共同伴の人。我双眼あきらかなる間には唯すこしの皮をも傷らすべからず。いざ豪傑たち一同にかゝりて。勝負を一擧にする賦。又は一人宛尋常の化粧勝負に果し合ふ歟。余に於ては天命にまかすなりと。少しも驚く氣色なく。七助夫婦を大樹の後に押遣。その身は大樹を小楯とし眼を配りて立たる形状。威風凛々としてあたりを拂ひ。なか／＼手強く見えにける八人の若者共初より無三四が壹人なるを見て。一慰なくさまんとおもひ。却て其勢をとりひしがれ。八人互ひに目と目を見合せ溜息繼て立たる所に。池の彼方の木陰より。菅笠を頂きたる一人の大男。大音聲を上て。双方少しも手を動かす事なかれと。呼はり／＼息をはかりに駈來り。若者を叱り退け。速に笠をとり無三四に對ひ。旅行の豪傑それがし申事あり。まづ憤りを止給へと申にぞ。無三四も睛を定てかの人を見るに年齢四十有餘と見え。眼ざし尋常に勝れ進疾。人物賤しからず慙慙に告て曰。某事の起りは如らずといへども。池の彼方より人々の喧嘩の模様を見付て駈來れり。某双方の旨趣を承りて後。よろ敷無事を計申さん。無三四面を和らげ答へけるは。事の起と申は某が同伴仕る處の農家。七助と申もの。爾々の事に過て豪傑の飯器を損ひ。すてに其罪を謝するといへども許容せられず。それ故某も同伴の人の過ちを見るに忍びず。農夫に代てさま／＼に罪を謝し。利害を申すといへども。某不才のうへ愚辨にして決句豪傑のために憤怒を副此諍ひに及べり。彼大男無三四が老實の言を聞。笑ひを催し申けるは。誠に一時の不平によつて。忽ち劍戟に及んとせしこそ危ふけれ。しかれども足下も兩刀を佩給へば定めて仕官の仁なるべし。私の憤りに身を傷るゝぞならば。君家への不忠父母まします御方ならば不孝なり。今僕は時に取ての年老。まげて此競を某に賜らば。大に満足なるべし。無三四忽ち土に手をつき。却て其事は此方より好む所なり。仰のごとく某主人もあり。兩親ともに存在仕る。定めて只今時分。僕が歸るを日をかぞへて相待申べし。希はくは諸英勇の憤りをなだめられ。無事の和睦をととのへ賜るに於ては。莫大の僥倖なり。此時彼大男八人の若者に對し申けるは。各聞給ふごとく。彼豪傑の言。はなはだ穩當なり。殊には其競ひの本人は畢竟農家の人。其上婦人を同道せり。旅行の豪傑は挨拶の人。それに本人を

人が狼藉を働く故。撃んとするに。何人なれば此中間に遮り來りて。我々を戲弄にするや。無三四否おのゝを戲弄にするにあらず。此もの夫婦は某が同伴の人なり。我全く渠が輩と同郷の人にもあらず。計らず播州の海邊より同船に乗合。船中において渠夫婦の輩。はなはだ心を用ひ。朝暮某を憐み。羈旅の寂寞を慰め。猶名島邊まで導きくれんと云。其芳志にひかれて。今日この所まで同往仕り。はからず這樣的争ひを引出すといへども原來求めたる罪にあらず。畢竟農民の質朴。ひたすら前後を伺ひ見る事なく。尊器を損じ。又釣魚の尊遊を驚し奉ること。全く不案内の科なり。何事も田夫野人の失禮。愚直の妻が詫言に免ぜられ。御了簡に預りたしと腰を折て申候處へ。同僚ことごとく塘の上に聚まり。無三四が前後をとり圍む。中にも無三四に手を捕停られたる男。眼に角をたて。足下田夫野人は失禮をいたしても苦しからぬと思ひ給ふか。無三四答へて全く然様には存ぜず。たゞ田夫野人をとらへて。對手とし給ふとも取に足らざる者にて。杖をもつて打給へば杖を蒙り。棒をもつて打給へば棒を蒙り。ひたわびに身を匍匐して撃るゝのみ。然らば犬鷄を撃るゝに等しく。譬はば手を下し給ふとも。何某は豪傑英勇を打とりしなどと云るゝ時は。子孫に傳へても其名芳しく。土民を打殺したりなどと申時は。不仁の悪名を蒙るのみ歟。子孫に至るまで。臭きを傳ふるといふものなり。この時彼土いよいよ怒り。床几を放下し。無三四が前に詰寄。今足下の一言は。事を招るゝに近し。田夫野人は畢竟犬鷄同然にして。對手とならざる者を對手とせんより。己が如き武士を對手にせよと。我輩を辱めらるゝといふものなり。若足下野人に代て對手と成り給はゞ。速に勝負を遂んと云ければ。無三四答て。こは思ひ寄ざる憤りに預るものかなわれひとへに言語不辨にして。人々の嚴威を犯せり。申所さらに各を輕んずるにあらず。農夫が身にかはり。膝を屈し腰を折て。實情を以て罪を謝するといへども。假初の失言を質とし。土民に更て某を弄んとぞならば千萬言語を盡して罪を謝するも。畢竟言を弊すに似たり。此上は一言雙辭さららにわびごとは申まじ。渠等もと土民といへ共同伴の人。我双眼あきらかなる間には唯すこしの皮をも傷らすべからず。いざ豪傑たち一同にかゝりて。勝負を一擧にする賦。又は一人宛尋常の化粧勝負に果し合ふ歟。余に於ては天命にまかすなりと。少しも驚く氣色なく。七助夫婦を大樹の後に押遣。その身は大樹を小楯とし眼を配りて立たる形状。威風凛々としてあたりを拂ひ。なか／＼手強く見えにける八人の若者共初より無三四が壹人なるを見て。一慰なくさまんとおもひ。却て其勢をとりひしがれ。八人互ひに目と目を見合せ溜息繼て立たる所に。池の彼方の木陰より。菅笠を頂きたる一人の大男。大音聲を上て。双方少しも手を動かす事なかれと。呼はり／＼息をはかりに駈來り。若者を叱り退け。速に笠をとり無三四に對ひ。旅行の豪傑それがし申事あり。まづ憤りを止給へと申にぞ。無三四も睛を定てかの人を見るに年齢四十有餘と見え。眼ざし尋常に勝れ進疾。人物賤しからず慙慙に告て曰。某事の起りは如らずといへども。池の彼方より人々の喧嘩の模様を見付て駈來れり。某双方の旨趣を承りて後。よろ敷無事を計申さん。無三四面を和らげ答へけるは。事の起と申は某が同伴仕る處の農家。七助と申もの。爾々の事に過て豪傑の飯器を損ひ。すてに其罪を謝するといへども許容せられず。それ故某も同伴の人の過ちを見るに忍びず。農夫に代てさま／＼に罪を謝し。利害を申すといへども。某不才のうへ愚辨にして決句豪傑のために憤怒を副此諍ひに及べり。彼大男無三四が老實の言を聞。笑ひを催し申けるは。誠に一時の不平によつて。忽ち劍戟に及んとせしこそ危ふけれ。しかれども足下も兩刀を佩給へば定めて仕官の仁なるべし。私の憤りに身を傷るゝぞならば。君家への不忠父母まします御方ならば不孝なり。今僕は時に取ての年老。まげて此競を某に賜らば。大に満足なるべし。無三四忽ち土に手をつき。却て其事は此方より好む所なり。仰のごとく某主人もあり。兩親ともに存在仕る。定めて只今時分。僕が歸るを日をかぞへて相待申べし。希はくは諸英勇の憤りをなだめられ。無事の和睦をととのへ賜るに於ては。莫大の僥倖なり。此時彼大男八人の若者に對し申けるは。各聞給ふごとく。彼豪傑の言。はなはだ穩當なり。殊には其競ひの本人は畢竟農家の人。其上婦人を同道せり。旅行の豪傑は挨拶の人。それに本人を

捨て。挨拶人に取懸るは理にあたらす。且世間の人の謂んには。小倉の士等は。強きを凌ぎ弱きを慢り。壹人の旅行の士を見て。大勢徒黨をなし。如々の口論を起して。討果せしなどと。人口にかゝるも我國の恥辱なり。速に一時の憤りを解て和睦をなし給へと申にぞ。八人心の中深く歡喜。言を揃へて答けるは。いかさま我黨。一時の性急に事の本末を忘れ。過て旅行の豪傑を刎んといたせしは。僕等が辜なり。兎も角も御はからひに任すべし。よろしく無難に事をさめられ給るべしと申けるに。大男また無三四に對して。唯今聞給ふ如く。八人の者更に惡念なしと申す。然らば足下も這一回は。五分の憤りを我に賜れ。我はまた双方より十分の憤りを申請て。徳分とすべしと云ければ。無三四も八人の若士も。聲を等しくして笑ひける。七助夫婦は。最前無三四が八人の諸士と争論のはじめより。顔色土のごとく慄懼れて居たりしが。すでに和睦と成し事を聞き。悦ぶ事かぎりなく。匍ひながら樹の陰を出。八人の前に踞り。奴が兇忽より事起りて。這樣の大事に暨んと仕る事。千萬後悔仕れどもいたし方なし。先刻奴がくだきたる食簞の代りとし。此携へたる飯筒を奉るべし。大男これを聞。哥々と笑ひ。七助が側近くさし寄。汝は老實の村夫。何ぞ其代りを出すに及ぶべき最前より。無畏しく思ひつらんといふに。七助顔をあげて。かの大男の面を見るとき。如何したりけん。哈と云うて地に倒れ。俄に氣を失ひければ。人々大きに愕き。還魂丹を口中に含ませ。其妻に池水を汲て顔に吹かけさせけるに。須臾ありて忽ち蘇生れり。妻も無三四も大きに歡喜。なほ七助を介抱しいたはるにぞ。小倉の諸士も渠が活生たるを見て安堵し。これ察する所最前より。我黨の争論を見て。大きに驚愕を喫ひ。漸々和睦の出来るに安心し。嬉しさの餘り這樣に氣を失ひつと覺たり。去來さらば今日は釣をやめて歸るべしと。面々釣針の類ひを收め。無三四に向ひ一個々々叮嚀にいとま乞し。竿を携へて歸りぬ。無三四も今は心を安んじ。なほ七助夫婦に晝飯など用ひさせければ。かれ夫婦も無三四に向ひ恩を謝し。ふたゝび歸旅にむかひける。

七助還子于名島一事

斯て三人のひとり。日を経ずして名島ちかく成しかば。七助無三四と別れんとする時懇ろに告げるは。願はくは。我家に於て。ゆるくと五六日も逗留し給ひ。其後城下に至り給へ。我家は城下より一里ばかりこなた。元來草深き所なりといへども。隣家遠く隔たり。人の來る事も近なり靜に勞をもらし給へ。はからず船中より朝夕とも御恩を蒙るのみならず。既に八人の士等がために。殺さるべかりしを。身に代りての說話に命を活りふたゝび古郷に歸る孩子等が顔を見る事。ひとへに尊士の厚恩なり。ひらに先我家に來り給へと。袂をとりて申ければ。無三四も渠等が叮嚀直實なる志を感じ。終に背く事能ずして七助が方に赴きける。却説那七助が家には一人の女あり。今年三十有餘。年花大きに過ぎ十分の顔色無しといへども。父母に事へ甚孝心なり然るに婿あり其名を十助といふ。渠その前は肥前國熊本の人なり。生質篤實にして少しにても非に與せず。農業に怠りなく。二三箇年このかたに少しの田畑を求め。夫婦もとより睦じく。七助夫婦が晩年の勞苦を助ける。此日十助忽ちおもひけるは。舅夫婦すてに歸らるべき時節なり。もしや今日など歸らる事もあらんかと。村梢の地まで出來り。彼方此方眺望するに忽ち七助夫婦が歸るを見つけ。其まゝ走來り。やれ舅大人姑娘を歸給ひしが。七助夫婦も十助を見て。嗚々婿室か甚麼我歸るを知り。迎ひには出たるぞ十助曰ふ何とやら蟲がしらせたる歟。今日ふと思ひ出し聞盡まで迎ひ意に出たりと。隨言二人が菅笠を乞取れば。七助無三四を指さして。十助に告げるは彼方は船中よりの御連なり。道すがらにても我夫婦をはなだ憐み給ひ。其上爾々の事にて小倉の邊にて惡黨等がために。既に殺さるべかりしを。身に引受て。危き難を救給ひし命の親なり。此たび名島の城中に赴き給ふを。我等夫婦誘ひ申て歸りぬ。まづ彼方の御笠をも預るべしと云ければ。十助大きに驚き。無三四に向ひ恩を謝し。無三四が背負し包囊と。菅笠をも一緒に受取ながら。十助熟々無三四を

見て。腰を偃め彼方は肥後國熊本の御家中。宮本友次郎様にあらずや。無三四も驚き。汝は日下幸助ならずや。十助答へて。即幸助にて候。これはく計にて。兩人互ひに手を打ば。七助も不思議の思ひをなし。扱は我婿とは知音のかたにておはせしかや。誠に深き因縁にてぞ有けれ。何事もまづ歸りて後。ゆるく御物語をもいたすべしと四人等しく打つれて。やがて村裏に立歸る。却説此十助が身のうへに話あり。是不題。那舅的の七助が家は。元來名島近在にては。人にも知られたる程の農家なりしが。渠が父の代にあたり。不幸にして身上傾き。あまたの田畑をもことごとく沽却ひ。終に零落の身と成りて終りぬ。七助か代にいたりても。彌艱難に迫り。彼方此方と漂蕩うち。其妻一人の女子を生り。左右して撫育るに。さすが月日に關守なければ。昨日よ今日よといふ間に。女子十三歳になりぬ。七助妻子をあたり近く呼よせ申けるは。扱も我輩親子三人如此零落に迫りなば。行末乞食の體となる事疑ひなし。恩愛の道に迷ひ。互ひに一緒に居て艱難せんよりは。三人三所に分離て。人の家に奉公し。少しづつの給銀をもためて。ふたゝび其すこしばかりの本錢を儲これにて晩年をも樂しみ。先祖の祭らひをもするやうにすべし。汝等いかゞ計較やといふに。妻は大きに悦び我もさこそ思ひつれ。然らば最初に娘が片付を着て後。われくが身をも治むべしと。知音の人を求めける處に。肥後國熊本の城下に。七助が内戚の従弟あるを幸ひに。渠を談ひて熊本の家士の家へ奉公に出し。其後七助は名島の城下に至りて諸士の家に仕ゆれば。妻はもとより紡績織績する事。尋常の人よりは勝れて上手なるが故に。在所こそ心安けれと。近在の富家のもとに身を寄ければ。世俗の諺にもいふごとく。女寡に花咲のならひにて。彼方這方より求を得て奉公し。各々身をぞ治めける。其後七助夫婦互ひに志しを固して便をも通ぜず。七年の年月を過し。身を儉約して些少の本錢を貯へ。頓て舊里に立歸り。親類朋友を憑み。假初に膝を容るばかりの小家をしつらひ。夫婦晝夜のさかひなく。農業をいとなみしかば。持に追付貧乏なしと。僅に一兩年の間に。少しの田畑をも買求めて。往昔の富には遙に及ずといへども。夫婦心を安んずるやうには成りにける。却

説かの肥後國熊本に遣したる處の少女雅名は巻とよび傲し。心の操正しく。幼稚心にも父母の艱難する事を深く歎き。熊本にいたり奉公する内にも少しも美服など着んことを乞ねがはず。僅の給銀を求得ては。父母の方へ鴻便を待て送り還し。既に七年の春秋を送りて十九に成し時。父七助夫婦が方より申遣しけるは。我々夫婦今は奉公を罷て舊里に歸り。再び農業をいとなみ暮せば。兎角して爾も本國に歸り來れなど。こまなくと聞えけれども。今は故郷を出て年久しく。熊本の繁華の地に慣て。寂寞の地に還らん事を強て臨まず重て便を得て文をしたため。懇にいひおこしける様は。父母のかはらせ給ぬよしを聞。殊には故郷に歸りてふたたび家をも起し給ふ事。ひとへに神佛の護りとは言ながら。父母の御志の切なるよりなす所なるべし。我とても。はやく歸りて。更りたまはぬ有状をも見もし。我顔をも見せ奉りたき事は。やまくなれども。早此處に住慣ては。假初のやうに思ふまゝに。徒らに七年を過し。さすがに年頃の名残も惜まれ侍りぬ。今三四年も奉公尋常にいたし。少しの給銀をも貯へ歸へりて。ふたりの人々を安く養ひ參らすべきまゝ。今しばしの年月は。歸る事も待るまじなど返りごととして。終に熊本の城下に。又數多の年月をそ過しける。然るに渠なほ熊本の家中に。或は一年六月。彼方此方に奉公を拵居たりしが。天正十六年三月。佐々内藏助成政。熊本を没收せられ。加藤主計頭清正をもつて。城主と定められ。清正朝臣爰に移り給ひし後。因縁や有けん。かの巻。宮本武右衛門が家に奉公して居たりしが。此時はやいたづらに年二十六なりしかども。いまだ男女適合の道を知らず。世に珍らしき女なり。武右衛門も渠が奉公ぶりの。蔭日向なきを悦び。甚だ憐みを加へて召遣ひけるが此時武右衛門が家に若黨あり。すなはち佐々内藏助成政が家士にて日下幸助といふ。成政すでに國城を收られて後。浪々の身と成り。兼ては武藝を執心し。何とぞ一流の蕙奥を究め。仕官せんものをと。師を撰び居たりし所に。宮本當城主に從來り。専ら諸士に師範するを以て宮本が家の若黨にあり付。常に忠直にして主従の道を闕ず。終日武術に心をゆだねける間。武右衛門も深く感心し我子友次郎の相手とさせ。百念をわすれて教授しければ。武術日を追うて達

人と成にける。時に如何なる紅絲の因縁やありけん。那卷が來りて後。其下情に深く卷を戀慕し。竊に人目を忍びて。其志しのほどを筆に云せて。文など度々に及びければ。何と否とは石躑躅いほどの神の誓ひや深かよりけん。終に人知れず幸助と忍び通ひ。二世かけてかたらひを成にけるこそ不思議なれ。すべて隠すより顯れたるはなしといふ言のごとくいつとなく此事奴僕の耳に止り。卷と幸助が忍びくに通ふよし。口さがなく云ひのしるのみならず。いつしかに日かげに結ぶ五月帶。夜るく毎に増る思ひのみか。腹さへかさまざりければ。友次郎が母は知らぬ由して居たりしかども。今は人目をも押へかねて。或時幸助まきの兩人を。人無き所へよび申けるは。扱もこの程より奴僕どもの。兎や角いふを聞に付て。心苦しく思ひ。夫武右衛門どの、耳に入ざるやうと。さまく心を用るといへ共。既に此程より此事耳にとまり。昨夜寢物語にのたまふ様に兩人の者の有さま若氣とは云ひながら是非もなき事共なり。若此事公になる時は我既に門人を教授するの家柄なれば便なき事ながら手討にも爲すは有べからず。爾此ものどもに少しの路用の調度を與へ卷が親元は筑前の名島と聞は。まづ幸助諸ともかの方へ參るやうにはからふべし。我憤りを畏れて出奔したりといはゞ。門人及び奴僕等が手前は濟べしとの事なり。然らば爾が們兩人ともに。今宵じて遣すぞと。金子一包幸助にわたしければ。兩人大きに恐れ入。背中に汗を流し。ありがた涙疊にながれまことに申わけなき身の誤り。千非を悔といへども。今は返りがたし。しかれども此御厚恩は生々世々わすれがたしと。厚く禮謝を盡し扱其夜兩人のもの竊に衣服大小の類ひを取持。やがて熊本を出奔し。筑前の名島へぞ歸りける。是より兩人七助夫婦のかたへ人をもつて。さまくと誘しこしらへ幸助やがて七助が婿となり。十助と改名し。程なく男子を出生し。當年四歳に成にける。今日はからず無三四に出逢ひ僅に五六年の間の別れなれば。互ひに面を見まがふべくはあらねども。無三四も四年の長旅の上。今炎天の暑を犯して顔色墨のごとく。いつしか往昔の面影あらん。幸助

も農業のいとなみに働働艱難して。いにしへの容顔をうしなひ。其上思ひがけなき對面ゆゑ。既に面を見損じたり。されども主従の奇縁盡ざるぞ目出たけれ。

繪本二島英勇記 卷之九

無三四霹靂話の事

諺に縁有ば千里相隔といへども相値。縁無れば紙門を障つといへども相知らずと。理なるかな。無三四は七助と同船せしより。不思議に十助に廻りあひ。歡喜他なく。十助も斜ならずいさみ進み前路にたちて立歸れば。七助が歸るを見つけ。娘まき門に出て七助夫婦に向ひやれ恙なく歸り給ふかやと。いひつゝ無三四が顔を見て仰轉し。こは思ひがけなき御主人の御入。ひとへに夢とおどろけば無三四も同じく悦び。七助と同船のやうすを語りければ。巻は涙を流し。まことに佛神の引合にてこそ候へ。われく夫婦つねく御厚恩の事をのみ申出す計にて。もとより風の便りをも仕ることかなはず。如何わたらせ給ふやらんと。幾ばくの年月を過し參らせしに。今日かゝる御對面を申さんとは存じよらざる事なり。まづ我に家幾日も御逗留なし給へと。俄に草鞋を解き足を清がせ。七助夫婦十助夫婦。ともに禮儀を盡しける。七助も船中の物がたり。路次の危難を助けられし事共。一々巻に語りつねく十助夫婦が申出せしは。友次郎様とのみうけ給り。御改名ありて。無三四様といふことを知らず。道終泊々の失禮。ひとへに御免下されよと。懇に罪を謝しければ。無三四も大きに笑を催し。是より酒飯を用ひ。湯を浴ひ心を安んじ憩ひける。此日を初として。一連五六日ばかり逗留しけるに。七助等四人の者ども。少しも兇略の體なく心をつくし饗應するに。無三四大きに迷惑し。ひたすら辭を告げれども敢て聽さず覺えず十日ばかり逗留するに。はや八月の時候にもなりしかば秋風肌を吹きまし。其上毎日霖雨ふりすさみければ。七助親子四人これをかこづけて。いよく無三四を輟めて放さず。既に八月十二日になりける。其日午刻の下りより。密雲四方に起り。東西一度に風の音震々と聞え。須臾の間

に雷鳴出し。あたかも天地をくだくがごとく雨は盆をかたぶけたるが如くなりしかば。無三四及び七助が家内すべて一ツ所に聚り。此はけしからぬ雷雨かなといふ間もなく。忽ち一聲の雷。まさしく頭上より墜かゝるがごとく響きければ。みなく一度に驚き。嗚呼といふてひれ伏ながら。むかうの畑の中を見るに一塊の火の玉おちて。地の土を旋る事五六偏。烏雲かの火輪をつゝみ。なほ眞黒に雲聚り盤桓としてかけめぐりければ。七助も十助も。たがひに聲をも出さずながめ居るうちに。烏雲次第に散亂し。程なく雷鳴やみ。雨も少し降やみしかば。十助やがて笠を冠り彼所に抵りて見るに。其遠さ一町ばかり。かの火の玉の墜たる畑の中を睨ふに。すべてその邊五六間ばかりの地。野菜の類ことごとく掻みだしたるがごとく。草葉は残らず枯矮みて全く燻たるに異なる事なし。十助得と見て立歸り。無三四に向ひ申けるは。正しく唯今の火の玉は雷の墜たるに相違なし。滿地悉く荒損じ。殊に其邊鹽硝の臭氣酷しく候。無三四それこそ雷の天降たるに疑ひなし我諸國經歷する事。すでに三年なり。去年はからず信州に於て郊野の中に。雷雨に値。いづれへ立よらんにも木陰だになく。足にませて家あるかたへと急ぎし所に。六七間向ふの方にいかづち墜たり。此時某おぼえず地に倒れて伺ふ所に。火の光散亂して忽ち闇夜のごとく。これ黒雲にまかれたるなり。其時何となく硝硝の臭ひ鼻に入て堪がたく覺えたり。我其時に一驚を吃ひ。地に倒れ。火輪の旋轉として地の土を磔るを見て。魂魄天外に飛び。唯今も是に身を觸るときは。身體微塵となるべしと。其畏しき心にこたへしが。それより以來雷をきくときは。身上の毛孔一度にたち。思ひ出すさへ心快らずとかたりければ。七助側より進み出てしからば其時さだめて雷の形をば見たまひつらん。鬼の形とも。または小さき獸のかたちとも申すが。左様の物にて候しか。無三四聞て否。雷に形ある物にあらず。今の世に繪に畫は。漢土の玉充といふ人の利をもつて畫せたる繪をらごにて。雷はもと天の火氣ふかく地に照込。その火氣再び天にのぼらんとする時。雲はもと水氣なり。水氣の雲の中に火氣包まれて。出る事あたはず。水火互ひに激して終に聲を發するものなり。易にては震の卦を雷とす。故に

震の卦は。陽氣下にあるを。陰氣をもつて押へたる形に作り。然らば聲のみ有て形なく。水火の戦ひと俗にいふこ
れなり。七助また申けるは。それほど能その利を知らながら。何ゆゑ畏れ給ふぞ。形ある物ならば。畏れ給ふも道理
なり。形なきものと悟りて畏れ給ふは近ごろ似合ざる御事なり無三四答へて。然らず甚だ相違なり。形ありて手に取
られ眼に遮り劍戟の双の立べき者ならば。譬へば天狗の所變といへどもおそるゝに足らず。世の中に無形にして勢ひ
の厳しきものほど畏しき物はなし。されども死生は天の數なるが故に。畏るゝともまたおそれずとも。天命の然らし
むる物ならば。鐵廓の中に籠り。石室の内に隠たり共。免かるゝ事なし。天命の然らざる時は。赤裸にして郊野に臥
たり共何の怖畏かあらんと。我悟りても觀じても雷鳴をきくと何となく畏ろしく覺ゆるは。一度驚きたる轉動心の再
び治らざる者なり。われすてに諸國經歷する事。父武右衛門が命を蒙りて武者修行をする身の上なれば。國々に於て
眞劍にて試合せし事數回。別して備前岡山などには。數十人の曲者共劍戟の中に取圍れしかども。刀劍を更に恐る
る心半點も起らず。刀劍も命を斷凶器。雷霆も一心を損ずるの凶激。され共嘗て双物は何ともなく。雷に堪がたきは
我ながら不審晴すとかたるにぞ。七助も嘆息つき。扱々武門の御身の上ほど恐ろしき者は候はず。何さま人は懲たる
事あれば。忽ち膽玉轉動りて。氣を失ふ物にて候。すてに先日池の側にて難儀の時。私思はず氣絶仕るも。これ下
地に懲たる事あるが故なり。初め壯士どもと争ひの間は怖しくはありしかども。是非なき事なりと觀念して居たり
しに。四十有餘の大男が來り幸ひに双方をなだめ。頓て和談に及びし處に。思はずかの者の顔を見て大きに驚き。こ
とごとく麻たるが如く。氣絶いたしたり。無三四是をきまことに其時の形容我も不審思ひしなり。驚き忙てたる上の
利害ならば。初めの言戦ひの間にこそ。氣をも失なふべけれ。和談の後の悶絶は合點ゆかず懷ふ所。唯今の一言に
ていよく不審起れり。扱かの男の顔色を見て。一心をとり失ふ程の恐懼せらるゝは。いかなる道理でや。七助嘆息
して申けるは。これには段々の長物がたりあり。今日幸の雨天なれば。外にも人の往來なし。爰に話申べし。外へ歸

ては一大事なり。無三四様も随分ちかく密たまへ。十助娘も近くよるべし。我今日までも。女房にも話さず。此事を
いはんとするも胸ふさがる事共なり。われ先年身上困窮の節。家内わかれゝに奉公控を仕出し。まづわが身は名島
の城下にいたり。溝口源兵衛といふ人の方へ僕奉公にありつき。ずるぶん律義に勤たり。主人も我奉公に内外なきを
見て。甚だ憐みを加へられ。およそ三年ばかりつとむる内。又他の家士に年給よろしき口ありしまゝに。溝口家のい
とまを乞取。その家に奉公する事又一年ばかり。嘗て奉公の暇あるときは先主溝口殿へ訪ひに參ること毎度なり。扱此
人小身なりといへども至つて慈悲深き。篤實主顧。時々にわれに向ひて。働もし在所へ歸らず。猶今暫く奉公を控ぞ
ならば。ふたゝび我家に還り來れと薦らるゝ故に。我もまた主顧の慈惠を忘れがたく。溝口どのに歸り新參となり。
復三年の間奉公仕りぬ。前後七ヶ年の辛抱六ヶ年は溝口家に仕へ。其後此所へ歸り。僅に殖生の小家をつくり農業耕
作をむねとし。木を樵ては城下に賣。いさゝか農事の暇ある時は。人に雇はれ四方を駆めぐり。貨錢を取。拵けるに。
城下へいづる度ごとには。古主の家に至り訪へば。古主もまた我こゝろさしの變らざるを歡び吉につけ。凶に就ては
我を呼よせ。折々多く金錢をも賜はるにより。厚恩を感じ。兩日三日隔には機嫌を伺ひに參りし處。すてに四年以前
より。それなる十助還りて後は我に代りて農業を營めば我は大かた溝口家へ參り。僕代りに雇はれ。或は旬日あるひは
一月逗留仕る事尋常なり。然るに三ヶ年以前の三月。彼家の僕俄に越度の事ありて。暇を出され。我を呼に遣し。
僕代りに。一二ヶ月雇はれ居たりし處。四月十五日の夜半の頃。召仕の下女俄に腹痛を仕出し。大きに苦みけるほど
に。主顧はもとより。奥方さまゝにいたはり丸散よ水よと語り喧ども。痛疼ますゝ厳敷して治まりがたき故に。
日頃出入の針醫あれば。我に迎へ來れと有しまゝに。我も大きに忙ながら。醫者の方へかけ出せし處。其日は正ど今
日のごとく雷鳴雨降て。宵に雨もやみ。空は晴たれ共。路次濕り。所々に水潦りありし間。木履を着。善惡を厭はず
駈付る折こそあれ。鳴尾殿と申大身の別莊の後門の前へ參る所に。向ふの方より謠曲高らかにうたふて來る人あり。

耳を傾けてくはしく其聲をきけば。溝口家の隣家吉岡殿と申。武藝の師匠あり其人なり。此主顧も個の篤實なる人物。溝口殿とはことの外懇意にて。平日圍碁を好給ひ。我居る主人の方へ日々に来り給へば我等も折に觸ては茶などはこび出るにことの外したしく。言をもかけらるゝといへども。劍術者ときけば。何となく心地悪く。其上其人禮義正しき人なれば。我もつめに路次などにて出合ときは。少しも不禮を活かず。其夜は雨の後。空も清く晴わたり。月の光晝よりも明らか成しかば。若出合ては木履をぬぐも邪魔なれば。やりすごして行んと見廻す處に。鳴尾家の屋敷の土塙の外に枳敷の籬有て所々損じ。土塙と籬の際にかぐみ竄るべき木蔭あり。我これを見付。幸ひの所なりと忍んで。籬の後にわけ入。ひそかに伺ふ折しも。吉岡殿はや我かくれある籬の處へ來り給ふをみれば。よほど酒に酔ひ給ひしとおぼえて脚步穩ならず。我忍びある木蔭の前を二間ばかりも通給はざるに。一人の大男草鞋をはき。忍び足にて伺ひ逼り。吉岡殿の後より。ひらりと抜て切つたり。彼男の劍術の勝れたるか又は双物の名作物か。あゝといはさず切倒す。其時われは枳敷の蔭に有て。此形狀を見ておそろしさいふばかりなく。満身一度に麻縮り地の上に打臥。今も見付られて殺さるゝかと。其時心願を倣て。南無金毘羅大權現。此度の難を救ひ給はゞ早速參詣いたすべしと只願拜み居るうちに。彼くせもの吉岡殿の誓をとつて引仰のけ。いかに吉岡。先年某に恥辱を與へし鬱憤今はらすぞ思ひしれといひさま。とどめといふものにも候べし。吭を二刀までさし通したる其有さま。畏ろしき強さ。其聲耳の底にとゞまり。月の明りに能々面體をみるに。双髪にして色白く。腮方にして。兩の頬骨たかく聳。眉の毛黒く。年齢四十餘り。一向名島の家中には見慣ざる人柄殊に旅装ひしたれば。全く他國の人に相違なし。其顔かたち夜分なれども。恐怖さ之餘り。目さきに着てわすれがたく。然るに太刀音鳴尾の屋敷に響てや有けん。門内に數多の人聲ありて。たしかに刀の双音なり。裏門の外へかけ出みよと。聲々に騒ぎのしるを聞て彼のくせ者は刀を鞘に納め。逃出す。我も由緒なき所に居て驚へられては身の大事なりと存じ籬の裏より逃げ出。籬を破て走りし。其後より

下大きに騒ぎたち。吉岡を切たるもの。諸士の内にあるべしと。殿様よりの御詮議さびしく。我より外に仔細を見認たる者なしといへ共。もしや掛り合となりては後日の難儀なりとぞんじ。曾て口外に出さず。其時に金毘羅大權現様へ願籠いたしたる故に。此度願解のため參詣いたせしなり。扱其後時々其事を思ひ出せば。彼の者の倣まぼろしに見え。ひたすらおそろしかりしに。先日はからず池の側においての扱ひに入たる男の顔をみるに。彼の吉岡どのを殺したる曲者に相違なし。競ひの時我渠をみるより。駭し。懐はずしらず氣を取失ひぬ。是こそかなたの先刻の仰の通り。一度動轉したる魂蟲の納まらざる故と覺えたりと汗を流して物がたる。無三四は七助が説の間より。或は怒り。又は齒がみをなして居たりしが。忽ち顔色に怒りを顯し。扱は我父を討たる者は。先日もの者にてありけるよな。それとしらずして。寸段くせざるこそ残念なれ。只今備の物語する吉岡殿といふは。吉岡太郎右衛門ならずや。七助答へて是なり。無三四其吉岡は我父なり。七助ふたゝび仰天し。彼方は肥後の熊本宮本家の御子息様と承りしに。吉岡殿の子とのたまふは千萬不審きことなり。無三四申けるは某實は吉岡が二男襁褓の内より宮本武右衛門に養はれ。武右衛門われを寵み愛せらるゝ事。實父の厚恩に勝れたり。然る所實父横死の後更に其仇を討べき者なし。某類に主人清正朝臣に復讐の願をあげ。武術修行と申立。其實は敵討の心底なり。されども誰を敵とすべき目的なかりし間。肥後發足の後。名島に赴き父が門人に會合して。その手がかりを探り問に。其以前播州姫路において。佐々木巖流といふ者あり。聊父太郎右衛門と争を起し。恥辱をうけたり。渠が所爲なるも計がたしと語りし間其巖流を尋ね出し。試に仔細を聞んと思ひ。三ヶ年以前より。國々にて佐々木といふものを尋ね求め。又播州姫路へもたち越。かの巖流が人物を聞合す處に。双髪にして年齢四十有餘と聞けり。然るに唯今汝のいふ所も四十有餘にして双髪の大男とあれば。汝のいふ所の模様と。某が播州にて承りし所の巖流が人物と。果して符合せり。先日の大男は双髪にあらず。然れども深く按ずるに。巖流わが實父を闇討にせしもの。其形容を變たるも知るべからず。かたちを易るほどならば。

又姓名をも改めつらん。何さまかの男の人物を熟と思ひめぐらせば。面體の様子。ひとへに這斷巖流にうたがひなし。先日の時姓名を聞定めずといへども小倉の藩士と申せしからは。小倉の城下に至り聞合さば。忽ち明白に相わかるべし。彼巖流ならば。我父をうつて後に。小倉に仕へたるに疑ひなし。然らば新參の士なり。かたぐ以て捜しむるに容易し。此上は一刻も早く打立べしと忽ち座を跳り上り。旅行の用意を取急げば。十助無三四にむかひ某も御供仕るべし無三四かしらをふり無用。我既に諸國修行の間に。たまへ劍術鍛錬の者に出合所。相手は眞劍己は木刀といふ法を定め。眞劍の勝負を試みるに。唯我片腕にも勝る者なし。巖流とても何の怖畏かあらん。一討に擊殺して。實父が靈をよるこぼしめんといへば。七助も側よりすゝみ出て決してあなどり給ふ事なけれ。私御供いたしたくは存ずれ共。所詮期に臨んで物の用に立かたし。十助は劍術をも仕れば。片腕の御役をも仕るべし。是非に御供いたさすべしと願ふにぞ。無三四甚だ歡喜し。此上は敵討は事に臨なば願ひをあげて討べし。復讐に恥ある物なれば。助太刀はかなふまじ。され共旅宿までは俱ふべしと有ければ。十助は雀躍し。無三四諸とも旅行の支度そこへに調ゆれば。七助が女房はめてたふ敵に鯉節の口祝ひの肴に酒をととのへさし出す。十助が妻は。無三四が言の動き恐るゝ景色もなく。さらに泰然としたるに。少しは心やすけれ共。勝負は時の運とあれば。勝にさだめぬ劍の中。神にいのりをかけまくも。かしこふ手柄を壽留の肴盃三度かたぶけて。無三四十助旅装をととのへ。未のさがりに首途して。小倉の城下へいそぎける。

無三四視三佐々木官大夫一事

往昔齊の景公に三人の豪傑あり。其名を。陳開疆。顧冶子。公孫捷といふ。晏嬰常に三人の英勇を悪み。殺さんとすれども。其序を得ざりしが。忽ち二ツの桃をもつて。はかりて三人を殺す。諸葛孔明。これを嘆じて。梁甫の吟を作り。つねに是を誦へり。人強くして亡ぼしがたきものは。智をもつてこれを殺すこれ明らかにか書せんとする者は防

ぎ安く。闇に傷はんとするものは。防ぐことかたしと。宜なるかな。佐々木巖流は。往昔吉岡太郎右衛門に勝をとる事あたはず。却て諸人の眼前に恥辱を蒙りし事を。憤り。播磨の國を出避し。名島の城外に徘徊して。吉岡を闇討に打取。結恨は解しかども。底意快よからずや有けん。やがて額髪を剃おとし。名を佐々木官大夫とあらため。そのうち中國を経て四國に渡海し。讃州九龜の邊にとどまり。専ら此邊の俠勇豪傑等に劍術ををしへ導き。己も日々其藝を切磋琢磨し。武術月々に上達しぬ。されど此地も己が心にかなはざる事やありけん。ふたたび九州にわたり。天正十九年五月。豊前の國小倉の城下に着岸せり。其頃は黒田勘解由高政朝臣の鎮藩。家中の諸士大となく小となく。ことごとく武藝を講じ。高名の武士。星の列りたるがごとくなりしかば。やがて驛店に逗留し。其後家中の士にしたしみ。武藝の得失を論ぜしに。元來渠が自得する所。常人にすぐれたる上。吉岡に打負たる後は。晝夜此道の工夫に怠慢なかりしま。今の練磨の功つもりて。中々凡夫の類ひにあらず。夫ゆゑ諸士追々に聞つたへ。旅宿の門前市の如く。毎日ははるく来りて武をこゝろみけるに。果して奇代の上手なりと諸士の評判次第にたかく。既に高政朝臣の聽に達し。ある時城中に召れて。其武技を試らるゝに。官大夫の右に出る者なし。高政朝臣も大に賞美し給ひ。其後諸老臣に此事を評議させ。秩祿を定めて召抱へらるべきに決し。やがて人をもつて官大夫に尋ねさせ給ふといへども。渠生得自儘自意のすねものにて。獨り其身を憍慢。嘗て仕官の心なく。即ち使者に對して申けるは。それがし若年の時より生質放蕩にして。更に禮讓の道に疎く。今四十餘歳まで仕官仕らざる身の。今さらに五斗米の爲に腰を偃んことも本意にあらず。奉公の義は恩免に預りたしと斷りければ。高政朝臣も笑はせ給ひ。誠に今戰國の風俗一藝一能を能する者の僻なり。晋の杜預が左僻には變りて。官大夫が僻は蕩僻といふものなり。しかし是も又憎むべきにあらず。昔楠正成の泣男を抱へたるも。其入用の所を取といふ者なり。武術は戰國の急務にして。今にては第一の入用なり。唯かの男の隨意にまかせ。家中随分かれが熟したる道に逆はずして學び取べし宜く賄料をあたへ。且武藝修

業のためなれば。稽古所をも構へ。宿所をも修らひ遣すべしと。嚴にいひつけ給ひ。當分薪水料として。五百石の年俸を定められ。あらたに召出され。時服を賜り。賓客の斟酌なり。これに因て家中の尊敬はなはだ厚かりしかば。官大夫僑傲が上に慢心を加へ。彌自己の武藝を鼻にかけて。すべて門人に對しても。至つて失禮なる事も多かりき。然るに假初の逗留に幾許の月日をかさね。既に三年の春秋を送りける時に。此黎天下朝鮮の軍役畢り。黒田勘解由朝鮮にわたり給ひ。國城には親父吉高朝臣藩を護り給ひ。譜代武功の諸士は。彼土に渡りけるほどに。官大夫も聊暇も多かりしかば。閑暇の時は。只願漁釣を好み。門人の輩を誘引し。或時は海濱に釣しあるときは池水に釣をたれて。渭濱の娛みを甘ひける。却説宮本無三四は俱に天を戴かざる父の仇を報せんと。十助諸共名島を發足し。日を経ずして小倉に來り。まづ城外に旅宿を占め。巖流が蹠蹠を伺ひ聞くに。人みな申けるは。當家には諸士はなはだ多く。又二三年このかたにあらたに召抱へられたる人も夥しく候。爰に三ヶ年以前に。江州佐々木家の末葉なりと稱し。當家の客分の土に佐々木官大夫といふ人あり。此人生得我まゝものにて。劍術は勝れたる名人なり。平生釣を好み。いとまの日は門人衆を同往して海川のさかひもなく。魚釣を好む人なりと申ける。無三四聞て九分は此人に相違あるまじと心裏に歡び。詳かに其住所を問。猶仔細に人物を見届けん。毎日十助を召つれ。旅宿を出官大夫が屋敷の邊を徘徊し。人目にたゞば見とがめられんことをはゞかり。或時は旅人の模樣に身をやつし。笠ふかふと着き。銘々すこしの行李を負。またある時は他國往來の商人の體に出たち。數日門外を往還して伺がひしが。はたして一日官大夫が漁どりにいづる所を見つけ。熟々と認見るに。あきらかに最前池塘の側にて見たる大男に相違なかりしかば。無三四天にもあがるこゝちして大きによろこび。其日は旅宿にかへりける。翌日早天に十助をよび。ひそかに耳に口をよせて。はかりごとを示し朝飯つねのごとくに食し。官大夫が方へぞおもむきける。

繪本二島英勇記 卷之九 終

繪本二島英勇記 卷之十

無三四對三面巖流の事

宮本無三四は。既に佐々木官大夫が人物を見て。巖流なるべき事を腹に察し。やがて十助を召連。渠が宿所に至り。玄關に案内しければ一人の若黨立出で。何れの御方にて候ぞ。無三四申けるは。某は諸國を廻りて武者修行いたす浪人宮本無三四と申ものなり。先生の高名既に四國。中國までも鳴響候間。此度態々拜顔仕らんため参たり。若御面下されなば満足に存奉ると。懷中より名貼を取出し。慇懃に述べければ。若黨其儘奥に入。官大夫に斯と告ければ。禮讓慇懃なる由を聞。無三四を大聽のうちに迎させ。暫くあつて立出づるに其體はなはだ尊大にして。少も遜る氣色なく。座定り寒暑の談畢りて後。官大夫。無三四が顔を熟とちながめ。足下は先月中旬。池塘の邊において。對面いたしたる仁にあらずや。無三四答て實に然り。某其時は一人の農夫を同往いたせし間。貴館へ訪はず直さま筑前博多邊へ参り。思はず日を送りて今日に及び候ぬ。某幼稚の時より武藝一みちに心をゆだね。少く學び得たる所あれども。いまだ心底に叶ざるが故に。あまねく天下を徘徊して名師に出合。その機關の底を叩き。道を明らかにせんと存じ。諸國を馳廻りて此三四年の間。劍術達人とさへ承れば見参いたし。得失の論は仕らず比量を仕り試るに。いまだ某が右に出るものなく。夫故彼方此方にて猥りに名師を尋問ふに。或人申は筑前國名島の家中に。吉岡太郎右衛門といふ者あり。此人こそ當世の一人なりと語りし間。某が心中大きに力を得。一ツには吉岡に對面して武術の蘊奥をも承はり。次には貴所にも對面いたし。一比量仕らん存じ海を渡り九州に來りしに。名島の土民が噂に承れば。吉岡は不慮の事ありて先年横死致せし由。懊惱少からざる處なり。是によつて今日貴館へ参りしは。比量の望あつて推

參仕ると。敢て謙退の氣色もなく。さも大勇に申ける。官大夫もとより果敢にして堪ざる男なりしかば。今無三四が一言に吉岡を敬し我をいやしむる如く聞ゆるのみならず。若年にして大言を吐事を憤り。怒心頭より起つて申けるは。我も吉岡が存生の間に對面仕らざる事を深く残念に存するなり。若それがし吉岡に出合なば一打に打倒して呉んものを。無三四又申けるは足下は佐々木巖流殿ならずや。官大夫甚だ驚き。某全く左様の者にあらず。無三四曰否足下いかに覆し包み給ふ共。たしかに足下を見識たる證人あり。即某が僕は。生國。播州姫路の者なり。先日某此所へ着いたして後。いさゝか所勞によつて。旅宿に逗留仕る事五日許。渠はからず足下を見付。我に告て官大夫と申は則我國に逗留の間は。佐々木巖流と申せし人なりと語れり。若わが言を信じ給はずは。僕を呼出して見參致させ申さん。およそ人たる者時に臨んで姓名を改るは古今の通例なり。足下何故それ程には深くつゝまるゝや。官大夫莞爾とうち笑ひ。我足下とは初ての對面なり。然るに思ひがけなき我初名を指れたるにより。思はず驚いて答話にまよひ。前名を覆んといたしたり。成程某初めの名は巖流なり。無三四申けるは巖流殿ならば吉岡には往昔出合給ひつべし。しかるを若吉岡が存生のうちに出合なば。打倒さんものをとの給ふは。あまり餘所げなる言かな。既に播州姫路の城下に於て。吉岡太郎右衛門がために。足下却て打倒され給ひし事は。我僕眼前にこれを見たりと申す。我も又播州に參りし節。彼家の諸士が物語に前年如々の事ありて。城外の旅店に於て争ひ起り。巖流と吉岡と互ひに手を接へ闘しが巖流立どころに打負。其後姫路を立去。いかゞなりしや。その趨く所を知らずと申せり。其説の如くならば。吉岡にうち倒され給ひし事。明白なりと申すにぞ。官大夫無三四がためにむかしの羞辱を説顯はされ。流石豪氣の性質なりといへども。敢て口をひらく事あたはず。満面忽ち紅のごとく成て居たりしが。哥々と笑ひ申けるは。すべて武藝には熟。不熟の時あり。考ふるに其時は今年より五ヶ年以前。某が武術今に比べみれば遙かに未練の時なり。若唯今に於て吉岡に出會なば。何條吉岡といふとも我前には立れまじきものを。無三四も同じく口を開いて大きに笑ひ。足下の

論は。たゞ己れ有て人無の論といふものなり。足下既に五ヶ年の間に。大に自得する所あらば。渠もまた五ヶ年の内には。遙に玄妙を得る所あるべし。是等の論は唯言を匠にし。己を利する僻論。畢竟する處。確論とは云ひがたし。縦や吉岡に負給ひしことは何の羞かあらん。然るに小人の如くその羞を包み覆し。姓名を改るほどの事には豈ぶまじきものを。それにはふかき仔細ぞあらん。其事は強て某が問究むるに及ばざる義なり。某はたゞ足下と試合をいたし度望なりと。言語の底に官大夫が恥辱をかぞへあげ。渠十分の怒りを催し。氣を勵す如に説ければ。官大夫心中はなはだ憤り。殊に無三四が年齢漸く微若なるを以て。一打に打居んと懐ひければ。打點き申けるは。某當家に来て後。いまだ三ヶ年の間に。嘗て足下の如くなる豪傑に出會せず。望に任せ試合いたすべし。然れ共都て比量には二ツの傲ひあり。一ツは眞比試と云。一ツは假比試と云。眞比試は一身をかけて比量。これ俗にいふ眞劍試合なり。假比試は竹刀木刀を以て。尋常の稽古比量のごとく。假に勝負を試みるまでの事なり。是れによつて某。假比試は實の勝負にあらざるが故に。何人にもあれ我方に來り。比量を臨む仁には。何時にても眞劍にて御訪ひ申す。されど是までたまま比量を望て來る人も。眞劍を見ては戰慄して逃歸るのみ。足下眞劍にて試らるゝや。唯世間並の木刀にての立合を臨まるゝや。承らんと申ける。即此一言官大夫無三四が強弱を様試るといふものなり。其故は無三四眞劍といふに聞怖して遁れ歸る歟。若又眞劍の勝負を臨むとも。渠僅に二十有許の年齢腹の中より學びたり共尺の知たる藝術己は三十年來晝夜の界なく治行をなし別して五ヶ年以前。吉岡に打負し後は只顧に武を講じ。今は己に及ぶ者普天の下には有まじと。いさゝか慢心胸に滿。眞劍の勝負に託て打殺し呉んものをと。腹に計し奸曲なり。無三四もとよりに好む所なれば。快然として笑を含み。眞劍の義我望む處なり。足下は眞劍を携らるべし。某は木刀を以て御相手に相成べし。我師小笠原新三郎某に教諭して人命の尊き事は天地の如し。猥りに人命を傷ふ事なかれと。某師の教誡を蒙りて後。その高論に服し。相手は眞劍己は木刀と云法律を立。國々に於てたまゞ眞劍にて勝負せんと望む人あれ

ば。相手には眞劍を携せ。我は木刀にて立合ふ。腹に悪念有て立合ひ。猥りに我を害せんと思ふ者をば。我立所に木刀にて打殺し。又我木刀の支妙に伏して。戦のうちに先非を悔。歸伏する者は某一々命を助くる。是に依て某が手裏の木刀は即木刀の眞劍。眞劍の木刀。生活動作我掌におぼえありと少しも動ぜぬ返答に。官大夫ますく憤りを含み。然らば速に勝負を決すべし。さりながら某當所に逗留の間。家中の師範を憑まれ。城主より格別に接待せられ。當分賂料として年俸五百石を辱けなうす。即今足下と眞劍勝負の義を。監察の方まで届おいて試合すべし。扱眞劍の試合は一方は死亡するか傷損する敷。二ツの間を免るゝ事あたはず。然らば殺されたるかたは殺され損。勝ば勝徳なり。互に此事は將來を約し一札を取換し。監察の方へ認る事文書にも。兩人の實印を押して。後日の異論を免れん。また城下を騒さん事もいかなれば。此所の南の海外壹里ばかりに當つて一ツの小嶼あり。此所人家もなき所なれば。外に妨すべき者もなし。彼處にて勝負せんはいかにと申ければ。無三四横手をうち足下の言ことしく確論なり。我に於ては浮雲流水の浪人。足下迎も普天の下に主人なき潔白の豪傑。自己の死傷は互の心に任すといへども。城下を騒動させんは領主への恐れあり。扱證文は先某より書て進上申べし。しかし證人なくては何の益かあらん。幸ひ某僕を召連たれば。我等が方の證人にも此ものを立べしと。やがて十助を庭前へ呼入證人とし。一紙の盟狀を認め。假令ば死亡傷損仕るとも死損たるべき旨書畢りて。實印を居ゑ。十助にも爪形を印させ。官大夫に渡しければ。官大夫も同じく盟約の文をしたゝめ。折節門人兩人來りてありしかば。兩人の門人に花押を書加させ。證人と定め。無三四へ渡し。同く一通の文書を作り。監察の方へ遣し。直に立上らんとする處を。無三四官大夫を押しとめて申けるは。足下願はくは昔の如く。佐々木巖流と名乗て勝負して賜るまじきや。官大夫肩をひそめ。今端的勝負の際に臨んで。人の姓名の事までを右や左。頓着せらるゝは何なる道理ぞ。無三四答へて然らば足下本名を改られし來歴は。何なる故にて候ぞ。官大夫いまだ答ざる時。無三四再び官大夫が側近くすり密。足下の改名の仔細は某その腹中に入らずといへども能

しれり。吉岡太郎右衛門がために。いさゝか羞辱を蒙りし事を。憤り。天正十八年四月十五日夜吉岡を闇討に殺し外に見る者はなしといへども。流石に大膽の人物を寢覺快からず。改名ありしにあらざや。官大夫此時顔色大きに赧らみ。我決して覺悟せざる處なり。其には正しき證據ありての事か。無三四其證人はそれにある我僕十助なり。其時十助官大夫に向ひ。其夜の有狀こまかに語り申さん聞給へ。四月十五日日暮て後雷雨おびただ敷。深更に及んで一天快く晴て晝の如くなりしに。吉岡殿僕をも連ず只一人。謠曲高らかに諷ひ。鳴尾五郎左衛門といふ人の別荘の裏門前。一方は大藪茂り。一方は屋敷の高堀積藪籬の際に來り給ひし處を。御身その跡より黒き小袖を着し。草鞋をはき。無言にして後より迫り近付吉岡殿の右手の肩先より。ねらひ打に切付られしかば。深手にてありし故。二言といはず俯臥に倒れ給ふを。忽ち髻を搦んで引仰け。血刀を取直し。いかに吉岡先年某に恥辱を與し其恨。覺たるかと世に恐しき聲をいだし。胸板を足にて踏しめ。吭二刀つゞけざしにせらるゝ折から。鳴尾の屋敷の内より數多の人聲して門外に人をあやめたる者ありと覺るぞ。棒よ鎗よとひしめくを聞。其まゝ刀を鞘に納め。東の方へ逃られし事を慥に覺給ふか。唯今の物語符節を合せたるが如くならん。官大夫十助が言處。誠にすこしも違はざるを聞。默然として頭を傾け。汝が一言悉く割符を合せたるがごとし。某いかにも吉岡氏に恥辱を蒙りしを憤り。闇討に討たり。後に思へらく。嗚呼よしなき事をせしもの哉と。後悔せしかども悔て返らず。汝いづれの所にありて如此つまびらかに蹠蹠を知るや。十助答て私は吉岡殿の隣家に。溝口源兵衛といふ人あり。其家の僕なり。主人の要用に就て其邊に行かゝり。計らず物かげにありて。其夜の始終をことごとく見たり。其後忙て主人の家に歸り。此の事を語りぬ。既に吉岡殿横死につき其翌日より。國中吟味厳しく。若や家中の士等の所行にやと。區々の評定。これによつて其夜の仔細たるものは私一人。この事主人源兵衛より城主へ訴出。それ故我さまの口問に預り。具に御身の模様。ならびに罵り給ひし事共申上しかば扱は去年吉岡に恥辱を蒙りし者は。播州姫路に住する所の浪人。佐々木巖流に相違なしと當分

に一決せり。官大夫又曰。先刻無三四の言に家僕は播州姫路の産なりと申されしは。某に實名を名乗らせん爲の調略にて有けるよな。眞に愼心べきは天の命なり。然らば宮本氏は吉岡がためには實に何人ぞ。無三四答て。某は太郎右衛門が次男。肥後國熊本の家士。宮本武右衛門がために。襦袢の内より養子となれり。今實父の讐を報すべき人なきが故に養父を辭し。主人主計頭清正へ願書を奉りしかども。敵討の願ひは如々の事にて聽し給ず。武者修行として他國徧歴を免されたり。これ憐愍の芳志といふものなり。夫より以來四ヶ年の艱難。今日一時に散悶する時來れり。いかに巖流速に勝負せよ。官大夫聞て爾笑を催し。孝子の志感心に堪たり。我前名に復して勝負すべしと。直に袴を着し。平生秘藏して腰を放さず帶たる備前長光が鍛たる二尺七寸の刀を携へ。若黨二人を引具し。無三四主従に伴ひ。路次少しも油断をせず。小倉の城下を發出し。濱邊をさして急行。

無三四討ニ巖流一事

文祿二年癸巳八月廿五日。既に宮本無三四が至孝天に通じ。佐々木巖流に廻り逢。小倉海外の小嶼に於て。勝負を一時に決するに宛まりしかば。兩人齊く濱邊に出。二艘の漁船を借。一艘には宮本主従。一艘は佐々木主従是に打乗り。直ちに海上の小島をめがけて押出し。互ひに船に目ばなしせず。兩船舷をきしりて漕連たり。此事すてに城中に達せし上。さきに巖流が家に居合せたる兩人の士。斯と諸門人に告げしらせしかば。門人等この告を聞とひとしく。復讐の出會とあれば。敢て救ひ助くる事能ずといへども。居ながら安否を聞べきにあらずと。追々に濱邊に出漁の小舟に打乗次第に漕かけたり。扱監察官の許へは。巖流が先達て訟る所の文書に依て。監察官大きに驚き。城内に入て。此由前勘解由吉高入道に訟れば。入道大きに驚き給ひ。余家中に渠が門弟多ければ。若過て官大夫に荷瞻し。法外の失ある時は清正の憤りを引起し。得て這樣の事より隣國不和と成事あり。急ぎかの島を警固し。嚴重に制止を加へよとありしかば。靜謐を司どる山内金左衛門。堀徳内早馬をもつて城中より駈出せば。其手に從ふ徒士。歩卒。雜兵。小者追々にかけ出し。或は熊手股叉を携へ。城中より濱邊まで。俄に上を下へとかけし。馬煙を上塵砂を蹴たて。以の外の騒動なり。是に依て海邊には役船に舳艫をかけ。官宦の人々込乗漕出す。此事穩便ならざるが故に。城下の町人に至まで。斯る事は珍らしき事に思ひ。皆我一と漁船輕舟の類ひに。廿人三十人づつ乗こぼれ。島を目かけて押出せしは。目ざましかりける有状なり。此日すこしく風起り。白雲虚空に飛。波浪船の舳艫を洗ふといへども。巖流無三四が船。はや小嶼に漕着たり。無三四船中にて身整し。船より砂上に跳あがる。身には袴の黒小袖に。萌黄色の革袴を裾みじかに着し。手次をかけ。船中に有合ふ處の襪を取て。中より踏折り二ツに爲て。左右の手に提たり。巖流は白き袴帷子に。布袴を高く股の上に褰。白布の帕しめ。長光の刀を挟んで船より上る。此時海上より門人の船追々に漕着。諸門人ことごとく巖流が前後を圍み禮をなせば。巖流も禮を返し。遙々と御見繼の程。歡に絶たり。唯今この所にて互ひに玄妙を用ひ。運を天命に任せて試合申べし。門人等言を齊へて申けるは。まづ試合とあれば。唯雌雄を試みて。流義の勝劣を究むるまでの事なり。其義ならば何ぞ死生にかゝる程の義は有まじきに。此試合はわれに仰付られ候へかし。巖流申けるは此義は別に義論のある事なり。一人も御手ざし御無用。何れも船へ召れ候へと挨拶半へ制止の役。山内金左衛門。堀徳内が船。諸艦をもつて押來り。船中より大音を上げるは。當家の面々一人も驚して手を下す事なかれ。比量のみにあらず復讐の義ある由。すてに大殿の間に達したり。何れも自分への船中に差控。神妙に見とゞけらるべしと制するにぞ。諸士船中へ去にける。巖流は無三四が木刀をもつて。眞劍に當らんといふを殊に怒り。ちかくと近付す。いかに無三四。汝が振廻傍に人無しといふべきのみ。まづ我手の中の眞劍に當り。黄泉に趨くべしと。貳尺七寸の腰刀鞘をはなれて拔出せば。無三四折權をとりて。間を詰よせ。眞劍に勝る木刀の安排を見よと近寄ところに。巖流先を取べき透間や有けん。無三四が頭上へ電のごとく切懸る

止を加へよとありしかば。靜謐を司どる山内金左衛門。堀徳内早馬をもつて城中より駈出せば。其手に從ふ徒士。歩卒。雜兵。小者追々にかけ出し。或は熊手股叉を携へ。城中より濱邊まで。俄に上を下へとかけし。馬煙を上塵砂を蹴たて。以の外の騒動なり。是に依て海邊には役船に舳艫をかけ。官宦の人々込乗漕出す。此事穩便ならざるが故に。城下の町人に至まで。斯る事は珍らしき事に思ひ。皆我一と漁船輕舟の類ひに。廿人三十人づつ乗こぼれ。島を目かけて押出せしは。目ざましかりける有状なり。此日すこしく風起り。白雲虚空に飛。波浪船の舳艫を洗ふといへども。巖流無三四が船。はや小嶼に漕着たり。無三四船中にて身整し。船より砂上に跳あがる。身には袴の黒小袖に。萌黄色の革袴を裾みじかに着し。手次をかけ。船中に有合ふ處の襪を取て。中より踏折り二ツに爲て。左右の手に提たり。巖流は白き袴帷子に。布袴を高く股の上に褰。白布の帕しめ。長光の刀を挟んで船より上る。此時海上より門人の船追々に漕着。諸門人ことごとく巖流が前後を圍み禮をなせば。巖流も禮を返し。遙々と御見繼の程。歡に絶たり。唯今この所にて互ひに玄妙を用ひ。運を天命に任せて試合申べし。門人等言を齊へて申けるは。まづ試合とあれば。唯雌雄を試みて。流義の勝劣を究むるまでの事なり。其義ならば何ぞ死生にかゝる程の義は有まじきに。此試合はわれに仰付られ候へかし。巖流申けるは此義は別に義論のある事なり。一人も御手ざし御無用。何れも船へ召れ候へと挨拶半へ制止の役。山内金左衛門。堀徳内が船。諸艦をもつて押來り。船中より大音を上げるは。當家の面々一人も驚して手を下す事なかれ。比量のみにあらず復讐の義ある由。すてに大殿の間に達したり。何れも自分への船中に差控。神妙に見とゞけらるべしと制するにぞ。諸士船中へ去にける。巖流は無三四が木刀をもつて。眞劍に當らんといふを殊に怒り。ちかくと近付す。いかに無三四。汝が振廻傍に人無しといふべきのみ。まづ我手の中の眞劍に當り。黄泉に趨くべしと。貳尺七寸の腰刀鞘をはなれて拔出せば。無三四折權をとりて。間を詰よせ。眞劍に勝る木刀の安排を見よと近寄ところに。巖流先を取べき透間や有けん。無三四が頭上へ電のごとく切懸る

を。無三四右の手に携たる。一片の櫂の折をもつて受とめたり。是より双方秘術をつくし。刀去れば木刀すゝみ。木刀されば刀進んで時を移して切結ぶ。海上の見物此ありさまを見て。あたかも酒に酔たるがごとく。牙を嚙肘をはり瞬もせず見る處に。巖流歩をすゝめ飛込しが。忽無三四が兩足を難つけたり。無三四其劍の上を跳り超。大喝一聲し右手の折櫂をもつて。巖流が眉間を照して一撃打たり。何かはもつてたまるべき。櫂の當る處髮際より印堂へかけて腦骨打碎かれ。满面血煙りおこつて地に倒るゝを無三四なほ一下して。再び頭骨を打たりしかば。兩眼迸り出。苦しげに叫び。七轉八倒して息絶たり。此時無三四袴の裾を見れば。裾の方より貳寸許ざらりと裁てあり。是最前無三四巖流が劍の上を躍り超たる時に切たるなり。今少し飛事高からず。袴の裾より下のかたに足あらば。忽ち兩足を切るべかりしに。袴の裏に隠れたるが故に。僥倖にして危きを免がれたり。其時人の言の葉に切も切たり。飛も飛んだりと稱美せしとなり。是よりこの島を巖流島と呼なして。猶今にいたるまで小倉海外にありて。普く人の知る處なり。時に海上數百人の見物。無三四が早業群に超たるを見て。一度に嗚呼と感ずる聲。しばしは嗚もしづまらず。警固の船より。山内金左衛門。堀徳内島にあり。無三四に對面して仔細を問に。無三四は兼て一通の口旨を認め。十助に持せ置たるを取出し。兩士の前に差出せば。兩士文書を受取。逐一に披讀するに。實父太郎右衛門を巖流に討れたる始末。今年に至りて巖流を見付得たる仔細。又理不盡に鎮藩を騒せ奉るのうへは。縦令嚴重の罪科に處せらるゝ共。少しも恨奉るまじと書認め。住所姓名悉く詳なりしかば。兩士書付を收め再び禮を返し。復讐とあるのうへは何の相妨る所あらん。しかれども此趣前勸解由入道へ申べし。其間は旅宿に在て裁許を待るべしと。宮本主従を請て官船に乗移らせ。次に浦邊の民に申付。巖流が尸をまもらせ。みなく城中に歸りける。後に巖流が死骸は此島に葬り墓なほ今にあり。

山内堀兩士。無三四養應并護送の事

再説山内堀の兩士。宮本が口旨を携へ城中に立歸り。吉高入道に奉りければ。入道殿大きに感心し給ひ。誠に順孝と謂べし。しかしながら家中に巖流が門入多ければ。自然いかやうの變を生ぜんもはかり難し。警固の人数をもつて無三四が旅宿を護らせ養應せよ。又此旨熊本の城へ報ずべしと懇に申付らるゝにぞ。山内金左衛門。堀徳内ふたゝび無三四が旅宿におもむき。吉高朝臣の芳志の旨を演説し。旅宿を轉じて養應せんと申ける。無三四謹んで兩士に向ひ。某御城下を騒し奉るのみならず。御賄料を賜りて召置るゝ師範人を殺害仕る事。莫大の罪科なり。しかるに仁恕を以て赦宥を蒙るすら。なほ廣大の御恩なり。何ぞ感懃の御養應を乞願はんや。もし此上の厚恩には。一日も早く歸國の御免を蒙らば。肥州の本國に立歸り。養父養母に此事を告知らせたく存ずるのみ。次に復讐の事は全く表立たる義にあらず。既に口旨に認め各を以て言上仕るごとく。主人より差ゆるされたるは武術修行の徧歴なり。若當館より復讐の義を仰遣されなば。却て主人の不興を蒙る道理なり。去ながら某の申旨。胡亂にも思召れ候はゞ。内々人をもつて本國へ御問合下さるべし。また御不審もなく此まゝに御宥免下されなば。實に一日の逗留は三秋を経るが如し。龍肝鳳髓の御養應よりも。養父養母に對面仕るこそ。身にとりての歡喜なれ。兩公此趣をもつて一應しかるべき様に御執成頼入ると。涙を流して申ける。兩士も無三四が養父を思ふ孝心を感じ。直に城中に立歸り。詳かに訴ければ。吉高入道大きに稱美し給ひ。道理至極せり。襦袢の中より撫育の恩を受たる養父には。義をもつて孝を存し。血肉をわからたる實父には。艱難を嘗て孝を全ふす。孝義ともに備れり。然るときは久く止むべからず。去ながら時運戰國に於ては。人の心詭りを善とす。渠もし官大夫を殺害し。偽言を設けて人を欺くも計がたし。頓て相糺て後實情相違なきに於ては。孝子を窮するは罪なり。望にまかせ今晚一夜饗し。明日早々發足させよと。残るかたなき言付に。兩士ふたゝび座をしりぞき速に巖流が家に至り。奴僕等を糺明するに。渠元來妻子なく。家僕はみな當所のものにて。今日宮本と巖流が説話。逐一に物かげに立聞せしに。敵討に相違なしといふのみならず。證人となりて花押を副たる兩個

の家士側にあつて始終の蹠蹠ことしく聞居たれば此ものをも呼出して聞に。分明に敵討なりと告しかば。兩士城中に入て此由を申す。吉高重ねて宣けるはしからば隨分叮嚀にもてなし。明朝發足する時節は。領分界まで護送すべしと命ぜられ。兩士また旅宿に來り。無三四に見え。明日出立を聽さるゝ旨申渡しければ。無三四いよゝゝ雀躍し。歡喜事かぎりなし。扱その夜は兩人無三四に陪して酒宴を催し。深更に暨び辭を告て歸らんとする時。無三四兩士に對し懇懇に申けるは。先刻より申如く。御咎をも蒙るべきを却て恩饗を辱し。速に御いとまを賜る事。太守の仁恩と申ながら。畢竟兩公の執し宜敷がいたす處なり。此恩骨に銘じて忘れがたし。次に明朝の發足いまだ明ざるさきに參るべければ。今般の御別離は互ひに天の一方。拜顔も是かぎりなるべしと。いまだ言も終ざるに。山内金左衛門申けるは。否明日なほ御對面いたすべし。主人より別して心を用ひられ。某どもに命じて界を出らるゝまで護送仕れとの事なり。無三四はなほだ恐れ入。決して其儀には及ぶまじ。兩士聞ず。君命のうへは我々が心に任せざる處なりと。言ひつゝ其座を立にける。無三四其まゝ旅宿の門外まで送り出るに。旅宿の前後はみな高張の挑灯をかゝげ。警固嚴重なる事いふ計なし。無三四は再び驚轉し。吉高朝臣の芳志をぞ感じける。既に鷄明の黎にも成しかば。無三四主従旅装を整へて立出んとする時。山内。堀の兩人。嚴重に旅行の裝束を調べ。馬を牽せて門外に來り。無三四を請て駕に乗せ。兩人つゞいて馬にまたがり。前後の隨兵五六十人。何れも旅出立にて駕に従ふ無三四今は辭する事あたはず。境に望んで出にける。

宮本無三四始終の事

百行のうち孝より大なるはなし。宮本無三四は既に父の讐を復して後は。仁人のために感起し。護送を蒙りて境をはなれ。夫より筑前國名島に赴き。亡父吉岡が塚に詣て。香花を備へ復讐のよしを告て讐を祀り。其後諸高弟に對

面して。事の仔細を告ければ。吉岡が高弟等も俱に感涙を催しける。夫より十助諸共七助が方にいたり。爰に逗留する事三日なり。七助夫婦娘がよろこび。蘇生の人に逢ふがごとく。猶幾許日をとどむるといへども。無三四は養父に對面せん事を心せきければ。七助もとどむる事あたはず。これより無三四晝夜のへだてなく。道を急ぎ熊本に立歸る。無三四が歸しと聞て。舍弟友之助興より走り出て迎ければ。無三四弟にむかひ。父母はいかにして見えさせ給はぬぞ。友之助是を聞涙を流し語けるは母は三年前八月。風のこゝちと煩ひ病死し給ひ。父はひたすら兄の事を案じ。此友次郎は如何したるぞ。本意を遂しやなど朝夕に氣づかひ給ふうへに。母の病死に力をおとし。程なく病に罹り。去年十月に墓なく成給ひ。今日も兄の事申出し。獨寂莫して暮しかねたる折節なり。能こそ歸り給ひつと。聲をあげて歎きける。無三四も兩親の死を聞。大きに力を失ひ俱に涙にくれけるが。友之助に向ひ。實父の讐を報いたる物語をなす。これより父母の墳墓に詣て。鬱々として十有餘日を過しけるが。一日友之助に向ひ申けるは。某すてに仕官の道に心なし。また茫然として此所に年月を費さん事を希はず。猶廻り殘しける國々を巡り。心に任せたる住處を求むべし。友之助忙おどろき。今は世に憑みなき孤子。兄をもつて父とも母とも思ひしに。復家を出給はゞ行末はいかゞせん。是非に思ひ止まり給へと。かきくどき歎くといへども。無三四決して聽き入れず。終ひに同年十月下旬。肥後國熊本の城下を出去ける。嗚呼無三四が英名唯武術を以て天下に鳴るのみならず。孝心節義ならびなき俊傑なり。後世の君子つとめて其の孝をとらば可ならんかし。

編者曰く無三四再び家を出諸國を經歷せし事跡并前編に洩たる所々の奇談等詳かに後編に出す前編と照し觀給ふべし。

繪本彦山權現靈驗記

繪本彦山權現靈驗記序

夫人之性也。孝廉而忠信。又何求。毛谷村六助者。身居貧。事母盡孝。奉養無所不至。死則哀慕不已。人皆爲之掩淚。又有大丈夫志而心事訴之無所。乃祈彦山權現。神憐其志行。悉告之。隨後有力如虎。擊劍亦得妙。皆是神所授云。如其容奸賊之欺。與助二女子復讐。可謂不謂。清廉且忠信者乎。頃有採錄其事蹟。附繡像。名曰靈驗記。其紀事也。雅馴而能辨。畫亦妙而逼真。使能感當時景光。世人覽之。有感而進。孝廉忠信。則有益于世不少矣。豈如備兒女子觀。小冊子類乎。因書肆請余序。終題數言于卷端云爾。

享和三癸亥歲春正月

平賀全齋

繪本彦山權現靈驗記

繪本彦山權現靈驗記總目錄

卷之一 彦山權現奇瑞の事
京極内匠來歴の事

卷之二 京極内匠與蓮大寺爭論の事
里見勘四郎逢難風事并銅劍の事
神谷與四郎奇術の事并京極討蓮大寺玄蕃允の事

卷之三 百瓜家雲州出張の事
多和元忠襲百瓜之陣の事并京極内匠仕官于百瓜家事

卷之四 多和元忠戦死の事并京極内匠討河津喜太郎の事
鳥取落城の事
百瓜家和講の事

卷之五 幸若太夫舞の事并内匠始て吉岡の女を見る事

吉岡一味齋來歴の事
京極内匠春木藤藏に令説媒來

卷之六 一味齋衣笠彌右衛門に春木が不義を辨ずる事
鎮西合戦來由の事

百瓜家遠慮を吉岡に談ぜらるゝ事并吉岡一味齋普請を奉行する事
岩國興國寺旅館結構の事并京極春木吉岡を殺害する事

卷之七 三浦源右衛門深慮の事
衣笠彌右衛門春木藤藏を據にする事
吉岡が兩女春木藤藏を斬る事
吉岡が妻子發足の事

卷之八 毛谷村六助孝行之事并彦山權現靈驗之事
微塵彈正鎮西へ渡る事
微塵彈正六助を討る事

卷之九 微塵彈正六助と比試の事并彈正六助を誹謗する事

六助門弟子に彈正が不義を説く事
 吉岡が妻子六助に復讐を告る事
 六助小倉に出て微塵彈正が惡事を訴る事

卷之十 十時明知を以て微塵彈正を擄にする事

十時善右衛門彈正を糺明する事并百瓜家の使者小倉に来る事

吉岡三女敵討の事

吉岡齒女が事

繪本彦山權現靈驗記 總目錄終

繪本彦山權現靈驗記 卷之一

彦山權現奇瑞の事

熟を周易の經文配當をもつて。天地變化の道理に推當に實に然りまづ乾坤の二卦あり。乾坤は天地なり。次に屯の卦あり。屯は物の始て生ずるなり。次に蒙の卦あり。蒙は蒙昧としてくらきの義なり。天地ひらき屯として萬物地に生じ。人類鳥獸つゞいて化生するといへども。天地開闢の後ひさしからざれば。鴻荒蒙昧にしてくらし次に需の卦あり。需はもとむるといふ字にして。はや食物を需るなり。次に訟の卦あり。訟はうつたへなり。あらそひなり。天地ひらけて人生ずれば。忽ち食を需むる事を旨とし。飲食をもとむれば。地をあらそひ食を論じて是非の訟あり。次に師の卦あり。師はいくさと云ふ字なり。是非の訟は亂の端にして師の根なり。爰をもつて考るに治亂は國家の器用なり。故に上古より亂極るときは治となり。治極るときは亂となる。君子慎ずんばあるべからず。我本邦神武天皇大和國鸚の長隨彦を亡し給ひ。敵傍の糧原に大宮柱ふとしり立。高天の原に搏風峻峙て。天下しろし召てより以降。正文文祿の年間にいたるまで。凡二千二百三十年。治亂交々にして三百年の昇平を得ることなし。なかんづく足利將軍家の覇權一たび解て後。天下瓜の如くに刻。英雄蜂の如くに起り。一人尊高の君を始め奉り。匹夫匹婦にいたるまで。海内一日も康平の安きを見る事無しに。眞柴久吉公山崎の接戦に武智日向守光秀を誅伐し給ひし後は。蒼天の雲を拂うて白日をみるが如く。再び太平の代とは成りにけり。さればこの治世にあつて。一國一郡の諸侯大名の麾下に於て。武勇萬人に超絶たる族星の如く顯れ。名を天下の間に稱せらるゝ輩數々多かりき。爰に前の肥州牧加藤主計頭清政の家臣貴田孫兵衛正員といふ者あり渠が家系は委曲に次の下に云べし。その武勇を皇國にしらるゝのみに

あらず。芳名鶴林大明にまでも傳へ。剩さへ外國の砂壤に尸を葬らるゝと雖ども。今にいたりて天下の人口に讚嘆らるゝ其來歴を尋るに。彦山權現の靈驗による所なり。抑豊前國田川郡彦山と申は其根を豊前。豊後。筑前の三ヶ國に蟠まり麓に金表あり是より上る事六十餘丁。山の頂三ツにわかれて。三足の鼎の如くに峙ち十の谷あり。四十九の石窟あり。漢土の天臺山は。其頂三ツに峙ち。三臺星の形の如くなればとて。天臺の名ありとかや。所謂彦山の形狀かの天臺の靈嶽に似たり。山中玉の谷だにより飛泉涌出この泉を飲ときは百病もおのづから治し。若天下に變あらんとする時は其水忽然として濁ると云へり。彦山三所權現と申は。南岳は伊弉諾尊。中岳は伊弉册尊。北岳は天忍骨尊。を嚴きまつるとなり玉葉集の歌に。いさぎよく彦の高ねの池水にすます心のすまざらめやは。とよみしもこの山の靈泉のことなんめり。上古より今にいたるまで。靈驗あらたかにして奇瑞を蒙りしともがらあげてかぞへがたく。其上此山の頂に。豊前坊といふ大天狗すみ靈場を守護するがゆゑに。若たま／＼邪智高慢の輩ありて。山中の清規を濫ときは忽神罰を蒙る者も隨多し。其一ツ二ツを擧ていはゞ。永祿八年八月の事ぢりしに大友宗麟入道の家臣朽網兵庫介某といふ者あり肩皮破の猪獅子武者にして。生得大膽不敵人を生たる蟲ともおもはざるのみか。神明佛陀といへども。さらに罰を恐れず。然るにそのころは大友家の武威豊筑前後の國々にかゞやきければ主人の威風の強大なるに乘じ。佛田神領とも云さず驅巡り遊獵しけるが。或時彦山に上り。別當靈仙寺に對面して申けるは。某當山をみるに山路の草木能生茂り。實に屈竟の狩場。われ今日狩くらさんと存るなり。別當の曰く我山は往古より以來魔所にして不信の輩ありてみだりに山中に入り草木を伐とり立どころに神罰を蒙る者はなはだ多し。まして狩獵などすべき地にあらず。山獸を殺し血を以て靈地を穢し給はゞ。權現の御怒によつていかなる凶變起らんもはかり難し。決して無用にし給へ。兵庫介更に用ゐずして申けるは。天狗といへ山神といへ。いかでか人力に及ぶべき。某常に神罰佛罰などいへる事を信ぜず。如斯る序でに試みずば何時かためし見る事の候べき。ひらに狩入てその變に出合んと存るなり

と。傍若無人に云ひ罵り。終に別當の許を退き。扱こそ山路に狩入たり。別當をはじめ。一山の大家ことごとく顔見合せ。悪しとは懐へども。大友家の武威盛んなるにおそれて。強て拒ものはなしといへども。天晴神罰をも受ていかなる憂目にも値かしとおもはぬ者はなかりけり。此時朽網兵庫介谷々の木の間。草の茂みに至るまで。あまねく驅巡るといへども。兎一疋をだも見出さず。從卒すべて十六七人何れも山野を家とする狩子ども。絡一ツも得たる者なし。既に夕陽西に傾きしかば。各々一ツところに聚り。茫然として立たる所に。忽渠等が立し後の方。古松老柏生茂りたる林の裏に一聲高く哥々と笑ふ響。山にこだまし。耳を貫き。更に人間の聲にあらず。その嘯號を聞もの物身毛孔いよ立。流石大膽不敵の兵庫介も。大きに驚き。呼といふ間もあらばこそ。何者とも知らず主從十七八人が誓を引摺んで。六十餘丁麓なる金花表の邊谷水のうちに投込たり。兵庫介を始として即死する輩一人もなしといへども。是に一驚を吃ひしにや。兵庫介は十五日ばかり後に死してけり。ひとへに天狗の所爲正しく神罰の然らしむる所ならんと。聞人舌を卷にけり又天正十九年秋の季。豊臣久吉公熟々と思惟し給ひけるは予卑賤の家に生れ。扶桑六十餘州の亂を鎮め天下掌握の裏に歸す。如何にもして朝鮮大明の諸域を切斷。秦の始皇が萬里の長城。漢の馬援が銅柱表を建し功を追て。地を廣くし。我勇武を日輪の照臨。かきりは輝すべしと思召たゞせ給ひ。扱まづ朝鮮國へ渡海せんには。數千艘の軍艦を造るべし。別して予が乗べき料の大船一艘美麗を盡して造り營むべしと頓て疾早川左衛門督高景卿を召れ仰出されけるは。予近年朝鮮國を誅伐せんと懐ふ事久し。一兩年の間に師を帥て渡海すべし。傳へ聞く豊前國彦山は楠の大樹多しと。卿いそぎかの山に登り良材を見て。予が乗べき料の大艦を造り出さるべし。高景卿領掌し給ひ。直ちに九州にくだり。彼山中に攀上り。殿下の命なるよし座主の坊に宣ひ。山中にわけ入り。良材を撰るゝに。殿下の御船に用べき大樹なし。然るに中岳に至りて見らるゝ時楠の大樹あり。枝葉繁茂としてはびこり。其幹のかたはあだかも十圍有許なり。高景卿歡喜なゝめならず。これこそ屈竟の良材かな速かに此木を伐出すべし。このとき山の

案内に侍りける一人の大衆すゝみ出て申けるは。黄門かならずしも此楠木を伐り給ふなかれ。抑々當山の豊前房と申す大天狗。天竺にて釋尊入滅の後はじめて此土にわたり當山に翹を休めらるゝ時。この樹上に止れりとかや。爾しより以降誠に千歳の古木。大天狗の愛樹なりと山中古老の先達ども申傳候なり。若し剪伐を用ひられ。祟あらんも計りがたし。なほ一應評定を加へられ神慮を卜なひ。其上にて斧鉞を用ひられよろしからん。高景卿首を振てのたまひけるは。御坊の言さることながら。殿下異國誅伐の事は國家の大事なり。其ために御船造功せらるゝは天下の大用なり。飛花落葉の草木を賞翫するは畢竟私用の小事。神明佛陀といへども。なかは公のために私をさしはさみ給ふべきや。何の祟りといふ事かあらん。人夫ども時刻を移さず。疾に伐倒すべしと。嚴重に下知せられければ。大衆もちからなく引退く。柚人ども。高景卿の指揮にしたがひ。其根盤桓として蛟龍の蟠たるが如き其上に立ならび。一齊に聲をととのへすべて五六十人の柚人。おのゝ斧鉞を振立伐といへども。此木かたきこと。鐵石の如く。斧刃跳り返りて木に徹ず。みなく大きに驚駭。こは不思議なる大木かな。わが輩多年山中に入て怪樹神木の數ともせず。伐倒すに終に如斯る木に出會すと互ひに面を見合。顔色を變じ。猶豫して立たる所に。忽一陣の怪風吹起り。山中の草木凄と鳴りひびき。須臾の間に天地曠曠として。日の光りくらく。烏雲東西より起りて。尺寸の間も見辨がたく。其の上雷雨おびたゞしく降來りて篠を投るに異ならず。側に立たる數十人の柚人ども。悉く色を失ひ。この變たゞごとにあらずと私語きける。高景卿少しも身を動搖し給はず。汝等一人も下山する事なかれ。速に健なるもの入替り立換りて疾伐べし。予が指揮に戻く者は立どころに斬て捨べしと。腰に挾たる馬策を取り出し人夫を下知せらるゝ其有狀雷の鳴より怖し。此時忽然として高景卿の後の方に。長七尺有餘の大の山伏顯れいて。頭に頭巾をいたゞき身に篠懸の衣を着しいらたかの念珠を手に掲へ。大喝一聲して。いかに高景卿。當山の樹木に於る。開基已來千百年の霜雪を經といへども。竟に枝葉條幹をだに敗事なく拜むる事無し。これ神佛を敬崇するが致す所なり。況や足下何の恐るゝ心もな

是を剪伐して船具に用ひられんとするこそ奇怪なれ。足下は仁義の大道形の如く行はれ。佛神歸依の心も深くして。末世には有難き名將とこそ聞しに。かゝる惡逆無道の舉動は眞に耳を尊んで目を賤むるとは和殿のことなりと。さもあらゝ敷呼はつたり。高景卿振戻りて見給ふに。彼が眼勢突出して屹と睨まへたるそのひかり星の如く高景卿の答話によつては飛かゝるべきけしきなり。高景卿さては様ある山伏かな。いか様にも此山上に栖なる。豊前房とかやいへる大天狗ならめと思ひければ。少しも騒ぎ給はず。胸もせず。こは山伏の仰とも覺えず。此彦山の良木高景が私用の爲に伐用ゆるぞならば。尤も有べき事に候へ。關白殿下の鈞命によつて剪伐を企て。高景はその奉行する所なれば。神佛に非禮の過を受べき謂れ候はず。然るに今當山の良材古來伐たる例なしとて。殿下の台命違逆に及ば。是天下公の鈞命に背き給ふとや申べし。普天の下率士の濱王土の外に出ず。久吉公天子にあらずといへども。寰中は天子の勅。塞外は將軍の令と云へり。當山獨いかなる道理有とも此命令に違背し給はん事叶ふべからず。次に高景を惡逆なりと宣ふはいかなる道理ぞや。御山伏こそ私がましき事を宣ひ給へ。役の行者已往非禮を立て大法を破れといふ事や候。若法を破て私を立ば。山伏は邪魔外道の法にして正法にあらず。正法は法愛をだに禁ず。況や樹木の愛著に縛せられんやと宣へば。山伏理にや伏しけん。忽顔色を和らげ。普天の下王土に非すといふ事なしと宣ふはげに理なり御邊の科にあらず宣ふ所。顯著しと搔消ごとく失にけり。高景卿時に臨み。臆してかゝる道理を責て説給はずんば。危かるべきに。仁義に背き給はざるが故に終に禍ひを免れ給ふのみならず。忽ち白日晴天となりしかば。柚人を催し良材を伐下して。やがて御船に造り給ひぬ。大安宅丸といふは是なり。此後高景卿彦山權現をふかく尊信し給ひしとなり。實に神靈の奇特にあらずや。是れのみならず奇特靈驗はなほ多しといへども。繁が故に略しぬ。

編者曰この一條あなたがちに此所に記すべき事にあらず然れども。貴田が英勇天下に普く鳴りし物は全く彦山權現の奇瑞を蒙り神力を賜はり學ばずして武術の蘊奥を授かり。埋たる家系を探り知り。豪傑の君に仕ゆる事にいた

るまで。神慮の明著御稜威にあらずや。故に首巻におどろかし置て。神徳のあやに尊き事を知らしむるのみ

京極内匠來歴の事

小人好勇而無義則盜と宜なる哉。爰に京極内匠といふ者あり。百瓜中納言照基卿に仕へ。秩祿五百石を賜り其性大佞好なり。彼が家系を尋るに。其前は宇多天皇の後胤なり。宇多天皇第八の皇子を一品式部卿敦實親王と申す。其御子從二位大臣雅信公に。始て源氏の姓を賜り是を宇陀源氏と稱す。雅信公より七代の後に。近江守經方といふ人あり。經方近江國佐々木の庄に住し。地名を以て佐々木氏とす。其子源三秀義父の遺跡を繼佐々木庄を領し。後に左馬頭源義朝に従ひ。保元の戦ひに武功を顯し。平治元年十二月義朝京都六條河原に敗北せらるゝ時。秀義大いに血戦し。數多の戦瘡を蒙り。本國へ立還り終に死せり。秀義に男子六人あり。嫡子太郎左衛門定綱(紋四目結)二男二郎左衛門經高三男三郎兵衛盛綱(紋三連錢)四男四郎左衛門高綱(紋三巴)五男隱岐守義清(紋輪蓮)六男吉田法橋源秀(紋三洲濱)なり。定綱鎌倉の右大將源賴朝公に仕へ奉り父の遺跡を賜り近江國佐々木に住す。定綱また嫡子近江守信綱に家領を譲り與へぬこの信綱に男子四人あり。相傳の所領を四人の子どもに分與へ始めて四家とす。大原高島。六角。京極是なり。京極内匠は京極大膳大夫高詮の後裔なり。系統に於ては名家の流れを汲といへども。心の奸曲なる事はさらに先祖に似ても似つかず。剩 佞辯にして。よく人に阿諛ひ。舌は利刀よりもなほ尖く。川をも海に云なし。石佛といへども點頭すべき曲者なり。尤勇猛大膽にして。仁義の心は芥子粒ほどもなく。され共人には天性自然の能あるものにして渠幼年の黎より弓馬刀槍を翫び。とりわけ射術は。養由石雄が古へに效ひ。鷲目をつらぬき。楊葉を射とどむるのみか。所謂下針をも射外さず。また劍術は牧田左近將監が傳を得て。念流の奥義を究め。後に師の左近將監がために勸氣蒙りおのれが工夫を交へて一流を建立し。微塵流と號しける然るに今百瓜中納言家に仕官し。秩祿五百石を辱ふするその根元を原るに。渠が生國は近江國蒲生郡なりはじめ同國小谷の城主淺井備前守長政に仕へ。平生の佞辯を振ひ。巧言令色をもつて長政を欺き賺し。常に側に侍りて其機を伺ひ。寵愛を蒙り身を立んとす。長政もまた生得明知の人にあらざるが故に。内匠が佞辯にして幫間にするを愛し。ひたすら側をはなさず。秩三百石を與へ昵近の士とせり。老臣蓮大寺玄蕃允は文武二道を兼たるのみならず。忠義もならびなく。君を諫争ふことは伍子胥が自剄の死にもおとらず。また抗直にして勇力を好むことは子路が雄鶏を冠にするに堪たり。つねに京極内匠が若年にして長政の側に有て諂諛。主人の寵愛を執んとする事を惡み。今の世天下大きにみだれことには小田家と合戦して止ときなし。主人もし此者一人を愛して猥に祿を與へ給はゞ。諸士心に憤りを含ときは。當家の危きこと眼前にあり。臣として諫ずんば有べからずと。或とき内匠がその側に侍らざる時を伺ひ。長政の前に出申けるは。君近來京極内匠を愛し給ひ。何に限らず。渠が申ことは大小となく用ひられ寵遇を蒙ること分に過たり。つらく彼者が年齡を見るに。僅に廿三四許り。勿論劍術は一流を建立仕り。射術は古への本間孫四郎が。海上の水鷹を射墜ほどの態あり。年齡よりは藝道遙かに超れたるに似て候へども。某密に行狀を承るに劍術の師は牧田左近將監と申ものなり。左近將監は眞實の君子。はじめ内匠が幼若にして武術を勵む志の厚きに感じ。晝夜のさかひなく己が蘊奥を叩て教へ。終に三四年の間に其流義の印可を與し所。内匠印可を得てより後かつて左近將監が方へ訪ず。師の厚恩を忘却するのみならず。還て誹謗仕る事ありしとなり。牧田大きに怒り憤り印可の書を奪ひ長く師弟の義を絶り。是より流義の名を減却し微塵流と號し。専ら自己の發明したる道のごとく申とかや。爰をもつて渠が性なりを考ふるに。只管身のためを努めて厚恩を忘るゝと存られ候。這樣の族は決して御側ぢかく召置るゝ事宜からず。すべて和漢ともに。君のために寵遇を蒙らんとする者は皆己がためにして。君に忠なく身の危に望て。その君を害する者なり。往昔秦の始皇帝の時に郎中令趙高といふ者あり。始皇帝に阿諛りつねに側にあつて寵愛を蒙りしが。始皇崩じて後。其皇子胡亥秦の

の時に郎中令趙高といふ者あり。始皇帝に阿諛りつねに側にあつて寵愛を蒙りしが。始皇崩じて後。其皇子胡亥秦の

統を嗣り。是を二世皇帝といふ。二世また趙高を愛し。すなはち丞相に拜し。天下の政事をことごとく趙高に任せ。晝夜淫樂に耽り。酒を甘んじ。奢侈を究めしかば。秦の黔首政りごとを恨みて國々謀叛を起し咸陽の都へ攻入んとす。これに因て國々の早馬雪の飛が如く事の由を二世皇帝にうつたゆるといへども。趙高固く制しかつて奏聞せず。故に二世天下の大亂を知らず。晝夜咸陽宮に酒宴せり。近臣この事を皇帝に奏聞せんとすれども。趙高が權を恐れ得たり即君に獻ると申す。二世これを見て笑て曰丞相何とて誤るや。これはこれ鹿なり。趙高の曰馬なり。二世あへて信ぜず左右の近臣に向ひて。丞相今これを馬なりといふ。汝等馬と見るや。鹿と見るや此とき趙高に阿るものはみな馬なりといふ。又信ぜざるものは鹿なりといひ。黙して言を出さざる者もありそののち趙高ひそかに鹿なりと争ひし者をば。僉二世皇帝に讒して殺せり。これより後いよく趙高が權威を恐れて天下の大亂を皇帝に内奏する者なし其後燕趙齊楚韓魏六ヶ國の兵武關函谷關に攻かゝるに及んで咸陽の都ことごとく震動し今は趙高天下の亂を覆ふ事能ざるに及んで。皇帝のために幸せられん事を恐れ。おのれが増咸陽令閻樂といふ者と共に。忽ち二世皇帝を望夷宮の内に弑せり我國の惡右衛門督藤原の信賴は後白河院の恩寵を蒙り地下の賤官より拔擢られて。官中納言に昇り。又非分の望を起し。おのれ能もなく才もなくして大臣の大將に成らんとせし少納言人道信西に遮られ。ひたすら無念のあまり。謀叛を企て。飽までの天恩を忘却し後白河院を押込奉りしことあり。その外先蹤はなはだ多しことごとく君恩を忘却するものは君を亡ぼし身を亡す。然れどもその辜の根元は君にあり。所以何んとなれば。凡天下の上に君となる人も。一國の上に侯となる人も。人を用る事一人にあらず。唯た良工の木を用るが如く。長短大小用ゆるべき所あり。直なる物をば柱とし。曲て大きものをば欄梁とし。長きものをば屋棟とし細きものをば椽椳とし短かく太きものをば榑とす故に尺寸のものといへども捨ずとこそうけ給はれ。國家を治むる人もこれにひとしく。其人物を見て

用べき所に使ふ然らば何れを愛し。何れを捨ん。今我君の内匠を愛し給ふ所を見るに唯かれが巧言令色を歡ばせ給ひ渠もまた巧言令色を犯し以て誑して寵を蒙るのみ。面り君に服事し。腹には君を刺り黜るものなり。早くこれを遠ざけ給へ如斯申さば人を讒するに似たりといへども。全く嫉妬偏執にあらず。庶はくは臣が愚直にして少しも私を存せざる所を察し給へと涙をながして諫ける。商君が言に至言實也。苦言藥也。甘言疾也とは。實に然り。今蓮大寺が言は至て苦しいへども。長政のためには自然の良藥なり。長政良久しく頭をかたづけ沈吟して居給ひしが。稍々在て頭を擡げ。まことに汝の諫言至極の利を盡せり。我はからず渠が辯舌さはやかにして。聰明なるを愛し側をはなさず寵愛する所に。熟々汝が云ふ所を以つて考ふるに師は乃父の如し。晝夜教授の大恩を忘れ。一師の流義を滅却し。微塵流と自稱し己れが發明せし所などと嘗るは。はなはだ不義なり。不義にして浮雲の富貴を貪ぼるものはいかてか忠あらんや。速かに逐ひ退くべし。されどもさし當りて渠を退くべき罪科なし。此の後その行ひを鑑み猶詔候の所行停ざる時は早速側らを逐ひ去ん此の事かまへて他へ漏す事なかれとのたまへば蓮大寺玄蕃丞その座したる所を飛び退り。不才愚直の申條御咎もなく寛仁大度を以て容させ給ふこと廣大の御恩骨に鑄肝に銘ずるとも豈一代の間に報じ盡しがたしとやがて其の座を退きける。是より長政朝臣。何となく京極が佞辯を輕々しく信じ給はず初に換る氣色を見て内匠も伶俐の曲者なれば豫めその心底をはかり。人の心に腹をよせて窺ふに蓮大寺が諫言せし由を聞きこれより深く玄蕃丞を怨み我立身を妨るものは這斷なり梁間の巧燕止まる事久しからず。如し我此所を去て他國に至りて用ひらるべし。されども我を遮るもの此老賊あはれよ敷叙あらば打殺し去べきものをと只顧玄蕃を亡ぼさんとぞはかりける。

繪本彦山權現靈驗記 卷之二

京極内匠蓮太寺と相論の事

呂不韋曰吾聞之。以色事人者。色衰而愛弛といへり。侯臣に於るやまた然り。君一朝に睡さめて倭辯を用ひられざる時は。忽ち其權を失ふ。爰に京極内匠は淺井備前守長政の側にあつて阿諛をもつて用ひられんとせしかども。長政蓮太寺玄蕃允が忠言の諫を容ひ。京極が詔倭を遠ざけんとする情發りしことを覺り。偏に玄蕃允を怨み。何とぞ宜しき時節もあらば。竊に殺害せんものと。奸計を廻らすといへども。蓮太寺も尋常の人にあらず。弓馬の道を究め。その上力量人に超れ。假初のことにも憤み深く更に少しの油斷無ししかば思はず光陰を費しける。元龜三年壬申の年八月一つの計ことを案じ浮説を作りて云せけるは。蓮太寺玄蕃允が家の後より夜なく燐火顯れ出。京極が獄の方へ登るを見たりと云ひ出しける。諺に一犬形になければ萬犬聲に吼るのならひにて。此事何となく城中の人々いひ罵ける。もとより蓮太寺が家は。京極が獄の麓のかたにありて。即かの峯につゞけり。此事隠れなく長政の聞に達せしかば。一日蓮太寺を膝下ちかく召されのたまひけるは。此節何とやら怪異の説を傳るものあり。汝が後蘭のかたより燐火あらはれ出。京極の獄に上るといふ。予此説を聞て心に快からず。其故は近年小田家と干戈を用ひ累合戦に臨て味方利を失ひ。一昨年六月遠藤喜右衛門を小田の手に討れ。去年磯野丹後守佐和山の城を出て彼家に降參し何となく次第に敵のために地面を蠶食たり。これに依てかの京極が獄に一ツの城を築き。我本城と棋角の勢ひを張んとおもふ。然るに這樣的變の生ずるは。若くは家を失ふ前表にても有んか。都て國家の亡びんとする時には。自然と凶兆あるものなり。遠き漢土の事。古き往昔の例は論ぜず。遙く天文九年の頃。周防山口の城主大内左京大夫義隆は多々

良義興の嫡子にして。中國九州すべて十三ヶ國の太守なり。佛法を信じ。また風流を好み詩歌管絃に長じ。天下亂世の中に在て。失口にも武の道を知らず。家臣冷泉判官隆豊。頻りに諫むれども更にこれを用ひざりしが。はたして國士陶尾張守隆房入道全薑といふ者の爲に亡ぼされ。終に百濟國東明王の子琳聖太子より傳りし所の家を殞滅せり。其の亡ぶる時に當りて。さまざまの不思議あり。其頃山口の城下に龍福寺といふ禪刹を營京師紫野の大徳寺より玉堂和尚を請じて住持とせり同年秋の頃かの寺に於て和歌の會の有けるに。いづく共知らず老僧一人有て。義隆と物語しけるが。さながら舊識の如くなり。供奉の人々は玉堂和尚の方様の僧にぞ有んと思ひ。又玉堂和尚は義隆の召具せられたるならんと思ふ所に。満座題を探りて沈思しけるに。此僧標といふ題を探て一首の歌をよみ。禰宜民部丞右信が側に由り斯も候はやとて詠草をさし出す。右信讀て見れば。

知るやいかに。すゑの山風。吹落てもろく。標のうち果んとは

右信此うたを再吟せんとせしかば。彼僧は搔消様に失にけり。右信は扱も不吉の事なるかな。これ全く唯事にあらずと思ひ敢て口外に出さざりしとなり。又山口城中客殿の庭上に二葉の松あり。此は琳聖太子より十代の後胤。長門守義村の植たる所にして。大内家の繁榮は此松を以て驗とせん。千代迄と限れる松も今日よりは。當家の武運にひかれて。萬々歳を経ぬべしと。賀せられたる由云傳へしに大内家亡ぶべきしるしにや。彼常磐木一夜の内に枯たり。諸人大きにあやしみ。是唯事に有ずと云ひしかども。義隆敢て心にも懸ざりしが。果して陶全薑がために亡ぼされ名家斷絶せり。また東國にては今川が亡びし時の妖歌みな其家殞滅の凶兆なり。此度の燐火も我家の變を告るの義にあらずや。玄蕃允元景謹んで頭を叩。御説の如く世上何となく此言をとなく候へども。更に心頭を惱せ給ふべき義に候はず。某夜々心を付て伺ふといへども。嘗て其火を見ず。是察する所に嗚呼の曲者ありてかゝる妖言を作りて申觸すと覺え候。假令燐火顯出るとも。又怪しむに足ず。妖は徳に勝ずとこそ承れ。君外には仁義の道を守り給ひ。國民を

隣れみ忠諫を收ひ給ふ何の不徳なる處ありて妖孽出きたる事あらん。古人も怪しき見て怪ざれば。其怪自ら敗すと云り。更に燐火の義はあともなき虚説なり。少しも御疑ひ有べからずと言を盡して慰ける。長政この時後の方を顧み京極内匠を呼て。汝先日彼燐火を見たりといひしが今また支蕃が説を聞ば虚説なりといふ。汝いよ／＼見たるに相違なきや。内匠答へて。某此間より世上一統に此風謠仕るがゆゑに。何とぞ見出さんと存じ。一夜京極山の邊へ参り伺ひ所正しく四更の黎。燐火蓮大寺どの、後蘭の邊より顯れ。其大さ蹴鞠の如く。火の色青くひかりて。譬は、硫黄のもえ上るがごとく。赫々として光りあきらかなり。又冥々としてくらく成り。山の頂に上り木の間を往來仕る。しかれども間遠くして慥に形状はわかり難しといへども燐火に副て人影の見ゆる様に覺え候。すべて如斯ことの出顯仕るときは御慎肝要なり。次には障礙退散の御祈禱有て宜しく候はんと申ける。この一言内匠が深き奸計ありて。長政君臣の間を隔。かつは蓮大寺に自滅させんとする下巧なり。其由縁は。長政格別愚昧にはあらずといへども。生得疑ひふかき上に。佛神を尊敬し常に神社佛場を造立し。僧尼を歸依して錢財の弊はなはだ多しまた蓮大寺は生質剛直にして。敢て鬼神を尊信せず。且うへ急速にして果敢なり。少しにても言の違ふときは面目を失ひ。死を顧ざる氣徹あり。夫故内匠。わざと渠が心底に憤りを發させ大言を吐出させ。却て後日に面目を失す時は。自ら慚慚して切腹すべしとはかりしものなり。果して今京極が祈禱といふ二字を聞て怒り心頭より發し。内匠に向つて申けるは。御邊の言はなはだ信用しがたし。某も夜な／＼心を付て伺ふに更に怪しき模樣を見ず。今晚立歸りて終夜ためし窺ひ。このこと虚なるに於ては御邊の言上は虚忽の虚言なり其分にさし置がたし。内匠が曰。こは蓮大寺氏の一言とも覺ず燐火は魍魎鬼神の所變なるも計がたく。毎夜出るにも宛がたし。某の見たる夜には顯れ。足下の見給ひし夜には顯れざるも知るべからず。今晚とてもそのごとく。先夜某が見たる時の如く出顯仕らば某が徳倅と申ものなり。如又今宵其應なきに於ては足下の説はいよ／＼信用られ。某の言上は全く狂語の説となるべし。然れ共臣たる者君の説を食て

猥りに虚言の義を言上し。其君を惑すもの有ん乎。先日わが見たる所をもつて有のまゝにて言上仕れり。唯足下の言は己を以て人を誣るといふ物なり。今晚足下立歸りて。燐火出顯ずんば。某をその分に差置難しと有からは。さだめて嚴重罪科に處せられんとの事なるべし。其時われに如何なる罪名を號て殺し給ふぞ。此者君の側に在て燐火の浮説を作り君を蠱惑と爲る乎。然らば某が實に見たる所の燐火は己が身の仇にして非命の屈死に罹るといふべし。又足下は實を面として内には忠臣を損ふ罪人といふ者なり。假令燐火の出る事。虚妄の事にもせよ燐火の出ると云事は世上一統の説なり。如また燐火の顯れざるに世上残らず此事を稱せば慎いよ／＼小事ならず。神明佛陀の人に憑て言しむるといふ者なり。其時は妖言行はるゝ地の變と申ものなり。或は不徳の君は徳を慎不仁の家には仁を行ひ豫じめ不虞の變に具ふと社承れ。我君の如く徳も行も具はりたるには。神祇を祭り佛徳を尊信し祈願の他事有べからず。蓮大寺支蕃允愈色を正しく申けるは。御邊の言はみな阿りにつくつべし。今天下大亂の時節にして諸國互ひに隣國の變を伺ひ。其國の機を計り。虚を見て攻入んとする時節なり。故に奸者を入。浮説を誑せ。その國の行ひを見る。天下道あるときは同じからず。如かゝる時に神祇を祀り。加持祈念などと鬼神の功を憑み。暗昧愚痴の事を成すを見て奸者本國へ立還り。此よしを告なば。扱は其國に知者はなかりけるぞ。然らば速かに軍勢を駈て攻入べしと。忽ち敵のために虚を討るゝ者なり。別して小田家の士大将等はみた這樣的事もつて敵國の機を計る者多し。大法秘法を以て禍ひを遠ざけ。加持祈念を以て敵國を挫くぞならば。天台の座主三井寺の法親王などは天下の權柄を掌り給ふべし。されば鬼神の妙用大いなりといへども。用ゆる時と用ゐざる時あり。往昔太公望望周の武王を佐て殷の紂王を討此日甲子の日也。此時牧野に至りしに。雷鳴雨風夥しく發り。忽軍中の旗を吹折れり。散宜生龜を燒て軍の吉凶を卜んとす。太公望怒て腐草枯骨何ぞ吉凶を知らん。間に足らずと云て。龜を踏破り軍して終に殷王を亡せり。是時に臨んては神明の功をも用ゐざる所ありまた宋の武帝軍を出さんとするに近臣等諫めて今日は往亡日也。往亡とはゆきて

ほろぶると言心ありかならず進給ふ事なかれ。武帝のたまはく汝等いかなればかくの如く愚なるや。我往彼亡ぶと言て。軍だちして終に敵を亡ぼせり。唯武の肝要とする所は武を以て衛るに如す。かゝる浮説の行るゝ時は奇怪の説を云事を禁じ。又國中に敵の間者ありや無やを考がへ國人の心を探り伺ひ。敵國に内通する者ありや否やを計り識。城郭の構へを堅固にし國の疆を嚴にして。不意の變に備へ給はゞ萬が一も患ひなし。往昔梁の武帝は佛法を歸依し。達摩を信じ國家を失り。皇國の後白河天皇は佛乘を歸依し魚を取は罪なりとて漁人の網を燒棄。佛徳を尊信し給ひしか共。此御時よりして帝道傾き仙院は平の清盛がために鳥羽の離宮に押込られ給ひ。數年の艱難を蒙らせ給ひぬ。その他猥りに鬼神を尊み國家を亡せしとがら。數ふるにいとまあらず。如斯申せばとて。あながちに佛神を歸依すれば。國家を亡ぼすといふにはあらず。衛るべき所をすてゝ尊信を本とするときは亡ぶると申なり。唯今御邊の説。信用がたしと申すは抑此浮説御城下に申出して後。我家の後の方京極山に續くが故に。此實否を探らんがため。毎夜深更に暨ぶまで。自らは伺ひ。己が伺事能ざる時は僕等を以て窺ひ見せるといへども。更に右體の事なしと申す。たまたま御邊の見給ひし夜に限りて燐火あらはれたりと承るが故に某甚た不審くおもふのみ。但し見る所の地に因て。見當らざるも知るべからず。併ながら此以後妖火出顯仕る事はよも有まじく覺え候。嗚呼の申條には候へ共。若某の申所相違仕り再び燐火の顯れば向後何の顔あつて。御邊に此面を合すべき。腹搔破りて死せんのみ。君かならず。御心を惱さるゝ事なかれと。やがて其座を立にけり寔に惜むべし。豪傑英勇といへども。奸曲の坎險に陥ること是非なけれ。

里見勘四郎逢二難風一事并銅劍の事

却説京極内匠が奸計により。國中に誣怪の妖言を誦せし其根元を原るに。神谷與四郎といふ者より事起れり。原この

與四郎は阿波國の産れにして里見勘四郎といふものゝ妖術の門人なり。勘四郎も元來阿波國三好郡の産若年の頃より刀劍の術を好み至つて奇怪事を歡べり。渠いまだ廿三四の頃。對馬國に龜卜の術とて。龜の甲を燒て吉凶を占ふト法あるをき。何とぞ其法を傳へんと執心し。或時西國へ下る商人の船に便りを需め。阿波國を出船せり。追風の風快よく吹て。既に筑前國唐泊の海上に至りし時俄に海の色かはり。天色眞黒に變じ。やれ疾風よと云間もなく。水主楫取大きに騒ぎ立。帆を衝楫を直す暇もあらばこそ逆浪蓬萊の如く涌上り船を西洋に向つて吹放つ。船中の者共。或は髻を切て水中に投入龍神に祈誓し祀るといへ共。海童の神の荒びや強かりけん。暴風嚴しく起り。楫を吹折けり。船中是がために力を失ひ。風に任せて漂ひしが。其夜風いよく荒く。既に夜の曉に至りて巖頭に乗上船は微塵に碎たり。水主船長ことく海中に没溺てたちまち海底の藻屑となりけり。此とき里見勘四郎は甲斐甲斐敷若者なりしかば少しも驚愕ず。船中の端船に乗移れば。水主三人勘四郎とともに端船に乗込かせに任せ潮に隨ひ漂ふたり。勘四郎天運の加護にや有けん日敷を経ずして福州といふ所の海岸に漂着せり。抑この福州といふは。中華の地にして古への閩越の地方なり。皇國をさる事五百里。むかし桓武天皇の御宇遣唐使藤原葛野鷹入唐のとき漂流て此所に着岸給へりとかや。さて此頃は吾本朝の長享元年足利征夷將軍義尚公の治世。すなはち大明憲宗皇帝の成化二十三年にあたりこれより勘四郎福州のうち長溪縣といふ所にいたり歐百年といふ者の方に止り二ヶ年の霜雪を送りける。扱かの歐百年は上古の歐冶子と云鐵冶の末葉にして先祖より劍を煨ふを以て其家の産とす。勘四郎も幼年の時より劍術のみ歟。刀を鍛ふ事を好み阿州海部の刀鍛冶の門人と成り。刀鎗を鍛煉業をも能熟せしとなり。渠また平生身をはなさず秘藏する所の二振の刀あり。一振は海部氏吉が鍛える二尺三寸の刀。一振は大和鍛冶天國が作りたる九寸五分の短刀なり。ともに最上の業物なるが故に寢食の間といへども側を退ず。前に船中危難の時も身上に縛り着携へ持しが計らず歐百年が方に至り。彼二振の刀を百年に見せければ。歐百年其兩刀を見て三度押いたゞき。大き

に嘆息して申けるは。天下萬國の間に於て刀劍の鍛煉そも日本より勝れたるはなし。我國の趙人除夫人が七首の劍といへ共日本の名作といふ物にくらぶれば。はるかに及ず。剛鐵の製も又日本に勝れたる國はなし。庶くは足下我家にとゞまり給へと。只顧慙に返めけり。勘四郎も身邊に少しの金銀も無りしほどに思はず。歐百年が方に在て。百年を助けて刀劍を鍛ひける。然るに歐百年左道の妖術に煉磨を得て。折にふれて百般の戲を爲し。或ときは目前を大海となしてさまぐの大魚小魚を水上に躍せ。又或ときは僅に入九疊の小齋の内に忽然と大山を涌出させ。壺の中に日月をささむる壺公が術は物の數ならず。實に人の魂をおどろかしける。元來勘四郎奇怪をこのむ生質なりしかば。百念を忘れて悦び。歐百年に向ひ申けるは。我平生如斯奇妙の法を求むれども。我國に這樣的法いまだ傳はらず。先生もし此術を某に傳へ給はゞ。生々世々に至るまで厚恩を忘れじ。歐百年が曰も我術は漢武帝の時李夫人の魂魄を還せし。李少翁が傳にして。後次第に傳へて唐の玄宗皇帝の時に道士王舟といへる人この道に達し夫より此かた此術天下に弘まり間またこの術をもつて人を蠱惑すもの出来れり。後に踐しめて左道の妖術と號す。其玄妙を得るに至つては身を千萬に變化し。現在人の眼前を往來すれども嘗て見認る事叶はず。例へば百重千重の牢獄の裡に擄ゆるとも。自在に獄中を脱れ出。劍戟を下して斬といへども。身を傷る事あたはず。夫故適此に法を自得するもの悪心を生じ。國法を背く輩あり。纔朝廷より禁制して公にする事能ず。まづ此法を授くるには其人物の善惡を見て次に法を傳ふ。我足下の心術を見るに眞實にして背ざる所あり秘密を得るとも何の過敷あらん。されども歸國の後輕々しく人に傳る事勿れと。是より僅に一年許りの間に口授秘傳淵底を叩いて教へけり。勘四郎歡喜斜ならず。平生秘藏して側を放さりし二振の刀を謝禮として送りければ。歐百年雀躍して悦び。忽庫の裏より一柄の劍。長九寸ばかりなるを取出し。勘四郎に與へて曰。此は往昔より世々我家に傳來る寶劍三枚あり。吳人干將が鍛鍊たる劍なりと申傳ふ。然れども銘なきが故に作人たしかならず。誠に千載の古物。双尖にして金鐵をも徹す我秘藏して輕々しく人に見せずそ

の中一枚別して勝たるを足下に進すなり。是すなほち足下の寶劍を惠るゝ惡志に報答する所なり。勘四郎も躍あがりて歡び。直鞋より拔放て仔細とみるに劍身片々として龍の鱗をならべたるが如き鍛膚あり。双のうち霜の如くなる沸あり。劍色紫にして底に赤き色を含めり。さながら剛鐵を以て鍛鍊たる物に非ず。はなはだ怪しみて申けるは。我幼稚ときより劍を見る事を好み。數百枚の刀劍を見るといへども。いまだ如是なる物を見ず。歐百年が曰。これは是銅を鍛て作りたる靈劍なり。凡銅は金銀などと等しき物にして至つて鈍なるものなり。上古には銅劍の鍛ひかたありて。徐夫人歐冶子の如き上代の名匠。みな銅をもつて鍛えり。干將莫耶といふも銅劍の名なり。史記の刺客の篇。荊軻が傳に燕の太子丹。竊に秦の始皇を害せんと欲し。荊軻を刺客として秦に遣す時。天下の名劍を求め出す。其價百金趙人徐夫人が造りたる所の七首といふ劍なりその劍を得て後工をして煉すあり。是は銅の劍なるが故に双の鈍からん事をおそれて工に命じ銅を利にする毒藥を双に染て煉すなり。すでに銅劍の法。秦の世までは傳りしと見えて。史記の始皇本紀に天下の兵を收めて咸陽に聚め鋒を銷鑠を鑄て金人十二を作るとあり。金人と云は殿前の飾物なり。これ上古の劍戟鐵にあらざる事明白なり。漢の世以來は銅劍銅鎗の類を用ひず是によつて銅を剛にする藥法なども天下に絶たるが故に今某もさまぐにして其法を求むれども得ること能ずとかたりける。勘四郎ふかく恩を謝し。其後便りを得て。本國へ還りぬ即外國の妖術本邦に傳りし肇なり。是より勘四郎かの法をもつて細川武藏守政元に仕へ秘傳口授ことぐ政元へ傳しかば。政元も勘四郎を信敬する事父の如し。勘四郎もその重禮を感じ福州傳來の銅劍をも政元に讓與せり。然るに政元大永元年九月に家臣藥師寺與一元。赤澤宗益兩人のために亡されたる後は。彼靈劍いかになりけん嘗て知ものなし。扱里見勘四郎は政元没落のちは。阿波國三好に逃歸り。此地に老を養んと蟄居して居たりしに。その頃此所に神谷與四郎といふ者あり。渠はもと細川政元が舊臣勘四郎にははなはだ親しき交りあり。政元生害の後は牢浪の身となりとも三好に隱棲し。勘四郎が妻子なきを以て折にふれては食

物など調へ懇に寂寞を訪ひなくさめけるほどに。勘四郎一時與四郎を近づけて申けるは。我御邊を見るに幸ひに妻子を具し給はず。我道術を繼給はゞいかゞ侍らん。すべて道功法術成就して後は妻子を得るとも苦しからず。いまだ修行の間には妻子ありては妨多し。神谷與四郎大さによろこび。もとより某が庶ふ所なり。先生の術決して輕々しくすべからずと。於是勘四郎終に奥義を叩いて傳へぬ。そののち勘四郎は三好の住居を心になはずとて年頃住馴たる草庵をすてゝ出さりしが。何國へ至りしや。其終る所を知らず却説神谷與四郎は里見が妖術の秘奥を得てより後。方術還て勘四郎に超れ。人の眼を駭す事多かりしとなり。生得奸佞にして人を塵芥の如く輕んずれば。人も又渠に交るもの少し。これによつて大永四年秋八月阿波國を出。東國の國々あなたこなたと徘徊し。此所に三ヶ月彼處に七ヶ月空しく脚步を逗るといへども。自像自意の強者なるが故に。いたづらに人のために用ひられず。次第に身の上零落し。元龜三年七月縁を求めて。京極内匠が家に來りける。此時内匠は蓮大寺玄蕃允を何にもして亡ばやと晝夜奸計に心を苦しめ居たりし所に。神谷が妖術に達し。不思議の玄妙を顯すをみて大きに歡び。慇懃に饗し。おのれが家に隠し置。其後はかりごとを案じ。與四郎に向ひ申けるは某當主長政のために寵遇を蒙る處に。蓮大寺といふ者あり頻りに讒言を説われを遠ざけんとす。其憤り骨髓に徹り。蓮大寺を亡しその怨恨をはらさんと思ふこと胸に迫れり。夫故一計を生じたり。そのはかりごとは蓮大寺が後園より京極山に臨んで燐火出顯するといふ浮説を謠せなば。程なく此事長政の聽に達し。やがて蓮大寺を召れて尋らるゝは必定なり。その時渠究めて浮説なりと云ひ消べし。某彼と詞争ひを發し。その後燐火を出しなば渠果敢の生質なるが故に。諸人に面を見らるゝ事を慚自刀に臥して死んこと疑ひなし。若御邊の妖術を以て某が争論の後。燐火出顯せしむる術は有まじきや。神谷與四郎これを聞。はなはだ心安き事なり。某竊に燐火の形に摸し硫黄消惱の類の火薬を以一ツの火珠を作り。これを鐵籠の裏に盛て火を燃し。京極山を往來すべし。我また身には白き帷子を着し。面は鬼女の如くに影どり髪をさばき折々口より炎を出しなば。尋常

の者を見れば魂魄を失ふべし若大膽の者ありて山路に上り追駈きたるとも。我に縮地の法あればいかに逐ふとも追付事能ふまじ。足下かならず安心して計策を用ひ給へと請合ける。これより内匠終に惡智を廻らし浮説のてだて成就し。果して玄蕃允と長政朝臣の目前に於て相論に及びけるぞうたてかりける事どもなり。

神谷與四郎奇術の事并京極内匠討蓮大寺一事

却説元龜元年八月廿八日蓮大寺玄蕃がためにはいかなる惡日やらん。既に京極内匠と長政の前にて争論を發し。其日黄昏に暨んで宿所に立歸り。何心なく妻子に向ひ四方山の物がたりを成し。二更の前後に各休息ねどろに入て憩にける。玄蕃は三更の後忽ち目をさまし。熟と思ひけるは。今日京極が燐火を見たりといひしは。例の巧言令色にして。佛神を歸依する主人なるが故に。其心を惑し奉り寵遇を受んと結構なり。憎むべし奇怪なりと。憤り胸に滿て眠る事能ざるに。鴻鴈雲井に啼連て行。四更の鼓空外に響き。いよ／＼睡眠を妨ぐる折こそあれ。蓮大寺が家の若黨熊井忠助といふ者。紙門をほと／＼音つれて申けるは。主人御目をさませ給へ。正しく一個火輪御屋敷の後面より京極山の方に向つて飛上りて候。玄蕃允若黨が言を聞そのまゝ、寢處より跳り出。向ふはるかには見はたせば。物間十餘丁の彼方にあたりて。陰々たる燐火青く燃上り。已に京極山の半途まで轉び行。又二三丁立戻る。髓には見えずといへ共燐火往來の間に人影あるに髣髴たり。玄蕃股を打て驚歎し嗚呼奇怪なるかな。夜前までも嘗て燐火の現るゝといふ諷説のみにして其實を見ず。究めて虚説なる事を驗し試たるが故に。主人の眼前に於て今日大言をはなち。京極と争を引發したり。何ぞはからん今晚あらはれ出んとは。然れ共此火のひかりに疑しき所あり。奸曲の京極今日我ために佞辯を云ひ傷れ。これに憤を生じ。這樣的詭計を廻らしたるも計りがたし。殊に燐火に副て人影の見ゆるも怪しく我この火を逐捕すばあるべからずと。草鞋をはき鎗引さげ。後門の外に駆出れば。蓮大寺が家來ども。手毎に松明

提燈の支度をなし。追々跡より駈出す。されども玄蕃允が如斯俄にかけ出されとは思ひよらざりしかが。皆はるかに後れてつゞく者一人も無りける。玄蕃允性急なる事火の燃が如く。案内は兼てよく知たる山路なれば。その速なる事あだかも猛獸の草を走るがごとく。すてに山上に馳上り。火輪の邊にちかづき進んで屹と見れば。一人の妖人その状鬼女の如く。須彌の髪おとろに延て面の上のみだれ口は耳のもとまで裂。面は藍をもつて彩たるが如く眼の光り銀盤に朱をときたるに等しく。鼻聳えながら兇惡の貌にして身には白き衣服を纏ひ手にくだんの火輪を提て立たり。玄蕃允これを見てさてこそ痴者ごさんなれ。一突にして其本身を顯さんと。鐵石をも徹す鎗鋒の勢ひ。一蹴りに突かけたり。此時妖人口を開いて蓮大寺が面へ一口の炎を吹かけたり。これ神谷與四郎が左道の妖術にして。人の眼目を惑す所なり。流石の玄蕃允も炎のために驚き二三歩ばかり後のかたへ飛退る。しかれども大膽の英勇なるがゆゑに一心を抖擻し。再び鎗を撚て突来る。與四郎其ひまに山後に向ひ。逃出す蓮大寺これを見て透さず後の方より追かけ來るといへども。渠もと縮地の法と號け大地を屈伸する術を以て徐に歩いて山を下る蓮大寺はいよ／＼憤激り嚴しく逐驅るとはすれども妖人眼前に在て嘗て追着事能はず心中大きに焦燥悶着せり。京極内匠は與四郎とともに山中に到り最前より木蔭に有て伺ふところに。蓮大寺唯一人與四郎を放さず逐來る内匠ひとり悦び天の與へ此時を延すべからず。一打にして鬻憤をはらさんものと。蓮大寺が後に突出し。拜撃に腦後より頭の上へ切付たり蓮大寺比類なき鬼武者なりといへども。只前に心あつて只顧うしろの方をかへりみざりしかば腦頭を劈傷れ。何かは須臾も堪るべき身を翻して眞俯に倒れたり。内匠疊かけて切る所を元來豪氣の蓮大寺。鎗を捨て起上り。腰刀を抜放して切付る。されども初太刀の深手に眼くらみ撃太刀更にさだかならず。僅に内匠が左の二腕に切付たり。渠物の數ともせず。終に斬倒し胸の上に垂かゝりとどめをさゝんとする所を。下より大音聲を上げて。汝京極内匠ならずや。おのれがため討るる事黄泉までの怨みなりと。齒を鳴し怒る處をそのまゝ首をぞ極にける。此とき蓮大寺が若黨熊井忠助を初めとして

數多の僕追々に松明をもつて驅來る中にも忠助眞先にたつて進み來るところに遙に主人の叫聲にひびき聞えければ。心にこたへ驅付るに内匠玄蕃が首を提。快げに立上る。忠助見るより太刀抜かざり切てかゝる。此とき蓮大寺が家人追々にかけて來るもの二十人ばかり。内匠を目がけて迫り來る。内匠今は一大事の場所なれば。忽精心を勵まし。一番に忠助を切て谷底へ墜し。なほ五六人に手を負せ。終に一條の血路をきり破り。何國ともなく逃去たり。神谷與四郎は先達て山路を逃下り。京極が家に歸り。行李の調度を拾ひ收め。小谷の城下を遁延たり。京極内匠は事急に迫りしかば。家あれども家に歸らず。京極山より直に北に向つて走り辛ふじて命を助りける玄蕃允が嫡子新三郎は僅に十八歳なり。今晚父が山へかけ上りしをき。其まゝ鎗を提おくればせにかけ來る所に。山中の騒動を聞て驚轉し息をばかりに驅來るに。父は討れ敵ははや逃去ぬ。新三郎歸を做父が死骸に抱付聲を限りに歎しが。稍在て申けるは。我後ばせにして父を討たる曲者に値ず。殊に闇夜なるが故に何國をさして追べき方角を知らず。まづ父の死骸を持歸りならびに手疵の者をいたはるべしと。壹番に熊井忠助が谷の間へ切墜されたるを引上。藥湯を用るに幸ひにしていまだ息絶ず。僅に眼をひらき御主人を討奉りしは。京極内匠に相違なし。某よく見届おく急ぎ敵を討給へと云も敢ず息されたり。其外六人の手負を一々いたはり宿所に連歸り。其夜いまだ明ざるさきに此由を城中に註進し。其身は家來十餘人を引具し。京極が家に亂入するといへども。渠すてに家に歸らず出奔せしかば家の男女五人をからめ捕て立還り一々詳かに拷問するに神谷與四郎を輟置。且浮説を作りて誑せたる事にいたるまで。悉く告たりしかば。新三郎この旨を長政に認めければ。大きに慚愧して宣ひけるは。予愚昧にして斯る奸賊を側に置。忠直の良臣を失ひし事。愈己が科なりと悔ませ給ひ。玄蕃允が遺蹟相違なく新三郎に賜りける。

編者曰これより後淺井家小田家互ひに接戦絶る時なく。終に天正元年癸酉八月廿八日。彼家殞滅の時來り。長政朝臣父子及び彼家の功臣ことごとく劍に伏て亡びぬ蓮大寺新三郎も十九歳にて殉死せり。これらの事蹟此記にあ

づからざる所なるがゆゑに略しぬ。

繪本彦山權現靈驗記 卷之二 終

繪本彦山權現靈驗記 卷之三

百瓜家雲州出張の事

伯夷叔齊は賢人也。周武王殷の紂王を亡し天下を有ち給ふに臨んで。周の粟を食じと云て首陽山に匿れ。薇を采て食し終に餓死せり。實に行ひ潔と謂べき耳。然れども天その善人を幸せずして死す。豈またいたましからずや。柳盗跖といふ者あり。日々に幸なき人を殺し其肝を膾にしてこれを餽。暴戾にして行ひを恣ひまゝにし。惡黨を太山の陽に聚め。天下を横行し惡事はかり無りしかども。竟に天年を得て壽し。後人はなほだ惑ひて天道は。是耶非耶と云り。後孔子世に出給ふに及んで。伯夷叔齊が賢なる事彰る歳寒して松柏の操を知る。人よく是を能せずば。世界に惑ふことあらん柳盗跖が。壽の類ひは。たま／＼にして免れたるなり。後世誰か賢なりと云ん。熟按ずるに暴惡不仁なる者といへども。一端にして榮る事あるは數なり。され共十か八九にして其終を能する事能ず。是所謂天命の循環する所なり。人慎まざるば有べからず。爰に京極内匠は蓮大寺玄蕃允を討。不義にして一度免るべき天數にやありけん。江州小谷を遁去再び神谷與四郎に廻り逢んと欲すれども。其夜互ひに申合すこともなく。嘗て東西途を異にして脱れたれば。終に廻り値ことかなはず。内匠は夫より北國へ赴き。所々の城下に輟り縁を求めて仕官せんと計れども。最前に蓮大寺を殺害せし時節。其嫡子新三郎といふ者あり。若くは渠俱に天をいたゞかざる志を發し。己を捜し求むる事もあらんかと。天に跼まり地に躡する心ちして。安き心も無りし程にいたづらに數たの月日を過しける。翌天正元年秋八月下旬淺井家滅亡し。蓮大寺新三郎も殉死せりとすゝしかば。忽愁の眉をひらき。今は世上何の怖畏かあるべしと。若狭國を経て丹波國に赴き。同國宇津の城主赤井刑部少輔直正に仕へ劍術の師範として此處

にとどまること五箇年。天正六年七月。家中の諸士と爭論し祿を辭して立さり。其後丹後國を経て因幡伯耆を經歷し。彼方此方の城下に。或は三箇月又は五ヶ月武術を教授し逗留するといへども。生得氣隨の放蕩者自ら人情に戻り逆ふ事のみ多かりき。これによつて仕官の道ふさがり。足を兩國の間に止めず。出雲國富田の城下。金尾の洞雲寺といふ禪院にいさゝかの所縁あるを以て。此處に逗留し。富田城中の諸士に劍術射藝を教へ導。恍惚す三年の莫茨を費し。天正九年にぞ移りける。其頃は尼子家没落し。若林。赤名。千酌。朝山。多和。安養等の如き尼子家下の人。悉く旌旗を卷て百瓜家に降参しければ。百瓜大膳太夫照基卿。一族の人々の中文武の機に堪且國の黔首を寧んずべき人柄を撰び。國中所々に城壘を築き籠置れける。中にも富田の城は尼子家代々の居城にして要害ならびなく。其上伊豫守經久この城を修理し。雲石因伯四箇國の英勇豪傑を數年頭を傾けさせしかば。城櫓の堅固はいふも更なり。大夏高閣の美麗また善を盡して盤桓たり。これによつて百瓜大藏大輔元安を當國の鎮守として指置る。元安は照基卿の叔父にして生得溫和大勇の人物。もとより弓馬の道に長じ給ひ。家中の諸士もおのずから武藝を好みけるほどに。京極が劍術射術に達したるを懼び。只顧に止めけるほどに。内匠も元來奸曲邪智の漢子なれば。天晴いかにもして元安に誤適き。是を便りとし一たび身を起さんと思ひ。富田の諸士に對するときは默々叮嚀にもてなじ。面に篤實を飾り。門人にむかつて少しも無禮を活ず。懇に教へさせしかば。諸士も内匠が倭姦にあざむかれ他事なく親しみ交りける。此時因州鳥取の城は。山名豊國入道禪高の居城なり禪高すてに百瓜家へ降参せし後は。百瓜家の一族岸川式部少輔隆久に當國降参の士森下出羽入道道與。中村對馬守春次を禪高に副て籠置れける。然るに豊臣關白久吉公いまだ其頃は眞柴筑前守と稱し。播磨國姫路の城主なり。古右大臣信長公の嚴命を蒙り。山陰山陽兩道を攻伏すべしと。因州に下り百瓜家麾下の城々を攻塵け。その勢ひに乗じて直に鳥取の城に攻かゝり給ふ。山名入道禪高もとより心ならず。百瓜家に降参せしことなるが故に忽ち久吉公の陣へ内書を通じて申遣しけるは。禪高今此處を守るといへども當て百

瓜家に對し必死の忠を抽んづるに非ず。始より事止事を得ざるが故なり。今當城堅固なるに似たりといへども。内に兵糧乏しく候へば大軍を以て一蒸むし立らるゝ時は。軍士力を失ひ早速落うせ候べし。然らば格別御手をくだかれずとも。一城ほどなく御掌握の裏に入申べしとなり。久吉公さらば此ときを失ふべからずと。其勢都合一萬餘騎鳥取の城に押よせ。七月上旬より百重千重に城地に圍み迫り。蟻蟻の通ふべき道路も無く。兵糧の道を斷て屯せり。禪高やがて城を脱れ出て久吉公の手に加はり。多年案内の己が居城を斯して攻給へ然して破り給へと諭しけるほどに。城中必死の難義なり。於是城將岸川式部少輔隆久。物なれたる兵士を藝州へ遣し。若八月下旬までも。後援これなき時は城中糧草乏しくして餓死仕る事疑ひなしと告にける。夫のみにあらず因伯兩國にある所の百瓜家の諸城より。急を告ること雪の飛に異ならず。照基卿この註進を開給ひ。岸川左京太夫基玄。疾早川左衛門尉高景兩人の人々に向ひ。後援もし延引せば鳥取落城うたがひなし。然るときは因伯兩國ことごとく久吉に降るべし。基玄ものたまひけるは。事速々に暨ぶべからず某まづ先手に進んで出馬仕るべし。公は疾早川高景と共に雲州石州兩國の軍勢を催して跡より進み給へと。即時に三千餘騎の兵を引率し。七月廿九日吉田の城を發し。八月上旬富田の城に着給ひ爰にて國中の軍勢を催促せらるゝといへども。雲伯兩國の國人何となく久吉公の軍威に聞畏し。馳聚る者墓々しからず。さればとて後詰延引せば。落城ほど近しと聞えし程に。基玄すてに富田の城を打立。伯耆國八橋の城に至り。城主杉原播磨守盛重に會合し。後詰の評定を廻らざる折節盛重病中にて起臥さへも快くする事能ざれば。軍評定もかなひがたく其上伯耆の國人南條小鴨が輩みな久吉公に志を通ずるよし聞えしかば後詰の軍勢かへつて銳氣をとりひしがれ次第に減少しけるこそ是非なけれ。此時照基卿は藝州廣島の城を雷發せ給ひ。疾早川左衛門尉高景朝臣と共に。其勢四千七百餘騎。雲州富田月山の城に着給ひ。御身は金尾の洞雲寺に入て一夜人馬の脚を休め。明日は同國安來の城に於て國中の軍勢を着到し。伯州へ乗入べしとの支度なり。其日は天正九年八月廿五日終日小雨ふりしかば。藝州の軍勢長途の濶

泥に勞れ。何れも野陣を張て休息するもあり。半は富田の城中に入、みける。富田の城主元安は岸川疾早川のためには舍弟にして、勇猛のみか智略も卓絶の豪傑なりしが。夜に入て洞雲寺に來り。百瓜殿に對面して宣ひけるは。公今日遠路を押して此處に來り給ひ。軍勢みな勞れ果たるべし。何故城中に入ては休み給はぬぞ。當時久吉謀計姦しく氣がさなる若ものにして。因伯雲石の四箇國をせめ取んため。細間の者を右四ヶ國の間に遣し。尼子が舊恩の者を語らひ。即かの家を再建すべきの間百瓜家を背き當家へ合體すべしと舌滑に利害を説せしとかや。夫故尼子家舊恩の者内々その志を動し。渠に同意する輩もこれあるよし承る。然るに要害もなき寺院の地に座ん事危きに候はずや。急ぎ城中に入て寛々と御休み候へ。高景も元安の説を聞給ひ。大藏の言至極の理におぼえ候。戰國の人心變詐はかり難し。御用心のためなれば是非城中に退座あるべしと宣ひければ。百瓜殿莞爾として笑せ給ひ。兩叔父の仰さる事には候へども。某城中に參らば城中の諸軍悉く妻孥を携へて外に歸るべし。僅に一夜のほどの宿陣に競々しく城中諸人の居所を移し換させん事も大きに煩し。何れ戰場へ向ふ者は郊原平野は常の事なり。明晩より又いかなる野外に屯仕らんも計がたし。諸將諸卒を城外に置き。我一人城中に入て今晚一夜襪を厚ふして熟く睡らんや。漢の宣帝の時趙充國字は翁孫といふ人あり。隴西上郡の人なり。生質沈勇にして兵法に通達し。大將軍に拜せられ。師を出す毎に其軍卒を營中に憩せ。その身は樹下に在て夜寝る事無くして士卒を守れり。これよりして大將軍の事を大樹と言。大將たる者は諸軍勢を思ふ事斯のごとくにせよと。某いまだ小兒たりし時祖父基成公の仰られたりしを承る。予愚昧にして祖父の徳には及ずとも其仰を守るほどの事は務めて爲すんば有べからず。殊に明朝出馬仕るときも城中より打立んは其便り宜しからず候。御言敢て背くにはあらねども。更に餘義なきところなりと宣ひしかば高景元安も大きに感じ給ひ。其座に有合ふ人々もそとに涙を流しける。京極内匠は洞雲寺に寄宿し住侶とともに間を隔て、これを聞。實に良將の才ある英勇かな。何とぞ計て過ぎより。此人に仕官せばこの好ところを勤め。明知といへとも惑すに何條難きことかあらん。何とぞはかりて其の便りを求めんものを目打毗、き姦計をぞ廻しける。

多和元忠襲百瓜之陣一事并京極内匠仕官于百瓜家一事

蟪蛄蟬を伺へば野鳥蟪蛄をうかぶとは。戰國の諸侯互ひに相平吞せんとする者の譬なり。爰に出雲國降參の諸侯の内、島根郡河津の郷羽倉山の城主羽倉孫兵衛尉元陰が嫡子多和彦三郎元忠といふ者あり。父羽倉孫兵衛尉。百瓜家に亡ぼされて後は同郡市成村といふ所にありて僅に一邑一村の地をも得ず。牢浪して居たりしが。何とぞ宜しき便りもあらば亡父が讐百瓜の軍中へ一矢をも射て死せばやと。憤り胸に塞り年月を伺ふ所に。今年六月眞柴久吉公美作の國を押靡その機に乗じて因州へ切入百瓜家の城々を攻屠り給ひ。七月上旬より同國鳥取の城攻急にして城中難義なる由。雲伯兩國の間に聞えしかば元忠渡りに船を得たるが如く悦び。さらばこのときを失ふべからず。尼子家舊恩の國人ならびに百瓜家に亡ぼされたる所の舊恨あるの輩を催促し若照基出馬せらるゝ時は不意にその旗本に切て入運を天運に任せて戦んと。先一番に大庭の大宮寺秋上伊織助が舍弟。秋上駒之丞。多久七郎左衛門。若林玄蕃。千酌瓢之助。谷歸之助。飛越蛙之助。鹽谷源三郎。藤名海之丞。此ともがらは尼子家の舊臣なり。竊に語ふに一義にも及ばず合體す。同國秋鹿郡三笠山の城主牛尾豊前守。末次の城主津森長門守。洗合の城主野白若狹守などは。當時降參して百瓜家に服従といへども。往昔皆父子兄弟を亡されたる舊恨の輩なり。多和が利害を説にあたりて犇々と同意しける又大根島城主。江見勘解由朝酌山城主の赤松源五左衛門尉。佐田の城主小勝間右近將監などは悉く舊恨なしといへども。甞上の灰の如く反復して強きに附ともがら。久吉公の勢ひに恐れて。戰慄居る折からなるが故に。多和この人々の城中に至り或は威し或は誘し。陸賈酈生が辯をかり。一々に説諭して百瓜家を反せける。これによつて國人の人数三千九百人。何れも多和が指揮にしたがひ。専ら照基卿の出馬の時節を伺ひける。然るに八月廿四日兼て多和が藝州の邊

を伺す所の細間立歸りて申けるは。既に百瓜照基疾早川と諸とも。其勢僅に四千七百餘騎因州へ後援の爲。明日富田月山の城へ来るよし承り候多和これを聞大に歡び天道命あるかな。かならず勝利うたがひなし。我兼て計りしは照基入州の軍勢を帥み来るそならば其勢三四萬はありつべし。譬へ幾許の大軍といへども是非一戦を快くすべしと思ひしに。何ぞはからん。如是些少の人数ならんと思ひ寄ざりし物をと。直に諸方の味方に際合せ。みな市成にぞ招聚ける。此市成村と申は。湖水の北なりそもく出雲國中に一つの湖水あり。其わたり廣き所にては三四里許にして。西のかた平田神在より流れて東は伯耆國の海に落入湖水の流るゝ所は國の眞中なり。流れ早ふして矢の如く。凡そ其行程二十里ばかり。湖水の北にある所は。島根郡。秋鹿郡等の諸郡布を敷たるが如く列なり。南に在る處は。應宇郡。飯石郡。山岳並び起りて都て碁をうつたるが如し。富田月山の城と申は湖の南にあたり市成村よりは湖水を隔て、斜に東南に向ひたる所なり。名和元忠かねて湖水の漁船を何となくつなぎ聚め。期に臨時は湖をわたり夜討せんとぞ計りける廿五日未の刻富田近邊に附置ところつ細作立歸りて告げるは。既に照基富田に着し。其身は富田山の麓金尾の洞雲寺を本陣とし軍勢半ば城内へ入り。半ば洞雲寺の邊に陣を取り。明日は富田を出馬せられ。安來邊にて國中の人数を着到せらるゝ由承り候。元忠この告を聞いよく雀躍してよるこび。今宵のうちは延すべからず。殊に洞雲寺は要害もはかくしからぬ。山寺照基此處に陣するは。渠が運命既に竭たるしるしなり。豫め火攻を用ゆるには如じと。俄に燒草の支度をなし。硫黄鹽硝の用意嚴重にして。竊に船中に積。日の暮るをぞ待にける。この日黄昏より陰雲次第に累り細雨いよく降荒み。微風少しく起りて湖上の波音蕩々と響。船路の動騒さらに陸上に聞えず。諸軍勢はことごとく物の具の上に笠笠を着し。篷を以て兵船を覆ひ二更の黎になりしかば。各船にとり乘一齊に纜を解き。南に臨んで漕出ず。一番の船は多和彦三郎元忠二十五人。二番は若林玄蕃を始として。秋上千酌。藤名。鹽谷。尼子家舊恩の勇士二十五人。三番は牛尾豊前守廿五人。その外跡に漕つらなる數百艘の漁船波を切。水をひらく。其氣色

古へ楚漢互ひに天下を争ひ、戰ふ時魏王豹といふ者あり。安邑に城郭を構へ漢の軍勢を拒み防く漢の大軍安邑を攻んとする時魏王豹蒲津關を塞てたゝかふが故に敢て一人も越る事能はず。大元帥韓信密に夏陽といふ地に至り。木罌罌といふ物を造り出し大河をわたり。夜中に安邑を襲ふて破り。魏王を虜にせんとせし形容も如斯やと思ひやられたり。一番の船湖南の岸を着とひとしく。多和元忠篷を擠排て陸に跳り上る。身には黒糸威の鎧にわざと兩袖を附ず。縋布に風虎を畫せたる陣羽織を着し。白赤七箇纏の卜襷を肩の上に高く結び包鏢の袖の上に筒笠を覆ひ。其他の船どもより篷を取除。陸地に上る。豪傑には牛尾。秋上。野白。津森おもひひの出立の上に兩具を覆ひ。悉くひとつ地に相聚り名對面して立たる所に宵より洞雲寺に遣し。蹊蹊を窺す間者どもおひひに馳還告げるは。百瓜の軍中作法の如く。夜廻り捨簪本簪に至るまではなはだ嚴重には候へども。夜打有べしなどと思ひ寄す。寺中のかたは以の外油斷の體に相見え候。元忠聞て笑を含み。しからば洞雲寺の後の方山の手より押廻し。本堂觀音堂客殿に火を放ち一齊に燒立。又風上より鯨波を發し攻立なば。敵は烟に蒸立られ狼狽て風下に遁出すべし。その時味方一手の勢をもつて風下に伏置亂火の中を脱れ出る者をば鐵砲にて打みだし。其弊に乗て客殿にみだれいり。自餘の敵軍に眼をかけず。照基を打取り日ごろの鬱恨をはらすこと。今晚の内にあるべしと。一々諸軍を號令し士卒には個々に投松明燒草をもたせ。一手毎に指揮の大將をさだめ。三更の時節を考へ。洞雲寺へぞ押寄ける。此時洞雲寺には兼て國人共久吉に志を通る者ありと聞えしかども。縦さもあらばあれ。國人の分際何ほどの事かあらん。明日安來にいたり着到を記さるゝと聞は旗を巻ることくく來るべしと大様に思ひ謾り敢て用心の體もなく。其上終日の旅行に倦勞れ。陣々夜まはり張番の外は悉く熟睡せり。多和牛尾十分に後の山路に攀登り。諸方の相圖を違じと。金太鼓をたたき法螺を吹立同音に鯨波をぞつくりける。その響き山にこたへ谷にこたまし。百千の雷公地の底より鳴出るが如く。これがために寺中に充滿たる百瓜家の軍勢。驚破敵の寄たるはと周章騒ぎ。目をすりく陣外に駈出し。見さだめた

る事もなきに馬に策うち。人の物具を奪ひ合。長刀を逆さまに突て脚をきり太刀をとるものは甲を着ず或は弦なき弓を曳。又は胃を俯に頂き。上を下へと踉蹌たり。そのひまに多和が手に従ふ。屈竟の間者三十人ばかり。方丈禪堂観音堂に火をかければ。火光天に燃上り。猛煙地を覆ひ。尺寸の間も見はげがたく。諸軍彌が上に騒ぎ立。ひた崩れに成と見えしかば牛尾豊前守。谷籬之助。千酌瓢之助。其手に従ふ兵卒五百餘人を引率し。轟ぐらに。突て入厨裏方丈に火薬膏油をそぎたる投松明燒草を等しくなげいれ當るを幸ひに切て廻る其勢ひ凜々としてあたりがたく。殊更如法暗夜といひ。雨いたく降しきりたる夜なりしかば土滑かにして脚步穩ならず。既に惣崩れと成て遁んとす。この時寺外に陣したる。中國の諸軍勢本陣の猛火に愕き。陣をより駈出し。寺中にはせ付んとする處に。兼て待設たる雲州勢。諸陣の擾亂するを見て勢ひ加はりおめき叫んで突入し。火薬を放つて攻戦ふ。山門の外に構へたるは五箇所の陣を火炎一同に燃のぼり。敗れざるは無りけり此時照基卿は疾早川高景とともに方丈に座しが夜討の動靜に驚き。鎧をとつて肩に投掛。太刀わきばさみ給ふ間もなく。諸堂は云に及ばず方丈の前後ことごとく硫黄鹽硝等の毒火迸り。その響き後の山に震動せしかば高景大音聲をあげ下知したまひけるは。敵うしろの山路より來るとおぼえたり。少しも狼狽ることなかれ。前面の敵を追破り。山門の外廣野に於て戦へと。呼はりく物具をかため。粟谷源次郎二宮李之助新里掃部之助富永三郎左衛門。周布十兵衛に照基卿を守護せ。天野新兵衛に下知して雨戸をさつと排せらる。照基みづから上帯をべながら四方を屹と見給ふに火炎のとびのぼる有狀車輪を轉ずるが如く。敵味方の軍勢亂火の下に在て叫ぶ聲。さながら叫喚大叫喚の苦しみに異なる事なし。都野駿河守乘馬の口をとつて方丈の庭にかけ來り。敵軍寺内に突入。其外諸所にある所の味かたの陣ことごとく燒のぼり。敵徒路を塞ぎ攻戦ふ有形。なかく國人の分際寄たるに非ず。久吉竊に軍勢を分て國人に力を副ると覺え候。一まづ富田の城中へ入せられ然るべし候は。ん速に御馬に召せ玉へと。敵上の塵を拂うて引立たり。此とき方丈の庭上へは若林支那。敵上駒之丞。多八七郎左衛門。

谷籬之助その外尼子家の舊臣三百人ばかり。鎧先を揃へ突ていり。照基卿を目かけ駈來る。そのころぞし金鐵の如くにして。更に半點も退くべき氣色なく。龍虎風雲の勢ひを顯し。方丈の縁先に臨んで駈上らんとす。百瓜家の勇士縁の上より飛下り。手前を廻して防ぎ戰輩には。粟谷源次郎。二宮李之助。杉原彌八郎。同又次郎。佐波越後守兼連。益田越中守。湯佐渡守。天野新兵衛元珍。おのく鎧長刀の鋒光を揃へ採合といへども。尼子の舊士等一死賊と成て進きたるその勢ひに銳氣を折れたりけん。百瓜家の勇士たちまち排摩け。階前さして追敗らるゝと見えたる所に。客殿の方より。一人の大漢。物具をも着ずみだれたる髪の上に帕巻ひき。弓に箭番うて駈來り照基卿の前に立ふさがり。大肌脱に成て散々に射る。あだ矢一ツもなく目前に十餘人同じ枕に射伏たり。是が爲に辟易し命を鴻毛塵芥の如くにする夜討の人數崩れたつとみえたる所に。谷籬之助鎧をとつて味方をもり返し。いかにかたぐ兼て約せし今日日の戦ひ戸を寺中に曝くことは面々期したる戦ひならずや。我につゞけ人々と既に方丈の庭に引返し。照基卿を目にか。鎧先に向うたる百瓜家の勇士五六人突たふし雀躍して階前に來る所を。最前の大漢。射のこしたる矢矢とつて引しぼり。水もたまらず籬之助を階下に射ふせ。今は矢だねを射盡したれば。弓をからりと地に投棄。太刀眞額にさしかざし。縁の上より跳り下り。無二無三に切て廻る。これすなはち京極内匠なり。今宵のはたらき諸人の眼をおどろかし。後に百瓜家に仕官すべき時運到來と謂つべし。照基卿このありさまを見たまひ其者討すな者ども。後は猛火さかんにして。煙方丈に充滿たるぞ。火炎の裏に在て空しく灰燼となり死せんよりは。敵に逢て命を棄よ。進めくんと宣へば。疾早川の家臣稻葉内匠介松野主馬介與に叫んで申けるは。何時の料に貯ふべき命ぞや。同じくは兩君の眼前に死して英名を子孫に輝せよ人々と。兩人ひとしく死力を出し。京極を助て突て入。百瓜家の諸士も氣を勵し。刀鎧の撃合ところは銃頭より火をほとばしらせ。終に雲州勢を中門より外に追まくる。高景これを見て。さらば此間に早く山門の東へ退き給へと。照基卿を馬に乗せ奉り。中門より突出し眞丸に備へ山門を出給ふ所に。火炎烈しく燃ひろ

がり。百瓜家の勇士頭髪を焼。手脚を爛かし。兩將も辛ふじて寺中を脱れ出。東をのぞんで走り給ふ所に。煙の下より一手の軍勢忽然として大山の玉柱を押倒が如くあらはれ出。照基卿の横合より頻りに鐵砲をうちかけ。眞先に一人の大將鎗を提。大音聲をあげて罵り。いかに照基。前の羽倉の城主羽倉元陰を亡せし事を忘れたるや否や。亡父が結恨を報んため。多和彦三郎元忠これに有て汝を待つこと久しと。大將軍の馬前かけ寄。春を惜る村燕の柳の條に。翻よりも疾く。既に照基卿のめされたる馬のひら首を一鎗に突あげたり。風飛の歩を得たる一物の駿足なりといへども。屏風を倒すが如く草莽のうちに倒れば。主は地上に身を轉して落給ふ元忠すかさず一突にせんとするところを佐波駿河守鎗をもつて押へたり。元忠が右手の肩口高細の下を丁と突。その鎗鐵甲を貫き肩骨の上まで抽出たり。元忠したゝかの英勇の上に。多年の恨み骨髓に徹り忘がたかりしかば。義氣金鐵よりも堅く此手疵に少しもひるまず。駿河守と鎗を合す所に京極内匠大わらはに成て返し合せ。元忠が鎗の柄の鐵を以て卷たる物打際より。一打に劈おとせば。手疵のうへに鎗の柄を切折れ且百瓜家勇士の競ひ聚るを見て再び近づくこと能ず。東に向ひ連れけり。其ひまに大將は三澤彈正左衛門が馬に乗給ひ。高景の馬と同じ頭に立ならべ。采配とつて下知し給ふ。然れども國人の勢は初より勝ほこりたるに利を得て。蛟龍の海水を蹴がごとく。中國の兵は事不慮に發り。火に焼れ煙を脱れて釣魚の釣を合たるに等しく。大半戦瘡を蒙らざるものは無く。味方諸方に分離て戦ふが故に。惣大將の此處にあつて接戦難義なる事を知らず。これによつて雲州勢のために切崩され。既に危く見えたる所に。南の方より松明の光り星斗の地に墜たるが如く振立。まつさきに銀の三鎗に金の切裂付たる馬驗。萌黄に澤瀉の紋の旗一流おし立。其勢七百餘騎人馬の足並をそろへ駈來り濕雲の雨を帶たるが如く。雲州勢を四方八面に屠ちらす。是すなはち百瓜大藏大輔元安。富田城中の荒手の兵を引率し。救として駈付たる軍勢なり。中にも元安鞍の上に立あがり。麾をとつて味方を指揮し。計るに國人の集り勢。數年祿をはなれ。賜食に乏しき賊兵。そのうへ歩立の聲。馬足にかけて踏破

し。鐵の端に當て蹶捨て除よ。首級をとるとも野外に捨よ。馬の脊背め手を塞て何の益かあらん。一人も通すなと高らかに叫ばる。勇將豪傑の下に弱兵なきの習ひにして。元安の軍兵この言を聞いていさみ立。國人の勢を餘さじ漏さじと追とり籠。命をかざりと攻戦ふ是がために備へみだれ。國人の軍勢排き靡け。一度に北のかたに臨んで逃出す。悲哉一端のあつまり勢にして。軍中に紀律なく。戦ひに定制なき上。和多元忠すてに深手を蒙り。家人のために助られ辛き命を助り。戰場を遁れし後は。誰か號令を司どる者あらん。寔に龍に頭なきが如く。鶏明の黎に至りては。散々にみだれ立。若林玄蕃は。百瓜家の新里掃部介に討れ。秋上駒之丞は疾早川の松野主馬介がために首級を得られ。其外江見赤松か輩は反覆きはまりなき者ども何かは一命を抛て戦ふべき終に大敗の色を現し四方八荒にあらけて敗亂す。夜すてに明しかば百瓜の軍勢夜前の敗北を面目なき事に思ひ。敵の鬘鬘たる中に突ていり。首を得ること勤を知らず。忽ち勝利と成にけり。却説軍畢て後。照基卿富田の城中に入て。首實檢在し。諸士の軍忠を抽んでたる者には恩賞褒詞を行せ給ひ。諸士に向ひ宣ひけるは。不慮の變によつて味方細粉の如く碎んとする所に。汝等一命を抛て戦ふが故に全く危殆を脱れたり。次に昨夜寺中に於て予が軍中に見馴ざる大漢一人大肩脱に成て活動。弓をもつて數多の賊軍を射とり。其後敵の村雲だつたる中へ物具をも着ずして切入勵しき血戦成したる者あり。是突めて寺中の侍どもにて社有つべし。何條他より來りて救べき謂れなし。汝等其戦ひの爲體を見ずや。湯佐渡守。益田越中守等しく進み出て申けるは。某ども兩人慥にそのはたらきを見認候。もとより夜中の義に候へども。火のひかりに其面體を見候に何さま御方に見知ざる人柄に候得ば。富田の諸士を召れ御尋ありて宜しからんと申す。百瓜大藏大輔これを聞て宣ひけるは。これは御尋までも候まじ。寺門に侍べる侍に何を左様な甲斐しき者有べしとも覺え候はず。近年一人の武術修行の牢人たしかに名は京極内匠と申して。彼等に寄宿致し罷在よし。尤弓に名譽を得。劍術は一流を建立せしほどの者と承る某が城中の兵士の中。渠を師と憑武術を修行いたす者も在よし。それを除て寺門に英勇の

者ありとは承らず。恐らくは彼者ならんと覺え候。照基卿左右の近臣を召れ急ぎ捜し來れと仰ある唯と諾て伺候の近士六七人其座を退て駈出す。暫あつて近士京極を引を立還る照基卿屹と見給ふに。即夜前の大漢なり。歡喜斜ならずして座前近く召れ謝し給ひけるは。予はからず賊軍のために襲れ危き事肩を燒が如し。味方舊恩の士すら敵のために後を見する折から。汝予に力を加へ。危難を救ひし事。其芳恩謝するに言語なし。内匠謹て平伏し某若年の時より少しく武術を學び。いさゝか胡亂の劍術射法を熟得仕る。これによつて諸國經歷仕り。當所に來り。既に城中の諸士のために愛敬を蒙り。思はず光陰を費す所に。計らず夜前の大變に出合。明君暴惡の者のために苦しめられ候ふ。這回の如きに臨んで義主仁人のために一命を棄ずんば有べからずと存じ敵軍に當らんとは仕れども。元來無僕の牢人身に甲冑の備なく。素肌にして敵中へ切入。不思議に少しの疵をも蒙らず。幸ひにして能敵三人に出合その首級を得。身恙なき事を得たるは。ひとへに明君の洪福による所なりと。ひたすら己に憍す。十分百瓜家の武威を揚て賞讃し。佞辯を振ひしかば。照基卿渠が底意を知り給はず。酒盃引出物など賜はり。やがて御前を立にける。重ねて佐波越後守を以て。出生來歴を尋らるゝに佐々木家の系圖ならびに。生國は近江國にて淺井家斷絶の後武術修行のよし詳に申せしかば。逐一に聞し召れ。家系といひ武藝といひ一かたならぬ者なり。渠われに仕へんとぞならば。召抱置べしと。當分三百石の秩祿を賜り。なほ軍忠を抽しずるときは。擯てて用ゐらるべしと。すなはち馬迫りにそ置れける。嗚呼阿諛の小人といへども。却て豪傑英勇や欺く時あり。恐るべきことどもなり。

繪本彦山權現靈驗記 卷之三終

繪本彦山權現靈驗記 卷之四

多和元忠戦死の事

行路難不_レ在水不_レ在山。概在_二人情反覆間_一とは。人心の險しきことを以山川の險に比し。人倫遇合の間といへども。變詐はかり難きにたとへたる辭なり。就中戰國の人心においてをや。朝には東に降旗をたて。夕には是を西に翻す。去程に多和元忠が縦横連合の辯に説れて。雲州諸邑の降人忽ち百瓜家に背き。金尾の洞雲寺を襲ひ。照基卿の陣中を却かせしかば。百瓜家の英勇分骨碎身して防ぎたゝかふが故に國人の軍還て利を失ひ。大に敗散す。しかれどもこの事因伯兩國の間にかくれなく。彼國に有所の百瓜家旗下の諸將。うすき氷を踏むこゝちして。運を兩端にこころ見る輩は。忍びくゝに羽柴久吉公へこゝろざしを通じ。または簾を卷て降りける。爰に岸川左京大夫基玄は。是より先に伯州八橋の城にあつて。専ら因伯の兵を招き。鳥取の城へ後詰せんと只管照基卿の雷發をまつておはせし所に。同廿六日雲州富田の城より早馬到來し。國人の變を告來りければ。以の外驚噩せ給ひ。因州後詰のことはさし置一まつ富田月山の城を引退き。後の患ひを除てのち。重て鳥取へ向ふべしと。同日八橋の城を引はらひ。其夜の中に富田の城にかへり。照基卿および高景元安昆弟の人々に對面し。互に恙なきことを悦び。廿七日より諸方へ物聞の間者を遣はし國人の動靜をさぐり聞たまふところに間者共廿八日の暮かたに城に歸りて申けるは。此度國人蜂起仕るその原は。多和彦三郎元忠魁首の權を司どり。尼子前亡の餘類を驅催し。かつまた御當家のために親子兄弟をうたれたる輩を。機にのぞみ變に應じて利害を説。其勢凡三千八九百人多くは鳥根秋鹿二郡の内者どもなり。またひそかに承るに多和元忠はさきに御本陣へ夜討仕りし時。鎗にて肩をつかれ戦瘡はなはだ油みいのら今日の間も計が

たきに付。國人共力を失ひ。今は愁に御當家へ背しことを。後悔臍を嚙ものも是あるよし此とき速に誅伐を加へられ候はゞ。半は降参するべしと訴へたり岸川疾早川すゝみ出て宣ひけるは。只今間者の申旨を承れば。久吉あへて人數をわけて國中の者共へ力をくはへたるにも非ず。國人共一時の淺智によつて元忠が爲に利害をとかれ透されたと云ふものなり。然る時は猶豫して時日を移すべからず。先元忠が籠る所の市成村を攻破り。次に島根郡の城々蠶の桑食が如く片はしより攻とるべしと。照基卿の勢に疾早川高景の勢を合せて五十餘騎。能義村の内圓淨寺の邊に本陣を移し。岸川左京大夫基玄の勢に富田の勢少々加はりて。其勢都合三千八百餘騎。同廿九日軍船をそろへ湖水をおしわたり市成村へぞよせらるゝ。却説多和彦三郎元忠前には一端の勢ひを得て已に國中の人心を發動し。同志のともがと共金尾の洞雲寺を劫せしかども。不幸にして戦瘡を蒙り。剩衆軍のころろざし一致ならず。つひに敗北におよび其身は家來が肩にたすけられて市成村に立かへり。痛手にくるしむといへども。猶少しも屈せず。必定明日に至りなば。百瓜家の大軍此所に押すべし。其時は快よく渠と戦ひ。接戦利なきに於いては。いさぎよく戦死して泉下の父に見ゆべしと。俄におのれが住居の上なる。小山の頂に鹿がきを結まはし。市成村近郷の土民の家に。貯へ持たるころの米穀少々山上にそ運び移しける。元來此近邊は悉羽倉孫兵衛の尉元陰が舊領の地なるがゆゑに。人みな元陰が仁恩を忘れず。今元忠が亡父のために艱難を甘なふ孝心を感じ。われもくくと米穀の俵を肩に荷し脊に負。運びのぼりて與へし程に。雑豆米穀ときを移さず此處の木もとかしこの草の間に積上。譜代の郎從百三十餘人。屈竟の健民七十人廿六日の晩かたに元忠が舊宅に火をはなち。一煙の間に焼たて。敵やよすると待かけしかばげに。潔きふるまひなり。然るに元忠昨夜肩口を突れたる鎗疵に灸治をだに施さず屢苦戦し廿六日の曉に市成村に立かへり。山中に鹿垣逆茂木等を結廻させ。夜に入て鎗疵に巻たる帛をとぎ。灸治などせんとするに痛み苦しむ事大かたならず。還て船入とて兩度也。元忠が妻並びに今年八歳になりける女子の有けるがさまにいたはり。藥圖など説

るといへども。疝みいよ／＼嚴しく。郎從も健民も安き心なかりし處に。廿九日午の刻山上より見わたせば。數百艘の軍船とり楫おも楫に諸艦をそろへ波浪を押しきりあだかも大山の湧出るが如く市成村をのぞんで押寄る。これ岸川基玄朝臣の軍勢なり此ありさまを見て唯今まで與に一戦を快して討死せんとはやり切たる健民ども。基玄の大軍にや恐怖けん。元忠の戦瘡を苦しみ頼みすくなく成しにちからや落たりけん。鹿垣そこへ逆茂木を潜りて我さきにおち失たり。これを見て何となく心細くや有つたらん。流石義を金鐵の如くにする郎等共破落々々と逃出して。僅に七十五人に成にける。此體をみて多和が腹心の家の子。河津喜太郎。持田甚四郎。いひ甲斐なき者どもの今の振舞かな。所詮わづかなる小勢をもつて。無残々々討死をせんよりは。一まづ此地を脱れ。主人ならびに内の御方息女をば本庄村までおとし参らせ。大根島にわたり。江見勘解由どの城にこもり。久吉を語り因伯の勢をもつて百瓜家の後より襲せんはいかにと互ひに計略を卜。元忠が枕のもとに來り。しかくの所由を告げれば。元忠病床よりむく／＼と起上り。何條人の城に入て。又他人の援來るを俟べきや。すでに先日の夜討においてはずが戦策こと／＼其圖にあたり。然れども尼子舊恩の士のみ必死の戦ひをなすといへども。江見赤松が輩只人の後に在て敢て死力を出して戦ず。既に十分に勝を得たる戰場を敗れしものは衆將の志し一圖ならざるが致す所なり。われ此處を脱れ大根島にいたり。譬へ一端の命は全くするとも。岸川。疾早川等の軍勢ども島の前後を取かこみなば。耳臆病の國人ども。いかでか後援して危きをすくふ事あらんや。然ば江見が輩某が寢首をかいて百瓜家へ差出し降参に出んこと疑なし。勇士の道死すべきとき有。遁るべき時あり。その時を失ひなば還つて辱を蒙ること多し。いまは死すべき時なり。潔よく戦ひ討死すべしと手綱を以て戦瘡の上を睨と巻。その後八歳になる處の女を呼て膝元にすゑ涙を流し。われ今討死して泉下におもむくべし。夫につけ世の中今をかぎりと思へば。汝を父が手にかけ殺害し。冥途のやみ路を快よく行べし。これ更に某が情なきにあらず。汝を跡にのこし置。敵にとらはれ憂目を見せんことは未來までの迷ひな

り。かまへて父を恨る事なかれと襟を取て引よせ。短刀を抜より早く。心もとを一刀に突通す。呼と靈限苦しむを膝の下に引しき。其まゝにとどめをさし母衣をとりて打かくる。少女が最期のありさまを見て母は死骸を押うごかし。聲をばかりに哭出し。かく静ならぬ浮世の中。わけて物のふのならひ。劍に臥て墓なく成なんことは。日比年ごろ思ひさだめし事ながら。譬へわがみ社。あだし野の露と消なば消めれ此子ばかりは何なる憑しき人をも誂ひ。夫婦が無らん跡までも残し置。父や母が跡ねもごろに吊ひ。世の騒ぎも穩になりなば。早くひととなりていかなる好人の妻ともなり。千とせをも長くいきよ杯と神をも願祭り。佛さへ祈り參らせし甲斐もなく。現在親の手にかけて殺てふことは。此はいかなる前の世の敵同士が。何なる悪日にわがはらにやどり來り。如斯る憂目を見ることの哀しさよ。待しばし我も共に三途の川をわたるべしと。視引よせ筆をふくみてなくく

三津瀬川。ともに越なんまで暫し。子をおもふ闇に。瀬はくらしとも

と讀み疊ふ紙にかきしるしてかたはらの松の木末に結びつけ。守りがたなを取て乳の下に突たつれば元忠太刀を抜て首を打おとし。陣寨に火をかけ。兩人の死骸を猛火の中になげ込み。同じく疊ふ紙に一首の辭世をかき。同條にむすびける。其うたに

踏わくる。草葉の露に袖ぬれて。われをしまたん。のりのしたみち

斯なん詠じける。多和元忠夫婦が墓は。今に至るまで同郡。上河津村西宗寺といふ寺に残れりとかや。誠にかゝる急に臨んで死に屈せず。腰をれうた一くさも詠得ん事。末世にはあり難き勇士なり。此とき山下には。岸川の軍勢雲霧の夕暉に棚びくごとく。簾の手を進めて押寄せ。同音に鯨波を作り。山の半腹にせめ登る。元忠主従七十五人。すこしもさわく色目もなく。各歩立となり。炎の下に立ならび。鐵砲の巢口を揃へさんぐに打かけたり。僅かの微勢とは云ながら。半點も命活んと思ふものなく。空丸一ツも打出さず撲びうち打たりしかば。眞先に進みたる軍

勢少しく色めき立て見えたる所を。得たりやかしこしと鐵砲を棄。河津喜太郎。持田勘四郎を初として。七十餘人の勇士ども。いづれも鎧を作り細手を廻して駈下り。鎗頭よりは金石をもつて火を燈いだすがごとく。號哭して接戦ふ。元忠も自身鎧を提さげ縦横無礙にかけめぐり。手先に進み來るもの六人まで突倒し。十一人に手を負せ。火に爲れ水に爲れと戦へば。流石に勢ひを得たる中國の先手。人なだれと成て崩れたつ。岸川の英勇には山田出雲守重直。小森和泉守高方。河口刑部少輔久氏。福頼刑部少輔元秀。何れも味かたを勵し下知しけるは。敵僅の微勢のために後を見する謂れなし。諸所の路すぢより登り一人宛の相手を取り。引組で虜にせよと高らかに呼はるにぞ。安達治兵衛。安原民部。はるか側の側なる逕路より駈のぼり。多和が軍勢のうしろに顯れ出。追とりこめて責詰たり。七十五人の多和が手の勇士こゝに押へだてられ。彼處にとりこめられ。一人には五人三人押重り。みな討死をぞ成てける。元忠ひとり言して申けるは。今は戦ひこれ限りなり。さらば人手にかゝらず腹掻切おくれたる妻や子に追付べしと。猛火活々と燃のぼる本陣に立かへり腹切べきいとまもなかりしかば。右手指抜て喉に突立。紅蓮大紅蓮と燃のぼる炎の裡にとび入て。終に焼死をぞ遂にける。このとき河津喜太郎。持田甚四郎兩人大軍の中に取圍れ。甚四郎は安原民部がために討れ。喜太郎は五六ヶ處の痛手をうけながら今一回このかこみの中を切脱。いかにもして主人の死を見とゞけ。心やすく幽冥におもむくべしと一條の血路を切ひらき。山上を望んで駈行ところに。一人の壯士河津が後より脱さじと追かけたり。是則京極内匠なり。かれ今朝照基朝臣に願ひ先陣にくはり。岸川の手に屬して居たりしが。喜太郎が傍若無人に血戦するありさま見て天晴この者を討とり勳賞に預らんと。太刀抜かざして追迫る。喜太郎も内匠が追かけ來るをみて敵に總角を見せんも名折なり。さらば這断をとらへて死出の山路の嚮導者にして呉れん物をと。山岸の上にて取てかへせば。内匠も端なく迎ひすゝみ。雀躍してうつてかゝる。喜太郎は力量といひ修行といひ數年の戦場に武功を顯したる勇士。内匠が武術に比ぶれば。同日には語がたき嗚乎のものなり。されども最

前より重圍の裏にあつて。數箇所の疵を蒙り心は彌景にはやるといへども。身心惱亂して進退自在を得ず。内匠をたらへて投つけんとや思ひけん。太刀をからりと地に落し。大手をひろげて押纏りに無手と組。京極が上帯を引擱んで高く差あげ。岸より下へ投落さんとする處を。内匠差上られながら左の手を以て敵の鬚の髪を緊と握り右手指を抜て喜太郎が甲の綿嚙の端より。拳も通れと指徹ば喜太郎は内匠が上帯を取ながら。身を翻して眞倒に岸より下に陥入り。此地は七八丈許の高岸にて下は湖水の波激なり。内匠もしたゝかの豪猪にして握りたる所の鬚髪を。終りに山下に落果り。喜太郎を取て押へ忽ち首を搔てけり。味方の軍勢これを見て喝采とほむる聲須臾は山路を響せけり。是ひとへに京極が僥倖にして。百瓜家に用ひらるべき時節なり。岸川家の諸軍勢ことごとく山上に駈上り。一番に火を打けし。同音に凱歌をぞ揚にける既に軍をさまりしかば。基玄寛々と首實檢まし。次に生どりの者を引出し元忠が事を逐一に尋問せらるゝ時。元忠が始終の有形殊に死にのぞんで妻子を殺し辭世の歌を詠じし事ども。一々詳にかたりしかば。甚感心まし。誠に敵乍も元忠は。哀れやさしき武士かなと。大將より士卒迄賞歎せざるはなかりけり。

鳥取落城の事

既に市成山の戦ひに多和彦三郎首を。岸川家に授たりと聞えしかば。諸方の城壘に楯こもる所の國人どもいつしか愈悔の志を生じ先一番に大根島の城主。江見勘解由。照基卿の陣中に使をもつて申入けるは。某初より百瓜家へ對し奉り怨恨をさし挾べき謂れなし。多和元忠が佞辯にあざむかれ。一端御陣中に矢を射こみ候段。千悔萬悔仕れどもかへらず。あはれ寛仁大度の恩惠をもつて此度の罪科を宥めらるゝに於ては。杵築大明神を照覽にかけ子々孫々末まで永く洪恩を忘却申まじと。さまざまに陳じければ。照基卿。岸川。疾早川の兩將にこのこといかゞ侍らんと尋給へば。兩將等しく言を揃へ。これらのもがらは。照基卿につく音響の奴は。畢竟宥めあるとも阿羅の價ひか有べし。

先降参のはじめなれば。速かに命を助られ然るべう候はんと宣ひしかば。頼て使とともに益田越中守を江見が城中へ給はり。基玄高景兩將より。仔細なく本領安堵の文書を下されける江見。勘解由。大きによるこび一族を率ゐ即時に能義村の本陣にきたりければ。照基。勘解由に對顔まし。一端の過ちをくやみて志しを讎し歸伏あるのうへは。照基舊惡をおもはずして其儘にさし宥す。しかれども重て野心をさしはさまるゝに於ては。三族を亡すべしと誓書をしたゝめ血判をとられける。此様子國中にかくれなく。牛尾豊前守を初め諸方の城々ことごとく降参し。雲州一國ふたゝび百瓜家に歸伏しける。然れども平均の功屢光陰をつひやして因州後援のこと。自ら遅々におよび同年十月下旬にぞなりにけり此時因幡國鳥取の城中には。岸川式部少輔隆久森下入道與および中村對馬守以下の人々。當年六月より眞柴筑前守久吉公のため。千重のかこみをうけ轍魚摺獸の苦しみをかさねひたすら百瓜家の援兵を待といへ共嘗て後まさの兵も來らざりしかば。城中九月の末より兵糧に乏しく。已に神無月なかに至りぬれば。糧草ことごとく盡はて。城中はや餓季日々にせまり。草根木皮はいふに及ばず。犬鶏より乘馬まで割食ひ後には餓して倒れ死したる人の段肉を剔て食し。たゞ首をあげ南のかたを顧つゝひたすら救をぞ待にける。實に其有形餓鬼道の苦しみと謂つべし。三惡道の中餓鬼道より苦しみ大なるは無。抑餓鬼道と申は飯食前にあつて食はんとすれば炎食のうちよりもえ出かつて食すること能はず。故に身體おのづから疲瘦としてやせおとろへ。手足糸のごとく。頸ながく。色黒ふして一身墨にひとしく行歩して行事かたく。渴しては適水を掬して是をのむとき水肚腹の裏に有て變じて火となり。返て咽喉を熱とかや。されど其は佛經に説れて誰か現在に見るべき。正しく城内の苦しみ宿世の蔭けん種とは云ひながら目もあてられぬ風情なり。城將岸川式部少輔隆久。十月廿三日つらく思惟しけるは。既に待期も過てかく援兵の來らざるものは雲石兩國のうち百瓜家に反くところの者あり。是等の誅伐に貪着して必定後詰延引におよぶと覺えたり今五六日の間には城中の兵士ことごとく餓死すべし。我諸人の命にかはりて腹掻やぶり。義卒の爲に死せ

んと。頓て久吉公の陣に使者をつかはして申入けるは。我不肖の身なりといへ共大將の號を蒙り。既に當城に籠るところに。城中の兵食まさに盡て餓死する者夥し。願はくは隆久一人自害して兵卒の命をも助けたくぞんじ候。御承引に於ては。速に檢使一人を賜り候はゞ切腹仕るべしと也。久吉公此ことを聞し召され感心なまめならず。柳樽百荷海魚數百匹を森久太郎英正に持せ。城中に遣はし仰せ入れけるは。一身を以て多命を救れんこと義士仁人のいたす處感心仕るに堪たり。久吉全く怨讐あるに非ずといへども君命の懸るところ是非なき次第なり。城中諸人の命を助け參らせんこと努を違亂有るべからず。これに由て久吉自筆の起證文一通をまゐらす所なり。次に些少の酒肴二品進上仕る。夜とも心しづかに諸士の輩と燕會を催され。年ごろの別れをも惜み給へなほ明朝に至りなば城中の人数をことごとく久吉が手へ申預り。何れの地へなり共仰越るゝ所まで送り出し申べし。其後檢使を進べきの間御生害をとげらるべし。若し仰せ置るゝ事どもこれ有に於ては。隔意なく承るべしと慇懃に申送られければ。隆久使者に對面し起證文をうけとり。元來能書なりしかば。忽筆を御み文字龍蛇の精心を顯し。さら／＼とかき終りて使者にわたして城外におくり歸し。扱其夜は此年來の名残とや思ひけん。終夜羽觴を飛し。老臣諸從に至るまで。個々よび出し懇にいとま乞をなし。冬の夜長しといへども靈臺扶桑を拂ひて。夜はしら／＼と明にけり。明れば廿四日久吉公の軍勢陸伍嚴整にして。一條の道をひらき出城をぞ待かけたり。城中の勢數日糧草の道を斷れ口中食に絶たるもの共。流石にいのちや惜かりけん脚止踉々踰々としながら恥を忘れ。我一にと老者は壯者の肩にたすけられ。妻を携へ小兒を負。久吉公の陣中へ出来るを久吉公みづから床几にかゝり一々に點檢し。遙かの地までこと／＼送り出し給へば。今は城中無人の境となり。旌旗のみ風に翻りてうたて寂寥たる光景なり既に巳の刻に向とする時。檢使堀尾茂助一編市助兩人ひとしく城中に入来る。是より先。森下出羽入道道與。中川對馬守兩人は元來山名禪高が家人にて。百瓜家へは降人と成て居たりしかば。檢使の前にはら切も敢て心にやかなはざりけん。堀尾式部少輔の目見とよけず。已れ／＼が家に歸り腹極切て失にけり。堀尾一柳の兩人城中ひる敷に打通れば。岸川隆久の家臣野田左衛門尉。小野太郎左衛門。城將隆久にかはりて兩士を迎禮を厚ふして申けるは。主人隆久申せと申つけ候。森下出羽入道道與。中川對馬守は。もと因州の降人百瓜家譜代の郎從に侍らねば。今は某が下知をまたず檢使の入來をもかへり見ず。先刻家に歸りて冥途の先がけ仕る。是によりて隆久も生害と短刀はとり直し候へども。某は百瓜の一族にて候へば。同じくは兩士の眼前に死して。首をば信長公の實檢に預らんこと元より幾ふところに候。實は餘程御入來をまち久しく社覺侍れ。隨意の申條には候へども隆久が居間に御入あつて。生害見とゞけられ給はるべしと謹て相述る。兩士もやがて案内にしたがひ居間の内に入来る。岸川式部少輔隆久。堀尾。一柳に一禮をなしける時。兩士隆久がかたちをみるに膚には越後布の帷子を着し。上には淺黄縮の袷袖を襲ね。萌黄の裏打たる黒綾の羽織を打かけ。靜間源左衛門に具足櫃をなほさせ。其上に腰打かけ羽織脱すて左右の肩をぬぎ。一尺五寸の打刀を抽。中巻し。莞爾と笑ひ。いかに御檢使日ごろ稽古いたしたる武藝すら猶ことに臨んでは仕損じあり。まして習はぬ切腹云がひなく仕損じおのおのに笑ひをうけ申さんも恥かしう候へと。言の下より硯ひきよせ

ものゝふの。取傳へたる梓ゆみ。かへるやもとのすみか成らん
と。水壺のあとくろみ切て書すて打刀弓手の腋に衝卓右手へ曳やと引まはし。又取置し心もとに押立。臍の下まで押下し。刀持ちながら兩手をつきて首さしのべ。靜間源左衛門よくきれと申ければ。靜間は兼て介錯せよと主人の命止ことを得ざれば。目も瞳心消れどもなく／＼首を打にける。靜間はその大刀取直し。堀尾の下に切先を突立。脊中まで差貫き。主人の尸に抱きつき其まゝ息は絶てけり。是を見てその座に有合隆久が舊恩の勇士。福光小三郎。竹崎市之允鶴若。坂田。小野田が輩いづれも並び立ちて各々おもひ／＼の嘯業し腹搔切て失にけり。隆久の首は後に久吉公より京都へ送られ鳥取の城にはみや部是祥房をぞ置れる。此こと程なく雲州に聞えければ照基卿をはじめとし

て岸川。疾早川の兩將ともに落涙をなし。あたら豪傑を見つがずして捨ころしたる事の悔しさよ。今は雲州も平らかに治りぬる上は因州へおもむきて眞柴久吉と九死一生の戦ひをなし。陸久が怨恨を潔くすべしと。能義村の本陣をはらひ伯州米子まで陣をうつされし處に。當年は格別とし寒して霜雪の降ること例よりも早く神無月の末より時雨に添て折々雪ふり。霜月月立比には大仙のごとき高嶺はことごとく装をかへ。玉樹銀樹と變じ。陳前寒後の玉篋の上には秦王十五城にも易べき珠をなせしかば。稻葉山の道もしろ妙とかはり。老馬に道を問計りに見え。朔風日々に勵しくして戦はざれども壯士の指をおとすばかりなり。百瓜家の諸士あへて戦ことをこのまず。其上細策を遣はして久吉公の陣中の蹠蹠を伺るゝ所に敵陣にも斯くては合戦はかくしからず。來春三月ごろ手足あたゝかなるに乗じて百瓜と雌雄を決すべし。當年は一まづ旌旗をひるがへして上洛すべし杯と。評定まぢくなる由聞えしかば。三家の人々も陣をまとめて藝州へぞ歸られける。

編者いはく。久吉公の陣中にて。すでに百瓜家陣を班めて藝州へ引入と云ことを聞し召れ。因州諸路の押へを残りし上洛せらるゝことはすべて此記に預らざる所なるが故略して記さず。又これより後天正十年六月。久吉備中國高松の城をせめらるゝとき再び百瓜家と對陣せらるゝの刻。惟任日向守光秀と云ものあり。洛陽本能寺において。故右大臣信長公を弑せまつりぬ。この事久吉公の陣に聞え百瓜家と和講をなし。山城國圓妙寺山崎において同月十五日惟任光秀を打給ひ。同十一年春二月に勢北に於て瀧川左近將監を攻伏し。夏四月下旬に至りて柴田匠作勝家と江北志津が嶽に戦ひ一戦にうち勝。柴田北の庄の城にて自刃を吞て亡び。是より久吉公の勢ひ蛟龍の雲霧を得たるが如く日々に威を加へ月々に登擡せられ。終に蒼天の階雲を踏分。位山の高峯に攀ぢのぼり給ひ。同年號の十三年秋七月に諸官に棟梁として帝道の鹽配をなめ。漢の代の霍光が萬機を關白し。職にまで昇り給へりしこと共。都て事蹟多しといへども遑々には人何某てふ人の纏る繪本大圖記といへる物に。くさん。擧げられたれば。是にゆづ

りて此記には春秋三年のあひだの事どもは除きぬ。され共此次下の一條に天正十一年十月。疾早川岸川大坂に來りて久吉公に謁し奉りしことを記するものは。和義の次第を詳かにせんため書記するのみ。餘は僉々く省略せり。

百瓜家和講の事

邯鄲の呂不韋は。陽翟の大賈なり。其姫のはらめる者を秦 莊襄王に奉りのちに出生するもの。秦始皇これなり。勇猛大膽にして。韓。魏。趙。衛。齊。楚の諸國を平吞し。終に天下をさだめ。咸陽宮を營み。阿房宮を造り。大廈高堂の上に座して。五鼎をつらねて食し。錦繡をもつて戸張とし。氏無して王輿に乗する事。戰國に非して。いかでか如是大夢をみることあらん。現在豊臣久吉公の有様社往昔を忍びて冷しけれ。既に。惟任。柴田を退治せられて。後は。頓て天下の權柄を掌の裏ににぎり給ひ。東西の諸侯。南北の郡令月々に來りて禮をとり。貢ものを獻りしかば。岸川。疾早川も。去る年。備中の高松において和陸し給ふ上は。安德寺。慧瓊といふものを上方に遣し。久吉公のかたへ行禮せられければ。久吉公。安德寺を欺ひ給ひ。岸川。疾早川。の人々は非一度上洛して。今上の天子へ天恩を謝したまへたとさまぐに拵へ給ひしかば。照基卿も承伏したまひ。基春は當年の春より。老年なるによつて隱居せられ。家務を嫡男。岸川治部少輔基永に譲られるの間。疾早川左衛門尉高景朝臣に。岸川基永を差副。照基朝臣の名代として久留馬藤四郎英兼。をもさし登さる。天正十一年九月下旬に。藝州を出船し。十月二日泉州堺の津に着岸し。高景。英兼。は玉蓮寺。基永は賢法寺に止宿したまひ。此由大坂の城に告給ひしかば。折節久吉公。大坂にましまし。其夜勝塚彦右衛門尉正員。久呂田勘兵衛尉吉高を上使として。遠路の上着はなはだ大慶に覺え候。明日三日大坂に來り給へと。懇懇に仰下されければ。三人の人々上使に對面し。厚く恩を謝し。上使を還さる。翌日になりしかば。久吉公城中の人々を御前に召れ。我今天下の權斗を秉こと。偏に岸川。疾早川。の恩義による所なり。去年高

松。和睦の折から信長公討たれさせ給ふ弊にのり。予が引ところを追撃せば。何ぞ安穩に歸る事なるべきや。兩川義を守りて。追ざるがゆゑに惟任を亡ぼし。忽ち武門の棟梁となれり。しからば彼兄弟の人びとや。當世の義者と謂つべし。我をわれと思はんものは。悉く迎として出向ひ。馳走せよと宣ひしかば。此座の人々唯々として退出し。御舍弟美濃守秀長。猶子三好秀次。丹波守秀勝。その外御家臣の面々。我おとらじと金銀鞍鞍美麗をつくし。こゝを啼と出たち行列をそろへ。住吉海泉は申に及ばず。西は勝間東は安倍野天王寺の邊まで。立錫の地もなく。兩川の人々を迎へ。道路をひらき禮をなし。接待はなはだ厚かりしかば。百瓜家の人々感伏せざるはなかりけり。高景。英兼。基永。即日城に登り。久吉公に調せらるゝとき。久吉公仰出されけるは。寔に去年中國引はらひの時。兩川義を守りて予が軍の後を襲れざること。今に至つて感心すくなからざる處なり。夫につき岸川基支は弓矢の知識とも承りしかば。このたび若對面いたしなば。古今の軍物がたりなど承るべしと思ひしに。隱居せられたるよし。唯今の殘念これ一つなり。今日は天守に上り。風景を眺望させ申べしと。人々を誘引し。十四五歳なる女ばう一人を具し。頓て天守に上り給ふ。三人の人々も。久吉公の關心なき體をみて甚だよろこび。天守に登りて遙に東西を見らるゝに。西は滄海を突め。南海の四州眼下に出現し。淡路の島の狭よ千鳥。あかしの戸をわたる船人は叫ば、顧るべきその有状なり。紀の路の浦山は。費長房が縮地の法を借ずして眉につなぐ共易かるべし。東は伊駒くらがりの山々に至る迄。巍然として掌中にそなはり。金臺鳳樓の美なることは。中く他化自在天の一日にも説盡しがたく。天守を下り給ひて後。千疊敷となつけたる殿中に於て。其夜よもすがら酒宴を催さるゝとき。十五六歳ばかりなる美女三十餘人給仕の爲に侍り。或は舞。或はうたふ其有様。更に人間世の娛樂ともおぼえざる風情なり。此後數日逗留し。藝州に還り給ふとき。人々に様々の引手物賜り。叮嚀なる事共いふばかりなり。是より百瓜家と。風虎龍雲のしたしみをぞ重給ひける。繪本彦山權現靈驗記 卷之四終

繪本彦山權現靈驗記 卷之五

幸若太夫舞の事并内匠始て吉岡が女を見る事

古歌に。厭ひてもなほ惜るゝ命かな。二たび來べきこの世ならねば。とよみしはげに理りなるかな。佛經に曰法界圓滿輪中皆是身命爲第一寶と説きて。性ある者に於て何者か命を惜ざるものあらん。然れ共古き俗説に身を捨てこそ浮む瀨も有といへるは。武士の身の譬へなるべし。京極内匠は往出雲富田の城外金尾の洞雲寺の戦ひ。そのうち市成村の攻撃の時。一命を鴻毛塵芥に比し。諸人の耳目を驚愕ほどの手段を顯せし程に。照基卿も深く渠が武勇を賞。觀まし。凱旋の後二百石の加恩を賜り殊に射藝に達し。劍術は一流を建立せし程の者なればとて。頓て師範の列に加へらる。抑々當家に師範人と稱せらるゝ者。夥しといへ共。何れも數代の家人。當諸士の門人たる者を教授するを平生の職分として。恒に主君の側に侍り。諂佞をもつて身を立んとする輩一人もなしかつて京極は其身幼少の時より江州に長なり帝都の景光をば粗見もし聞も暨しかば。土地の人性風俗をおのれ識たり顔にいひ語りけるほどに。照基卿ふかく信じ給ひ。晝夜側におかれ。都下の談話などさせ給ふに。例の好言令色をもつて都の事は人の巷説に聞たるとも現在自ら看たるが如く。辯舌をたくみにして語りけるにぞ。流石に賢明の主といへども。其好る所をもつて謀ときは感し易き効ひにして。終に寵遇をぞ蒙りける。于時天正十二年三月照基卿はじめて。上洛をとげられ。久吉公に謁し給ひ。又久吉公の執奏により。禁裏へも參内まし。其後數日を経て藝州に歸國し給ふ。此とき内匠も扈從して帝都に上り。歸國の後もなほ側をはなれず。ます。出頭とぞ成にけり。然るに渠はまた妻子なかりしかば。或とき熟々と思惟しけるは。我淺井家を出て後諸國徘徊にあまたの年月を費し。指を屈めて蹄をかぞふるに。荏苒とし

て今年すてに卅六歳に及べり。今は當家に仕官し。すてに秩祿五百石を辱なふする上は。妻をも迎へ。家門を蕃息する謀を爲すんば有べからず。妻を迎るぞならば同くは容色人にすぐれ。又系統もたゞしく家柄も然るべき人の女をも娶てんものをと。ひたすら紅糸の縁をぞもとめける。爰に天正十三年越前の幸若太夫藝州にくだり。吉田の郡山八幡宮の神前に於て八月九日より七日のあひだ禊めの爲幸若の舞曲興行せられける。抑々郡山の八幡宮と申は奇特靈驗明着して。當家歸依の靈神なり。その所以は故陸奥守基成朝臣いまだ吉田の郡山に在城ましくける時。陶尾張守高房入道全薑といふ者あり。暴悪狼戾にして己が仕まつる所の主を殺害し。剩さへ百瓜家をもせめかたぶけんと欲心増長して周防長門。ならびに豊前。豊後。筑前。筑後。六箇國のつはもの三萬餘騎の勢を引卒し。弘治元年九月下旬同國嚴島におしわたり。直に垣田口より吉田の城に攻かゝらんとするよし聞えけり。基成朝臣待設たることなりしかば。速に吉田の城を雷發し。嚴島へ逆よせに押わたり。一夜撃して全薑をせめ亡すべしと。九月廿三日郡山を首途せんとし給ふといへども。味方僅に四千餘騎。敵の軍勢に比べ。十分一の微勢なるが故に諸軍勢いづれも全薑が大軍に聽畏して更に一點の勇みなく。諸大將もおの／＼薄氷を踏とるに。同日辰の剋當社八幡宮の神主あわただしく參上して注進しけるには。某晴夕の夜ふしぎの靈夢を蒙り候。其夢は例の通り神前において清しめ奉らんと參朝仕しところ。八幡大菩薩金色の甲冑を御れ馬上に鋒を横たへさせ給ひ。白旗を御先にたて。鳥井の前を南に向ひて下らせ給ふ。その御後を見奉れば末社の神たちおもひ／＼の鎧を着て弓箭を携へ。鋒を提げ供奉し給ふあひだ。餘り不思議に存じ。こは何方へ神幸ならせ給ふやらんと尋ね奉りしかば。嚴島大明神。陶入道がとしごろの暴悪を憎み給ひ。彼を嚴島に召寄。末代の見懲のために誅罰を加へ給ふ。吾も百瓜家の弓箭を守護し。陶を誅戮すべしと宣ふと覺えて。夢は程なく覺て候。こは新なる神勅と存じ。今朝未明に社參仕り覗み候に。寶前より華表の方まで。ひしと蹄の蹟地に印し。神馬の蹄に泥付身體汗流れて候。世は澆季に及ぶといへども。神力稱焉。有がたき御事に候と訴へけ

る。諸人これを聞。忽奇異のおもひを成し。扱は合戦必勝うたがひなしと。味方一齊に勇み立。旗の手黒み勢ひ日頃百倍し。出馬の旌旗は濕雲の雨を帶たるがごとく。終に同月晦日の夜。嚴島に押わたり。全薑を一戦の下に打亡ぼし。其後武威次第に加はり。山陽山陰の兩道を攻墮けたまひしかば。基成朝臣ふかく八幡宮の神徳を尊信し給ひ。神田を寄附せられ。神廟あらたに造立まし。是より今にいたるまで代々の君臣渴仰日々に新なり。此たび清めのため舞曲興行にも假屋のしつらひ。舞臺棧舖の構にいたるまで。愈々照基卿より普請奉行を給はり。一々に美を盡し營み給ひ。日々に警固の士を給はり。又諸土の見物をゆるされけるほどに。農家商賣は雀躍してよろこび。此年來の間は金鼓整戰の聲たゆるときなく常に東西をわかつたず逃げさまよひ。日夜苦みのために白髮の老翁と成しに。今日這樣的太平を見る事の嬉しさと。手の舞足の踏とるを忘れ。見物の諸人趾を續て競ひ來り。諸士は妻子老少を携さへ。爰を晴と出たち。或は竹筒破籠を持せ。または花席紅氈を負しめ鼠戸の口にさしかるといへども。數千の見物われ一にさきをあらそひ鼠戸の邊に充滿し。所せまきまでに見えにける。これによつて三日目より鼠戸三箇所にかまへ。芝居錢は永樂錢十文とさだめらる。朝より夕にいたるまで。鼠戸に入るもの絶る事なく。聚る所の鵝目千文をもつて一貫とし。勸進場に積上ること。あだかも錢の山をなし。前代未聞の群集なり。抑々勸進能のことは。古へは知らず足利尊氏公より七代慈照院殿義政公の治世に當つて鞍馬寺諸堂大破に及びしかば。勸進替りの猿樂として觀世音阿彌が三十六歳になりけるを雇ひ。京都多田須河原に於て寛正五年甲申の歳次四月九日より三日の間勸進能ありしよりはじまれりとかや。その時芝居錢十文とさだめられし事古き物に見えたり。芝居とは假屋の内の土間の事なり。此時の勸進能には將軍塗興に召せられ入御まし。青蓮院。梶井二品親王も御見物として入せ給ひ。管領細川政元島山尾張守。その外足利家の諸大名棧敷に在て見物せられければ。平人は假屋の眞中芝の上に居て見物せり。これらの者は入口の鼠戸に於て錢を出して入故に。芝居錢とはなづけたり。却説清しめの舞曲すてに七日目にあたり。此日は

八月十五日放生會の祭祀なれば。法樂のため。かつは満願の日なればとて。烏帽子折を舞にける。烏帽子折と申は。幸若一流の秘傳とする舞なればとて。見物日頃に十倍せり。京極内匠もこのよしを聞。早天より棧敷にのぼり見物して居たりしが。すでに其日の晡時に遡からんとする時烏帽子折の舞はじまり幸若が一世の秘術を盡し舞けるに。聲響亮々として林木を震ひ。流泉を涌して謳ひすましかれば。聴聞の貴賤感慨に絶兼て。袖を濡さぬはなかりける。内匠も肝膽に徹りて面白くおぼえければ。時々われを忘れて歎けるが。その聲あまり高く笑しげにやありけん。内匠が居たる棧敷の三間ばかり彼方なる棧敷より。紫のきせ綿着たる女房二人すこしく身を延あがりて内匠が居るかたを顧ける。内匠もおもはずかの女房と。目と目を見合せ其ありさまをみるに一人は年のほど二十には今ひとつ二ツたるまじく見えて。肩けだかく目もと口つきことごとく端正かにして十分の顔色そなはれり。一人は二十の上を一ツ二ツをもこえ。其人の姉となんおぼしくして十一分の顔色あるのみか。ひきわたしたる黛のきはより。顔のほひ濃やかに物いひざま流石さがなしと。人目はづかしくやおほひけん。銀箔おしたる上に。田家に雁金を墨もて畫きたる扇の。中ら三間四間ひらきたるを。口のほとりにさし覆ひ側の人と私語ものしけるその氣はひ。更に人間世にあるべきものとも見えざる心地して。内匠は魂魄天外にとび。其後はなかくに幸若が舞曲も。虚空吹かぜのごとく。ひたすらに眸を凝して伺ふ内。はや烏帽子折終りて。濱松うたふ聲に見物一度に立あがり。叟やくと押合つゝ愈々家路に歸りける。内匠は舞終りてもいよく目をはなさず。かの婦人の方を見るに。兩人の少女の母とおぼしくして。年齢四十餘りの女房これまた人の妻とも見えず。容貌物ごしいと徐かに。立振廻甲斐なくしく家僕二人若黨一人。侍女三人ひき連。棧敷をくだりければ。内匠も澁々棧敷を下り。竊に家僕が耳もとに口さし寄せさゝやきけるは。汝はわれより跡に残り。この婦人等の後に従ひ。渠等が住所を見とゞけ。またかの姉女は人の妻室か。いまださだまりたる縁合なきや否やを詳に聞きたるべしと。跡めに見て遣し。其身は廣島の本城さして歸りける。斯くて家に歸りて後も。うつゝ心なく懐

惚として。居たりし所に。家僕程なく立ち歸りて申けるは。私にかの婦人の從者につきいかなる人ぞと懇に尋ね候へば。則御家中にて吉岡一味齋といふ人の女姉御娘はお蘭と申し廿二歳。妹のかたはお菊と申し十八と承る兩人ともいまだ縁談の約束もこれなきよし。たしかに聞糺しまかり歸り候と。大息ついで訴へしは。往昔龍樹菩薩南天の鐵塔をひらき金剛薩埵菩薩に對面して。大日經の奧秘を傳へて。歡喜んで歸り給ひし顔色も是には過じとみえにけり。内匠は横手をうち。さては吉岡が女共にてありけるかや。吉岡は八重垣流の劍術の師範互ひに城中にて出合と雖も。かつて親子交りなし。この後はいかにもして吉岡にしたしみ姉蘭を得て偕老の縁を結びてん物をとひとり笑して居たりける

吉岡一味齋來歴の事

爰に吉岡一味齋といふ者あり。生質正直にして能人と交り。假にも他人の非をあげず。劍術の藝に達し。一國に冠たりといへども更にその妙技に憍らず。當主照基卿の尊祖基成朝臣のときより此處に仕官し。今三代の賢主に仕まつれり。抑々吉岡が來歴を尋るに。其先は伊豫國の英産にして本の姓は越智氏。すなはち河野氏と同流なり一味齋はじめの名は彌右衛門幼名は源之助といふ。渠が父は能島掃部助武慶に仕へ。河野彌右衛門といふ小身の諸士いさゝか事の所謂ありて浪卒の身となり。同國吉岡といふ地に蟄居せり。自是のち地名に因て姓を改めやがて吉岡彌右衛門と號しぬ。然るに源之助七歳のとき。父彌右衛門病に罹りてみまかりしかば。其妻源之助が幼年なるを携へ。同國浮穴郡上林村と云所に移り。母子僅に艱難を嘗。浮世の煙を立難しに。母もまた病の床に臥。終に源之助が十歳のときに墓なく黄泉の旅客とぞ成にける。元來源之助に。はかなく敷一族もなかりしかば。奇特の孤子と成つて後は漸く郷里人の情により。同村の農民の家に牧童となり幾許の年月を累ね。成長にしたがひて。山中に追ひ遣れつゝ薪を樵り田畠に驅逐れて。草をくささり山時鳥にあらずして。哭音に血をぞ吐にける如斯て年十五といふ秋の頃弓木を伐んため。腰

には斧をさしはさみ。まだ夜ふかきに家を出。深山に向ひ分りしに。旭日山の端にきらめき出るとき一ツの丘の上に登り。斧の柄を杖に突おぼえず。嘸と嘆息し嗟乎人間の生涯ほど世に慷慨ものはなし。われ先祖は卑しからぬ系統なりといへども。家次第に衰へ。我身ひとつをだに養ひかね。農民の家の僮僕と成り朝には斧を採り山に入り日毎に薪を樵。夜は草鞋を作り蓆席を織。晝夜くるしみの間に年月をかさね一代鹿猿と群を同し。この山中に朽果ん事のかなしさよと獨言して立休らひ。遙に四方を見おろす所に幽なる溪谷の裏より燒柴の煙細々と立のぼりければ。源之助不思議の事に思ひ。やがて煙の上る所を目あてに。谷に望んで到りみれば。果して一ツの廬あり。茅を刈て屋根とし。竹の梁に丸木の柱を結び。古柏老松庵を圍み。更に別境に入りたるが如し。源之助大きに不審り人口はなれたる深山のうち。中々人間の住べき所に非ず。これ仙人といふもの、棲にてこそあるらめとこはくながら庵の裡を伺ひみるに。一人の老僧年齡六十有餘とおぼしきが。爐に向ひ燒火して居たりしかば。源之助斧をすて庵の前に兩手を突かかると人跡絶たる山中に引籠り。おぼしはいかなる御方に候ぞと慇懃に尋ねける。老僧も源之助が風俗は土民の體にみゆれども。言語のさま賤しからざるをもつて。眸を定め得と見。われは佛道修行の桑門今汝が身上の模様をみるに。正しく野人とは見ゆれども。言語に賤しからざる所あり全く生質土民の類ひにあらず。何なる人ぞ。其來歴を語れ源之助ははじめより老僧がありさま凡夫とも見えざる上に。唯今の一言を聞。すなはち先祖の家系より父母早世して其身艱難の事ども詳に物がたりければ。老僧も源之助が姓氏たゞしくありながら。落草たる事を憐み。落涙して答へけるは。有爲の人界盛衰轉變は常の事なり。我法名は信響其先は八重垣氏。もと土佐國の生れ。長曾我女家の家臣なりしが。傍輩のために讒言を蒙り。その實否を糾されずして祿を沒收らる。是を争うて是非を對決する時は。讒言を信じてわが職を收給ひし主人の非を擧るに似たりと。忽ち有爲の頼みがたき事を觀じ。髮を雜髮をすて、無爲の境界に入ひたす座禪工夫せんと思へども。城市罷くして禪定の妨げ多し去年よりこの地に移り。膝をさだめし處。

はなはだ靜遊にして心にかなひぬ。又人里に出て米穀を求ん事もうとましく。近ごろより木食の法を悟り菓を採。草の根をほりて食し試るに。腹に充滿する事なく。飽て睡眠を起さず。快こといふばかりなし。汝もし零落して艱難を厭ふ心あらば。速に有爲をすて、此地に來り。わが白雲の廬に同庵せられよ。源之助聞て。頭を傾けしばらく沈吟して居たりしが。仰然事には侍れども愚母いまだ世にありし時申やうは。汝が父不幸にして。浪牢の身となれる事を常に歎息。一たび家名を引起さんと。朝暮心を用ひられしかども。命數に限り有て。終に本意をとげず世を早ふせられき。汝成長の後は何にもして父の念願を續。廢たる家名を再建し。幽冥の父が游魂を慰よなど。吳々申聞せし事ども今に心膽に記し忘れがたく。佛神に向ふといへども此事のみ祈念仕る計なり。斯申せばとて全く嚴しく馬上に跨り兩刀をさしほこらし。奢侈放蕩を幾庶心底露程も候はず。夫故晝夜辛苦の中にも手習ひなども心に懸。人の姓名を記すなどの文字は學び覺え候。大徳の教誡違背いたすに似れども嘗て出家の望み毛頭も候はずと。孝心おもてに顯れて答へける。信響法師も源之助が孝心の切なる物がたりをき、歎息して答へけるは。出家沙門の法は實に忠孝の道にあらず。唯自心の法性を磨き六道四生の間に流轉する事を免るゝのみ。出家の事はまづ論ずる事を輟ん。扱汝家名を起さんといふ志しは神妙なりといへども。家系を起す事は仕官の道にあらずしては起しがたし。又仕官せんとするに。藝道無くして仕官することかたし。汝何の藝をもつて其君に仕んと思ふぞ。樵芻は土民の態。奉公の申たてに成がたし。源之助涙を流して申けるは。わが常に歎きかなしむところは此事のみ。七歳の時父にわかれ十歳のとき母にはなれ。孤子と成て後は農人の家に驅仕れ斧をとり。鎌を握るの外。更に藝を存せず。然れども今の世は合戦の眞最中なり。急務の道と申は。武藝のほかさらに他事なし。このところは無下の在郷なれば武藝を學ぶべき師もなくさればとて武藝に有ざれば奉公の申だてなしと存じ。僅に十一二歳のときより山中に入り人なき所にては竹を伐て刀とし。大木を相手とし。手の裏をかため。又立木の條に五六本の棒を縛りて釣下げおき。嚴しく棒頭を撃ときは棒自ら揺

旋りて交に打來る。それを相手として身を翻し早業をこゝろみ。又或ときは數多の小兒どもを聚め。手毎に竹杖を持せおのれ一人これが相手と成て戦ひ。師と云者は得ざれども自己の修行も數積りてや。今は十人二十人の僮牧等がために圍るゝといへども還て。渠等が撃係る篋杖は身にあたらず一々其對手を撃倒のみなり。這樣に一身を凝しなば。假令師匠はなしとも。五年十年の其間には自然と妙を見る事もあらんかと。これを目的として年月を費し候へども。師を得て學ばざる武藝なれば勞して功なきこと多く侍り。嗟呼貧は諸道のさまたげ。さても父が世にありせば斯ばかり功のならざる事はよも有まじきものと。そゞろに涙の催されて聲を吞でぞかたりける。信響いよく感じ入まことに孝心の程感激するに絶たり。我桑門には似合ざる事なりといへども。順孝の志にめてて劍術の奥秘を叩ひて傳授すべしまづ一試合して汝が自得の妙をこゝろみ其後汝われに及ばざる所あらば修行すべし。源之助雀躍し天に歡び地に喜び信響老僧が指揮にしたがひ。竹を伐て太刀とし塵外の平なる地を撰んてかしこに至り。やがて技量を試みける。源之助は精心を激まし信響に向ひ打てかゝる信響敢て秘術を盡すこととてもなく源之助を打伏三度たゝかふに三度ながら手段みなおなじ源之助地に跪て慎んで禮をなせば。信響大きに稱讚し人は心術に因とは云ながら。汝は奇才の麒麟兒なる哉われいまだ佛乘に入ざる其以前は劍術の師範をなし。數多の豪傑と試量するといへど一人としてわが眼前に立ものなく。又門人を導びぐこと數百千人なり。たまゝ我と手段を較るに五七合の間こたへるものなし。今汝の武藝をみるに學ずして。自然と體腰の備へ固く。手足眼目の動作すこしも法にはづれず。全く進退を得たり。往昔源義經いまだ牛若丸といひし時。鞍馬に登山して在せし刻み自ら工夫成就して。一派の劍術を起されたり。是等は天下の名譽の人傑も凡夫にあらざるが故に。天地自然の玄妙をも具足しつべし。されども上古の事はみねば知らず。今現在に汝の立ふるまひをみて。往昔の義經の事までも思ひ出られて感歎すくならざる所なり。扱わが流義は諸流と違ひ。千變萬化の術ある事なくたゞ敵の眞頭をめめてとして。一刀を下すより外に太刀無し。これを思ふ所の靈と

號く。千變萬化その一刀の中に籠れり。天地を合せ鍛錬たる乾坤の利刀を以て來る共。我一刀を造る事難し。まづ上手下の論を止て。流義の得失を論ぜば。天下の内我流義に超たるもの一流も有事なし。汝今日より三年の間學び得ば。おそらくは天下の一人となるべし。源之助は頭をもつて地を叩き。今日何なる幸あつて斯如る名師に對面つかまつることぞや。ひとへに某の家系を再建すべき時節なりと是より信響を拜して師となし。其翌晩より。谷をわたり山路を超。風雨をも厭ず雪霜に苦しまず。秋くれ春たちて三年が間怠りなく通ひけり。往昔三位源博雅は相坂の蟬丸にしたがひ。琵琶を學び給ひしかども。流泉啄木といふ秘曲を傳へざりしかば。何とぞ其秘を傳へんと。風を衝雨を凌ぎ既に三年の間一夜も怠る事なく通ひ給へりとかや。凡師を得て道を學ぶ者は。怠りて道を得る事は難し。果して源之助武術次第に熟し。作業師に越ること藍より出て藍よりも青しといふ譬にひとしく。今に於ては信響に少しもおとらざりしかば。或時源之助に印可の巻物を與へて申けるは。汝が武藝却てわれに勝れたり。此うへは斯る隱栖の地に年月を送らんより。何れへなりとも趨き仕官すべし。當時戰國の最中なれば。一藝一能の士は何によらず用ゐらるゝ時節なり。しかれども良禽は木を見て棲。良臣は主を撰んで仕るといふ事あれば仕官の道輕々しくする時は還て後悔あり。たとへ高祿をもつて招くとも不仁の君に見えて穢れたる祿を食む事なかれ身を立る事は天命にあり。かならずしも己が身を立んとして。人を損ふ事無れ。藝術に儒慢することなかれと。懇にいましめければ。源之助天に向ひ誓約をなし。我慎て師の教誡に背く事あらば。天神地祇の神罰を蒙るべしと。年頃の厚恩を謝し。そのち旅行の調度を整へ。信響に辭し。頓て諸國を経歴し。後に藝州に來り百瓜基成朝臣に見え奉り。御前に於て劍術の妙技を顯せしかば。初めて秩祿三百石を賜り。諸士の師範にぞ命ぜられける。流石は師匠の姓氏にかたどり。八重垣流と稱へ。其身も吉岡彌右衛門と改名しけり。基成朝臣逝去まじくして後は前武州基高朝臣に給仕し奉り。恩祿加増たびく賜はり。終に五百石となり。又基高朝臣すでに世をはやくして失給ひし後は當主照基卿に仕へ奉り。忠勤いよく怠りな

く。藝道次第に行れ専ら諸士を導きけるされ共不老の薬をも嘗ざりしかば年齢としを追て加はり。既に六十二歳に暨びけるとき。致仕の願ひを上。嫡子源之丞に家務を譲り。其身は隠居して一味齋と號しぬ。源之丞父におとらぬ達人なりしかば。門人一味齋が世とひとしく。門前市をなしける。然るに源之丞常に多病にして。天正十一年四月終に父に先達て病死しける。父母の愁傷は云も更なり。門人の歎き一かたならず。一味齋また兩人の女子有て姉をお蘭妹をおきくといへり。兩人とも常く武術に心をよせ。晝夜針巧機織の間には専ら藝道をはげみ。女には珍らしき劍術者なり。扱源之丞死去の後には門人の稽古を司どるべき者なきによつて。高弟衣笠彌右衛門といふものに演武の事を司どらしめ一味齋再び教場に入て彌右衛門に力をくはへさらに怠りはなかりけり。

京極内匠以ニ春木藤藏一媒せしむる事

却説京極内匠は。さきに郡山八幡宮の廟前幸若舞の折から。吉岡が兩女を見そめてより後。姉女そのが容姿晝夜眼前にあるがごとく。現心なくあくがれ。何にもして一味齋へ申し。おのれが方に娶てんものとさまん計策をこらしける。爰に春木藤藏と云ふ者あり。渠は吉岡一味齋が門人にして。甚だ辯舌あるものなり。京極渠とは一面の交りありしかば。あはれ此者を談ひ。吉岡が方へ申入んとおもひしかば。親しみをかさね折々春木をおのれが方に招き酒宴など催し。一時春木を請じ。例の通り酒盃を飛し。藤藏に向ひ申けるは。扱も某當家に仕官し幸ひ主君の恩寵に因て高祿を賜り。殊に未熟の藝をもつて師範の中に加へらるゝ事。時にとつて身の面目なり。此上某妻をも迎へ後榮を計らんと存ずるなり。如斯申せば恥しき申事に候へども。先日郡山八幡宮の放生會の日吉岡一味齋の姉女を見そめてより後今日にいたるまで魂魄恍惚として晝夜山野に迷ふが如し。幸ひいまだ良縁もこれなき由。足下吉岡氏へ申入れ。某が妻に申受てたまはりなば。われ一代足下の厚恩を忘れまじと。眞顔に成て頼みける。俗の言に戀は心の外とい

へとも。京極が齡四十に向々として顔色黒く頬骨高く時ち。兇悪なる有状さながら五道の冥官の再從兄といふともはづかしからぬ人物なり。春木藤藏うちなつき。此事何より心安き御用なり。足下當時御前の首尾よろしき御かたなれば。縁談の義仰入らるに誰人か否と申べき。ことに吉岡などは足下と同列の師範者よろこんで承引いたすべし。十に八九は事なるとおぼし召候へ。若否と申とも某辯舌をもつて得心いたさせ申べしと。事もなげに受合にぞ内匠は手の舞足の踏とを忘れ。床の間に直し置たる脇指を取て藤藏にあたへ。この指添は相州貞宗が作なり。某先年洞雲寺夜撃の時身命を抛て敵にあたりしかば。御感の上我君手自たまはりし大切の家寶には候へども。即今足下の快よく御申ある言の嬉しさに。進上いたすと申ければ。藤藏三度おしいたゞき。御拜領の品といひ。殊に名作の御賜もの子孫に傳へて家寶ともせらるべきを。某に惠るゝ上はいかてか粗略にいたすべき。いかにもして御手にいれ申べし。少しも愁給ふなど。其夜は家に歸りける。春木は夜の明るを待かね。早天に起て吉岡が方に至り伺ふに。一味齋はや教場に出。門人の輩が演武するを見て居たりしかば。藤藏も人々と同じく稽古をなし。果るを待て申入んと。液を呑込んで居たりしが巳の剋にも成しかば。朝稽古畢りて門人何れも吉岡並びに衣笠に辭しおのゝ家々に立歸る一味齋も暫時休息すべしと内に入らば。春木藤藏その後へに従ひ入來り。寒暑の談畢りて後。一味齋が顔色を見るにはなほ快よげに四方山のことを語りければ。折こそよけれと膝すりよせ某先生に吉事を申いるゝ旨の候。知らず先生某が申ところを容給ふべきや。一味齋笑ひを含み。凡吉凶の二つは人間一生のうち五つ／＼にして。凶事あれば吉事來り。吉凶差ひに來るべけれども。すべて浮世のならひとして凶來る事は多く。吉事ははなほ希なる物にてこそ侍れ。何事にもあれ吉事を申入んとあるを。否と申者の候べきや。假令ば萬石を得るとも謀叛に組するは逆悪なり。萬金を得るとも盜賊をなすは不義なり。この二つを除て吉事とあらんに何事か容ざらん。藤藏大きに歡び早速の御許容はなほ雀躍仕るに堪たり。吉事と申は餘の義にあらず。先生すでに嫡嗣を先だて給ひ。いまにいたつて御養子の沙汰無といへ

ども。是非に恰愛二人のうちに婿をも撰び取給ふべければ。一かたは他家へ嫁せられずばかなひがたし姉妹兩所の内何れを残し何れを嫁すると御決談は定め置れ候ぞ。吉岡其時眉を蹙め。されば其事にて候。愚子源之丞さきに世を早ふ仕り。今にいたりて家務を譲るべき養子をも成ざるは如何なる心底ぞなと人々の疑ひ給ふ所も有べけれども。我家を譲るべき人物を得ず。某兩耳聾ず眼目あきらかに。齒は一枚も落ず。手足健にして筋骨丈夫には候へども。昧齡已に六十六歳丁ど木の朽たる如く實は明日をも期しがたき老體なり。しかれ共我家農にあらず。醫にあらず家祿五百石を惠るゝものは武藝と云職分あるが故なり。于今も我跡に直して這断に演武の事を打任んと存るほどの門弟を得ず。有は有てもみな衣笠彌右衛門等が如き銘々祿を頂戴したる御家人達にして無祿部屋住の人のうちに養子にすべき門弟なし。廣き一家中の事なれば。人物は有ても此方の流義にあらざる人に家務をば任ねがたし。如斯申うち某落命いたしなば君の恩裁をもつて三代の君に對して私なく仕へ。諸士を教授する事怠りなかりし一味齋断。跡をも立て得させんと。若くは御憐によつては。姉妹の内へ御家中の無祿の士を養子として賜るべし。時には他流の人にもせよ。恩裁の上は少しも苦しからず。某黄泉の下にあつて。君恩の廣大なるを謝すべし。家の興廢は天命に任て養子の事を庶はず。夫故無心にして何れを嫁し何れを残し置んとも。更に家の私を貪着せず。晝夜門人を導くよりほかは他念なしとぞ申ける。實に一味齋がときは世に有がたき君子なり。春木猶も膝を寄せ。仰さるることに候へども。假へ興廢は天に任せ給ふとも。人倫親子の親しみは鳥獸すらこれを知るところなり。一人を残し置れても事足べし。兩人の息女を死期までも残しおかれて。あたら歳春の盛を過し給ふは。親子の實情といふものにあらず。某吉事を申入ると云は。宜しき媒を仕らしたためなり。京極内匠は當時出頭の仁にして流義こそ違ひ候へ。同列の師範職なり。この人某を頼み。先生の長恰おその御嬢を申受たき所望にて候。いかゞ御心術うけたまはりたし。吉岡答へて千萬の芳志よろこば敷は侍れども。この事は不承知なり。春木又云ふ然らばいづれのかたへも嫁し給はざる思召にて候歟。吉岡こたへ

て申けるは。兩人の醜厮一人は家にのこし一人は嫁すべき事は仰までもなし。某がもとよりの心底なり。しかれどもいたづらに佳縁の幸ひもなく年春の妙齡を失ひ。長女は當年廿二とおぼえ侍る。この者は紅糸の良縁も有ば某が存生のうちに片付をかんと思ふ所に縁談を取持人これまで五六人も有しかど何れも事のさまたげありて。はからず今日にいたりぬ。唯今にても宜しき處あらば遣すべし。春木藤藏吉岡が言を聞て少しく憤りの色を現し。先生は虚言をもつて人を戯給ふか。吉岡が云某幼若のむかしより虚言を吐す。奴婢といへども戯ものにせず。何をか虚言とは申さるゝぞ。春木が云先刻某に對して逆惡不義を除ては何によらず吉事とあらんに何事か承知せざらんとたまひながら。某が申入る縁談をば用給はざるのみか唯今にも宜しき方あらば遣べしとのたまふは。人を戯て芥の如くにし給ふと申なり。事に臨んでは師弟といへども聞流しにはいたしがたし。吉岡聞て莞爾として答けるは。こは春木氏の言とも覺ず。吉事といへども心に叶ふ時は吉事なり。心底に戻るときはかへつて凶事なり。夫人に五倫の道あり。所謂君臣父子夫婦兄弟朋友なり。父子兄弟の二ツを天倫と名く。假へば父子心に叶はぬとて。父として其子を殺すに忍ず。兄弟氣に和せずといへども。斷ても捨がたし俗に兄弟は五本の指と云ふ。天縁自然の恩愛あつて。捨るに捨がたき所あり。所以に天倫と云ふ。君臣夫婦朋友の三ツは義倫となづく。まづ臣たる者君に仕るには。其君を撰んで仕ふまつるべし。朋友と交るには其行ひの善惡をみて交るべし。夫婦はとりわけ子孫を引べき物なるがゆゑに。古人も夫婦は人倫の初にして禮の源なりとも云へり。婚嫁の道は輕々しくすべからず。父として子を遣すに人柄を撰ばずして嫁する者天下の間にあるべきや。心にかなふ時は肯ひ欲さる時は輟。また唯今にても良縁もあらば何れへなりとも遣すべしといひしは。眞實の言句を吐出すと申者なり。足下は我家の門人にあらずや。われ足下に對して偽の言がいはるべき歟。究めて他人へ縁談は致すまじなどと言を飾りいつはりを吐ちらし。明日にもあれ。渠を他家へ嫁する時は。夫こそ虚言をもつて人に戯るゝといふものにして。後日に足下に説話せられたる時何を以て口をひらく事あらんや。次に京極氏へ女を

遣すまじといふは渠が家師範の職あるがゆゑなり。足下當家の譜代として。還て當家の格式を知給はざるはいかなる道理ぞ。諸士の武藝を修行するに劍術。鎗術。馬術。射術。體術など一人の身に五流七流をも學ぶ人は銘々の根機次第にて多能の達人と賞美せられて少しも苦しからざる所なり。また斯劍術と彼劍術といづれの流義や勝れたる。この體術と。かの術と何れの體術の勝たると。同じ流義の提くらべして稽古する事は堅く禁制にあらずや。假令は京極の流義は微塵流某の流は八重垣流。流義こそ違へ同じ劍術なり。その同じ術を一人して兩方の稽古場へ出る事をゆるさず。この義は當家のみならず。當時諸國の通例。これ互ひに極意とする所の秘密あるが故なり。某が女とも幼少のときより劍術を好み。兩人ともにことごとく我家の蘊奥を傳へ置り。今京極氏へ嫁せしめ。渠もし輕々しく流義の極意をもらしなば。先師へ對して。神秘の玄妙を僞略にするに似たり。たとへ京極家に其流義を何にかせん此方には此方の極意神傳ありと思はるゝとも。某が方の遠慮と申ものなり。然るに足下これらの法式は能しりながら。京極の方へ縁談を薦めらるゝのみならず。殊に某が言質を取。師弟の禮讓を失ひ。事に臨んでは師匠といへども聞通しには成がたしと。顔色を變じ肘を張て説話せらるゝは如何なる道理ぞや。諺に七尺去て師の影をさへ踏すところ申せ。厚恩もなき他流の師範人が後舞し。君父にひとしき師にむかつて切羽まはさるゝからは。我家の奧秘をも他家へ傳へかねまじき人物なり。某のかたへ入門のはじめに血判して。親子兄弟たりといへども他傳他言をいたすまじと。神文に筆を立つたる事は忘却せられたるに似たり。但し一味齋が申所理に通ぜざる歟。また足下の言道に叶ふか事の利害を辨へたる人によく聞れよ。さばかりの人には我門をも踏すまじ自今以後稽古場の出入無用なり。破門いたしたる趣は明日奉行中まで申達すべし。速かに歸られよと。其座をあらゝかに立て入れれば。春木藤藏は赤面して更に云出すべき言もなく鼠の逃るが如くにて頭をかゝへて歸りける

繪本彦山權現靈驗記 卷之五終

繪本彦山權現靈驗記 卷之六

一味齋衣笠彌右衛門に春木が不義を辨する事

春木藤藏逃かへりて後。衣笠彌右衛門一味齋が前に出て申けるは。最前より密に蹠蹠を伺ふ處に。藤藏京極が爲に縁談のことは説物は。畢竟若年にして前後の思量なきが致處なり。先生日黎寛厚にしてかり初にも御怒りの體たらくを見ず。然るに今日春木に對して嚴敷御憤り。殊に渠を破門し給ふ有様。某私に肺腑に落す候。渠當流の極意は傳へずといへ共。已に中免状をも賜りし程の者なり。先生の爲に不興を蒙りたるを憤り。内匠が方へ入門など仕り。當流の意味をかの家へ傳るときは。内匠も一個の達人と承れば。此方の宜敷所を盗み取て自己の流義と酌酌仕り。八重垣流の奥義は如是々々などと公に誹謗仕るときは。先生の門に出入して飽まで當流の劍術諸流にすぐれたる意味を覺れる者は。一人として疑滯いたす事は有間敷候へ共。何をかな諸流を誹謗せんとの分別もなき若士ども彼是と批判仕りなば。後々御流義の瑕瑾共なりなん歟と。安からざる意地仕候。某今一應春木藤藏に面會いたし渠が心底に一物なく。偏に若氣の魚忽によつてかゝる詮なき取持をいたし計らず無禮を仕りしに究り候はゞ。以來屹と志を誦させ申べし。御賢慮いかゞ侍らんと伺へば。一味齋打黙き衣笠氏の深慮はなほだ感慨に堪たり某老屈の身となり。雖も稍く傾き。何となく性急にも成しやらんと。人の思はんことの面目なさに。申まじきことゝ雖も今口外へ出すなり。必しも親子兄弟の間へもあへて語り給ひそ。抑京極は當時派ぶりよき男には侍れ共。其行狀に於ては至つて心得がたき所あり。權衡一たびもちひては輕重争ふことかたく。繩墨既に發しては曲直覆こと能はずと。われ愚なりといへ共。雅ときより直實の道を守りて内に其性を具足せり。此墨規を以て曲れる人に當てみるに。少しにても曲たる者

は曲れりと見え。直なる者は直なりと見ゆ。今京極が行狀を以て其心根を計るに渠已れが爲にしてかつて忠義の心なし。昔年雲州富田の城外洞雲寺合戦の夜自ら疆敵にあたり。身に甲冑をも着せず。我が君の御前に立て矢を投。臂を振うて大軍の圍ゆの中に劈入死力を出して働かし事ありとかや。是何の道理ぞや。臣たる者君の馬前に有て矢石を犯して戦ひ。或は討死し。或は傷を蒙るものは愈其君の厚恩に浴して一命を棄る事古今定まりたる武士の恒なり。内匠が身に於ては其とき當家より尺寸の地をも下されず。又一粒の扶持にも預らず。何ぞ危地を踏で戦ふの利あらんや。己が身は己が物に似て嘗てしからず。身體髪膚は悉く父母の賜なり。いまだ君に仕へざる時は是を傷らざるやうにするは孝の道なり。既に洞雲寺に寄宿して彼住僧がために數年の恩養を受し事あれば。宜しく住僧の僧を誘ひ燄火の中を突破り。靜なる地へ脱れて難を避しむる是當り前の義と云ふものなり。然るに敢て寺門の老僧等が焼死するをば救す。厚恩もなき當家の爲に粉骨碎身して戦ふことは人の眼目を驚かして其祿を貪んとする志必然たり。果して當家へ御見出しに預仕官の後ひとへに巧言令色をもつて君に阿諛ひ。唯己が爲にせんすること共甚だ多し。如是の小人は久しからずして君のために捨られ。一朝に寵遇をうしなひ。後には身の置處さへなくなる物なり。又渠が前主は淺井備前守長政と聞り。昔年久吉公の爲に攻亡され。長政父子及び一族江北小谷の城にて自害せられき。其とき。何故忠臣の輩と一同に殉死せざる。若くは逃さつたるか。士たる者君家の死に殉ずんは命を竊盜臣と云者なり。又長政没落せざる以前に渠淺井家を出たりといはゞ浪卒たる事顯然たり。失なくして浪人と成べき謂れなし。殊に渠が武藝諸人に越えたと聞く。さばかりの藝術有ながら年齢四十に。向として其主を得ざりし者は其行ひ正しからざる所有ればなり。斯る人物に女をあたへ。徒に其流を酌んで差辱を家門に及さんこと豈けがらはしからずや。又人たるもの其友と交るに信なければ交らずと。藤藏京極が善惡のこゝろ根を識ずして交りしぞならば。是若氣の鹿怨とも云ふべし。京極が生質宜しからざる事を識ながら交れること疑ひなし。其由縁をいかにといふに。今日果て来に

對して婚嫁の媒を取持するに。従ふか従ふまじきか杯と。先に口固して我に違背さすまじとす。是宛て京極がため透し込れて幣物を受けたる物と覺えたり。然らば春木が測底にも京極は宜しからざる人物と識ながら。幣物のために誑されて交りをなすのみか。我女迄を醜き縁に墜入んとするは師弟の道に叶へりと云はんや。爰を以て某春木が不實なるを憤りて言を勵しくして破門したる者なり。是等の輩は小利のために大義を失ふ賊なり。何ぞ齒に掛るに足んやと理非明白にことわりければ。衣笠額に汗を流し誠に先生の教誡至極の利に當りて覺え候。某た淺智たるが故にかゝる意味を覺らず。春木が如きものを推舉仕らんといたせしは。千萬後悔仕ると慚愧の體にぞ見えにける。嗚呼吉岡は武のみか文事をも兼たり。夫口に百千萬言の詩を賦し。文字章句の義理をのみ吐ちらし。古今の書に眼をさらしても。心に古人の書を見ざる時は。所謂世の腐儒者なり。僅かに仁義禮智の五つの物を得て。行ひ其にひとしきときは周公孔子其前にあり。一味齋幼稚にして父母に離れ。農夫の家に奴隸と成。晝夜武術に心を委ね。文字を學ぶに遑あらずと。雖行ひ仁義に戻らざる時は。學ばざれども自然と大人の學に至る。聖人の言に文事有るものは必ず武備あり。武備あるものは必ず文事有りと。是等の事をや申べし。吉岡また衣笠に向ひ。此こと構て口外に出さるゝことなけれ。若世上に流布する時は。京極を誹るは君を誇り奉るに邇し。然れども君も明君の御子孫にまします上。生得明智にわたらせ給へば。追付京極が行ひの正しからざる旨を覺り給ひ。遠ざけらるゝ事疑ひなけんと申にぞ。衣笠もこれを聞。何しに他言仕るべきと。頓て其座を退ける。

鎮西合戦來由の事

辯口を以て天下に游説する者は。又辯口の爲に身を損ふこと有。廣野君が剛辯なるも。齋王田廣が爲に辯舌を以て油鏝に烹る。されば春木藤藏京極がために媒を説かんとせしか共。一味齋が片言双辭にときやぶられ。鼠の逃るが

ごとく立かへり。頓て京極に對面し。吉岡が云ひし事共、詳に語り。却て破門せられ再び行事だに叶ひがたき趣申ければ京極は海上に船楫を失ふたるが如く。忙然として居たりしが。元來奸曲邪智の生得なりしかば。心中大に憤るのみか己れが望の叶はざる事をなげき。此上は宜しく奇計をととのへ。時を伺ひ主人へ申上。君命を借て申受てんとなく申出さんと欲すれども。己が身の上の事は流石に云出し難にして。數多の日をぞ過しける。然るに春木藤藏吉岡が爲に不興せられたる事共。何となく世上に聞え。夫に就て自ら京極こそ吉岡が長女に戀慕し。春木藤藏をかたらひ。如々のこと云入しより事起りしなど。様々執さたしける程に。悪事千里といふ諺のごとく口無善惡よの有様。尾に鰭つけて私語けり。假令ば二人頭を交て。密事することすら漏安きは常の效ひなれば。頓て此事照基卿の聞に達しける社せひなけれ。既にこれよりさき照基卿は聰明の人にしまし／＼ければ。京極が振まひあまり輕忽にして巧辯なるを見たまひ輕々しくとりあげし事の悔しさよと轉躰を噬こゝろ發りしに。又此度の風説宜しからぬに就ても。さればこそといよ／＼慚愧たまひ。先夫とはなしに何となく京極が昵近役をやめられ。師範職ばかりにぞ成りおかれける。京極元來進疾男なりしかば。九分は御館の心中を推量し。さまざま思惟しけるは。我はからず吉岡がむすめに心をよせ。本意をだに透ることかなはざる耳か。春木藤藏が破門せられたるより事露顯し世上に惡せつをうたはれ。而已ならず。役がらをさへ召放され何の面目ありて世間へつら出しすべきや畢竟この事如斯かなたこなたへ流布せしは。吉岡が家より譚歌せたるに疑ひなし然らば其うらみの根元はよし岡老賊にあり。便宜よくば這斯を切斷し當所をたち退ばやと。例のあく心の熱氣再發しければ。ある日春木藤藏を己れが家にまねき。頭をまじへ閑談しけるに。春木も欲心熾盛のものなる上。さきの日吉岡にはづかしめられたる事うらみ骨髓に徹しかば何とぞ人しらず聞討にせんと互に熱談を固めけるこそ恐しけれ。是よりのちは晝夜吉岡をうかひ。天晴よる數をりもがなと心を附て探り伺ふと

いへども。更に便宜を得ざるのみか。一味齋は老人と云ひながら筋骨丈夫にして壯年の人におとらず。剩、武藝中國に並びなく。周の廉頗が斗食を吃せし壯健なる漢の馬援が疊礮たる英勇の有狀一身の上に兼ねたりしかば。容易にしては禍ひをまねく媒とも成なんと。徒に月日をぞ延しける。却説この黎は天下すでに昇平に歸するといへども。鎮西九州の地は干戈なほ一日も輟ときなく。高橋橘龍造寺のごとき國人たがひに地を掠め。蝸牛の角の争ひに天正十三年も暮。すでに十四年九月に至り。豊後國大友豊後守義統。京都にまします殿下久吉公の方へひそかに使を遣はし訴けるは。某數年の間島田修理太夫久義と接戦に及び。渠がために采地を奪ひ掠られ畢ぬ。この節修理太夫豊後國へ押寄たゝかひ度々に及んで。我還て克つこと能はず。若しこの時にあたりて殿下より援兵を下され。某が燃眉の急を救ひ給はゞ義統ながく殿下の御家臣と罷成忠勤をはげみ申べし。と言を卑しふして申入けるにぞ。久吉公聞し召入られ先援兵として千束權兵衛英房に。長曾我部宮内少輔元親をさし副られ。汝等速に九州にくだり。島田家に利害を説軍をやめさすべし。若承伏せざるに於ては。予自ら駕を催すべしとの給ひしかば。兩將謹て命を蒙り其勢六千餘騎を引率し。直に豊後國にくだり。千束權兵衛は鈞命を傳へ島田家の陣中に至り。則殿下の書を出して示しける。修理太夫久義みづから出て千束氏に對面し。殿下の御書を引破り。地に抛置りて曰く。かの藤吉郎の猿面今ときを得て五畿内の髓腰もたゞざる小兒等を亡ぼし。殿下と唱へ寛々として我方へ書を示し。久義を鳳城に引付んとする條奇怪なり。近々猿面の藤吉が首級を得て鎗鋒の鬼となすべし。汝速かに頸を潔て我劍を受けよといへやと。即時に武士に命じて千束氏を陣外に追いだす英房憤り心頭より發り。忽ち大友長曾我女が軍勢を合せ。其勢二萬餘騎島田家の先陣。中務少輔久家の陣に向ひ戦ふといへども。島田家の軍勢さらに烈火の毛を燃すが如く。三家の兵一戦の下に利を失ひ。長曾我女信親討死をとげ。千束氏も豊前國小倉の城まで逃退き。早馬を飛すこと乃浪のうつが如く京都に注進しければ。久吉公以ての外に怒り給ひ。さらば踵を廻らさず鎮西に押わたり。自ら島田氏を誅伐すべしと。やが

て五畿内は申に及ばず。丹州前後北國は若狹越前より江州濃美の諸國へ軍勢催促の御教書をたまはり。別して百瓜家へは小谷刑部少輔吉隆を上使として仰下されけるは。既に中國以東の諸國ことごとく今上皇帝の徳化に偃し。諸侯何れも朝貢を捧たてまつり。天恩を報ゆる處に。鎮西の諸藩いまだ七徳の餘風に隨はず。なかんづく昔年の間島田久義といふ者あり。自家の威風を頼み猥りに隣國を犯掠あまつさへ今般我等使に對して無禮の有様。まことに言語に絶したる狼藉あり。是に依て予みづから朝廷のために斧鉞を執て西國に馳くたり。彼の一門を誅戮せんと欲する所なり。然れども五畿内及び尾濃諸國の兵ども。未だ西國海濱の合戦等になれず。故に西國平均の功は偏に百瓜三家のちからを頼み思召所に候。別して岸川基玄に於ては。近年退隱の身分ちかごろ無理なる所望には候へ共。久吉九州にくたりなば我ために軍旅の及ばざる所を助けられ給はりなば。甚満足に思召るべき段。懇に仰せふくめられ。又三家の人々へ御教書を賜り小谷夜を日に續て廣島に下り。上使の旨申入れしかば。百瓜岸川疾早川三家の人々やうや敷上使を迎へ。謹て教命をうけ給はり。何れも御教書を拜見し翌日吉隆を城中に請じ。山海の珍産を以て饗應あり。各殿下への受書を奉り。別して岸川基玄朝臣吉隆に向ひの給ひけるは。我近年病氣に罷成當時隱居仕ると雖。殿下某を以て心にくき者に思召され。九州の先陣を僕に命ぜらるゝ事。基玄ときに取て身の面目にて候へば。今般蟄居の室を出て。ふたゝび白髪の頭に簪をいたゞき。先登に進み身命を抛て軍忠を抽んで申べし。此段宜しく言上に預かりたしと。快に領掌ありければ吉隆はなほだ感じ入。仰の趣つぶさに言上仕りなば。定めて殿下にも満足に思召さるべし。と酒宴終りて後三家の人々に辭し頓て都へ還りける。是より百瓜家には豫め出馬の用意を調へたまひ。又東は備前國より西は長門國に至るまで。領分の道橋等をつくり城々を修理して専ら殿下の御旅館に備へ。また風景を眺望するに宜しき地を撰んで亭を造り茶室を營みすべて饗應の支度をぞせられける。

百瓜家遠慮を吉岡に談せらるゝ事

既に鎮西の戰事近づきければ。百瓜家及び兩川の人々殿下のために袒ぎ甲兵をとゝのへ専ら水陸の備へ嚴密なり。時に十月上旬照基卿吉岡一味齋を召れ。仰出されけるは殿下近々九州誅伐として大軍を出さるゝの間。上がたの軍勢定て海陸二手にわかれ此地に來り。殿下は陸路より下向ましますべし。是に因て旅館は云ふに及ばず。行路をつくり橋をわたし。諸軍道の滞りなき様心を用ゆべき旨。兼て申わたし置處なり。但し周防國岩國の庄興國寺は。合戦の首途杯には最上の目出たき寺號なり。殊に此地風景を眺望するに宜しければ。彼地に於て殿下を饗應し。且茶を進らせんと思ふなり。汝急ぎ防州におもむき予が認めたる處の繪圖を携へ。圖にしたがひ繩ばりし。速に入夫を下知して旅館及び高樓小閣茶室等を造れ。一味齋頭を叩。君命を違背仕るにはあらねども。臣稚ときより田天野人の堺に交り。稍く人心つき候黎ひより。武術に志を委ね。聊普通の小技を識量仕り。七十歳に邁き今日迄。數奇風雅の道に於ては。嘗て夢にだも覺語仕らざる無風流者上藤雲の上人などを御饗應せさせ給ふ御普請さし圖の類ひ。某が身に執て更に存じもよらざる義にて候。諸禮古實など覺悟仕りたる仁御家中には數多候へば何とぞ此輩に仰下さるゝ様つづしんで願ひ奉ると。額に汗を流して申ける。照基卿莞爾として笑を含み給ひ。汝の言ふ如く我家人物すくなくならず。又風雅の道を嗜み古實作法などを識たる者あまた有。しかれども今般思ふ處ありて是等が輩を用ひて差圖を成さしめず。汝を呼出して直に申付るには深き所由ありと。前後を屹と顧み給ひ。左右の者ことごとく退座よ。今密談ありと宣へば。惣て扈從し奉る左右の昵近給仕に侍る小童に至る迄。徐々として座を立。僉次の間にぞ退りける。照基卿は近臣の退畢るを待ち手を以つて。吉岡を膝下ぢかく召れ聲を忍び。猶漏なん事をはかり思し召けん。蝙蝠の扇を鼻の下に押當小聲になりて宣ひけるは。扱も足利義政公の時山名細川權をとり。天下を攘亂せしより以降四海大きにみだれ

て凡そ百餘年の間。干戈暫くも輟るときなく。黎民塗炭のくるしみを蒙りし處に。眞柴久吉公惟任日向守を山崎に亡ぼされて後は。諸國ことごとく風に望んで歸伏し。帝都のほか緩服の地。漸く太平の世とはなりぬ。是時節到來とはいひながら。全く殿下の武功による所なり。予すてに是と雙角を。疑角ずして和陸をなすものは敢て彼の人の武威に恐懼にあらす。只治るべきときを識。また久しく戰國に苦められたる民を救んが爲なり。然れども此人の癖として。大國何程を得たればとて飽ことを知ざる大膽の識量あり。予が穩便にして従ひ靡を見ては百瓜家の。輩こそ己れが武威に畏れて簾を捲て降参しつれ。天晴このたび筑紫誅伐の序に。若くは油斷の體もあらば忽ちに中國を攻とらんなど。思ふ心あらんもはかり難し。これ漢土の古へに道を借て貌を亡ぼすといふ計略なり。こゝを以て予叮嚀を面として。其實は少しも備へを怠らず唯我國に油斷なき事を知らしめ我國家を奪ふ所の望みを斷ん爲なり。夫故別して驛路の旅館は云ふに及ばず水路には橋梁を渡し。路程には茶店を修ひ。善をつくし美を盡し。威さず慢ず。禮をも具へ怠りもなく。彼人のために憤りを發さず。よろこびを加へ。自然と干戈を用ゆることなからしめんとす。就中岩國興國寺に於て。予自らこの人を饗應するに。諸禮古實を識たる者に普請のさし圖を爲さしむる時は還て作法すぎ。茶人數奇を好る者に其事を任するときは。只顧風流に過ぎ。却て我家の油斷を顯す道理なり。それ過ぎたるは猶及ばざるがごとしと。作法過たるも禍ひの根風流に墜たるも又禍ひの端なり。予が祖父基成卿いまだ在世のとき周防國山口の城主多々良介大内義隆は。中國の御館と呼れ十三州を領し。飽まで愚將といふにはあらざれ共。諸藝の奧義を究め。孔孟の道に心を盡し。老壯の跡をしたひ。また都紫野の大徳寺玉堂和尚を喚下し。龍福寺といふ寺に置き。常に禪學を學び。歌の師に飛鳥井大納言雅俊卿を請じ下し。有職には日野大納言資定卿。廣橋大納言兼秀卿。郭曲には持明院中納言基規卿。衣紋には高倉冷泉範遠入道宗紹などの如き人々を京都より山口に招請し。其道の研究をさぐり。又諸禮古實の達者と聞ば。遠國他境の果まても人を遣はして呼寄。或は風流數奇の名譽と聞くとときは。山林靈遊

の世捨人をもまねき聚め。何れも其道を學び盡されし程に。折目高にして作法と云ひ。風流と云ひ。雲の上人といへども。立振廻なかく大内家には及び難しなど。とり／＼稱美せられしか共。如斯風流に墜入て武邊の事は失口にも云はれざりしかば。家臣陶入道がために亡ぼされ。名家たちまちに斷絶に及びぬ。是のみにあらず往古平家の亡びたるも。雲上の人に交はり歌を詠詩を賦し。武家の輩が有形は頭にして賤げなりと。嘗て武の道を念とせず。唯裾をひき冠をかめしげにいたゞき。月卿雲客と班を同ふせられしに。源家のために帝都を攻め陥され一門のこらず壇の浦の海底に没せり。其他足利義政公は諸禮古實に心をゆだね。御厨黒棚あるひは床の飾つけなど。朝暮古實の事に心をよせ。武の道ほとんど廢れしかば。山名細川がために權を縦まゝにせられ。足利家の衰微を引出し給ひぬ。所謂かの過ぎたるは猶およばざるが如しと云ふ是なり。凡武門の家には作法風流あまりに能備りたるは却て智者のために見おとさるゝ物ぞかし。唯亂世に於て過ぎて宜しきものは武邊のみなり。夫故このたび殿下饗應の旅館には。風流古實等の雅美を用ゐず。左有はとて稜威げに武備を輝さんも決句油斷あるに似たりと。さまざま心を用ゆるに。唯祖父基成卿こそ小身より身を起したまひ。中國を切斷武といひ。文と云ひ。颯たる所なき名將にてまじ／＼き。唯先祖の格式を以て饗應するに如じと思惟一決せり。殊には祖父御在世のとき度々將軍家より上使を下されたる事もあれば宜しく其ときの作法を斟酌し。此たびの饗應を成んと思ふなり。然れども予が家の古老近年に至りて悉く死し祖父の世に在しとき從纏ひ奉りし者を指に折てかぞふるに僅に入九人なり。汝小身なりといへども甚心志たゞ敷ものにして。小事のことゝいへどもよく記憶し。思慮ふかき者のよし祖父の御側にさし置れたりと聞く。定めて在世のときの大禮規式など粗覺え居るべし。是によつて汝を喚出し此たびの普請の指揮申付る處なりと。則繪圖をとり出して一々に説示し給へば。吉岡はるかに飛退り御明君の御見出しを蒙り奉ること冥加にかなひし仕合なり。此上辭し奉るは還て恐れ多く社候へ。臣すてに先々君の御側に奉仕り。愚昧には候へ共すべて軍事に限らず。大禮小禮等の御

作法大略をがみ奉りしことは。何によらず忘却仕らず。其上御繪圖をたまはる上は。謹んで奉行仕るべし。なほ事に臨んでわかり難き趣は退て伺ひ奉るべしと領掌して座をしりぞき岩國さして赴ける。

岩國興國寺旅館結構の事

吉岡一味齋は君命を蒙りて後。門人の指南は衣笠彌右衛門に任せおき。木匠又は水泥匹諸の棟梁どもを引連れ。周防國岩國興國寺に趨き。僧侶の輩に對面し。やがて照基卿の命を傳へければ。住持の僧は申に及ばず塔中の桑門異議に及ぶべき大きに悦び。時にとつて寺門の面目なりと先吉岡を方丈に於て饗應しければ吉岡は其よく日より地面を見立。こゝの地は亭。その地は閣などと。それ／＼に地を下して繩張をなし。數千人の人力に命じて土石を運しめ。陸は材木を引車のひびき雷霆のとどろくが如くに數百の車は輪をならべて地にしきり。賤の雄が木を挽音頭の聲は響くして谷にこたへ。又海濱には船の艦舳をならべ。奇石異木の類ひを移して砂上にはこび上せ寺中に作りならべたる假やごに。番匠がうつ槌鑿の音絶ることなく實に殿下饗應の設。人の耳目を驚すばかりなり。却説京極内匠は先には昵近役を放され。主君の側に伺侍することを輟らるゝのみか。家中の風聞宜しからざる事は身より出たる錆。己れが身を顧ず。只管吉岡をうらみ憤り。いかにもして闇殺し。鬱結を解んものをと。春木藤藏を諸共にさまさま心を用ゆると。雖。更に假隙を得ざりし處に。今般吉岡興國寺普請の奉行を命ぜられ。彼處に趨くと聞えしかば。其日より折を得たりと大に悦び。折節京極は病と稱しひき籠て居たりしかば。密に春木と奸計を廻らし。忍びやかに廣島を出岩國の庄に伺ひ寄。此ほどより錦見浦の所縁あるところに旅宿をさだめ。晝は寢床に臥て頻出しせず。夜な／＼毎に興國寺の近邊に徘徊し。忍びやかに吉岡をつけねらひ。其動靜を探りきくに一味齋僅かに召つれたる所の家裏兩人若黨一人の外は別に門人をも同伴せず。興國寺の塔中を借てかしこに宿し。朝には夙に起て煎餅に食し。

夜の明るを遅しと普請場に出て。あまたの下役と同じく番匠人夫の輩を指揮し。夕には暮に暨んで方丈に息ひ。日の限りある普請なれば少しも怠慢することなく。晝夜精心をぞ抖擻しける。内匠は吉岡が普請の爲に終日身心を勞し。晝夜怠りなきを見るよりも。驚波や時社ごさんなれ。此時節を失ふべからずと委しく寺内に忍び入り。阿々まてかけ廻りとくと蹠蹠を窺ふに元來寺門のことなるが故に。要害とてもなく。歳霜あまた／＼び蒙り。亂世年を経たりしかば。諸堂僧坊大半はくづれ傾き屏門瓦散ては雨露自ら檐梁を朽し。爰の築地かしこの籬ところ／＼破れ損じて人も犬も潜り入るべき隅々あまた處にありしかば。是幸ひの天の賜なり若普請追日て成就せばみだりに窺み入ることかなひ難し。此時節を失ふべからず。是非に本意をとぐべしと。其後は夜更人しづまるを待て。夜ごに後菌のかたより忍びいり。豫め脱路を見定め。能隙もがなとかたづを吞て居たりける。佛ならず神ならぬ身はいかにせん。吉岡一味齋はおのれを亡さんとする曲もの有りとも知らず。神無月十六日の夜。例のごとく暮て後普請場より宿坊に歸り。酒飯など用ひ客殿の裡にうたゝ寝して居たりしが。忽ちさつと風吹わたり。庭上の萩の葉さは／＼とそよぎいて。風にまじれる時雨の音。住荒したる僧坊の妻戸を打て人のたゞくに彷彿たり。雨の音に夢破れて。懐はず假寢の枕を擡げ。耳を傾て。次の間の動靜を聞に。若黨家僕も同じくうたゝ寝したりと覺え世間ひつそりと寂り。鼻雷の響きさながら車を轟かすに異ならず。吉岡若黨をよび寢床を敷せんと。伊平次／＼と高く呼しかども。渠等も終日普請場にて主人に従ひ西方東方とかけ廻り。共に草臥てやありけん。前後ふかく寢入ていらへさへなし元來恤み深き生質なりしかば渠が黨もいたく慘勞れたりと覺えたり。今少し休み覺るを待て喚べしと。再び枕につかんとするに。時雨程なく零止みて。雁金一群鳴わたり。雲井はるかに通りける。吉岡思はず古歌を吟じ「神無月しぐるままに。くらふ山。下てるばかり。紅葉しにけり」嗚呼この歌にて思ひ出せること社あれ此近比朝は黎明より普請場に出。夕は晩て後立歸るゆゑに。ほとんど忘れ居たり。此坊に來りしとき。庭前をみるに數十株の蝦蟇手の木何れも見ごとに

紅葉してありしが。今晚は十月十六夜。月もさこそ鏘冷たるべし。後撰集の歌に「照月の秋しも毎にさやけきは散紅葉を夜も見よとか」と有れば秋のみぢは左有ことなれども。散がてにしたる冬の夜の紅葉。しぐれの雨に染めたるも。又興ありて面白かるべし。旅中の寂寞をなぐさむるには屈竟の友に社ごさんなれ。さらば紅葉見んと獨言する聲次の間に聞えてや。若黨二見伊平次。あわたと敷出來り御喚なされ候かと寢慌たる顔おしかくせば。吉岡點頭きはやく寢床をしき汝もやすめ伊平次畏り候と早速夜衾をはこび來り寢床てばやに敷御用もなくば臥り申べしと。紙門を塞て次の間へぞ立にける。吉岡は若黨が立間を待かね。去來快よく雨のあとの紅葉見んと座をたち。障子おしひらき。又雨戸をも開。庭上を屹とみれば。銀盤高く懸り。黒雲風に從ひて東南に飛去。雲間を徘徊する。桂男の暝光。紅葉の上葉はしぐれに濡。夜の錦を翻。がごとくなり。感情いよく深く餘念をはらうて庭上の景光を詠め。浮世の外までを思ひ出られ。空の氣色を熟々見るに。早三更の頃と覺え。月光半天を過ぎたり。扱は深更に及びぬ。我も速に寢て明朝もまた夙に起んと。何心なく雨戸をもしめず。障子引たて入にける。このよ京極例のごとく春木と共に宵より忍び入り築山の後に偃て伺ふ所に。吉岡何心なく紅葉を賞翫して居るうちに。すは時こそ得たれ。今宵爰を外しては本意を達する期なしと。脚を側だて庭を廻り雨戸の邊に來り。吉岡が障子を引立すてに裡へいる處を。後のかたより駈より。手に提たる素鎗にて障子ごしに丁と突。あやまたず七の圖の邊より。鐵壁も徹れと突込たり。此痛手に屈しもせず障子を蹴やぶり。何奴なれば臆病千萬と縁側にかけ出る。此有形に辟易してや有けん。内匠一二足飛退り。ふたゝび鎗を操直し。面門をてらして突んとするを。一味齋差添を抜て鎗の柄を切折たり。此物音におどろき二見伊平次。隔の唐かみ開くひまや無りけん。紙門を蹴やぶり駈入り。主人の疵を蒙りたるを見るよりも。刀を拔鬚し内匠を望み打てかゝる。春木藤藏庭上より縁の上に跳り上り。伊平次が右手の肩先胸板まで斬下れば二言と云ず死てけり。吉岡勇氣凜々たる豪傑といへども。すでに深手のために心志みだれ。擊刀目當さだかならざる上。内匠も普通に勝れ

たる劍術者なれば。佩刀拔討に吉岡が利腕を斬おとし終に斬倒し。押へて咽をさし通すこの動搖をき。兩人の家僕ども駈來り。吉岡が最期を見て再び驚き厨のかたへ逃出せしが大きに周章戸迷ひして。出るべき處を失ひ。あれよあれよと叫び廻るを。京極春木追かけて兩人ともに斬倒す。もとより坊中無住なりしかば。吉岡主従のほか更に餘人なし。敢て遮る者なしといへども最前家僕が號泣してさけびたる聲。寺内にひゞきければ。所々の假屋の内に臥たる番匠人夫ことく四方より群り聚り坊外を取圍む。兩人何れも眞黒に立。各血がたなを提切て出るその勢を見て散々に騒きみだれ。我一にと逃崩れ敵は僅かに兩人といへども。明らかに見認る事なく。上を下へ悶着せり。兩人兼て脇路の案内は見置たり。終に一條の血路をやぶり何方共なく走りける。すでに兩人のがれて後漸騒動しつまり。先坊中に入り人々吉岡が横死その餘若黨等が討れたるを見て仰顔し。早馬をとばして。廣島へ此旨を注進し。寺中に在合ものども。様々評定しけるは。吉岡は老人といひながら。武術世に英中國は申に及ばず。其名諸方にながれて知らざる者なし。容易もこれを討は凡人の所爲とも覺えず。是察する處吉岡に恨ある師範人などの所爲なるべしとぞ細話けるしかながら天の謂しむる處なり。

三浦源右衛門深慮の事

扱も京極内匠春木藤藏兩人の悪黨は興國寺に於て。思ひのまゝに吉岡を討とり。圍を突て脱れ出廣島さして逃歸らんとはすれ共。天罰免さざる處にや有けん。春木藤藏は最前坊中において二見伊平次を斬倒し。また一人の家僕を殺せしとき。寺中の大勢群り來る其聲に驚き。忙て、坊中を駈出るとき。吉岡が死骸の側なる拔劍をふみ左りの足裏を突傷り。なほ重圍の中をつきやぶるに疵口に砂を含んで快く走る事能ず。如斯ては追手の逼り來らんこと疑なし。一まづ以前に竄れ居たる錦見浦の旅宿に逃歸り。此處にて寺中の蹠蹠をも聞濟し。其模樣に従ひ身を遁んと。其夜の曉に命からん旅宿に還り。家内の者に銀錢をあたへ竊に寺中の落着をぞ竊ひける。却説興國寺より早馬を飛すこと雪の如く。其夜の次第既に廣島に訴しかば。照基朝臣大きにおどろかせたまひ。急ぎ仔細を見て還るべしと檢使の士として傍臣村上又右衛門。三浦源右衛門。馬に策を上て岩國の庄へかけ付けば。吉岡が高弟衣笠彌右衛門その他門弟子のともがら。此よしを聞き仰天し馬に鞭うつ人もあり。素足に成て走るもあり我一にと岩國へと駈出し以の外なる騷動なり。村上三浦の兩士は人よりさきに興國寺にいり吉岡及び家僕等が死骸を改め。吉岡に従ふ下役の輩を喚出し。一々に其夜の有状を問尋るに僉一同に訴へけるは。我々がともがら終日吉岡氏の下知を承り普請場に有て人夫を遣ひ。暮方に旅宿へ引とり。此地と地を隔罷れば詳なる事は存せず其夜寺中の騒ぎを聞付早速駈付寺中を見るに。狼藉者はや番匠賦役の圍をやぶり逃去たる跡にて候。夫故最初に駈付てことの様子を見たる所の番匠人夫どもを喚出して承るに。夜分の事といひ殊に黒裝束にて人の多少は存す候得ども。手いたくはたらき切脱たりと申聞其靈坊中に入て人

人を見るに。悉く息絶死骸の側に素鎧一すぢ柄は切をられたりと見え落しおきまた吉岡殿の戸の邊に。赤銅に彫物したる差添の小柄一本落てこれあり。され共此小柄敵の物歟吉岡氏の所持の品歟。いまだ體ならず候と申ければ。村上又右衛門。三浦源右衛門かの鎧を取よせとくとみるに物打鐵をもつて巻たてたり。心得て作りたる體なれども。既に千檀卷の際より切折たるは。吉岡が最期のはたらきと見えたり。また小柄小刀をとり上げ能みれば赤銅の上に金を以て二つの獅子を彫たり。其細工寔に精心をなはり生活動作がごとし。三浦源右衛門かたはらを顧れば衣笠彌右衛門諸門人に抽でて着座せり。やがて衣笠を近づけ足下は吉岡氏の高弟。これは師匠の具足なるや否哉。よく見識給ふべし。某愚按を以推察するに。曲者夜分に忍びいり。武藝一國の上に關たる吉岡をうちとらんとするに。何條差添の類ひ短寸の兵器を振うて。相あたるべき謂れなし。凡小柄小刀は近世便利よる敷ものとして短刀の側に差加ゆる人多し。敵差添を拔ざらんには小柄の拔ちるべき所以もなし。是は必定一味齋の物とこそ覺ゆれ。足下は師弟の間なればよく見覺えあらん。得と見給へと衣笠に句して申ければ。衣笠小柄を取てよく見るに全く吉岡が所持のものにあらず。其上師の死骸に添たる差添の鞋にも分明に小柄あるをば。詳に詮鑿をもとげず。却てわれに向ひこの一言を出すのみか。渠が旬して其情を識しむるには。ふかき仔細あらんと思ひしかば。衣笠その意を悟り態と答へて申けるは。御推察のごとく。師常に愛して手を放さず。閑暇なる時は折々取出し珠玉を摩するが如く重寶致せし具足にて候。定めて其夜も取出し手馴翫びてなに心なく居たりらんを。如斯ねらひより不慮の外に横死つかまつるか存ずれば在すが如くに存心膽やぶるゝが如くなげかはしく社候へと。涙を袴におとしける。源右衛門再び頭を傾け。これ決して何人の所爲といふ事分明に識がたしといへども。察するに鎧を落し置からは必然鎧術者に疑がひなし。然れども相心得ものを切折れたる程なれば吉岡氏の活動も究めて勵しく有しと覺えたり。惜かな近國無双の英勇を失ひ給ひけることよ。扱死骸は諸門人の旁よる敷はかりて持還り葬禮懇になし給へと。其座を立て方丈に入しばらく休息をぞ成

にける。此とき源右衛門密に衣笠を招きよせ聲を微めて申けるは。足下さきに僕が愚意を察し答話せられしこと。時に取ての即智なり。吉岡氏を討たるもの餘人にあらず京極内匠が有爲に相違なし。人數の多少はかり難き上は其餘の人は未誰とも知べからず。但し京極が所爲と云所以は。昔年雲州富田の城外夜討のとき渠折ふし寺中に寄宿して居たりしが。御館の御前に顯れ出すさまじき血戦をなし。始めて當家へ召抱らるゝとき。我君當座の褒賞として差添の刀を下されかの小柄はそのとき賜りたる御腰の物に差加へ。これをも一緒に下されたる御具足それがしよく見覺あり又ころごろの風説に京極こそ吉岡が長女に戀慕し。春木藤藏を以て縁談の事を取もたせしか共。吉岡承引せざるのみならず。春木藤藏がみだりなる振舞を憤り。破門せられしなど。巷々の評判あり。其上京極が好言令色なるを嫌ひたまひ。御館にも渠を遠られたり。彼といひ是といひ京極おのれが非を顧ず。只管吉岡氏を鬱憤に思ひ。奸惡の者を語らひ此禍ひを引出しつと覺えたり。先刻諸人の並居る所にて此事をかたりなば京極が方へ漏ん事をおそれ態と餘所げに申出せり足下急に某が本城へ歸らざる以前に諸門人にもふかく忍び。密に立歸りて此旨を言上し。まづ京極を擲にして實否を糺明し給へ。衣笠大きに感心し。足下の眞計今に始めことながら驚入に堪たり。然らば諸門人にも口外仕らず今晚夜をこめて立歸るべしと。日の暮るを待て興國寺をうつ立ちける。もとより衣笠は武術のみか旅行の速なる事人に超たりき。

衣笠彌右衛門春木藤藏を擲にする事

諺に馬は馬づれ牛は牛づれと云ことあり。宜なるかな京極春木兩人のもの共は錦見浦の民家に隠れ。竊に家主を談ひいかにもして寺中の風説または死骸見聞の人の評定にいたるまで探り聞べしと頼みしかば。金銀をみては蠅の臭氣につくが如く。欲心熾盛の家主。すでに京極が興し。幣のかねに眼くらみ。寺中人夫の中に徘徊し。三浦源右衛門

が諸人の中に語りし事共。立歸りて京極に告げれば内匠は眉に皺をよせ春木に向ひ申けるは。某吉岡を殺し鎧をその場に棄置たるは全く思慮したる計略にて。鎧衛鍛錬の者の爲方と疑はせ。實は後難を避ん爲なり。今家主がかたるを聞ば。佩刀の小柄の落てありしを三浦が如々云しなど。我何となく心にかゝれり。御邊何によらず落したる品はなきやげにもと心づき差添を取り出し見るに小柄なし。藤藏大きに周章して申けるは。某前夜足を傷りし故これに貪着して唯今迄所持の物をあらため見ざりしが果して小柄なし。堅くさし置たる上に太刀緊の下緒を以て差添の小わなの中へ引通し。きびしく腰に縛りて佩たるもの、拔出べき様なし。いかゞして落したるや。恐らくは吉岡が死骸に蹶き倒れたるとききの事と覺えたり。此は先日足下の惠れたる御差添の小柄なり。内匠股をうつて歡息つき命なる哉。事露顯すべき時運なる哉。然らば須臾も遲疑すべき所でなし。某は是より直に蹤跡をくらし遁るべし。足下また一剋も疾く此地より廣島に歸り去げなき體にもてなし難を免れ給へ。擲日申ごとくかの腰の物は館より拜領の品。小柄も即ちさし加へて賜りぬ。三浦源右衛門は數年君の側に扈從して争乎君の御道具を見覺えずといふ事有んや渠原來伶俐のうまれつきなるが故に。はや某が所爲なる事を察し。還て這箇の偽言を用ひて世上を穩にをさめ某に油斷させ欺いて捕んと結構なり。然ども某が脚元に窟居を推察せざるはまだしも我運の強さよ。事露顯に及びなば當所を出避する事兼て期したる所なり。我だに出奔いたしなば分明に某が所行に落着し。夜討の多寡相しれざる上からは。外に詮議も候まじ。殊に足下は破門せられたりといへ共吉岡とは師弟の間から。京極に合體して渠を殺害せし杯と。人の疑ひ惟ふ事も有まじ。さすれば某が門人の中合體の者もあるべしと批判まぢくならん。足下一刻もはやく廣島に歸り人の疑を避て身の無事をはかり給へ。寔に今般はからず事の不和により。我ためにちからを加へ給ふ段譬へ生を隔とも其恩は忘るまじと頭を叩て謝しければ。春木も同じく頭をさげ。某兼ては何方までも同道仕らんと存せしかども。如斯少し計りの疵を受。行歩こゝろに任せざれば。却て足下の妨と成んと思惟し一まづ本國にとゞまり猶風聞よろしから

ずば我も國を去て禍ひを免れ申べし。扱足下此地を去給はゞ何れの地に身を倚たまふや。内匠がいはいく江州は生國の地といひ。舊知の友など多ければ。是より近江國鯉江に通れ。鯉江權之助といふ者の方にいたるべしと互に將來を約し。日のくるゝを待斯て内匠は嚴に旅行の装を整へ少しの包袱を負。つとゞ家内に暇乞しふたゞび春木に對し。足下危き事あらば早速某が示し置たる所迄來り給へと。懇に別離をなし。民家を出て走りける。春木も痛疼をしのびながら身整し。馬駕などに乗るときは人目に立て宜しからずと。無利に杖に助られ旅宿の家主を雇ひあらかじめ。行李を拾收め。其夜いまだ初更にも至らざるに渠を引連蜷々旅宿を出。星夜を犯して急ぎける却説那衣笠彌右衛門は先刻三浦と閑談し。黄昏を待て興國寺を出んとしたりしが。熟々考るにもし同門弟の輩に此よしを告ずして去んには。明日我を尋搜んこと必定なり。其時は却て便りよからずと。諸高弟のうち五六人ばかりを喚て。竊に三浦が遠計を語りきかせ。必口外に漏す事なかれと堅く示し合せ時刻稍々移りてのちすてに初更の終りに興國寺を發足ぬ。もとより密事を漏さじと家僕をだに召れす。唯一人笠ふかゞと引覆り普通の旅人のごとく出立東にむかひ急ぎ行く。ころは神無月廿日ばかりの事なりしかば。月虚空にあがるといへども。其夜は少しく天霞りて月も朧に山海をてらし。行さき聞き向ふにあたりて其間一町ばかり隔り旅人の足音響きければ。彌右衛門忽然こゝろづき此の輩もしくは不良ぬ厮等なるも計りがたし。我まづ忍やかに蹠蹠を伺ふべしと。頓て行歩を寛め徐かに後より近づき。月かげに透して見れば兩人の旅客なり。一人は主人と覺しくて足をいたむ體に見え。また一人は家僕とみえて少しの行李を春中に縛りつけ。甚だ道をいそぐ氣色なり。渠等も後に人の足音するに心を付所々に立とゞまり。やゝもすれば顧るその有狀いとゞ怪しく思れける。彌右衛門いよゞ不審を發し。なほも徐に歩みつゝ。跡目に從ひ談話をきかんと耳を傾れば。須臾ありて先に立たる男の申けるは。最早時刻は何時なるぞ。僕が日さきほど鳴し鐘が四つのかねにて候といふ彌右衛門この聲が響音を聞くに。即春木藤藏なり不審の上にもまた一ツの聲を生じ。怪いかな此地は防州の地方なり。武士たる者

君命にあらずして本城を放れみだりに他國へ出る事なりがたし假令は餘儀なき事につき他國に赴くとも。君の免しを蒙らずして參るといふ謂れなし夜分の旅行殊に忍びたる様體こそ心得ね。渠もと京極に交り厚し。さきには渠が事に就て師の不興を受たり。恐らくは此たびの無道に與したるも知べからず先遣斯を據にして糺明せば仔細明白に解るべしと。既に手を下さんとせしが。再び思ひ返して謂道凡君の祿を食ものは渠も我も一面高下なき傍輩なり。今君命を待つずして。若罪なき人を捕へなば兪忽の致し方なりと人の謗を受るのみか。後難を蒙らんは必定なりいかゞはせんと千思萬惟してひとり心を苦しめ。いやゞ假令後日に申わけなく。腹撞傷るとも自然この場を見遁し。渠若京極に與したる惡黨ならんに。今晚の内にも風を食うて他國へ逃去なば。後悔するとも何の益かあらん。手を下して縛捕には如じと。得と一心に決定し徐かに身を堅めて後より追かけ大音聲をあげて呼はりけるはそれへ遁るものは春木藤藏ならずや。去る十六日の夜興國寺に忍び入り。京極内匠と同意し。吉岡一味齋を闇殺したる段惡事明白に顯れ衣笠彌右衛門追うち命をうけて向ふたり。覺悟せよとよばはるにぞ春木藤藏のがるゝに道なしとや思ひけん。取てかへし追手はもとより待設て候なりと。衣笠を望んで切てかゝるを。衣笠身を蹴し太刀の鑢をもつて架とゞめ。直に手もとへ入來り。白刃をもつたる拳を柄とともに緊と執。忽地上に投着そのまゝ繩をぞ懸てけり。この有狀をみて供の男は大きに驚き。惣身痠麻れ綺を解たる繩のごとく身を動揺ことあたはず唯いのちを助たまへとたかばいして逃んとするを。彌右衛門譯をかけ汝にのみなれば一命を助け別に尋ね問べき仔細ありと。春木を引起し並木にくゝり付。次に繩をもつてかの従者をも縛り上。氷のごとくなる太刀をぬき。春木藤藏に向ひ汝京極と共に奸計を廻らし。吉岡を殺害せし旨ことごとく白狀せよ。もし少しにてもいつはるときは汝が股の下に二三百の穴を穿べし。春木が曰われ嘗て吉岡を討し覺えなし衣笠が曰覺なき者が是非の問答にも及ず某にきり付たるは何ゆゑぞ汝またいかなる用事ありて。此邊に徘徊するぞ。假令口を閉て一言を云す共。後日に本城に於て糺明のとき悉く云しやふありと。又従者に向ひ。刀を

取て冷々と胸の下にさし付。己も速に白状せよ。もし云ずば云しやう有り。雷の如く罵りければ。彼者はあわて、涙を流し。命だに助給は存じたるかぎり悉申べし。我はもと錦見浦の土民京極内匠とそれなる春木どの兩人數日我家に旅宿し。毎夜深更に及ぶまで興國寺を伺ひ。曉に至りて立歸り。數日かくの如くして吉岡殿を付ねらひ。去る十六日の曉兩人立かへりて我に多くの金銀を與へ。今晚吉岡を討とりぬ。是につき猶數日汝が家に逗留し。此度の落着を聞かして後本國に歸るべし。汝は寺中に入れてよく、蹠蹠を聞出ししらせよとありし間。よからぬ人をとどめ累纏の難をうけんかとあやぶみながら。我家貧苦につまり。金銀を給はるに眼くらみ。今日迄とどめ置し處に今晚京極は宵の程に逃さり。生國近江國の人なるにより。此度も同國鯉江といふ所へ立こえ鯉江權之助と云者を頼み身をよせ申よし兩人密談仕るを物かげより立聞いたし候其外のこととはかつて存せずと震ひ、申ければ。衣笠聞てかつ悦び。從者が縛索をゆるし。此うへは汝に罪なし廣島に来るべしと頓て春木を引立させ本國さして歸りける。

吉岡が兩女春木藤藏を斬る事

天地に不時の風雲あり。人に且夕の禍福あり。さだめがたきぞ實人の世の有形なる。吉岡一味齋不側の變に罹り興國寺にうたれし由。最前に城中に告來りしかば。吉岡が妻子はこの告を聞よりも。こはそも何なる前の世の果報ぞや物の部のならひ戰場に出陣して能敵にくみ討死をなしてさへ。其妻や子の身にとりては何ほどか苦しかるべきに。まして何者とも知らぬ悪黨の劍戈にかゝり。其身ばかりか從者まで。悉くうたれ妻子すら猶口をしきものを。益て武藝も人にすぐれ一國の上に擢られ師範とも稱るゝ身の。無殘くと最期をとげ給ふ御身の憤り。さぞな冥途の道にても怨みおぼすべしなど。播口説うちかぞへ聲を忍びて歎けるは理も過てあはれなる。一族近隣の人々交るゝ來り。さぞまじりにいたはり悲傷はさる御事なりしかれども空の世の有形なきはたし給へる人の再が歸らざるは。高きも卑も

南陽部州の傲ひに侍る。又その敵のことは御館の威勢と諸門弟の憤りによつて明白に相しれ申べし。其ときは敵を萬端に斬てうらみを暗し給へと力をつけ。日々來りて慰ける。然るに早走の者と覺えてあわたた敷吉岡が家にかける來り。すでに衣笠彌右衛門殿岩國より歸りたまふ路次にて興國寺を騒せたる曲者に出合。生捕にして歸城せられ候。此事御城中に註進し。ならびに當家へもしらせ奉れと路次より遣されたる驛使にて候。御よろこびあれと申すて、歸りける吉岡が妻ならびに兩人の女歎きの中の悦び今はなかゝ人目をも恥ぢず。徒に家内に在て便りをまたんよりは路次に出て待べしと。兩人の女は甲斐くしく一刀を脇ばさみ何れも劍術には覺えを取たる者なれば。母を助て巷の邊に駈いだす。折ふし來り合たる一族近隣のともがら。我おとらじと還道に出て待とところに。此事城中に隠れなく吉岡が門人は云も更なり。若士ども衢上に充滿て只顧頭を旋し衣笠が歸るをぞ待にける。衣笠彌右衛門は春木藤藏を擲とり路上の驛に於て人夫を騙たて、一挺の駕に春木をとつて高手小手に縛りつけ。同く春木にしたがひたる旅宿の家主をも驛夫共に衛らせ。其身は後に引さがりて。はや藩鎮に入れれば。往來の諸人何れも衣笠を稱美する聲喧く。城中の壯士門人追々に迎ひに出來り。吉岡が妻子は見物の中よりわれを忘れてまろび出。衣笠が袖にすがりつき。能こそ敵を生捕て歸り給ふものかな。その相手は何者なるぞ。早く我々に本意をとげさせ給はれと。聲を放つて歎ける。衣笠密につけて曰。其本人と申は京極内匠疾出避して手に合ず。今一人の擔荷人は春木藤藏なり。唯今から捕て駕の中にあり。囚獄奉行の手に引わたし落着の上にあらずんば本意を遂がたしと。略じめ事の所由をものがりければ。三人の女房大きに春木が不義を憤り。衣笠は直に囚獄奉行に春木をわたし。粟谷掃部介。益谷備中守兩人の家にいたり。興國寺の始末三浦が遠計ならびに春木を擲とりし次第逐一に語ければ。兩老大きに感心し。やがて照基朝臣の御前に出て如々の趣言上するに。館も御感斜ならず。早速衣笠を召れ賞詞せられける。却説吉岡が死骸に諸門人衣笠と共に懇に葬禮をいとなみ。又新に興國寺へは普請奉行を命ぜられ造工を司どらしめ。その後囚獄において春木を

拷木にかけて責問れけるに。奸計の始終ごとく白状におよびければ。先京極を生捕べしと忍んで江州へ人數をさし向らるゝ處に。みなく立還りて某共江州鯉江に赴き彼處の者に鯉江權之助といふものを尋ぬ候に。權之助と申は佐々木祥貞入道の旗下の國人にて。むかし小田家の爲めに亡ぼされ今は家名さへ斷絶仕りて其跡だにも侍すと申候。粟谷掃部助大きに憤り。これ京極がとき者は奸曲の中の奸曲といふものなり。己に同意したる者にすら猶眞實を吐出さず。偽言を以て友を誑く大悪人。然らば始より江州へは參る心底にあらず。容易には行衛しれがたかるべしと。先錦見浦の民は罪科輕しとて本國に歸され。春木藤藏は國の大用を妨るのみか。奸人に與し吉岡を殺害せし始末師弟の間を顧みざる國賊の振舞。屹と嚴重の罪科に處せらるべしと評議一決し罪名をさだめらるゝ由聞えしかば。吉岡が妻子は衣笠彌右衛門を以て願書を捧げ奉り。夫の讐父の敵にて候へば。春木藤藏を賜りて恨を晴したき訴なり。此事左右評定遂られ。願ひに任せ春木を吉岡が妻子に下さるゝに究まり即ち霜月廿五日その刑に當りしかば。城下の外廣野に於て竹圍を構へ。檢使として兒玉十郎左衛門。山縣助十郎警固の組下嚴重に引連圍の中に入り來る。此事藩鎮に沙汰有しかば。見物の老若星の如く野にみち山にはびこり。早朝より群り來り推合ける。既に巳の刻に至り吉岡が兩人の女各々白無垢の小袖を襲ね鉢巻引しめ。手綱を以て手次につかへ。母もろとも入りきたる。須臾もあらざるに、春木藤藏を縛め士卒ども四方を取巻圍の裡に引きいれ檢使の前に引居れば。檢使すなはち科條の書付を出してよみ聞せ。其後中央の大地に二本の杭を深く打込やがて藤藏を其眞中に居らせ左右の手を引張て兩方の杭にきびしく縛りつけ。檢使姉妹の一人を床凡の邊によび。去年兩人の息女いづれも太刀どりせられよ。但し兩人互に聲をかけ一度に兩肘を切おとし。其後首を刎られよ。兩女は母と共にたがひに顔を見合唯々として一同に頭を下げ。御慈悲をもつて春木を下し置るゝ事。冥加にかなひ世に難有覺候。しかれども父の敵夫の讐にて候へば。申さば敵討なり。尋常のごとく勝負仕らんと唯今申さば敵討なり。申さば死人をうつに等しく候。何とぞ藤藏を解れ。明らか

勝負仕たく存奉ると思ひいりて願ひける。その聲絶々にして細流の石をへだてたるがごとくなり。兩士詞ぞろへて答けるは神妙の申條には候へ共其願かなふまじ。このたび春木藤藏が罪科と申は。師匠を殺害する惡黨にくみし白刀を振て寺門を騒せ。次に吉岡が家僕を殺し君の大用を妨げたる大罪人なり。刑法をさだめらるゝ時は、磔に行るゝが當然の罪名。しかれども兩女の孝心妻の節義を御感の上據なく下し給はるといへ共。實は太刀どり仰付らるゝ也。只今三人の願の通りにては敵討にのみして罪科の義は外になり。刑法行れざるに似たり。殊に京極こそ一味齋を殺害したる本人渠は若黨を討たる枝葉のものなり。敵討とはとなへがたしと。理非明白にことわりければ。三女はいまだ言を出さざるに。衣笠彌右衛門三女にかはつて側より進み出。仰至極に的當仕り候。しからば兩息女ともに高指にしたがひ太刀どりあれと申にぞ。三人等しく檢使に向ひ。今は違背いたすべき謂れなし此上は御前よろしく仰上られ給はれと並居る人にも夫々に禮をなし。姉妹左右に立わかれ。藤藏が後の方に立廻り。曳といふかけ聲のした電光のひらめく如く抜うち。兩の肩骨の上より諸肘一度に切落せば。藤藏一聲呼と叫びて立上るところを。姉の蘭ふたゝび振あげたる劔のかけに首は小跳して地に落たり。これを見たる數萬の見物おもはず知らず嘆る聲しばしは鳴もしづまらず。そのうち三女は慙に兩使を謝し。圍を出て乗物にうちのり。直ちに家にぞ歸りける。

吉岡が妻子發足の事

斯て吉岡が家には藤藏を斬て後諸門弟をあつめ。母は兩女を引連座につれ。門弟の人々に向ひ。既に近々亡夫の喪も終るべし。もとより家を繼ぐ男子有連も人の爲に横死せられたる者は家系斷絶に及ぶ事當家のみならず。天下一統の格式なり。殊にわが家には嫡子病死の後家名相續の男子なければ。斷絶のこと明白なり。然らばいまだ夫の喪の晴ざる以前に。敵討の願ひをさし出し。母子もろ共五十日の喪のあき次第。當所を發足いたす覺悟なり。各々何とぞ我

等三人にかはり願書をしたゝめ。衣笠氏より栗谷益谷の人々へ此旨申立て給はれと。さも潔よく申ければ。一座互ひに感心するといへども皆々心底に念ひけるは。かよわき女の力を以て京極を討んこと覺束なしと。何れも口を鑷んで敢て答話もなかりしに。衣笠彌右衛門取敢ず。御申然る事には候へども。相手は一流の師範者といひ。殊に戰場を経たる古兵なり。先生御存生のうち息女方に武藝の奥義はつたへ置くゝと申ながら。京極が相手には些か覺束なき心地仕る。然らばとて其儘打すて置くべきにあらず。先生それがしに飽まで玄妙をつたへられ今にては教場をも預り八重垣の流名斷絶仕らざる程に取立置れたる洪恩あれば。是を謝し奉る爲且はわれゝが爲にも師父の讎に候へば。諸門人の惣名代として助太刀の願ひを出し人々と共に發足いたすべし。吉岡が妻なみだを浮め御芳志よろこば敷は侍れども。武士たる者の武術修行いたす事はひとへに君の御馬先の一大事に逢ふ爲なり。君もまた諸士に武術を修行させん爲にとて。教場を構へ。その上師範人に高祿を興へて居置る。しからば吉岡が諸門弟がたを教授する事も。又おのこの吉岡を師として學び給ふ事も。國家の大用と申ものなり。師弟とは申ながら君の祿を食人は浪人の武藝修行仕るとは同じからず。今師弟の義を以て君を辭し。敵うち助太刀し給ふとも。黄泉の下にて吉岡が能し給ひつと稱美は致すまじ。又復讐の事は武術の熟不熟にかゝはらず。唯天運に任す所あり。兩人の女ども稚ときより只願武藝をこのみ手弱けれども。父が慈妙を續たる上からは。むざゝと討るゝ程の義も候まじ。よし假令還り討にうたるゝとも。子たるの道すら立たば冥途の父に申わけもありぬべし口無善惡世の中。いまだ壯年の其向様兩人の女に心有ての助太刀など。醜きとりさたを受給はゞ。御身は勿論われら三人が恥辱のみか黄泉の夫が面をもけがす道理なり。よろこばしうは候へども。助太刀の義は心底にかなはずと言語明白に申ければ。衣笠をはじめとして一座に在會諸門人。實吉岡の後室なり感せぬ者はなかりけり。孟母王陵が母は申も更なり。むかし齊の晏子が御の妻は夫を諫て大夫たらしむ。婦人といへどもその志に於るや。男子に勝れたる胸襟ある者あり。吉岡が妻のごときは又有がたき人物なり是より諸

門人三人の人々に代りて願書を寫し。衣笠諸高弟と同往して益谷備中守の家に至り。願書を出し。次に衣笠が助太刀せんといひしを。吉岡が妻の辭退せし事ども。悉く演舌しければ。益谷も稍感心し婦人には又有べしとも存せず然らば速にこの旨申達すべしと願書をぞ收ける。かくて極月六日吉岡が喪のこと終りてのち。同七日に益谷備中守衣笠が方へ。復讐の願ひ相かなひ人々等が孝貞を御感のあまり。御館直々三人の婦人に御値なされんとの義なり。急ぎ召連登城あるべしと申遣しければ。衣笠は吉岡が家にいたり。如是と聞えしかば母も女も歡喜かぎりなく。やがて衣笠に従ひ本城へぞ上りける。須臾あつて吉岡三女を召し出され。御館は女なれ共淵底はづかしき者なればとて。狩衣に烏帽子揃い給ひ。左右には栗谷益谷を始として古老の忠臣巍然として烈居し。三女隊行して出來り。古實作法をりめ高にして。更におめたる氣色もなく。母は少し座を進み兩女は少し退きて居並びたり。容義端正にして百人に超れ。また凜として猥ならず。げに師範者の妻子なり。照基朝臣はるかに觀し給ひ。栗谷掃部介御意を蒙りて三女にうち向ひ。吉岡一味齋かねて誠忠を抽てたる老人不幸にして奸惡の毒手にかゝり命を陷すこと君にも歎きおぼしめす處なり。既に婦人の身として父夫が讎を報んと大義を存じたち。他國へ發足の願ひを差出す條。御感なゝめならざる處なり。所詮復讐のことは人力の及ぶ所にあらず。天運に任とはいひながら。孝子節婦がこゝろざしを神祇の照覽にも預り本望を達すべき事。君にも祈り思召ところなり。但し本懷をも遂なばふたゝび歸國いたすべし。其ときは家系を立られ給はるべし約束のため御盃を賜るところなりと申ければ。三人疊にひれふし有がた涙身にあまり。袖につゝみ兼てはいらへさへなかりける。頼て近臣土器御引出ものを携へ獻酌とゞこほりなく終り。御太刀一腰づつ三女に賜りければ。栗谷益谷の兩人をもつて厚く君恩を謝し。三女御前を下りける。是より吉岡の後室は兩人の女を連て立歸り首尾よく御暇を賜る上は時日移さず。今日直に旅行に赴くべしとせき立ければ。門弟いづれも今は早暮にせまり候明日早天に發足あれと轡むるといへども終にとゞまらず。諸門弟と共に盃を酌かはし。互ひに別れを惜み旅行の調

度整ひしかば。三女はおの／＼包袱を負。目だちては猶人のあやしみなんことを厭ひ。わざと刀を腰す。握りもふと
き杖の中に眞劔を仕込。餘所目には嬋娟なる容姿と云ども。底意は深き勇魚どり。鯨魚よる浦虎臥のべ。あめつちの
共命の限り。千重の波路も押わたり。敵の有家をさがさんと心はたたく梓弓はるげき道の首途なれば。構へて送りな
し給ひそと門弟子の人々へつと／＼に暇をつけ。袖ひぢ笠に舊郷の軒を其方に顧みてそこともわかず出て行く。

繪本彦山權現靈驗記 卷之七 終

繪本彦山權現靈驗記 卷之八

毛谷村六助孝行の事并彦山靈驗の事

周の諡法に曰慈惠愛親曰孝といへりされば百行の中孝より大なるはなく。親しみ親を愛するより親しきは
なし。佛教にいはいく諸佛念衆生。衆生不念佛。父母常念子。子父念父母と説かれて。親は子を念ふこと切なりとい
へ共。子は親を念はざること世の常なり。億兆萬人の中に和漢孝をもつて鳴者は希なり。震旦の大國と雖竹帛に其
名を録するもの僅に二十四人。嗚呼つとめて爲べき道ならずや。爰に其ころ九州豊前國小倉にちかく毛谷村といふ地
に孝行六助といふ農民あり。稚とき其父に後れ成長の後母につかへ孝を盡すことは嚴寒に雙鯉を求めし。玉祥が行
ひにおとらず。生れつき正直にして少も人の言を疑はず。元來家貧ければ人の田畠を借て作り。または山中に入り薪
を樵。小倉の城下あるひは筑前黒崎などへ持出し是を賣。少しの錢を設。つねに其身は麈食を吃ひ。老母には滋味を
あたへ。譬ばいかほど宜しき賃錢をもつて雇ふと雖一夜をも放れたる遠路に赴かず。寒天の寒き夜は母をひやゝか
なる夜衾に寝することを厭ひ。黄香が温席の孝に效ひ其身をもつて衾をあたゝめ。晝夜心を孝道にゆだねける。斯る
暇隙なき身にもいかなる宿所の因縁にやありけん。平生武術をこのみ。もし武藝を能する人とだに聞ときは。農事の透
を考へこれを訪ひ。且相撲は極めて手取にて。近邊近郷の若もの一人として六助が片腕に足者もなく。身材六尺一二
寸力量も普通の人二三人前はありけるとなり。渠常に思ひけるは。今天下の内大きに亂れ。士民と雖其器量により
ては。一國一郡の主と成人まゝ多し。天晴われも能主人を得て家をも身をも引起したき物かな。しかれ共我家いかな
る人の系統にや詳成すと。一時母にむかひ懇に尋わけれども其母慥に知らずとなん答へける。これより心中に大

願を發し同國田川郡彦山は靈驗あらたなる神跡なれば。かの神廟に參詣して。一つには先祖の家系を知り。二つには我農業にいとまなき民なるが故に。四方を駈廻り名譽の劍術者を訪ひ。武術を修行する事能はず。願はくは指南者の手を借す。自己の矇昧なるをひらき。自然に武術を感得する程の神智を授賜らんことを。神明の加護に憑れて祈るに如じと。ある時彦山に上り。かの玉谷の靈泉をもつて身を清め。心の垢を深き。直ちに三岳の廣前に額き。現在の人に訟るが如く。志願の趣を神明に告奉り。嘗て大願成就のその間は姪欲の道を斷んと誓ひをなして下山せり。其後は毎日水をあび彦山のかたを遙拜し。一ヶ月二月の中には。三度五度暇隙を考へ登山し。勤行日々怠ることなかりしとなり。往昔平相國清盛公いまだ中御門家成卿の許に仕へ給ひし時。其家はなほだ貧しかりしかば。或時志心に大願を發し。大威徳明王の法を。道徳堅固なる眞言の阿闍黎に授かり姪欲を斷こと六箇年なり。其法まさしく成就すべき奇瑞まのあたり出顯し。終に身身をとげ給ひ。其の身は申に及ばず。子息昆弟ことく九天の階に昇り。天子の御外戚とまで仰がれ奉り給ひぬ。凡そ何事によらず。修行の怠りとなるべき根元は酒色の二つにぞ有ける。就中色欲は斷がたき者なり。蚊蟻の微細なる屬ひにすら。天然として交合の道は具りぬ。惣て乾坤の間に孕まれ。一物として此道無きはなし。然れども迷ひ易く怠慢爲やすきは凡情なり。天地鬼神を感ぜしむること。是を斷程に無くていかでか成就する事あらんや。扱六助は猶農業に油斷なく孝心少しも怠りなかりしに。天正十一年秋の初めに。老母何となく風のこゝちと病の床に臥ければ。嘗て須臾の間も。側を放れず。晝夜薬餌を進めさまぐいたはりしか共。終に世のなかり頼みすくなく。七月下旬に墓なく成にけり。六助が歎き大かたならず。され共世の定りなりしかば。頓てあだしの草の原に葬りて後。毎日食事をと。のへ母の靈を祭り。夜に入てのち。世間ものしづかに成ぬれば。定めて母の寂寞くこそ有べけれど。母が墓所に至り香をたき。生たる人に仕ふるが如く。露にぬれ雨を犯して四十九日が其の間一夜も怠りなく。墓のかたはらに臥て。曉に至り家に歸りければ。後には近隣の者ども是を知りみな申けるは。

悲みはさることなれ共。斯くては終に病をも引出すこと有べしと。様々に慰さとしける程に。其のち墓所に至りて。通夜なげく事は輟にける。然るに同十二年の春のころ六助が家の屋根いたく敗れければ。一日やねの葺替せんと近邊の農民ども寄聚り。手ごとに古茅をまくりけるに棟の上に一つの箱をくゝり付たり。六助あやしみ其縛りたる繩を解て能く見るに。箱の長さ僅かに一尺計り。何とやら中に物ありげに見え箱の上は紙にて能く封じ。その上を細き繩をもつて巻きたり。先繩をきり篋をひらき見れば二巻の軸巻物ならびに長さ八寸計りの無銘の短刀一柄あり。こは不思議なるもの哉。われ兼て彦山權現に大願を發し。日夜に先祖の家系を知らせ給へと祈り奉りしに。其奇特顯れ。是なん正しく系圖といふものにて社有べけれど。そのまゝ巻物を解き見れ共。中々讀ことあたはず。直に近邊の寺に走り僧を頼み。讀しむるに。則紀氏の系圖なり紀氏は原神武天皇より八代孝元天皇の皇子彦太。忍。信命の孫。武内宿禰の後胤なり。その系統武内宿禰より次第に相續して。六助が曾父に至る迄。代々筑後國御井郡。高良明神の神職にてありしが。應仁大亂の後。四海ともにみだれ。亂に逢て難をさけ。かの曾祖父がとき此處にうつりたる由緒に至る迄一々明白に記したりければ六助天地を拜し雀躍し歎喜かぎりなく。其後一兩日を経て彦山に上り。先南岳中岳を拜し。次に北岳天。忍。骨尊の神殿に參籠し。神恩を謝し奉らんがため。終夜經などよみ。少しも睡らずして居たりしに。忽曉におよんで頬に睡眠をささしければ。自ら心を以て身を誡め。睡まじとはすれ共。終に覺る事能はず。恍惚ずして神階により係り。眠るとなくまどろみしは。全く神慮のなす所とおぼえて明着し。然るに神殿の扉おのづから開。衣冠正しき神人御手に弓箭を携へ。腰に神劍を佩。忽然として出給へば御後の方に御供の神達。あるひは束帯にて弓箭を帯したるも有。又は甲冑に神鉢神楯を持たるもあり。更に幾許とも其數を知らず。此とき眞先にまします神人階上に立て屹と見たまへば。神光輝き六助が身を照すが如く覺えければこは勿體なやと。忽級階の上より大地へ轉び下り。地上に平伏して居たりける。時に側なる老翁かの神人の仰を蒙り。徐に階を下りて六助が前に來り宣ひけ

るは。汝實に孝心至誠の君子なり。是によつて其志を感じさせ給ひ。既に先日家系の巻軸を顯し授け給ひぬ。汝が曾祖父に至るまでは。代々筑後の國高良の神職なりしか共。天下の亂によつて神領を奪れ。零落して當國に移住し。汝が祖父を生り。其後いよゝ家貧しく汝が父の世に至り。かの系圖短刀など先祖の舊物を人に奪れんことを恐れ。屋の上に隠しをさめ置り。次に汝武術の玄機を發明せんことを幾度か丹誠しきりなるに酬い給ひ。汝がために武術の妙をさづけ給ひ。また力量をも與へ給はるべし。先汝が兩肘を出すべしと。肩を袒しめ兩肘の上を幾度も撫給ふに。掌の内いとあたゝかにして且こゝろよし。筋骨身に勢力おのづから生じ。換骨脱體するが如く覺えければ。老翁微妙の聲をもつて。扱しも力量はさづけ畢ぬ。みよゝ此後兩ひちに水牛のごとく威力具り。百千鈞の物といへども重しとせず。惣身金鐵の如くなるべし。次に汝がために唯今より十年の間武術を修行せしむべしと。老翁神階の下なる堅庭を撰びて立たまひ。手に金色の神鞭を掲げ。六助にも一條の銅の鞭をとらしめ。頓て兵法を演武せられける。老翁も手を盡し。六助に進退曲節をしへて更に倦たる氣色なく。六助も又老翁のをしへにしたがひ。縦横座作身をひるがへして。少しも勞れ苦しまず。修行神妙に入て心中かへつて歡喜を生じ。春立山の霞ざり。垣の卯のはな雪にまがひ。花橘雪妙しく。夜がれて來鳴ほとゝぎす。聲遠そけば萩の葉に契りあつてや秋風の。音づれそむる露霜に。櫃の葉よりぞ紅葉せる。いつしか山路に降雪は鹿子まだらに消えかへり。岩間に迷ふ水の沫の。しばし宿れる薄氷。はるてふ日にぞ解そめて。また來し春に近江のや。鏡に影の移るが如く。春去り秋來りて。裘褐十たびかへ。終に十ヶ年の修行をば。一睡の夢の中にぞ爲しにける。むかし王質といへるものは。仙人の圍碁を打をみて斧の柄を欄し。水の江の浦島が子は海神の宮に三年が間の契りに三百餘歳を経たりと云へり。夫は現在にして七世の子孫に逢てかなしみは一夢に十年の修行成就して。悦びを睡中に生じ。雞林支那に英雄の譽れを施す。不思議といふも不思議なり。神授口傳をはりて後に老翁また宣ひけるは。汝仕官の道をこのむと。職若かるん。職するときは却て後職の

ことあらん。但し天下を偏歴して身を暇ることなけれ。自然と發るべき時をまつて發れ。今又神力を賜はる上は汝を組留る程の者世にあるべしとも覺えず。しかれ共後に汝が力量に勝りて組とめる程の人出來るべし。必々其人に従ひ身を立よ。され共其身の終を能くすることあたはじ。是天數なり。功名は未代に残すべし。努々不忠の志を起す事勿れ。我は則汝が氏津神高良明神の神使なり。彦山權現の神勅によつて。武藝の玄機を叩て傳へたるぞと耳の底に徹し。忽ちに夢は覺てけり。眼をひらき邊を見れば。其身は神廟の前なる大地のうへに座し乍寢て足には赤土多くつきたり。六助大きに歡び。これ全く正夢也われ始めは神階の上なる欄檻によりて休み居たりしに。今庭上に座するのみか。惣身に汗ながれ。身上倦つかれ。足には赤土のつきたること偏に神力の奇瑞疑なしと。再び合掌し夜もしらゝくと明けしかば。其邊の大地のうへを見るに。夥しき足形あり。六助感涙肝に銘じ。三岳の寶前を再拜し下山をぞなしにける。是れより力量自ら嚮に百倍し。大石大木。十人廿人にても動かしがたきを安々と引かづき。若し力を用ゆること有時は。肘のうへに力肉數塊累々として連り顯。形蝸牛の竹を上るが如く。腕のかたより肘の上に集りのぼり。其外惣身には鵝の卵の如くなる力肉起り。其さま宛正身の門神に異なることなし。諸人之れをみて扱々稀有の豪傑かなと舌を卷かぬはなかりけり。然れども六助は少しも人を侮らず其うへ力量に懦らず。閑暇なる時は山に入り薪を樵。小倉の城下。または黒崎の邊へ持出て賣けるが。自己の力にまかせ。人の五度十度にするを己は一度に擔いて走りける程に。柴などの如き重高なるものを荷ひ行くときは。さ乍ら山の動くがごとくなり。天正十三年三月中旬のことなりしが。一日例のごとく柴を荷ひ。黒崎の町へ行かんと。出きたる六助を知らぬ旅人などは是れを見て。こは怪しからぬ大力哉と稱美し。また渠が來歴を知りたる者は。孝行六助なりと道を退て通しける其ころ豊前國小倉の城主立原三河守増長の居城にて。武を講じ兵を操事を好みあへり上を學ぶ下なれば家士もまた。恒に演武の道に怠らず。向馬鎗刀を第一と翫ひけり。此日立原家の壯士。青木武助。井村六左衛門。小野源八といふ者あり。馬を遠乗せんと

黒崎中濱の邊に出て歸りがけ。其日天色快く晴わたり。眺望目を悦ばず浦風に。馬蹄の塵を蹴させ。三士等しく馬の鼻を乗りならべて馳かへるに六助端なく出來りけるが。渠が荷ひたる樵柴あだかも鼈山の動き出たるがごとくなるに。三士が乗馬一驚きを吃ひ。忽ち高嘶して跳り上り。狂象の梟るが如く。足をあげて飛歸れば。眞先に達たる青木武助。身を翻して馬より下へ眞倒に落てけり。井村六左衛門。小野源八も左右して馬を乗りしづめ。ひらりと鞍上を跳て下。側なる並松に漸く馬を縛つけ。其間に青木武助は手綱をとり放。俯臥になつて眞砂に頭を突きいれ。鬢髮砂まぶれになり。握板を細菽の中に取落したるごとく這々に起上る。青木が馬は後のかたに向ひ駈出したるを。三士が中間ども後れ馳にかけ來り。先馬を取とめ。主従六人夫其下郎を取逃すなど。一同に六助引とらへ大きに置りけるは。這斯何ものなれば。分に過ぎたる高荷を擔ぎ。往來を妨るのみか馬を驚し人を落馬さすぞ。六助畏いり地に躊躇申けるは私は至て貧乏なる農民。身一つを養ひかね人に雇れ農業を任り。閑なる時は薪を樵。毎日町をいづる事叶ひがたく。三度五度にはこび行を一度に仕るゆゑ荷重高く貴人を驚かし奉る。何とぞ宥免をたれ給はゞ廣大の御慈悲と。手を摺腰を屈むれば。三人は六助が恐るゝ形を見ていよく怒り。汝が狼藉を此まゝに通しなば。人の誹謗を蒙り武士道たゞず。今手討にして捨べし。六助猶も砂上に頭を下。全く求めて仕りし事にあらず。若し此度の罪を御免下されなば。向後高荷を持運び往來の人を驚し申まじ武助目の中に入たる細砂を摺出し乍ら。惡聲を出し置り。畜生め此以後高荷をもたず共。我落馬して今此腰骨の痛み治すべきか。所詮斯る匹夫に論は無用なりと。跳り上り六助が眞額を抜打に切付る。六助膝にてすりより。立も上らず武助が腕口柄とともに引摺み。われは賤しき田夫野人。各は仕官の人。心あらんと思ひ詫言すれば。法に過たる無頼者。元來道は天下の人の還道にして。高荷をもつも身の生活なり。馬は汝等が職分。乘が稽古か落が修行か。驚くとも罵る共。落さる様には乗らざるぞ。貴きも賤しきも。人の命の重きことは皆同様。汝ごとき無法者の馳走には。潮水を吃すが相應ぞと。左の手にて帶を引提。

あだかも狗兒を投るが如く。波激の潮に打込たり。夫狼藉もの脱すなど。兩士が下知に三人の家僕共。一同に立かゝるを。引摺んで海中に投入れば。堪かねて小野井村雀躍して切て掛る。六助一跳到り高荷の柴の上を跳こえ拐を抜とり惠釋んと思ひしかども。抜取際なかりしかば。一荷の柴荷を其儘に。兩士が身を照して横さまに投つけたり。兩士遮止るといへども。止る事能はず。高荷を腰骨に打つけられ。大地にどうと。倒れたり六助其ひまに荷拐をぬきとり小腋にさしはさみ。青木武助が濡鼠のごとく成て眞砂の上に這上るを。頸壑摺んで兩士と一處に躊躇せ。拐を兩手に指かざし。汝等只今が今生の限りなり。若し半言にても無禮を吐出さば。此拐をもつて頭腦微塵に打くだき泥と爲すべし。向後志を改め農民を惱さず。往來の妨をなさずは。佛眼を以て汝等を助くべしと眼をいからし立ちしかば。三士は大地にひれ伏。願くは豪傑今日の命を助け給へ。自今以後きつと農民に對し無禮を致まじ。一向御了簡に預りたし。唯今の早業力量なか／＼凡夫の類にあらず。猶住所を承。後日に參りて幾重にも我々が罪を謝し申べし。又た今日の事は。幸海邊に往來の人もなく。曾て見たる者もなければ。なにとぞ此爲體他言は御無用。願はくは其名と承るべし。六助答へて我は毛谷村の土民。六助と云ふ者なり。人には定りたる身の分限ある物にて。農民は賤しき者諸士は尊きものといふ事愚痴の田夫なれ共其差別はよく辨へたり。唯今の無禮過言は止事を得ざる故なり。何しに口外に出し申べし。人の來らざるに先に早々此處去給へと。落散たる物を拾ひ集め。三人に與ふれば。三人面目なさに馬にもならず。そこ／＼に暇乞し。家僕に馬をひかせ。小倉をさして立歸りぬ。

微塵彈正鎮西に渡る事

隠たるより顯たるはなしと。世の醫のごとく小倉の三士。六助が爲に半死の危殆を脱れ歸りて後。打傷れたる腰膝の痛みを治め。しらず顔に日を送る所に。何某にそ斯々の事の争ひにより。六助が爲にいたく打れたるなどと取沙

汰ありしかば。此事程なく三河守増長の耳に入りはなはだ憤り。武士たる者が農民の爲に恥辱を興へられ。恥を忍ぶ條他家の見聞に預るときは。當家の弓箭を笑るゝに似り。急ぎ追放すべしと忽ち三士が祿を收め小倉を追拂ひ給ひける。是に付けても渠が勇力の有さま四方へ流れ小倉の家士も忍々に音信を通じ交りを爲者も有よし聞えしかば三河守増長。或時六助を城中に召れ。武藝に達したる若士を出して技量せしめらるると雖も一人として勝をとる者なし。後には諸流の師範人を出して。入替立かはりて手段をつくして比試すれども。一人として六助に打勝つものはなかりけり。増長稱歡なゝめならず速に秩祿を定め召抱らるべきに決し。此由斯々と傳へければ。渠堅く辭して申けるは。某先祖は紀氏にして由緒ありと申乍ら。曾祖父が代より零落仕り當所に来り住居仕處に。不思議に彦山權現のあらたなる靈驗ありて。己が武術力量に勝たる人あらば身をよせ奉公せよ。假令何ほど高祿を以て招るゝ共參りて仕ることなかれと。神勅を蒙りて候へば。若し御當家の諸士の内に武藝は申に及ばず。相撲の類ひにても某に勝程の人候はゞ。神勅にまかせ祿の多少にかゝはらず御奉公仕るべしと申にぞ。増長いよゝ渠が直實なるをしたひ歎息して仰せけるは。今戰國の最中。國々の諸侯みな一能ある士をまねき募る折から。若し我に渠が武藝の右に出る者なく。他國へ是を用ひられなば。我國に人無事を笑るべし。然ればとて唯今諸士の中にかれに打勝者なければ。此上は武技または力わざにもあれ。一流に名譽ある者を招くべしと。手寄ゝに六助に打勝程の豪傑の士を募驟め。必然手段を交へ打勝ときは。即刻五百石の秩祿をたまはるべしと聞えしかば。其頃は武術天下に英たる者。船に積升にはかる計り多かりし程に。此募を聞傳へ月々に小倉の城中に。名札を捧來るもの多かりき。其來る度毎には毛谷村に人を走らせ。六助を召寄目通において比試するといへ共けがにも打勝ものなく。其ことゝなく比試の度毎には六助が武名次第々々に芳しくぞ成にける。是によつて遠境の諸士。または近邊に隱栖諸浪人。追々に聞傳へ日々に門弟となる者夥しかりしかば。諸門人等身の分限にしたがひ。金銀あるひは米穀を送り。いまは農事山耕をやめ。其日の炊煙を上ることは

豊にぞ具りける。俗説に藝は身を助くるとは是等のことをや申べし。されば光陰校のごとくにして。天正十四年の冬にぞ成にける。爰に京極内匠は。岩國興國寺において吉岡一味齋を討とり。春木藤藏にわかれてのち山陰道に走り。微塵彈正と名を改め。出雲。石見の間に身を竄して居たりしが。此國々は元來百瓜家の領地なるが故に。天に偃る意地して。一先西國に赴。彼地の諸侯につかへ後榮をはからんと。石見より長門に出其のち豊前國小倉にぞ渡りける。小倉の城下に一兩日逗留して人のかたるを聞に。六助といふ者神明の加護によつて力量を授り。靈夢の中に武術の竊妙を發明し。夫につき渠に勝たる者には。秩祿五百石を賜るべきよし聞と等く。すはや時節到來せり。然らば名札を捧て城中に入り萬一の僥倖を得て六助に打勝ときは。身を起す基。ござんなれと思ひしが。又思ひかへし見るに當家の諸士。武技に名高き者あまたあり。一人として六助に打勝もの無に。さして仕出したる事もなく比試を望み。何の手もなく打負なば。當座の恥辱のみか仕官の道も塞る道理なり。必定勝をとる手段もかなと思惟しけるに。つら／＼六助が行ひを聞所。正直を守り孝心萬人に勝れたる者とあれば。何とぞ夫につけてよろしき計略をもなすべしと。例の奸計を廻らし。ひそかに小倉城下をぞ出にける。

彈正六助をはかる事

京極内匠はいかにしても。六助を欺き渠と比試して打勝。立原家につかへ後榮をなさん物をと。腹に暴患のはかりことを工夫し。かの計略の種を求ん手掛りに。所定めず行路を進め。筑前國博多の津に至り。思はず海邊の風景を眺望し。程なく夕日西に沈み。旅宿を求めて一夜を明さんと。浦さびたる濱傳ひ。彼方此方と見廻せば。白水郎の藻鹽火うちしめりたる敗廬あり。密に内をさし闖ば。年齡七十計りの老女爐を燒てゐたり。獨心に打うなづき咳して内に入。行暮したる旅人願くは一夜の宿を借給はゞ廣大の情なりと。いと叮嚀に申ける。老女火を燒乍我家は旅人を留

る家にあらず。若し宿をとり給はゞ。博多の町に至りて泊り給へ。驛舎は幾らも有り。内匠申けるは原來其事は知りつれども。獨旅の事なるが故。快よく宿をかさず。それ人を雨つゆにうたさず艱苦を助くる事は。廣大の功德なりと佛も説置給へり。老女も最はや老の晩此世はわづかに假の宿。ながき未來に善果を蒔給はゞ。當生極樂とて。結構なる淨土に生れ。百味の飲食に向ひ。また人を憐まざる者は。地獄道のくるしみを受けるとかや。心ばかりの慈悲をもなし給へと愚人を威す地ごく極樂の沙汰に。老女も百味の飲食をや芳しく思ひけん。頓て愚蒙を導く舊套にかゝりて。歎息して南無阿彌陀佛。まことに仰せの通りなり。我七十に近く。若きときは數多の子供有りしが。皆先だて頼むかたなき獨住。今は養ふ人さへなければ。浦人の網を引地に行ては。腰をかゞめて僅かの魚を乞ひ。または磯菜を摘て世をわたるも。みな是前世の業と社存じ候へ。食物はなけれ共錢をさへ出し給はゞ米をも買來り飯をたいて參らすべしと云ふに。内匠はしましたりと悦び。そのまゝ。少しの銀を出して老女にあたへ。夜の食は重ねずとも苦しからず。是にて米を價へきたり。一夜をだに明させ給はゞ。我爲には喜見城の樂なりと。草鞋を脱て爐の邊に寄ば。老女は内匠が辯舌にあざむかれ。米を買て參るべしと出行。須臾して立かへり。飯など懷懇に饗應ける。はや此比は天正十四年といふ歳暮て。同十五年正月の事なりしかば。餘寒膚を犯し。軒端まばらの草の庵。朔風すき間より入りて。いとど睡りを催すこと能ざるにかの六助に勝べき偽計を思ひめぐらし。天晴此老婆こそ屈竟のものなれ。是を以て一欺あざむいて吳んずと一計を決し。懷中を探り路費の盤纏を取り出し多く老女にあたへ。汝老て子供に死おくれ憑しげなき身の上といへり。今此金を汝に恵むべし。若し我頼を聞入なば。猶多くの金銀を興へ。汝が晩年を心よく養ふべし。其頼みと云ふは別の事にあらず。今日より汝。わが母となるべし。其様子はかやうくと。計略の次第密に耳もとにより辯に任せて説ければ。老女は元より其日の煙さへ立かねたるに。内匠が多くの金子をあたへ。其上味いこと盡しに心や迷ひけん。打點て申けるは。我老て物の用に立ざるに。金子を給はるのみか行末のことまで頼母

數の給ふ上は。兎も角も宜しく計ひ給へ。何事も仰には背まじと。快よくうけがいきけるにぞ。内匠は歡喜なうめならず。夜の明るを待兼て博多の津に至り。少しの衣服を調へ立かへり。其日は終日家にあつて。老婆に言さま立振舞など一々に教へ。頓て調へ來りし衣服を着せ。翌朝いまだ夜ふかきに老婆を誘ひ立出て。再び豊前へ歸りける。却説六助は武藝日々に琢磨し。門人かはるゝ來りて朝暮鍛錬にいとまなかりしかども。究めて質料にして口に美食を甘なはず身に美服をまとはず。奢侈の心芥子程もなく。夫故門弟子。貪ることなく。篤實無欲にして天然の時運を俟て居たりしが。一日門人も來らず獨爐にむかひ。先達たる老母が事など思ひ廻らし寂寞として居る處へ。一人の大漢子銅造りの腰刀を帶し。七十計に向たる老女を負。行路にゆき艱みたる模様にて六助が門口を伺ひ。某は諸國徧歴の浪人もの。六助殿の宅は是なるかと音信ば。六助答へて申けるは。某。則六助なり。何の用事有て六助を尋ね給ふぞ。此とき浪人忙しく老婆を脊より下し。手を携さへて内にいり。寒暖の挨拶終りて後申けるは。某は微塵彈正と云ふ者なり。はからずこの仔細ありて。若年の時より浮浪の身となり。普通の武術を修行いたし國々を経歴仕り。此間鎮西にわたり足下の高名殊には孝心第一の人と承り。少しく頼り度旨ありて參り候と。いと慇懃に述べれば。六助同じく禮をかへし。我はもと田夫野人。いかなる御頼かは存ぜずといへども。腰を折てたのみたまふことを空しく聞流しに致すべき謂なし。先づ其仔細をかたり給へ。身に應じたる事に候はゞ仰せに隨ひ申べし。彈正大きによるこび。唯今足下に申入る一件は密談なり。願はくは人無所にて詳に申べし。六助が曰我家には一人の奴僕だに是なし。此座はづかに三人何事か外に漏るべき様なし。然れ共わが家門人の出入あれば。先此方へ來り給へと。側なる一間に誘ひ互に膝を摺よせければ。彈正疊に頭をつけ。再び禮をなして申けるは御頼申事餘の義にあらず。某いまだ十一二歳の時。愚父某甲なる者病に依て身罷り。僅かに老母が養育に因つて。長り。其後主人家に奉公仕りし處はからず事由あつて浪人と相なり。已に母を同道いたし本國を出て。零落に年月を送り今日に至りぬ。誠に千辛萬苦をなめて

一向武術を修行いたし未熟には候へ共。今は一流を極め。即藝道申立にして仕官をとげ一日にても老母に安堵せんと存ずれ共不幸にして未だ仕官の手掛りを得ず。如是漂泊の内愚母が老命且夕の間も計りがたく。若し明日にても落命仕りなば何國の土に母を葬るべき片時も心を安ぜずして死なしめんこと。不孝是より大成はなし。され共心に任せざるは天數なり。母も平日某に向ひ。汝が仕官したる有状を見るときは即日死する共恨なしと。掻口説を承り。いよいよ仕官に心逼りし處。ほのかに承れば小倉の城中に。若し六助と比試し渠に打勝者に於ては即刻五百石の秩祿給はるべきよし。是幸ひの事とは存ずれども天性武術の道を得られたる足下。殊に神力の應護を蒙り給ふ御身なれば。某ごとき凡夫の生兵法をもつて眞實の比試に勝べきこと所詮百念さへ果たり。御頼申とは近ごろ心底慚愧しき義に候へども。自然此後立原家の城中にて某と比試し給ふことあらば。一個の破綻を施し。某に勝をとらせて給はりなげ。忽ち仕官の端となり身を収め申すべし。其時は明日をも知ざる老母が安心の笑ひ顔をも見。一日快よく養て晩年を送らせなば本懐これに過たる事候まじ。其故足下の思召を忘却致し。面皮を厚うして参りたり。何とぞ寛廣の慈念を垂給はゞ生々世々の大恩なりと。落涙疊を潤しける。是六助が孝心正直なるを幸として謀計の陥穴に墜入んとの手段なり。六助思ひがけなき彈正が頼みに當惑し。茫然として居たりしが。飽まで孝心老實の豪傑なる上。自分の母が存生の内。思ひの儘に孝をつくさず。今にも生て有なばと日々夜々に思ひ出し。己が身に引くらべ彈正が言語人を動かすに轉母のこと迄思ひ出られ。慈念おのづから起りければ彈正に向ひこたへけるは。然ば足下の頼みと有は小倉の城内へ至り。六助と比試仕るべしと願ひ出給はゞ必定比試と成る事疑ひ無し。ときに足下と某木刀を携へて立向はんに。たとへ。某が足下に勝べき透間有とも。曲て負よとのこと歟。彈正がいはい然り。六助又申けるは。足下先刻の言に我一流を極たり。是を申立にして仕官を遂んとしたまふからは一派の劍術を得られたること顯然たり。しからば假令六助が身は神力加護の純磨を得たる者にもせよ。明白に討かたんといふ存念なく。いまだ某が手段の甲乙をもは

からず。始めより膝を屈して頼み給ふこと有べき義とも存せず。若し足下一向の未熟にして還て高祿を望み。尊母への孝心のみに溺れて某にのみ勝を求め給ふとも。小倉の城中にも武藝諸人に超れたる者甚だ多し。自然後日に餘人と比試を遂、かつて其人の爲に見苦しき敗をとられなげ。はじめ城中衆人の眼目を欺き給ひしこと顯れ。秩祿を收拾らるゝのみか。再び浮浪となり給はゞ。其ときの恥辱は一端の勝にまさりて羞多かるべし。また某も人を欺くに似たり。能々これを察し給へ。彈正莞爾として笑ひ。足下の一言實に痒を抓といふ確論なり。某未熟の劍術と雖も三十年に近き修行なれば。普通の劍術者に於ては何程の怖畏かあらん。足下のごときは天地自然その道の聖と申者なり。殊には神明の應護ある人に逆ひ。邪智慢心の志をもつて自己の藝術を頼みとし。容易の手段を交へて何ぞ助を取ること叶ふべきや。未闘ざる先に其人の位を見るを以て我流の極意と致ところなり。是を兆前に機を鑑とは申なり。凡夫の庸人と足下を一ツ眼に見るべきや。某が武術萬一不思議の僥倖にて。實に足下にうち勝こと有共。何ぞ決定の勝と申べきや。みな怪我の高名と申者なりと。一つには六助を尊敬し。二つには威風をみせて堂々と吐ちらしければ。六助は正直の君子渠が辯口理非分明に似たるに欺かれ。大きに感慨し。足下の一言武藝の極意とする處なり。さばかりの修行鍛鍊の身として尊母の心をやすめんが爲。我蘆屋に來りて。賤しき村夫に手を下げらるゝ孝心のこゝろざし。誰か感ぜざる者あるべき。後日城中にて比試仕ること有ば。某足下に勝べき鹽合あり共。勝を譲り申べしと。堅く約をなしければ。彈正心地快然として開。早速の御許容雀躍に堪たり。流石に這樣のみぐるしき密談。母に聞せ候も面ぶせに候へば。母には唯ひと通り足下と知音を結びに参りたりと申べしと。猶多く禮を厚し。一間なる所を出にける。是より彈正母に向ひ申けるは。是なる御方は當時鎮西一人の英勇。某すでに交りをつ結ばん爰に参り。義を結んで兄弟の約をなし候。母にも宜敷禮義を謝し給へと申ければ。賈の母彈正がをしへたる如く少し會釋し。我老て我子に引れ。諸國漂泊の身となり。且夕の程も計り難し。願はくは我少子と共に交りをつなし給はゞ行末見捨給ふことなかれと。言少く

申ければ。六助も殷懃に返答し茶をすゝめて饗應に彈正は贖母が過ていかなる訛言をも云はんかと脊中に汗を流し。六助にいとま乞して早々毛谷村を出にける。是より路上を急ぎ兎ある山林の人跡絶たる處に連至り。老婆を脊より下し。扱々汝よく教をつとめたり。此世に在ていつまで苦しみを重長いませんよりは。早く極樂へ参り百味の飲食を吃ふべしといふに老婆大に泣出しかけ出んにも足立ず。聲を上てさけぶ所を咽喉一しめと絞りて摘みころし。死骸を谷間の石の間に隠し小倉の城下へいそぎける。

繪本彦山權現靈驗記 卷之八終

繪本彦山權現靈驗記 卷之九

微塵彈正六助と比試の事并彈正六助を誹謗する事

天地をも計つべし人心は計るべからずと云り。されども人奸計を以て正實の君子を計る事間また是あり。微塵彈正は熟く六助をたばかり其後老婆を殺害し。直に小倉の城下に至り便宜をもとめ名札を奉り。某は諸國修行の浪人仕官の望有て鎮西に罷下り竊に承る。農民六助と言者あり是と武術を試み給ひ。渠に打勝ものには祿を下さるべき旨承り。比試の願ひとして名札を奉ると訟へける。謁者此よし増長に達せしかば頓て彈正を目通りに徴るゝに。年齡四十有餘と見え大庭に一ツの小痕あり。何さま尋常の人物とは見えざりき。諸人渠が容の伉健を見て目を驚し。増長謁者を以て仰けるは。天下經歷の人とあるからは世に抽出たる英勇ならめ。まづ我家の武藝者どもと一手試みて後六助と比量べし。彈正頭を叩て仰の趣き違背仕るに似たりといへども原來餘人との勝負を幾度六助と手を交る者あらば召抱られんと有をもつて賤名を捧て罷出候。もし餘人と比試の上非れば六助と立値ことかなはざることならば速に御暇を賜り他國へまかり去べしと。更に埴なく申にぞ。増長も申條傍若無人とは思れけれ共。元來寛弘にして憤を發されず。しからば六助を召出し比試すべしと翌日毛谷村へ召使ひを立らるれば。六助使と共に城中に來り。正月十三日廣間に於て彈正と武藝の手段を試みらる。此事世に隠れなく。諸士ことごとく拜見を願ひ。巍々堂々として早天より詰懸たり。既に巳の刻に雙方城頭に上りければ。勝負を批判する證見の人々席を進んで着座し。上壇の間には三河守増長左右は古老の勇士威儀嚴重に着座せり。六助は藍の小紋革の袴を裾短に着し。縁通りに出て平伏し。微塵彈正は萌黄緞子の裾絞りたる袴に手馴たる木刀。長さ三尺ばかりなるを携へ廣敷の口に着座せり。證見諫早隼人六助に向ひ。度々

比試仰付らるゝといへども。いまだ汝に勝べき程の者なし。今般微塵彈正汝と勝負を願ひ出るにより。又々比試御所望あるぞと申わたし。又彈正に願ひの通り比試仰付らるゝと申わたしければ。彈正唯々として承伏し。徐々と廣間の中央に動き出。先日すてにあざむき置しにより我に勝を譲らんと精心空虛にしてその油斷あるべし。何氣なき虚に乗て髮際より天庭の邊を打碎き過たる體にて闇殺せば。わが頼みたる事ども漏ざる道理なりと。例の惡念淵底に芽しかつけども。六助更にその心を悟らず態と餘所しく禮をなし。我嘗て足下の手段を存せず元來真劍にあらざといへども劍術は無情の器互ひに傷損こともあらん。是を厭ひて少しも遠慮いたすときは。神妙の手を盡す事能はじ。某決して遠慮仕らず。誤て無禮をいたす共高免に預るべし。彈正が曰御申にや及ぶべき打殺さるゝも自己の覺悟某とてもさらに慮外を顧みずと言語少くいひはなし。毒々と近づきよる。一座に居ならびたる諸士の面々片津を呑息をも出さず。六助は彈正が頭の上より打込なば撃べき際幾許もありしかど。すてに約束せし處あれば態と勝を譲らんと思ひ。却て撃べき透間を避し。唯勢ひを見せて切入たり。彈正身を翻して跳り上り。六助が眞額を腦骨も碎よと礮と打。其大刀の嚴しきこと恰も霹靂地に墜るに異ならず。六助大に驚き心中はなはだ不審り。求めて譲りし勝なれば打べき油斷はありつべし。され共斯はあるまじきはすなり彈正が今の一刀正しく變心と惟しかば。後るとびに一間ばかり飛退り刀を取直す。すかさず彈正飛かゝりて打殺さんとする所を諫早隼人勝負明白と聲かけたり。彈正は證見の言を懸ずば。虚に乗じて二三連をつゞけ撃にして。後の患ひを絶んと思へども隼人がかけ聲嚴しきに木刀を提ながら本の座に平伏せり。増長を始として一座の諸士誠に希有の達人かなと。みな感心をなしにけり。此とき六助もし尋常の者なりせば。忽ち悶絶をなすべきに力量惣身にみち。幸ひにして暴惡の毒事を免れたり。されども大庭うち傷られ。腦骨のいたみ忍びがたく扱は此者の振舞心得がたし。われ勝を譲らんと約せし上は如此うたすともよかるべきに木刀を下す事靈石をも敗るべき勢ひあり。然らば渠が心を散きその不意を打て殺害せんと工みたるか。若やはらかに

打と證見の見る所をはかり。態と手あらく打たるもはかり難し。自然この義ならば明日わが方にきたりて罪を謝すべしと。半信半疑の内に有て決する事能はず。元來正直雙びなき篤實者なれば。敢て色にもあらはさず縦さもあらばあれ一たび人と約して勝を譲しものが一端の不平に堪かねて憤りを發するは大丈夫の所爲にあらずと心をしづめて座を立。其日は毛谷村へ歸りける。却説微塵彈正は六助に勝て後旅宿に下りければ。増長稱美限りなく。既に秩祿を定めて召抱らるゝことに究りけり。諫早隼人その夜彈正が旅宿に訪ひ座定りて後申けるは。六助が力量早業神明加護の妙技にして凡夫の及ぶべき所にあらず。足下何の手段もなく打倒さるゝ事一個兩得と申ものにて。足下の如き英勇を得給ふのみならず六助も今仕負たるのうへは違背なく當家に奉公いたすべし。是に依て明日評定をとげられ。彌五百石を賜るべしとの内意なり。彈正あたりの人を遠ざけ小聲に成り。某足下に密談ありと席をちかづけ。斯申さば人を讒するに近しとはいへどもこの後拙者に恩祿を賜りなば。各々と一列の御家人心底に存る旨を申ざらんは還て不忠なり。夫故肺肝を吐て申べし。竊に言上し給へわれ熟々六助が所爲を按ずるに。神明の冥見に預り力量武術を夢中に授りしなど申は。世を欺く奸計なり。凡和漢ともに上古正直なる世には神祇の惠ある事明著く末世暴惡さかなる世となりて後は。鬼神も跡を隠して更に奇特を顯さず。六助母に孝あるを以て神明の加護に預りしなどみな虚説ならん末世といへ共六助が上に出る忠臣孝子升に計るほど候。或は貧苦に究し又は無實の讒言を蒙り。其身を亡す輩少からず。されども神明出現して忠臣孝子の危厄を救ひし事嘗て承らず。察する處。かれ竊に外國傳來の邪法敷。または幻術の類ひを傳へしものと覺えたり。抑々幻術は漢の世黃巾赤眉が屬ひ國家を傾んとする幻賊の翫ぶ法。近來阿波國の住人里見勘四郎外國より傳へ來り人の眼目をくらませり。邪法は南蠻國の法人の心を驚すほどの不思議あり。今の世かたく天下の制禁なり。また我國は神國にして人氣正直なる風俗諸人神明の道とさへいへば尊敬する者多し。こゝを以て偽て神明應護といひ觸し。人の眼目をくらまして打勝に相違なし。人心は迷ひ易く神傳鬼術とさへいへば。闘

る前に恐怖をなし。名譽の豪傑等もおのづからあやぶむ心を生じ。自然と這斯が幻術に眼目をくらまざる。某愚なりといへども。かの幻術を看破り。はじめより一心寂然として。彼もし幻術を用ゆるぞならば。破魔治兵の護身劍をもつて一打にして吳んずと正念すこしもみだれざるが故に立合時太刀筋明白に見え何の手段を用ゆる事なく一撃に打居たり。又渠が劍術をみるに修行未練にして熟せざるところあり。唯當家の人々これに敗をとり給へる者は。かの幻術の眼をくらす事察し給はざるがゆゑなり。武術に於ては御稱美あるべき程の者にあらず。若誤て天下の禁法を修するものを召抱へられ。後難を引出さんもはかりがたし。能々御賢慮を廻らされ宜しかるべう存ずるとおのれが曲れる所をかくし。人の直なる所を説曲ければ諫早も理に伏し此事内々申上べしと座を立て歸りける。

六助門人に對して彈正が不義を憤る事

却説六助は微塵彈正がために小倉城中の試合不慮に頭面を傷られ一端憤りを押へしかども。歸路に於て熟々彈正が無禮を思ひ廻らせば結恨胸に滿。怒の色を含みて毛谷村に立歸る。兼て六助が家に聚る所の門人近郷の郷士八九人ばかり。顔色にがり切て歸るを見るより一同に申けるは。先生の顔色平日にかはり。額の上に木刀の痕あるは心ならず。勝負の如何なし給ひしぞ六助稍々しばらくして。今日城中の比試につき快よからざる事あり。凡大丈夫たるものと約をなしかるべく敷口外すべき謂れなしといへども。人の實情に背きたる憤りに依てわれ各々に物語をいたすなり。先日微塵彈正といふもの七十有餘の老婆を伴ひきたり。如々の事につき立原殿の前にて比試を致しなば勝を譲り吳よと涙を流して頼みし故。渠が老婆に孝あるを感じ。今日城中に於て態と勝を譲らんと約せし所其虚に乗じて我頭上をしたゝかに打たり。今一しは油斷あらば我を打殺さん計りがたし。われ再び飛かゝりて打居んと思ひしかども。もしくは渠が心底に相對の比試といふ事を證見の人数に識られまじきため。また時の勢ひにはすみ思はずも過

て打たるか。この二ツの間に出まじと胸をさすり立歸るといへども。路次すがら能々思ひ廻らせば。這斯が爲の法外なる事よと。積怒胸にみち如是は言外に顯せりと。大息ついてかたりける。諸門弟六助が老實寛廣なるを感じ。また微塵彈正が失禮を憤り。互ひに顔を見合してしばし答話もなかりしが。等しく言をそろへ我ともが愚意を以て考ふるに恨らくは先生その浪人がために欺れ給へり。渠先生に及ばざる事を識り。最初に來りて利害を説その心を怠らせ勝をとり。また後日に先生の口より漏されん事をはゞかり。不意の油斷を見濟して打殺さんと計りしものなり。這樣的賊には恥辱を與へ面の皮を削ぐに如はなし。然らば能々實否を探りき。彼者實情先生を欺きしぞならば。速に願ひを上再度の比試を成給へ。六助門弟の憤るをき。兩手を組閉目して居たりしが諸門人に向ひ。足下等疾く井村治郎助上原郷右衛門を喚て給はれ。此輩に密事あり。おの／＼今晚は御歸りあれ。明日事を決談せんといふに門人等その言に隨ひ。一兩人は井村上原が方へ走り。その他ことごとく家々に歸りけり。この井村上原の兩士もとは小倉の家士いさゝか事のあやまりに依て浪人し。此邊に隱栖し六助が高弟なり。程なく上原井村の兩士出きたりければ。六助兩人に申けるは。われ兩個の豪傑に頼み入べき事あり。這樣々々の事につき今日微塵彈正といふものと比試し。不慮の辱を受たり。各元來城中の人なれば親族も多し。唯今より小倉にいたり。かの彈正に老母ありや否やを疾き來りて給はり候へ。兩人の曰必定先生の仰の如くならば。此者不良の徒と覺えたり。然れども今日はや黄昏に及び候へば明日詳に實否をさぐりき。若先生をたばかりしぞならば再び比試を願ひ渠が姓氏のごとく微塵になして結恨を晴し給へと奮然として歸りける。斯て翌日に成しかば六助は唯兩士の便りを待て居たりしに。春の日といへどもいまだ長からず。夕陽西山に没して世上寂寞とものしづかに成しかば。表を肩んとするところに爰に吉岡一味齋が妻ならびに兩人の女去年の冬本國を出てより何國をさすとは無れども。若や敵の西國に竄居ることも有らんかと。周防長門を経て豊前國に渡り。往來の人の噂に毛谷村の農民六助といふ者あり。老母に仕へ孝心を盡し彦山權現の奇瑞により力量並び

に武術を授かりしとかたるをきく。母は兩人の女にむかひ彦山権現は兼て靈驗あらたなりと聞けばかゝる奇特ある神にも詣て何とぞ敵に廻り逢ひ。本意をとぐる様祈願をもなし。また六助と云人にも對面すべしこの人武藝の達人と聞上は國々武者修行の人も。折々は訪ひ。比試をもなし交を成も多くその手すぢより敵の在家知れまじきものにもあらず。京極も無道にこそあれ一流の師範者。殊に自分の武藝に高ぶる生得。六助と甲乙を様さんと出て來りしもはかり難し。假へさばなくとも浦々郷々たづねさがし。靈驗あらたなる社々には立願をもこめ行末の事をも祈り。また神慮にかなひし人の奇特にもあやかると。これより毛谷村へところざしたどる。急ぎけり。すてにその日の晩かた六助が栖ちかく來り三人籬の邊に立やすらひ。姉の蘭母が袂をひかへ里人のをしへにあれなる敗家が彼六助のすみかと承れば。まづ何となく押つけに一夜の宿をかりんと申もいかゞなり。母の病氣といつはり暫しがほど休息し。密に其人柄をもうかゞひ。便よくは敵うちの由を明したまへといへば。母も妹もうちうなづき。夫こそよきはからひなれと。三人互ひに私語あひ。頓て兄弟左右より母の手をひき。庵のうちをさし闖けば折ふし戸をさゝんと六助は何心なく門口をみるに一人は母と見え年の程四十有餘。また兩人は其人の女と覺しく何れも旅行に行艱みたりとは見ゆれども風俗世に比ひなく。もとより立振廻甲斐々々しく六助を見て惠釋するに木で造りたる六助も思はず笑を啣みけり。母は兩女にひかれたる手をはなし六助殿と申御方は這向にてわたり候敷。六助聞て即拙者なり。見馴ざる三人の女姓某を尋たまふは如何なる用事そ。その時母は嬉しげに兩女を引つれ内に入。われは親子三人の旅人本國は山陽道邊の者いさゝか宿願の旨ありて筑紫太宰府の天満宮へ參詣仕らんため。このほど小倉にわたり往還の人の噂に六助とこそ天下に又なき孝行人にて彦山権現の奇瑞を蒙り神明より力量を授かり世に有がたき人とときく。是なる兩人の女ども。是も比ひなくわれに孝を盡し朝暮心を用ひいたはり吳候へば。人の子の孝心を聞につけても何となく慕しく。殊に神祇の助を受給ひ奇特ある御方に對面仕らざる事本意にあらずと。態々此郷に參りしところ。此程の餘意又は略

の程の勞れにや。最前より持病の纏緊に惱まされ。漸く兩人が介抱により是までたどり着候。近ごろ骨なき申事に候へども。側なる牛部屋馬廄になり共一夜を明させ給はゞ快よく病を息ひ猶ゆるくと御物がたり致すべしと徐やかに申ける。容儀挨拶たゞ人とも見えざりしかば。六助心中大きに不審りこはけしからぬ孝行ものゝ寄合かな。先日は母をつれたる孝男今日は孝子を連たる母おや。かれといひ是といひ旁々あやしく思へども此輩に於ては偽り者とも見えす。されども今西國の地は合戦の巷なるに従者をも具せず往來するは。何れも心覺えある者にこそあるべけれとくそのよしを探らんとは思へども。第一には彈正がために憤りを發したる折節第二には一夜にもあれ婦人を轆めんこところよからずと思ひしかば禮を返して申けるは我家農業のいとなみを仕らねば牛馬を入る部屋はなし。また家内に返め參せたく存れども獨身の寡夫の裏に女姓をとゞめしなど近邊の思はくも宜しからず。御いたはりには存ずれども今宵は他所へ赴き泊り給へしかしながら人里とはいへども路次のほど宜しからず追つけ門人ども來るを待て旅人をとゞむる家まで送らせ進すべし。暫くのほどは見ぐるしくは候へども一間なる所へ入て藥にても用ひ給へ如是申せばとて更に情なきに非ず。且は御身のためなりと叮嚀に申ければ母も女も頭を下げ。仰の趣一々ことわりにこそ候へ暫時の間息ひなば程なく快よく侍りなん馴々しくは候へども一間の御借給はれと側なる間に入にける于時門人晩るを待て追々木刀面籠手の類ひ稽古の器を携へ出て來りみなく一面に座し禮をなし。其後門人等申けるは先生昨日微塵彈正といふ者のために計られ給ひしと承り我々の輩誰か齒を切ざる者あらんや。井村上原兩人を小倉へ遣されしと承る。いまだ靜動を伺ひ歸らざるや。もし今にも歸らずば某とも小倉に駈付兩人を尋ね實否を聞來るべし。六助が曰否々それには及ぶまじ。兩士も性急の人物争か心を繼せにすべき。追付便有べしと。言もいまだ終らざるに井村治郎助上原郷右衛門兩人盛に盛て立歸り。扱て言語同斷悪き廁かな。かの微塵めが事よく探り承るに老母といふものは嘗てこれなく其上比試に勝て後先生の劍術を誹謗いたし彦山権現の加護などと云るは詐り。其實は幻術邪法の類ひ

人の眼目を蠱惑し勝を得る者なりゆめ、信じ給ふ事なかれと。和漢の例などを引て利害を説しまゝに。渠が佞辯にあざむかれ小倉城内の壯士ふかく這副を信じ五百石の秩祿をもつて召抱られ。今日改めて目見え相すみよし慥なるかたより聞出して候。察する所この者先生の孝心なる事を聞知り。調略を構へ置の老婆を拵へ欺きたるに相違なし。此上は明日小倉の城中に出て再び諫早隼人を以て再度の比試を願ひ給へと血眼に成て薦めける。一座の門人悉く憤り。何れも腕を摩りて曰この微塵彈正といふ者奸曲邪智のはなはだしき。已に先生に勝。高祿を得たるは大恩にあらずや。これを忘却して誹謗する上は母といふもこしらへ者に決したり。今は一刻も早く小倉へ訴出給へといふに。六助も鬱憤胸にみちて實に然り。渠先日比試に自然過ての無禮ぞならば早速我家に來り。其罪をも謝すべき所に唯今まで音信せざるは渠が奸計の中に陥いれられたるに究つたり。各々今晚は歸り給へ。猶明朝事を決談して小倉に願ひを出すべし。井村上原を始め門人ども然らば明日早天に來るべしと。各々六助に辭して家々に歸りける。

吉岡が妻子六助に復讐を告る事

門人歸りて後猶もうらみ骨髓に入て忘れ難かりしかば。六助宵に三人の婦人をとどめたる事をうち忘れ茫然として居たる所に。一間に有て事の蹊蹶をきゝたる三人の女與より立出。母はとりわけ六助に謝して申けるは。旅行の勞れに持病を引き出せしかども心をしづめ休息いたせし故。最前より潔くと快よく御暇をも申たく候へども。何とやらん抱繁給ひたる事ありげに見え侍れば。憚を顧みて唯今までさしひかへ有しなり。さて今晚人々の御物語のはしぐをうけ給はるに微塵彈正とやらんにはかられ給ひしなどのたまふはいかなる御事やらん。苦しからずば白地に語り聞せたまひ又彈正と申ものは。年齢幾ばかりその人物をもとくと覚え給はるかたり聞せ給へかしと仔細ありげに尋れば。六助三女が言をき、暫く人々の顔をながめて居たりしが嘆息して申けるは。事の縁千聞給ふ上からうは包べきにあらず。某原來神明の加護によつて自然と一流を發明いたしぬ然るに近來小倉の城中より仕官せよと頻りに催促せらるるといへども如々神勅によりていまだ仕官仕らず。夫故立原家より六助に打勝者には祿五百石を賜るべき旨内々四方の豪傑どもを召募らるゝ所。數日已前壹人の浪人その名を微塵彈正と申し七十計りの老婆を誘ひ來り。さまゝ言を盡し某に利害をとき小倉城中にて比試の事あれば勝を讓てくれよと申す。その有狀ながら實體孝心の模様に見えしまゝ忽ち孝行といふに感激して勝を讓らんと約束せり。そのうち小倉の城中に於て渠と約託の如く比試に臨し所いささか某が怠侮の油斷を見濟し頭上を臨て不慮に木刀をうち下す。其意はせ全く即座にわれを打殺さんとする手段顯れ如是面上を傷りぬ。これにより立歸りて後も憤りやまず門人と評議して忍やかに人を遣し事の動靜を聞ところろに老母ある事はあとかたも無き詐り事なり。さて彼者の年齢は凡四十有餘兇惡なる面貌色黒く天庭の邊に一ツの痕あり。身材六尺計り言語はなはだ能辯なりと物がたりの間より母は兩人の女と互に顔見合。ため息ついて居たりしが。六助に向ひ涙を浮め。斯さまに御たづね申事不審く思すべし。他言したまふまじき人がらと見まらせ身の上つゝまず物がたりいたすなり。我々は藝州廣島百瓜の家士吉岡一味齋といふものゝ妻子。一味齋老て男子を先だてこれなる女兩人を持しに同家中に京極内匠と申ものあり。渠はもと佐々木氏にて本國は近江國中途より我國に仕官し。微塵流と云劍術を師範仕りぬ。生得奸曲能辯にして人を欺く事まゝ多し。それなる長女蘭を娶て妻とせんといひしを夫一味齋其の人柄の正しからざるを嫌ひ。嘗て婚義を承引せざりしかば。此事を深く憤り春木藤藏といふ者と心を合せ。周防國岩國の庄興國寺に於て案計をかまへ一味齋を討て立退たりと。一々始終の物語をなし夫よりわれ親子ども京極を尋ね亡夫が讐を報せんため去年極月願ひを出し本國を出。定めたるあては侍ねども九州へわたり不思議にこの地へ來り。貴家にたよりて思ひがけなき人々の御物語の端々を承るに微塵彈正とのた給ふをもつて熟々思ひ廻らすに。も

し流義の微塵といふを名によびて改名せしもはかり難しと。夫ゆる思し召をも願ず其人物を承りし所。今御物語の様

子にては年齢格骨ごとく符節を合すがごとく。面體に痕ある事まで少しもたがはず。この者京極内匠にて候は、人を欺きはかる事は渠がつねの行ひなり。偏にかゝる處へ参り不思議に敵の手がかりを聞くことは彦山權現の加護を蒙り給ふ這向様の武運にひかれ。かつはこれなる女どもが孝心の志を天より助け給ふと覺えたり。此上の御情には二人の女が孝心をあはれみ微塵彈正が素性を糺し敵討いたす取持をも成たまはりなば夫が冥途の怨をはらすのみか。我々親子が歡び五百生まで厚恩はわすれ申まじと涙にくれてかたりければ二人の女も六助を再拜し手弱き女を助給は、神明もなか納受し給はざらんや力を加へたまはれかしとわりなく頼むぞ哀なる六助は三人が身の上をき、かの京極が積悪なるを憤り彈正が本名京極に相違なくば某が小事の憤りをすて。人々の大義を助け本意を遂させ申べし。われ嘗て吉岡殿に對面仕らずといへども高名は兼てうけ給はり及びぬ。又京極内匠が如き暴悪不義の輩を其ま、助け置きは行末幾の人を惱さんもはかりがたし。一殺多生は菩薩の行。提婆達多が生ながら無間地獄に墜るを釋迦如來は却て救ひ給はずとかや極重惡人は佛すら猶救ひ給はずとあれば斯るものを亡すは勸善懲惡なり此上は我家に逗留して實否を糺すを待ち給へといとたのもしく受合ける。

六助小倉に出て微塵彈正が惡事を認る事

斯て吉岡が妻子は六助が家にて敵の音信を聞よるこび一方ならず六助も今は自己の鬱憤をさし置き吉岡三女が大義に力を助け微塵彈正が實否を糺さんと門弟の來るを待戸をひらけば井村治郎助上原郷右衛門霧を拂うて出來るに門人追々にはせ集る六助まづ吉岡三女を喚出して對面させ。豫じめ門弟に事の由を物がたれば。一座の人々三女が孝貞を讚歎しならびに京極内匠が不義の振廻を憤り。此上は速に微塵彈正をとり逃さざるやふの計議を廻らし小倉に訟出んと評議の半へ。六助が門人田中某といふ郷士あり。忙しく馳來りて申けるは。奴も微塵彈正が連れきたりし老女といふ

もの、落着明白に相知れ候なり。わが家の僕今朝某に申すは。昨日山に入り候ひしに。谷の間にて老女の死骸を見付たり。死して日數は經ずと見えて惣身に疵などもなくさればとて自殺とも見えず。察するところ人の絞殺したるものと見え候よし申す。これ究めて先日彈正が連來れる贖婆ならんと存せしゆゑ猶仔細に衣類の模様など尋ねしかば僕が申は郷中の人も見えず黒き絹の衣類を着したりと答へ候。先生思し召あたりなきやと尋れば。六助聞て眉を蹙め何さまかの母といふもの體に黒絹の綿入を着すとおぼえたり。我まづその所にいたり死骸をあらため先日道斷が連れ來りし老女ならば彈正が所爲明白にして渠争てか罪科をのがる、道理あらんやと。諸門人等とともに田中が家僕を案内とし山中に至る深々として草木茂りたる谷の中に果して老婆が死骸あり。六助近づき寄てかの屍をみるに先日老女なり。門弟に向ひ申けるはこの者さきに彈正が連來りし老婆に相違なし。某熟々の老女が人物を見るに荷葉を摺たるがごとき皺面なか、由緒ある者の母とはおぼはれざりき推量するに銀錢などを以て雇ひ來り後日に露顯せん事を恐れ殺害せし者とおぼえたり。上原郷右どのは手書にて候へば某に代りて願書を認めてたまはれ。我考ふるに表むき比試の願書を出しなば。渠も邪智の者なれば。事の露顯せしを推察し他國へ出避せんもはかりがたし。其時某が事は云にたらず吉岡三女の本意をとぐるに妨となるべし。自是密に小倉にいたり。十時善右衛門は明知の人と聞ば内々に彈正が無道の趣を訴へ即日虜にして本意を遂させ申べしと。かつて自己の憤を押へ井村治郎助が方へ吉岡三女を預けその身は小倉に出にけり。却説六助が十時善右衛門へ事を訴んと云るをいかにといふにもと善右衛門は立原右近、將監宗虎の家臣なり。是より先宗虎すでに一族三河守増長を以て小倉を守らせらるゝ時小倉は中國より渡口の地守禦の怠りも有んかと。増長に添てかの地に置れぬ。軍中の事は申に及ばず領内の仕置といへども増長ことごとく、評定せざれば輕々しく事を行す。善右衛門は武術諸人に越たるのみか智勇兼備の者なりしかども。少しも武勇を面にあらはさず。又道に缺たる振舞を成す。これによつて六助も専ら邪正を訴んとぞ計りける。斯て正月十六日城中には當

年殿下鎮西誅伐せらるべきに付。近々小倉に下向ましますよし聞え。軍議の評定あるべしとて諸士ことごとく登城し。十時も城に望んと玄關まで出る所に孝行六助忙たゞしく來り。十時が駕に乗るととき謹て駕前に禮をなし。愚民六助訟へ奉る密事あり。善右衛門が曰われ今日軍議ありて城中に參る軍議は國の大事なり汝わが歸るを待べし。六助が曰某が訟出る所も國の御大事なり。善右衛門聞て廳中に入り六助を中門より裏によび入れば。六助庭上に躊躇し謹て願書を奉る。善右衛門ひらきたるに微塵彈正が本名京極内匠と云者にて吉岡を殺害せし始末。かつ賈老母をもつて己を欺き次に比試に望んで不意を伺ひ打殺さんと企たる事。及びその藝術を幻術なりと誹謗し。又賈婆を殺したる次第。吉岡が妻子復讐のため當國に來り己が方にとゞめ置たる事ども詳に紙上に載たり。善右衛門甚だ驚歎して曰。さてはかゝる國賊にて有りけるよな然らば京極内匠に相違なきや。六助が曰否この事も分明ならず吉岡が妻子の申所と符節を合せたるが如し。慥に夫とは定めがたしといへどもまづ搦捕給ひて後吉岡が妻子を喚て見せ給はゞ即剋相わかるべし。善右衛門が曰分明ならずばかるくしく手を下しがたし。假にも主人より祿を賜る人を過て縲紲を蒙らしめ後に吉岡が妻子に見せその人にあらずんば。事の是非を糺明せず人たがひを以て罪なき人を搦とる事恥辱これより大なるはなし六助が曰假令ば渠京極にあらずとも縲紲を免るゝ事能はざる大罪あり。十時が曰其罪はいかなる罪ぞや六助答て既に近ごろ當國より四方の劍術者を召抱られ若六助に勝るものには高祿を賜らんといふ事を彼者ほのかに聞付。此ところへ來りしかども尋常の如く某に比試して勝を取事成がたく。闇に奸計を巡らし。一人の老婆を談ひきたりいまだ比量ざる以前に某を誘ひ欺むき勝を譲りて吳よなど虚言を構へ人をはかり其比試にあたりて不慮の油斷を見濟しうち殺さんとはかる。是其恩を忘却する不義の賊ならずや。斯る變詐はなはだしきものを搦取給ふ事はこれ罪の當然と申ものなり。善右衛門が曰く然らず罪に次第あり先其疑しきを捕す。微塵彈正すでに當家へ仕官する時汝と劍術の勝負して後。汝が術を幻術邪法の屬ひにして實は人の眼目をくらますといへり邪法幻術は天下の制禁の法なり。もし

彈正が言上に従ひ汝を以て邪法幻術として搦とり後にその罪を糺明するに自然汝の劍術幻術邪法にもあらざる時は一剋半時にもせよ縲紲にとらへ置。汝は時の災難なりと堪忍をなすとも信偽を辨せずして。無罪に人を捕へたるは。これ國家の政をとる者の誤なり。愚者は何とも思はねども智者は慚慚すべき事ならずや。もし是を公にせんとするに。先雙方の是非を對決させ。汝申わけなき時は汝をとらへ汝もし幻術邪法に有ざる時は。殘訴の者を捕へ罪を糺すなり汝今我まへに於て彈正が不義を訴るといへども眞偽をも糺明せずして訴に従ひこれを捕ゆるは俗にいふ片手うちなり。六助頭上に筋を顯し。然らば彼者己が母なりとて我家に連きたりし所の老婆を山中に於て密に害せりと見え。其死骸は某あきらかに見とゞけ置たり。渠罪なき人民の命を絶事暴惡のはなはだ敷に候はずや。嘗てこれを捕すしてそのまゝにゆるし置たまはゞ國政ひとへに眞眞のさと申べし。十時が曰汝が訟る所理に似たりといへども。渠の老母を連來りしといふも又殺害せしといふも皆汝が訟へ出る所なり。一人の訴へを信じて手を下す事容易には用ひがたし先渠と汝と是非の對決をなし彈正が罪科明白なるに於ては捕へて首を刎るとも遅かるまじと更に六助が訴を信ぜざりしかば。六助憤り骨髓に徹し鬢髮逆さまに立上り顔色さながら朱をそゞぎたるが如く。無言にして座を立上り。大喝一聲して庭上塊石たちまちみぢんに踏碎き。大きに叫んで申けるは。此國の政事も暴惡を助くるといふ國風なり此上は後難を蒙るとも少しも愁ひなしわれを殺害せんとせし微塵が頭この石のごとくになすべしと憤激して駈いだすを十時善右衛門六助を呼びとゞめ小聲に成て申けるは。汝はまことに正直の君子なるかな。唯今某が訴へを拒み争ひしはことごとくその本心より出たる事にあらず。唯眞偽を試みんためなり。いま直實のふるまひ言句の下にあらはれし上は。速に微塵彈正を捕ゆべし。若本名京極内匠に相違なくば吉岡が妻子に與へ斬却して其うらみを晴さすべし。まづ穩密に如はなしとありければ。六助は雀躍してよろこび猶閑談してその日は毛谷村へ歸りける。

繪本彦山權現靈驗記 卷之十

十時明智を以て微塵彈正を擄にする事

十時善右衛門は六助が訟に依て微塵彈正が暴悪を識り。いかにもして渠が本名來歴をたゞすべしと城中に出來る。此日軍議の内儀につき。國中軍事に預る所の諸士廣敷に着座せり。立原三河守増長修如出座し給ひ。諸士の班中を顧みらるゝに。十時善右衛門が座に侍らざりしかば。左右の昵近を呼て善右衛門は何故に出ざるぞ。扈從等謹でいまだ出伺仕らず。即剋御召使を差遣べしと。言も半ばならざるに。善右衛門參上と謁者が披露とともに十時は廣間の口に平伏し。早天にまかり出べきところ。持病の腰疾さし發り唯今にまかり成候と。謹て遲參の罪を謝し着座すれば増長古老の諸士に向ひ。殿下出御のこと既に二月下旬と仰越れたるの上は。三月中旬までには九州へ渡御成べし。察するに供奉の人々大半上方の諸侯。鎮西は不地案内なり。必定當家をもつて先鋒に命ぜられ二陣は百瓜家か浮田ならん。自然百瓜三家の人々に二陣を命ぜらるゝ時は。何れも弓箭の知識我手軍略にはづれて屏き敗戦あらば三家の人々物笑ひにすべし。諸士軍卒に至るまで戦場の芝居を踏たる兵をえらび。戦ひにのぞんで落度なき様にいたすべし。善右衛門頭を叩。仰の通十が八九までは當家より先鋒たる事疑ひなし。速に軍冊を作り申べしと。隊騎將。旗奉行。鎗奉行を始め。駄餉馬廻り一々手配をぞさだめける。微塵彈正は人々の評定をきゝ己れも今度の軍役に用ひられなば。百瓜家の陣に近く。彼家の人々に出合こと有なん。しからば身の一大事。呼乎本城を守る人數の中に加へられたきものかなと。片漣を吞て居たりける。十時善右衛門は諸老臣と共に軍冊を編。このたびの軍役に當るものは是まで功名をも願し。難兵首をも取し者ばかりを撰び。次に新規に召かへたるもの。又は老年の人々諸士の部屋仕の

士を以て城を守らしむ。彈正も新參の士なればとて。本城守護のうちに加はりぬ増長再び善右衛門に向ひ。殿下渡御に於ては當城に坐すべしその時は城地を獻じ。諸士を他所へ移さずばかなひがたし。豫めこの事をも評定をせよ。善右衛門申けるは他國に例なきに當城ばかり明わたし給はば。各國の諸侯殿下に對して。阿諛など思ふところも候。まづ上方筋とくと御聞たゞし有て宜しかるべし。就中備中より長門までは一邊に百瓜家の食邑なり。鞆。尾の道の城を始め。本城廣島など悉く獻ぜらるゝや否哉。百瓜家へ使者を遣はされ。御尋ね有べしと申ければ。増長老臣等もこれに一決し。然らば誰を使者として賜はるべしやといふに。善右衛門申けるは百瓜は大家といひことに威風強き國なれば使命を辱しめざる者を選ばれずばかなひがたしと。忽諸士の班中を指さし。誰彼と申さんよりはあれなる微塵彈正を遣され然かるべう存じ奉ると。やがて彈正にうち向ひ我地の諸士嘗て中國の風俗行禮を詳に存せず。御邊は諸國を徧歴し上がった筋の蹠蹠をも案内なり此たびの使命を勤められよ。また外に一人物馴たる人を副らるべしと。思ひがけなき一言に。彈正睨と當惑し顔色紅のごとく變じ答へけるは。御譜代の諸士數多ある中にその御撰に預る事面目には候へども。某若年の時より武技に志を傾け。進退應對の作法に疎く。必定御使者を勤めなば無骨の振廻多く。還て御國の威儀を失ひ他國の爲に笑ひを蒙る事有ん。某恥辱は申にたらず。君命を辱しむると申ものなり。もし戰場劍戟の中に入て先鋒を爲よとの仰ならんには。假へ水火の中といへども少しも避候まじ。御使者の事餘人へ仰付らるべしと。汗を流して辭しにける。善右衛門重ねて。京家の武士などこそ禮義作法に疎くは。人後ゆび差ことも有べけれ。今天下漸く平均諸國に名を轟かすほどの武士は。みな金鼓の内に生れ。幼少より戰場を経て諸禮を學びたるは一人もなし。無骨は還て威風をかゞやかす道理なり。唯御邊の存分を以てつとめ給へ。京極再び答へて。無骨くるしからずとある上は敢て辭し奉るべき謂れなし。しかし今般御本城を明けて殿下の御用に備へ給ふ事は。各國使者を馳て糺問せられずとも事たりぬべし。其故は既に百瓜家より御當家へ使者をたて。我本城を始屬邑に至るまで。城を獻

じ奉る貴國は如何はからひ給ふやと。彼地より申送られなば。これ隣國顧問の交りと申ものなり。彼國より聞尋をも仕らざる以前に此方より他國の例をたづね訪ひ給はゞ。只顧他國の指揮に預り還て誘を蒙るに似たり。這樣の事は自國の格式を變られざるが威風を減ざると申者なり。具に百瓜家の義を承るに。殿下饗應とて接待厚く。柄。尾の道。神邊等の屬邑の城はたゞ一通りに修理を加へ若し殿下の旅館と成るべき地は。其時節に臨んで明わたすべき支度なり。廣島本城に於ては明けて。上ると申事も承らず。但し周防國岩國庄興國寺は美麗に修理を加へ。照基朝臣この地へ出て旅行の勞を慰め奉らんと結構なり。然れども至極の善を盡されず。唯往昔足利將軍家より上使を賜はりし時饗應せられたる例を以て接待に饗らるゝとの密事なり。御當家に於ても足下宜しく舊禮を斟酌し饗應の式を定められ然るべし。某使命を辭し奉らんとために。事を左右によせて申には候はず。偏に御國風を減すまじと存じ。憚を顧ず言上仕ると辯舌にまかせ専ら使者の役を免れんと。人も問はざる百瓜家の密事ども。なが／＼と語りける。善右衛門耳を傍側きゝ居たりしが忽ち大音あげて戸次。山崎の兩士は無やと呼はりければ。次の間の諸士の列より兩人の壯士つと來りて。微塵彈正が左右より一同に飛かゝり。兩肘を執て捻上げんとす。一人は戸次友之丞。一人は右馬之允なり。彈正右の方より掛り戸次が腕を握り。左より來る山崎が帶を擱んでこは理不盡の振廻かなと手を交んとする所に。次間より兩個の勇士走り來り手向ひするかと叫んで左右より立かゝり。忽彈正を踏倒し兩肘を執て彼の方へ捻付繩をかけて庭上へ蹶落したり。後に出たる勇士は篠澤兵庫問住所喜左衛門なり。増長を始め一座の人々大きに驚ろき。こは何事の發しやらんと。互ひに顔を見合せたり。善右衛門増長の前に平伏し。君を駭し奉る事某が罪なり。願はくは寛宥を蒙り言上仕りたき旨趣の候。當務諸役人の外は退座せらるべしと申にぞ。諸士いづれも座を退り僅かに國政に預る人のみ残り。また庭上には士卒等彈正を引居たり。善右衛門懷中より先剋六助が奉りし願書を取り出し。謹て増長に呈上す。願て押ひらきよみ給ふに。彈正が罪贖一々に載たり。増長驚き且憤り。善右衛門にむかひ仰せけるは。然らば

渠が本名京極内匠なるや。善右衛門が曰いまだ此事に於ては分明ならず候へども。既に孝民六助を計り價母を殺害せし事願書の上に顯然たれば。彈正が罪科遁るべきよしなし。此事言上仕りし上にて捕へたく存せしかども。今朝はや御評定の席へ。出させ給ひし間。申上るに際なく。時刻を移し漏聞えて出避仕る事有んかと心配仕り。戸次山崎等の四士に申し合せ御座の邊を騒せ奉りぬ。又此たび殿下渡御につき。問尋の使者として渠を百瓜家へ遣さんと申せしは其行歟ゆかざるを試みたる計略にて。誠は他國の例を問尋仕るまでもなし。然るに最前の時辯舌を巧にして渠使命を辭するものは。いかにもして中國へ參るまじとの結構言句の中に詐りの色あらはれ。百瓜家の密事まで委しく語りたるを以て考るに。渠百瓜家に仕官したる京極内匠たる事顯然たり。夫故糺明を俟ずして。まづ搦捕候この上は速に吉岡が妻子を召出され。一應かの者を見せ給ひ。京極内匠に相違なくば。吉岡三女に下し賜り。碎粉となさしめ孝子節婦が志を遂させ給ふが上もなき御仁恵にて候と。理を盡して申ければ。増長も善右衛門が才智を感じ給ひ。此上は是非の糺明こと／＼汝に任す。斯る暴惡の徒を抱へ置し事わが一時の不明よりおこれりと歎息して座を立れ給へば。諸役の輩も十時が明察を稱美しみな／＼退出をぞ成にける。

十時善右衛門彈正を糺明する事并百瓜家の使者小倉に來る事

微塵彈正が積悪脱る事あたはず。終に獄中に捕へられ。其日は有無の糺明にも及ばず直ちに毛谷村に人を遣はし吉岡三女を召連來るべしと告しかば。三女は此由聞よりも六助及び門人に此ほどよりの恩を謝し。六助に誘はれ十時が宿所に至りぬ。善右衛門三女に對面し。熟兩人の女をみるに容儀端正にして言語輕々しからず。十時三女に向ひ何れも女性の身として大望を思ひ立ち。廻國せらるゝ段男子も及ばぬ志し武藝も然こそと推察せり。昨日彈正を捕へ。いまだ糺明を遂ざれども京極内匠に相違はあらじ。唯今渠を呼出さん。各は物蔭より能くみたまへ。若し京極に究りな

ば。快く怨恨を晴させ申さん。三女は十時が恩言の嬉しさそる涙にむせび乍。言をそるへて申けるは。我々女の身にて斯る大義を存したち相手は豪勢の勇士容易は巡り逢がたく思ひし所に不思議に情ある人のちからにより手係りを得るのみ歟。仁惠厚き太守君臣の御恩。生を隔つとも争か忘れ申べしと跡は言も絶々なり。かくて三女を側に忍ばせ彈正を庭上に引すゑさせ。十時微塵にむかひ。汝は京極内匠と云てもと百瓜家の武士なり。防州岩國に於て吉岡一味齋を殺害し。且贖婆をもつて六助を欺き。加之當家諸士の眼目を履ひ高祿を貪んとせし事。言語同斷の積悪。さきに孝民六助が訴へ出るのみならず。汝に討れた吉岡が妻子敵討の願を出したり彈正答へて今この期に望んで何ぞ陳防に及ぶべき。某は京極内匠なり。吉岡へ憤りの旨ありて彼者を討果し當國に來り。高祿を取んため一人の贖婆をもつて六助を計りぬ。渠武藝は學び得たりといへども。心底に明知なく。わが辯口にたぶらかされて怠りをかまへたるは性得の愚痴何ぞ人を恨むべき。唯己れが愚なるを顧みるべき所なり。又當家の諸士某に欺れ眞偽をも辨ぜず五百石の高祿を興へ却て後悔の心なく。罪を人に塗は高明の士なきが故なり。次に贖婆を殺害せしも某なり。又吉岡が妻子に討れて得さすべけれ共。豪傑の士としてかるく數婦人の手に死す謂れなし。かの妻子等をも一緒にうち殺し吉岡が冥途の供を致させ。後潔く死につくべしと傍若無人にのしるにぞ。一座の諸人渠が悪言を憎まざる者はなかりけり。善右衛門吉岡三女をよび出し京極に引合せければ。三女は内匠をみるよりも益憤り胸に充この上は一日もはやく亡父が泉下の憤を安めたく候へば。御仁惠を以て速に敵討御免下されよと思ひ入たる氣色なり。善右衛門も貞節至孝の志を感じ。然らば此旨申入べしと。京極を獄屋に入置。即剋城中に入て三女が言をもつて申といへ共。諸士ことごとく京極が積悪を憎みひたすら吉岡が妻子の孝貞を感じ言を等しくして申けるは京極内匠は武道の者といへども劍術一派を立るほどの者又三女甲斐しくは候へども婦人の手業内匠が對手にあらず。まづ此事を百瓜家へ仰遣されなば吉岡が門人など見つきとして差越れつべし。然らばまさかの時に望んで助太刀をも仕るべし。此

旨早馬にて仰入れよろしかるべう候と申にぞ。増長も此儀に同じ早水源左衛門早三郎左衛門と云ものを中國へ驛馬に鞭うつて遣はし給ひける。此とき三女は頻りに敵討の願ひを上るといへ共百瓜家のおとづれこれあるまで相俟べしと有しかば。止事を得ず時日をうつして遂に二月にぞ成にける同月二日藝州へ遣したるところの使者早水諫早兩人に。百瓜家の土衣笠彌右衛門。二宮熊次郎兩人を差添て送り來る。早水諫早の兩士増長の前に出。百瓜家の口詞を演舌に及びぬ。頓て衣笠二宮を召出され。兩使謹て増長に禮をなし。照基申せとの事に候御使者の旨逐一承伏致し畢ぬ。京極内匠吉岡一味齋を討取本國を立退。貴國へ參り。僥倖に恩遇を蒙るところ。此節吉岡の妻子ども亡夫の報讐と稱へ。京極が罪を訴出しにつき召抱へられし者を惜み給はず。敵討いたさせられんとわが方へ告知らざるゝ段大義の思召感謝に堪たり。即ち御使を護送のため且敵討見とゞけとして一味齋が門人兩人さし遣はし候。三女天運の助けを蒙り本懐を相達しなば。兩人の使者へ御渡し下さるゝに於ては満足に存候と。慇懃に申ければ。増長兩士に禮を復し猶近々日限をさだめ敵討せしむべしと。その日より兩使を旅館にとゞめ接待はなはだ厚かりき。斯くて小倉の君臣三女が爲めに天官吉日を下し。即同廿五日敵討有べしと城外の廣野に於て。方州間餘の竹園を修ひ東西二ヶ所に入口を定め竹園の外に高く棧敷を作り藝州の證見及び城中諸有司の居所とし。西の方入口の上に一面の太鼓を構へ若双方弱りつかれたるときは。彼太鼓を鳴し引わけて息をつがせ快よく勝負をなさしめんと結構なり。

吉岡三女敵討の事

斯て天正十五年二月廿五日敵討の勝負あるべしと用意すてに調ひけれども。増長を始め。諸士の末々に至るまで。その群々は頭をさし合せ申合けるは。京極は一流の師範者。殊に身を犯したる大罪あるをもつて。所詮脱れがたき必死の場所を察し。一命を塵芥の如く輕ずる時は。勢ひ日頃に十倍し。中々三女の手に討るべしとも思はれず。今般照基

より吉岡が高弟どもを檢使に遣されし事。其實は後楯とは見ゆれども表向檢使として來りし者が。三女が危殆に臨んで躍り入て討んも諸人の見るところ後日の嘲り如何なりと。さまざまに評定しけるに。十時善右衛門忽ち一ツの計を案じ廿四日の夜六助を召よせ。また三女の旅宿へも人を遣はし人々を招き善右衛門三女に向ひ明日人々の願ひに任せ敵討あるべし。それにつき主人増長を始め。我輩。三女の孝貞を感じ。いかにもして存念を晴させ申たく思へども。相手は豪壯の武士。おの／＼志ざしは猛くとも手弱き婦人の事なれば場所に見望んで覺束なし。婦人等京極が對手と成りたやすく渠を討取べき手覚えありや。一味齋が妻額を疊に着厚き御情争か忘れ申べきわらはが事は若かりしとき。靜流の長刀を稽古いたし。未熟には侍れども形の如く覺え候。兩人の女どもは幼年の時より武藝を好み父が流儀の劍術を傳へ紡績針糸の暇ある時は晝夜の境なくまなび。嗚呼がましくは侍れども。亡夫が流義の極意をも見せ置候よし。去りながら木刀竹篋の態を以て何程修行仕ればとて眞劍の勝負など申事は夢にだも存せぬ細水練。期に臨み切きころを發し遁れ避んなどと仕らんもはかりがたくは候へども。唯今までは三人も志を一致に申合せ。京極が肉むらに喰付てなり共。本望を遂んと存じつめては候へども。相手は數度の戰場を経たる古兵。進猿き働きをもいたしなば。三人一同に渠が爲に還りうたれん事もはかり難し。假令同じ白刃の露と化し。亡びたる夫が跡を追ひ。泉下の道に赴くとも疊の上にて安樂にみまかり。幽冥に於て面目なき對面仕らんよりは。遙に恥なからんかと存ずるのみにて。更に他念なく候と。言すゞしく申にぞ。善右衛門をはじめ紙門の彼方に立隠れて事の蹊蹠を伺ひきく。十時が妻子にいたるまで感涙袂をしほりけり。善右衛門は稍暫く在て六助に向ひ。汝も當鎮西に敵なき豪傑をみてせざるは勇なきとかや。今三女の志を助けずば有べからず。殊に先日京極が爲に。欺れ計らず人前に於て一木刀の恥辱を蒙り。その憤も有べし。假へ然なくとも斯る重悪のともがらは憎てもなほ憎むべき事ならずや。婦人等の爲に助太刀して討とめられよ。然れども京極もさる者なれば無縁の者の助太刀は何の道理ぞと咎めなば答詰なくばいかゞあらん。

體伴にして汝いまだ妻子なき事なれば。吉岡が長女の聲なりと云はんに。誰か妨る者あるべき。京極が如き人面獸心の武士は畢竟無體に討取とも少しも苦しからずといへども。凡そ死を興ふるにその法を以てせざる時は。公の道に非ず六助雀躍して歡喜び。某元來京極を恨むる事骨髓に徹したれば。頭顱微塵にうち碎き先日の際憤を晴さん。人だに承引ならば聲となりとも主従と成とも詐り厨奴が勢ひ強きを見る時は忽ち躍り入て一刀にうち殺す事磐石を以て卵を押よりも安けんと事もなげに申ければ。吉岡が妻夫大さによるこび誠に憑しき人々の御厚恩をもつて謝し盡すべき唯今まで只顧打勝んとは存ぜず死を以て夫のあとを慕ひ冥途のみちに赴くべしと思ひしに六助どの、助太刀を蒙らば渠を討事疑ひなく。現在に夫の恨みを報じ自分の憤をもはらす事。太守君臣の御恵み六助どの、御蔭七生までも忘れじと手を合せて泣きけるは理りとこそ聞えけり。十時は其夜人々を宿所に歸し。又衣笠彌右衛門二宮熊次郎兩人が方へも六助を助太刀とすべきよし申遣しければ。兩士も深く禮謝を施し明るを遅しと待にける。廿五日黎明に及び今日三女の敵討と聞えければ遠近これを傳へき。老たるも幼稚も夜のうちより廣野に群り聚り立錐地も人ならずといふ事なく。遅れて來りしものは喬木の上に攀上り。竹圍の四方は曳や／＼と押合揉合前代未聞の見物なり。辰の刻に向として當城の監察官十時十藏立原三郎左衛門並びに兵士二百人雜兵五人百警固として出來れば。百瓜家の證見衣笠二宮の兩士其手の從卒五十餘人威儀嚴整にして出來り。竹圍の外に床几を立させ。互ひに禮を爲すとき。吉岡が妻子一様の白無垢の小袖に束ね髪の上に凜々しく拍を引しめ裾高く纏り上げ母は長刀を提げ。兩人の女はおのひを出さるゝに付。今日此處に於て敵討申付らるゝ間。尋常に勝負せられよ。但し竹圍の中に一面の太鼓を掛られたり。櫓を守る者これを撃べし。たとへ鬭争半なり共太鼓に従ひ引分れ幾たびも休息あるべしとありければ。その時藝州の兩士言を揃へ今般當所に於て京極内匠にめぐり合復讐の願ひをさし出したる旨城主の御しらせにより證見として

我々を差遣さる。本懐を相違なば急ぎ本國へ立歸るべしと嚴重の君命なりと申にぞ。三人ともに頭を下。時の運はかり難く候へども。若し本望をとげたるに於ては本國へ召歸さるゝ段。尤ありがたく覺え候。自然われども京極が爲めに返り討に預り。屍は此地に曝とも魂魄は本國に歸り申べし。此段宜しく言上頼み入候と述べれば。兩士再び床几を立ち。側に近づき。衣笠聲を卑くして。主君より某等兩人を證見として遣されし事は。全く三女の勝負に因て京極が爲め討れ給ふとも。師匠の讐を討せんとの御内意にて候へば。跡の事は少しも念とせず。一命を捨て其場所を見ては飛込んで討たまへ。これ所謂死地に陥て活路を得るといふ我流義の眼目なりとさとしければ。三人もいたく悦び頓て側に座しにけり。暫く在て士卒ども京極内匠を高手小手に縛めひき出し。十時立原が床几の前に引居れば。兩監察士卒に下知して縲紲を脱せ。汝すでに高祿を貪ん爲め罪なき老婆を欺き殺害し。孝民六助を討り。城主を詐る段その罪死刑に當れり。又本國に於て吉岡一味齋をやみうちせしにより。その妻子ども汝を尋ね敵討の義を願ひ出るに付。死刑一等を宥められ。敵討の勝負仰付らるゝと申ければ。藝州の兩士また京極に向ひ。去冬防州岩國興國寺に於て主人の用事を蒙りたる吉岡一味齋を殺害する事君家へ對して不忠のはたらき。是より大なるはなし。本國へ引かれて嚴科に處せらるべき所。罪科一等を免され一味齋が妻子と敵討の勝負仰付らるゝ事満足に存べしと申ければ。内匠莞爾として笑ひ。縛り首を刎らるゝも罪科の脱れざるところ。死の道に於て何ぞ満足といふ事あらん敵討の義は同じくは骨法ある勇士と手を交へて最期の思ひ出にはなばなく戦ひなば。これ死の面目とも申べきに。兒女子の輩と戦ひ。渠等式の者十人廿人殺したればとて。何ぞ足事の有べき。また汝兩人を證見として遣はされしも。照基卿の本心に吉岡三女が助太刀を爲んとする事なるべし。然れども理に當らず。禮記に子夏孔子に問て父母の仇にはいかげせんと。孔子こたへて苦に寢干を枕にして仕へず天下を興共にせずとこそいへれ。傍輩の仇に命を抛て助太刀するといふ事を聞ず。汝等吉岡と師弟の間がらなりといへども。その實は傍輩なり。刑法には常の則あり愛すれども其

悪き事を知り。憎ども其善ことを知らん。京極内匠が所爲憎しとして無縁の助太刀して宋代までの笑ひを殘す事なかれと高らかに申しければ。是を聞たる警固の諸士憎ぬものはなかりけり。はや檣櫓の上より入太鼓の音響きければ。十時立原兩監察内匠に向ひ。唯今の太鼓は勝負催促の相圖なり。この後太鼓を鳴らしなば。闘ひ最中といへども手をとめて休息あるべしと下知しければ。内匠も領掌して立上るとき。足輕一人京極に刀を取て與ふれば。徐々と腰間にさし挟み。三女諸とも東西に引わかれ。口々より竹圍の裏に入所に孝子六助頭に鉢巻緊としめ。嚴重に身を裝ひ三女にしたがひ入来る。京極大きに驚き汝は六助ならずや。今日の敵討に汝何の所縁有て圍に入ぞ。六助が曰某は吉岡が長女蘭を申うけて妻とせり。婦人の敵討見るに忍びず。舅の敵助太刀のため参りたり。京極聞て敢て有無の返答なく。勢ひ忽ち折けたり。是京極が本心全く三女を還り討にして己れが一命を助らんとは思はず。身に犯したる罪科あれば。三女を討得たりとも刑法のがれざる事は知るといへども。渠生得奸曲の徒なるが故に。此ほどより小倉城中の人々己れを憎み。三女に本懐を遂させんとする振廻ある事を察し。何とぞ三女を目下に討殺しその後潔よく刑にかんとの下情。誠に重悪の仕方なり。此時四方に居崩れたる數萬の見物互ひに神水をのみ始終いかにと氣を詰たり。京極は黒小袖の上に袴を請て着し下緒を解て手次にとり掛得ものゝ太刀二尺八寸ありけるを佩て立向へば。吉岡が妻は十時善右衛門が與へたる薩州波平が打たる名作の薙刀物打の所を鐵もつて巻きたるを壘短に提げ。いかに京極内匠當城主の御免を受け。敵打いたすところ親子三人一緒に懸らんも何とやら臆して見ゆるによりわれ一人宛かはるがはる参り候京極が曰それほど潔白なる汝等の。俄に當所へ來り新聲を談ひ。助太刀を後楯にたのみ勝負を遂んとするけ見ぐるしき態ならずや。妻が曰岩國興國寺へ忍び入り。春木藤藏といふものを後楯にして吉岡一味齋を闇打にして姓名を變て逃隠るゝは見ぐるしくは有ざる賊心に羞よと申ければ。此一言に魂をとりひしがれ。面目なくや有けん。顔色赧然として紅を塗りたるが如し。一味齋が妻ふたゝび聲を揚。夫の恨み自己の憤り唯今晴さんこれ見よと雀躍

して長刀取延飛鳥のごとく難來る。京極も身を翻し太刀を抜合せ難刀にあたりて切結ぶ彼は多年練磨したる劍術の玄妙を仕ひ出し。是は亡夫が恨を晴さんと怒り心頭より發りて突手難手込手開手。靜流の極意獅子の洞出なといへる秘術を盡せば變生男子の法は借ずしてその有狀飛禽の蒼空に翹がごとく。走獸の草莽の間を行くに異ならず。警固の武士も數萬の見物も酒に酔ひたるが如く氣をあせりいかにと見る隙に京極一跳到りに跳りかゝつて吉岡が妻の手下に着入電光の如く切入一太刀切込と見てけるに肩口二寸餘り切て白無垢朱に滌々たり。此の體を見て太鼓櫓の上より輟太鼓を打ち立れば東西の入口より棒を持たる足輕ども六七人ばかり竹圍の裡へかけ入。双方休息したまへと大音聲を上て制する間に京極は猶付入て切とめんと制止の聲を耳にもかけず。再び刀を上て妻女が頭上を望み打來る妻女難刀を灼して横に破落利と難しかば。忽京極が膝の口へ切先深く切れたり。京極少しもひるまず猶立上らんとする處へ兩人の女雀躍して左右より駆きたり。父が秘術の蘊妙を得たる極意の手京極が左右の肩骨一度に入九寸づつ切下たり。この體を見て六助は足輕の制止を東西の入口より追出し。猶片津を吞てためらひ居る内匠は三ヶ所の手瘡に弱り。尻居にとふと倒るゝ處を兩人の女ども續いて切付んとするに六助中にわけ入て兩女を制し。忽京極が刀を奪ひ取り。髻を掴んで宙に引上げ大力に任せて投付れば一身悉く碎たるが如く聲をも立る事能はざるを。六助まづ吉岡が妻に藥湯を與へ瘡口を巻たて力を添へ。京極が半死半生に成たるところへ誘ひ行。去來こゝろよく本意をとげ給へと云ふに。母は大きに歡び腰に挟なる短刀をとりいだし。此短刀は夫の秘藏恨の靈魂いまだこの土を去り給はずば。今憤りを晴して天に生じ給へと。忽京極が髻を取て吭を一さしに指徹せば苦しげに叫んで息絶たり兩人の女俱に刀を取て鳩尾の方を一刀づつさしつらぬき父の仇覺えたるかと罵り嬉しきに付かなしきにつけ先だつ物は泪にて親子三人顔見合せ聲を上げて哭にけり。女は母をいたはり旅宿に歸れば増長より外科本道の醫師を付て手瘡を療治せられける間にそのち十日ばかりにして金瘡癒増長三女を城中に召れ。母子三人のともがらに織物眞綿など賜り稱美して宜ひけるは汝等古今未曾有の孝貞の人。武門の妻にはあやかりものなり。本國に歸りて後もなほ魚鴈の便りあらば此方へも書を送るべしとあるに。三女は有がた涙を流しこの程よりの恩を謝し。いとまを賜はり退出をぞ成しにける。翌日衣笠彌右衛門二宮熊次郎を召れ。兩士に對してすでに三人の女ども本意を達したるの上は速に本國へ引連歸るべしとあるに兩士も同じく恩を謝し。増長の前を辭し。十時善右衛門が方に到りこのたびの仁慈偏に太守の恩といへども。且は足下の惠に因ところなり。此由主人に申なば満足淺かるまじとつとんに暇乞しました六助がかたに至り好意の恩を謝しにける。

吉岡 蘭 女 が 事

同三月五日百瓜家の使者吉岡が妻子を召連。すでに中國へ立歸らんと發足の剋限に成しかば。兩士は茵に食し三女を催促するに姉の蘭母に向ひ申けるは。われは此國にとどまり。本國へ歸り候はじ。衣笠二宮ともに言をそへ。立歸れとあるは君命なり。殊に兩女母を介抱し大敵を討て本懷を透られし事家門の面目故郷の錦。何ゆゑに此地にとどまらんとは申さるゝぞ。おその顔をあかめて申けるは。斯申さば女の實情にはづれ徒に夫を好むと思召べけれどもこのたびの事小倉君臣の御憐みとは申ながら。六助なき時は敵の在所を探り知る事かなふべきや。既に此人の訴へ出たるにより十時善右衛門もわれが敵討の取持をせられたり。そのうへ期に望んで助太刀せんと身の危きを顧ず我々親子のために後楯と成し志。人としてわするべき事にあらず又京極に向ひて我吉岡が長女の聲なりと云し事は人も知たる事ぞかし。いまわれ母に従ひ本國に歸りなば諸人ごとく六助が申たる事は詐りにて聲もあらずして聲なりと稱へしなど人に誹謗を蒙らせん事。六助の恥辱のみならず我々が恥なり。然らば此人われを嫌ひて妻とせずば髪を難て形を變。父の菩提をも吊ふべしと言理に當りて聞えければ衣笠二宮も理に伏し。然らば六助の方へ至り此事

を申べしと母并に姉妹諸とも毛谷村に至り。六助に對面し齒がいひし事共。悉く申して幸ひ無妻の事なれば六助の妻とし給はゞ兩人は申に及ばず。母も妹も満足いたすべしと。降て涌たる押付嫁入六助は頭を振て大きに迷惑し其偏に敵討の取持せし事は人々の孝貞を感じるのみならず。渠がために恥辱を蒙りし鬱憤有ての事なり。又期に望んで聳と云しは。十時善右衛門がはからひに従がひ唯當座の間に合嘗て眞實の義にあらず。某今日まで妻を迎ざるは。其昔彦山權現の寶前に於て主君を得るまでは淫欲を斷んと誓ひをなせり。殊に人の謂んには。六助こそ吉岡が長女の艶色に迷ひ助太刀せしなど云へるときは恥辱これより大なるはなし。決して妻を好まずと如何に薦むるといへども從はず。衣笠彌右衛門が曰くその言理にあたるといへども。既に神明に祈り力量を授り。武藝の蘊奥を得たまひしは廢れたる先祖の家名を引起し明主を助けて世に秀て。自己の有名を後世に耀さんとするに非ずや。子孫なくしては叶ひがたし。又世間の婦女を考ふるに賢女は甚だ少し吉岡姉妹の如きは孝といひ賢といひ劍術の奥義を叩き。身は婦人といへども心は男子に勝れり。吉岡の長女足下の妻と爲ざるときは身を墨染に變んと申す。これ貞操に非ずや。六助こゝに於て更に答ふる事能はず沈吟してさし俯ば。折節上原郷右衛門井村次郎助來り合て居たりしが。上原も俱に薦て曰く誠に麒麟は麒麟に交り鳥は鳥に交る。みな其配あるものなり。吉岡氏の息女のごときは中々尋常の男子を丈夫とすべき者にあらず。英勇豪傑の妻とすべし。先生まげて迎へ給へ。若し先生仕官を遂るまで妻を迎へまじとぞならば。井村次郎助は妻子老母あれば。其間は預り參らすべしといふに。次郎助も此言まことに然り。理をまげて申受給へと。四人交るゝすゝめて輟す。六助も今は辭する事能はず。終に蘭女を妻とするに究りければ。母も兩士もはなはだ悦び。互ひに別れを告。またあらためて別離の泪をながし。母妹は衣笠二宮に引れ藝州さして歸りける。春秋左氏傳を按ずるに。楚國の平王と云ふ人あり。無道にして讒を信じ忠臣を殺す。大夫伍奢といふものあり。男子二人を持てり。長を伍尚といひ次を伍員字は子胥といへり。平王讒を信じて伍奢伍尚を殺す。伍子胥は父兄罪なくして死を蒙りしを

怒り。楚國を脱れて吳國に走り。吳王闔廬を頼み竊に吳國に隠れ。楚を破り平王を殺して父兄の爲めに其恨みを報はんと思ひ。吳王に兵を借ん事を請ふといへども吳王闔廬敢て果さずこれに因て空しく年月を累ぬる間に楚の平王病を得て死せり其子米珍と云ふ人。國を受けてこれを楚の昭公といふ。伍子胥平王死したりと聞えしかども猶憤りやまらず。楚國に攻入て平王の屍を掘出してむちうたずんば寸恨晴じと。楚の昭公の四年冬十一月吳王をすゝめて大軍を起し。楚國に推寄所々の城々を攻陥し。忽楚王の本城を攻拔んとす。其勢破竹のごとくにして當りがたく。楚の昭公子西。鬬辛。玉孫由。玉孫圍。鐘建。鬬巢。申包胥。王孫賈。宋木。鬬懷と共に本城を脱れ。淮河といふ河を渉らんとするときに。國中の盜賊ども夥しく起り。楚王の携へたる金銀その外身に佩たる珠玉等を奪ひとらんと。王の舟を取圍んで攻る事はなはだ急なり。此とき楚王の妹季芊公主といふは美人にて殊に賢なりしが。盜賊等群がり來りて季芊公主を捕へんとするを。楚の大夫鐘建。自ら賊軍を追拂ひ季芊を脊に負て船より躍り上り危き難を助けたり。そのち楚國吳の爲に陥入られたるを楚國の忠臣申包胥と云もの。秦の國に走り。哀公に嘆き訴へ秦の大軍を借り來りて吳國の兵を追退け再び諸城を取返し楚國もとの如く治まりぬ。そのち昭公本宮に歸りて。功臣を賞美し。また季芊公主をば嫁せしめんとするに。季芊敢て從はず。堅く辭して申けるは。人に男女の別ありて女子人と爲ては男子を遠ざくる事常なり。然るにわれ前に事の急なる事眉を燃が如くなる時。鐘建がために負れて難を避たり。既に男子の手に負れたれば女子の道猥れたり何ぞ嫁すべきや。われ鐘建が妻となるべしと云り。昭公止事を得ずして其妹を鐘建に配せて妻とせりとかや。楚妹季芊は一たび鐘建に負はれて道を守りて他に嫁せず。吉岡が長女は一言の偽計を眞として六助に嫁を成し。和漢時異なりといへども。賢婦の道を守る事尙同じ後に六助加藤主計頭清正に仕へ貴田孫兵衛と名乗し後。井村治郎助が方より娶て妻とせり。却説一味齋が妻並びに菊女は衣笠二宮に従ひ藝州に歸りければ。照基卿兩使は敵討の訴へ三女が動作。次に小倉の君臣心を用ひられたる始末孝民六助が來歴。於齒が申せし事ども逐一言

上せしかば感涙を流し給ひ。其日母子兩人を召出され。誠に汝等が輩は末世に有がたき孝貞。實は我國の面目なりと賞美まし。絹布金銀など賜り小倉へ使者を遣し厚く禮謝を盡され。其後衣笠彌右衛門に吉岡が女お菊を妻として下され。自然渠が腹に男子出生しなば。吉岡の家名を相續さすべしと命ぜられ。一味齋が妻には別に月俸を賜り豊にぞ暮しける。菊女は衣笠が方に嫁して後。男子數名を生し程に。三男を以て吉岡の家名を相續せさせられ。人と爲りて吉岡齋宮と名乗秩祿五百石を賜り家名大いに耀けり。經曰天地之性人爲貴人之行莫大於孝と云へり。天地をも鬼神をも感動せしむるものは孝なり。六助母に仕へて至孝至誠なりしかば。神明これに武力を與へ給ひ。吉岡三女が孝貞なれば天これを憐みて討がたき大敵に巡り合。加之廢れたる家名を復す事所謂孝より大なる事無にあらずや。戯か戯弄の繪虚事といへども淫欲の醜きを圖してこれを觀すれば。櫻兒も姪奔の機を含めり。忠貞孝信の諺を畫きて文几の側に具へ小兒物學びの間に翫ばしめ善を見ては善じ。惡を見ては惡んじなば。誰か孝子忠臣の情を感慨せざるものあらんや。子曰の唐囀は以呂波書後はいかて悟てん。丹青の脚む鼠鬚に書進びたる忠孝のむかし繪に。頑童をして萬に一ツも至孝至忠にみちびくことあらば。戲畫もひしりの手を助けつとほこらしきのみ。

編者曰殿下鎮西に下向まし。且六助を召れ相換台覽鎮西合戦の事どもは猶種々後篇に記す。

柳荒美談前編

柳荒美談前編 總目錄

卷之一

荒木又右衛門吉村由緒の事并丑之助生立の事
寶藏院樂傳坊鎗術妙を得る深智の事并丑之助鎗術稽古の事

卷之二

溝尾嘉源治劍術高慢の事并又三郎嘉源治試合の事
柳生家由緒の事并松實内膳惡謀の事

卷之三

又十郎宗矩所領の敵松實内膳を討つ事并柳生流一派を弘むる事
澤庵和尚座禪の事并山獵師團三郎が事

卷之四

澤庵和尚柳生十兵衛へ詠歌を送る事并十兵衛返歌の事
柳生十兵衛武者修業の事并三吉樂傳坊試合の事

卷之五

樂傳坊武術指南を止る事并荒木又三郎柳生三吉が門弟と成る事
荒木又三郎元服改名の事并荒木村山の神祭の事

卷之六

荒木村百姓 共亂妨の事并 又右衛門武術手練の事
柳生宗冬末期に又右衛門武術皆傳を授る事并 吉満明神由來の事

卷之七

川崎鐵之助と荒木又右衛門立合の事并 自源典膳荒言の事
荒木又右衛門自源典膳を打居る事并 又右衛門典膳が金看板を打碎く事

卷之八

荒木吉村ほけ嶽山薬師參詣の事并 和泉式部詠歌の事
荒木又右衛門慈悲をして盜賊に逢ふ事并 竹内鬼玄丹の事

卷之九

塚原卜傳荒木又右衛門初て對面の事并 又右衛門道中にて護摩の蠅に逢ふ事
池田信輝卿家系の事并 荒木又右衛門船中にて當惑する事

卷之十

荒木又右衛門箱根にて勇力を出す事并 江戸にて町道場を出す事
御簾本男達の事并 町家の若もの共荒木へ入門の事

卷之十一

荒木又右衛門吉村柳生家へ招かるゝ事并 柳生又十郎密通の事
又十郎宗多武者修行に出る事并 化物退治の事

卷之十二

泉岳寺猫塚の事并 又十郎箱根にて大山伏と試合の事
三村紀伊守妖怪と契る事并 又十郎江戸へ出府の事

卷之十三

柳生又十郎宗多勘當を許され家督相續の事并 二蓋笠紋所の事
荒木又右衛門柳生家の屋敷へ行幸事并 又右衛門柳生の屋敷にて兩刀鐵扇を取上らるゝ事

卷之十四

荒木又右衛門柳生飛驒守殿に御目見の事并 又右衛門吉村柳生流指南免許の事
渡邊靱負が娘を荒木が妻に送る事并 河合又五郎釣に行く事

卷之十五

又五郎水中に入て名劍を得る事并 又五郎悴又左衛門三浦竹之助を双傷の事
河合又左衛門衣笠靱負を討つ事并 宮脇久右衛門北野にて生酔とり押る事

卷之十六

渡邊金右衛門正宗の刀を懇望の事并 河合又左衛門再び渡邊に命を救はるゝ事
河合渡邊死去家督相續の事并 河合又五郎吉原櫻見物の事

卷之十七

河合又五郎頼智發端の事并 伯父靱負を謀る事
荒木又右衛門舅靱負へ諫言の事并 爺々婆々念佛講の事

卷之十八

本多家中間博奕喧嘩の事并名劍様し切の事
河合又五郎伯父渡邊靱負を殺害の事并又五郎阿部家へ立退く事

卷之十九

渡邊數馬父靱負を討れ忿愁の事并松平宮内太輔忠雄卿阿部家へ使節の事
近藤登之助使者へ返答の事并服部市左衛門ふたゝび阿部家へ使者の事

卷之二十

大久保彦左衛門頼智思慮の事并池田勘兵衛本家を謀る事
調市長松を若殿に仕立る事并笹川團右衛門謀にあふ事

卷之廿一

笹川團右衛門切腹の事并因州の荒尾但馬江戸出府の事
松平伊豆守奉書を出す事并大久保彦左衛門智辯の事

卷之廿二

大名御簾本江戸中騒動の事并松平伊豆守信綱肝膽を砕く事
宮内大輔忠雄卿病氣の事并半井通仙院法印の事

卷之廿三

宮内大輔忠雄卿毒藥にあたり逝去の事并池田家の一門奇合評議の事
松平伊豆守殿荒尾但馬乾上總へ御利解の事并御簾本五人東叡山へ寺入の事

卷之廿四

河合又五郎三州片濱へ旅立の事并御簾本八萬騎入寺を願ふ事
松平勝五郎家督任官の事并渡邊數馬主從二人忓討首途の事

卷之廿五

本多家由緒の事并大内記殿劍術出精の事
本多政勝卿免狀所望の事并大内記政勝卿天守にて雪見の事

柳荒美談前編卷之一

荒木又右衛門由緒之事并丑之助生立の事

抑伊賀の國上野の御城下小田の切通しにおいて荒木又右衛門渡邊數馬主從四人を以河合又五郎の大敵をきりくづしつひに本望を達する事を世に伊賀の水月あるひは乗かけ合羽などと表題にする事あまたなり是は三代將軍大猷院様の御代にて寛永十一年九月十一日の事にて城主藤堂大學頭高次卿折せつ御在城なれば御櫓にて此敵うちを御覽じて八方へかための諸士を數百人出されまことに軍のごとなり中にも荒木又右衛門はたつき天下の武勇數十人を切ておとし荒にあらたる形相ひとへに天狗のごとく世に荒木の小天狗といへり此荒木又右衛門の由緒を糺す所元來伊勢の國山田郡の内あき村と申邊土に郷士となりて代々村長をつとめ田畑をおほく所持して何不足なくくらし處天正十年六月二日織田信長京都本能寺において明智日向守光秀の爲に御生害なざるゝとき東照宮様は折あしく御上洛あそばし堺の町御逗留遊す所京都の一亂と申ゆゑおどろき給ひわづか四十五人の御人數にて伊賀路をへて御歸城あるところ途中御難おほくこれを伊賀の御なんと申夫より江州多羅尾の四郎兵衛のかたへ御入遊しうへにて御凌または伊勢路へ懸らんと遊すをりから百姓一揆おこり立留はあやふき事薄氷をふむがごとし此時多羅尾四郎兵衛御先に立て一揆を伺ふにあらき村の名主又右衛門と申もの元より入魂たるに依てこれを近付利解を申て神祖を御すくひ申さんと云ふ故に荒木村又右衛門も尤とや思ひけん一揆をなだめかこみをひらきて東照宮様を伊勢の白子の方へおとし奉る

神祖はやう／＼白子へ御入ありて角屋七郎治の忠節により御船にめさるところに又た才沼九郎兵衛の御難ありこれ

も七郎治の計ひにてなだめと／＼遠州へ御歸城ある其後多羅尾四郎兵衛はめし出されけるゆゑいまもつて代々御代官を相勤て高千六百石を頂戴いたすしかるに荒木村又右衛門は正直の生れにてやはり古郷に住居仕たくとの願ひゆゑやしき地ばかりをくだされて帯刀御免郷士となりてあら木又右衛門と號す其孫又右衛門とて敵討をして高名人なり天正の時代の又右衛門は極邊土に生れ他國へ出る事をきらひ侍にもならず郷子と成て田畑八十五石所持なし男女大勢めしつかひ村中のものうやまはれくらしけるその後一男をもふけこれを彦太夫と名付て跡式をゆづり樂いん居となりしが程なく病死におよびける其子の彦太夫も父又右衛門に似て正直けつばくのものゆゑ村中の上に立て用ゐられけるます／＼繁昌しけるが是二代目の彦太夫同村より妻をむかへ夫婦の中に壹人の男子をまうくこれを幼名丑之助と付たり慶長六年丑の正月の出生ゆゑ丑之助と號するよし關ヶ原大合戦の翌年の事にて日本國中のさわぎもやう／＼に納りまづは目出たきと申すはこの年たりこれより關東の勢ひつよく京都に所司代をおき五畿内は申すに及ばず中國西國まで政事を密々京都にて吟味さばきをなす徳川家にて所司代のはじめ奥平美作守信昌たり慶長六年より天下一統關東の御威勢になつきておなじく八年に東照宮様征夷大將軍に任じ給ふさて丑之助生れしを見るに世のつねの子供とはちがひ骨太にして大丈夫相合に自然と勇あり彦太夫喜び大かたならず蝶よ花よとたのしみしははや年月立て六歳にあひなり子供あそびにも竹馬に乗りあるひは竹刀をもつてやつとふやつとふと試合のまねをなす事毎日／＼なりむかし孔子は生れ子供の遊びにもそとをつらね禮容をもうくと論語の席にも見えしはこゝなり天地開闢以來の聖人たり生れ落より違ふはずなり丑之助も孔子とはちがひ朝夕竹をもつては打合うて遊びは奇代なりと父彦太夫これを見てこゝろの内にわが父は天正十年の亂に侍にめし出さるべきを御辭退申上しは残念なりやしきの地のみを拜領して郷士とは申せ共あはれ悴丑之助の體を見れば天然と武藝のまねをするこそ頼母しけれ子を見る事父にしかじとゆく／＼は武士に成たし花は櫻木人は武士と申也とその後慶長十二年の十一月十五日は丑之助が七ツの

祝ひに付酒肴おひ／＼と用意をなし當時江戸にては五歳にて袴着と申を祝といへども在／＼邊士は男女とも七ツの年を祝ふなり田舎の風儀なりさて慶長十一年に東照宮様大御所様と申奉り御二代目台徳院様は將軍に任じ給ふ其翌年は十二年丑之助七ツのいはひこのとき丑之助は父彦太夫のまへにひざまづき申やうは私儀劍術をおぼえたく存じ候なり何卒稽古の儀おゆるしくださるべしと願ふにぞふしぎなりと父彦太夫はこれを中心の中におもひよろこび梅檀は二葉よりかんばしきにほひあり虎の子は生れて百日たつと獸を取りくらふおそろしく我子ながらも七歳にて劍術をおぼえん事を願ふはかんにたへたりと心にはよろこびける

或人のいはく七歳にて父へ願ふは虚談ならんと申左にあらす天正四年尾州森山の御本陣にて徳川治郎三郎清康公物の間違ひとは云ながら安部のために村正のかたなにてきり殺され給ひ大騒ぎのをりかたはらにありし植村新六郎七歳の幼君にて一尺三寸の脇ざしを引ぬき主人のかたきと飛かゝりて安部彌七郎をつきころすと申がやうの事も是有なれば七歳にて父に願ひし事は違ひなし父彦太夫も常の様子かた／＼丑之助をゆく／＼は士になさんとこゝろえたるゆゑ悦びよきかなんぢが申分随分劍術をしへ遣すべしと是より彦太夫をり／＼木刀をとつてをしへけるに七歳とは見えす飛あがりはねこえ其はやすき事かざるふのごとくにしておそれをなしける器用なりしかば彦太夫は心中におどろき随分能先生にまなばしなばゆく／＼は上手共成て士になるべしと所々を問合ける所に近頃近國にての評判は大和國の奈良の町に寶藏院樂傳坊因成と言ふ劍術と鎗を指南し門人あまたありと聞及ぶゆゑさてこそみぎの樂傳坊を頼まんと傳手を求て願ひに出けり

寶藏院樂傳坊鎗術妙を得事并丑之助劍術稽古の事

その一、寶藏院樂傳坊と申は古今の名人にて丑之助を四弟子に遣す時は二代目の因成と申先代因成といへるが寶藏院の元祖なり鎗は楠正成が家人たる天野了間と申もの長刀をやめになし竹の先へ大かぶら矢の根を付て用ひしに利分よしとて鎗をはじむこれ則鎗の元祖たり去ながら不鍛鍊にてはとかく遣ひにくしと用ゆる人もすくなきところ天文年中織田備後守代鐵砲と鎗とに利ありともつばら鎗を用ゆこれより種々流義はじまる寶藏院流はこの樂傳坊が元祖なりあるゆふがたに月のはじめ三日の事にて樂傳坊が川ばたへ出しに小笹の内よりさつと飛出すは頼と申けものなりこはおもしろしと素鎗をしごきかほうそを突伏せんと日頃の手練はこの時なりと突立しに少しの事にて突そらしけるゆゑ口をしやと突たる鎗を其まゝ口にて喘息をつき伺ひしにかりふし三ヶ月素鎗の柄にうつり十文字の如くに相なりしは水面ゆゑなりさてこそめづらしや月の輪が此素鎗にあるならば獺をつき留ふに殘念なりとおもふこゝろより工夫をこらし素鎗を十文字とすよつて寶藏院の三日十文字とは此時よりはじまるといふ

またある説には樂傳坊毎日／＼やりに心をうつして心を勞するに奇々妙々の手をかんがへ我こそは天下の壹人なりと少し高慢の心おこりて魔のさすはいくらもある事なり十歳ばかりの美童來りけるが玉をあざむくごとき童子にて今晩罷り出しは先生の御高名天下にとどろくによつてはる／＼のところたづね來る御指南を願はんと申を樂傳坊見とれ前髪立の幼年にて水色の狩衣烏帽子を着て下人のやうにも見えず然ればといづれ歴々の子供ならんとていねいに取あつかひ願のごとく御指南申さんと右の童子へ鎗ををしへしにわづか二三度もかよふうち妙々の法をおぼえ此方の手練をはやくもさととりて奇代の名人となりいまは鎗と鎗との試合ひにあやふき體わづかのうちに十歳の童へをしへる事もなくなり骨のをれる事大造にてのち／＼は童子に辟易して舌をふるひけるある日かの童子笑らひながら申よう先生の鎗の手練随分よしといへどもをしかな妙と云ふ事には至らずわれ此間先生にしたがひてまなぶ事五七日なれども妙と云ふをおぼゆ其位の手際にてあめが下に唯一人と思ふはあやまりなりねがはくは明晩先生と眞劍の勝負をして奇々妙々の所を御覽に入れんかならず御まぢあれというて立かへるさす

がの高慢たる樂傳もおそれをなし童子はまさしく人間にはあるべからず明晩來りて眞劍の勝負とやくそくなれば
 死るとも立合ずんばかならずいかゞせんともみづから夕方に川ばたにて素鎗を取つてりふ／＼としごきか
 く致さんやあゝすべきやと一心にこりかたまり南無天照大神宮春日大明神八幡大菩薩日本は神國なり妖怪のわ
 ざはひに川合うて明晩眞劍の勝負して相果るは残念なり守らせ給へと水面の所にて工夫せしにふしぎや三日月の
 水へうつり素鎗のさきへかゝりて十文字のごとくに成ければさて鎗先が月にうつり自然と十文字に成ておもしろ
 うてのをしへと大に悦び明晩のしあひに工夫をなして十文字となし童子を突ふせんとにはかにこゝろづき十文字
 の用意して翌晩を相まつにいかゞしてか童子は來らずこれまつたく妖怪のわざはひと見えしが樂傳坊鎗に心をつ
 くす事かくのごとくよつて妖怪も災ひする事ならざるゆゑ此後は來らず斯のごとく月の水にうつりし所より三日
 月十文字とてつばらは是を用ゆ清光月の傳とて柳生流の劍術もこれよりはじまるしかる時は樂傳坊鎗計にあらず
 劍術まで達人なりよつて門人多く繁昌しけるとなり

さて彦太夫は此評判を聞傳手をもとめて悴丑之助を連れて奈良へ來り門人たらん事をねごふ是八歳の時なり樂傳坊悦
 びそれはよき心がけなり八歳の童なれども當分はそれがし傍遣ひにしてをり／＼指南すべしと受合ける彦太夫はうれ
 しく何分にも御預おき申候と一禮におよび荒木村へかへり入用は仕おくりをなし萬事たのみける樂傳坊丑之助をつ
 くづく見るに入歳とは見えぬがらにて才發ゆゑひとしほ不便をくはへ教へをり／＼は試合などいたしけるに一を聞
 て百をさとの才智にて殊の外立ふるまひとも器用なり丑之助は生れ落より劍術をおぼえて侍にならんとおもふ
 三ツ子のたましひ百迄と申ごとく一心ふらんに鎗と劍術を學ぶ事他事なく樂傳坊は丑之助のやう子を見てめづらしき
 小僧もあるものかなゆく／＼は日本無雙の達人ともならんと見ぬく所もまたすさまじき先生なりかれこれ年月立て十
 四歳とは相成りける前後七ヶ年のうち稽古懈怠なく好まきこそものゝ上手なれとたとへのごとく目にたつやうなり樂傳

坊申にはいつ迄幼名の丑之助とはいかゞに付改名せよと云ひ聞せ又三郎とあらたむ然るに彦太夫も折節奈良に來りて
 は悴の上達を見て悦び金銀の入用諸色のみつきなどして一人の悴侍になさんとこゝろがけけり

柳荒美談前編卷之二

溝尾嘉源治武術高慢の事并又三郎嘉源治試合の事

爰に大和の國鮫村といふやま付に溝尾嘉源治と云ふあらものあり樂傳の門人と成て鎗術劍術を學び高名のやう子もつとも人を眼下に見て憎まるゝものなりとかく又三郎が心には叶はず又三郎十四歳とはいへども劍術の器量上達を樂傳よろこびゆくはわが跡を又三郎をもつて繼せんものと申を聞て溝尾嘉源治心中にいかりを生じ口をしき事かなおそらくは門人の内にて此嘉源治におよぶものなきに小せがれを寵愛なしほめそやすは憎き奴なりいかゞして吳んと大勢の居る所にて荒木又三郎をたゞき伏て目にあはせんと先生の留守を見て嘉源治門人中へ申やうおのゝがたはいかゞ思ひ給ふや荒木村の又三郎八ツの時より當院へ來り劍術を習といへども高が六七年の成功なりそれを才發器量ものとほめそやしゆくは先生の跡つぎとは片はらいたき申分唯今又三郎を呼て此嘉源治立合をなしてくれんと申を門人どもとめて申やう溝尾氏さんぐの不了簡又三郎は年とはちがひよほどの上達先生も舌をふるふ事なれば萬一貴殿が負なば恥のうへのなほはぢまた勝たる所が十三四歳の童子を相手にしてはおもしろからずひらにとゞまり給へと云ふに嘉源治頭をふりいや／＼とゞめ給ふな日ごろ高慢顔のにくさ／＼是非立合をしてひどき目にあはせんと又三郎を呼び出しに貴さまはとしにも似合さるこさかしきもの劍術の稽古を六年や七年したれば逆なかくもつて上手と云ふに至るべきや此嘉源治は今年で二十年の星霜をおくりしなり何と大勢の見る前て一勝負をせざるやそれがしが事は一番弟子の事ゆる代師として一本教へて進上申べしさりながら幼弱の貴殿なればかふいたすべし左りの手をは帯にはさみ置右の手にて立合ん隨分いたぬやうに致すべしとあ來れと立あがるゆる荒木又三郎は隨分如法の

生れなれども嘉源治の高慢をばあまり過たりふらちと思ふに付うち笑ひ溝尾氏御邊高慢はあまり過たり世の中にわれより上手はなしと思ふはまよひなり上も下もかぎりなきは天下廣大なるゆゑなりたゞいまの仰にも左りの手を帯にはさみ右の片手にてそれがしと勝負せんとは大言なり左やう御方と立あひがたく御斷申候と引退くを嘉源治はやれまてと又三郎の袖をとらへ唇黃にして片手をふそくと思つてかたく斷とは舌長し是非に一太刀來れよゆるしはせじと無體に道場へ引入る其の時又三郎頭をふり御無用／＼ひらによし給へまづかんがへて御覽あれそれがしは當年十四歳の若年なれば負たところが恥にもならず御邊は當院にては一番の高弟先生のかはり門人へもをしへ給ふ御身分萬々一それがしに負るならば恥をさらし是迄の御修行に疵がつくと云ふもの氣の毒千萬こゝを考へて立合はよし給へ御爲を思つて申のみといふを嘉源治これを聞けと鬢髮ふる／＼となし面色變じいかに又三郎最早かんにんならずなんぢ口が横に明たればとて言度まゝの大言さあ來れと木刀を取て嘉源治あざ笑ひ又三郎たかが十四歳の小腕口計り達者のやつと十分あなどり道場のまん中へつと立上りさあ來れ／＼と木刀を上段にかまへしは何さま仁王のあれ出したるにことならずはつたとにらみしといへども荒木又三郎は此形相にすこしもおそれず一番の御高弟いざおだし給ふなと詰寄る溝尾嘉源治はいつたうの下に打すゑてこり／＼させんと眼下に見しにふしぎや又三郎が付し木刀の先きがちらちらと兩眼の間だに付て少しもはなれずこれは／＼と心中におどろくといへども十四歳の童無利にうちくだかんとやつと一聲さけび打ちおろし又三郎心得たりと溝尾の木刀を弓手へさつと請留どつこいと少し動かず大磐石のごとく此時嘉源治南無三寶と二の太刀をもて付んとすれば又三郎の早わざ參つたりと付こみ來たり憚りと横に拂ふゆゑさしもの嘉源治請そんじ右の小手をしたゝかにはらわれしゆゑ持たる木刀はつんとちうへとびあがる此時又三郎小敵とあなどる事なかれと云ひながら溝尾の眞面をはつしとうつこの當りつよくして大の男たる嘉源治もあつと云うてうしろさまにどふと倒れける此時諸門人は又三郎のはたらき手の内の有さまに舌を巻いておそれけるさて／＼荒木氏は天狗

でも附そへるにやと一度にとつと小天狗こてんぐとほめそやしける然るに樂傳坊は又三郎の手なみを聞いてひとしほよろこび子供の時分より世話をせし甲斐ありゆくは我跡をふまへせんものと彌やま鎖さ鎖さともに指南をなすいまは南都の樂傳坊の門弟にては荒木又三郎にならぶものなく一番の高弟と相成もふしぎなり古語にも申如くすきこそもの上手なれと古人の金言何の稽古にても其身好んで身を入れてまなぶ時は名人となるべし傍にて何やうに世話をしても好まざる藝は左程にならぬものなり樂傳坊は門弟多く日本に我れくらゐの達人はあらじと高慢をしけるあまりの高慢におよぶは至らざる所と云ふ藝術に限らずもはやこれにてよきと申事はなき事なりまた其うへのある事限りなしすてに樂傳坊は高慢つよく所々へ高札を出し浪人もの武藝の達人とうを呼入て試合をいたしづれも打たゞきひどき目にあはせ追返しよ／＼高くとまる所へ壹人入り来るは柳生十兵衛三吉といへる古今の名人たるゆゑにさしも高名たる樂傳坊も柳生十兵衛のためにたゞきふせられ武藝をやめ門人をゆづると云ふ此の柳生十兵衛三吉と申は柳生但馬守宗矩の惣領にて天下の名人右の十兵衛の門人荒木又右衛門なり

柳生家由緒の事并又十郎劍術修行の事

叔柳生の家はもとれき／＼にて宇治攝津守頼通卿より大和の人に春日の社に四ヶ所の所領を下され其時代は田地にて領する一千町と號すこれを當時にくらぶれば五六千石のわけなり頼通卿の末孫にて永家の孫と申す播磨守永陳といふ其弟は同國笠置寺の中坊にて無双のあら法師此入道元弘のころほひ官兵にくはり楠正成をすゝめて旗をあげし入道なり中坊の強勇なる事尋常ならず所々の合戦に高名多く是に依て大和國柳生を拜領なすしかるに笠置寺の中坊こゝろの内に思ふはわれらは清僧の事にて子孫はこれなき身ゆゑ所領は無益ゆゑ兄播磨守へゆづりてしからんと此事を正成へ願うて柳生の地を見へゆづる兄の永陳よろこび弟中坊の拜領せしを申し請て代々柳生の地を領し地名

を苗字として柳生を名のり是よりおよそ十八代を経て柳生美作守家吉と云うて廉直の君子なりとの評判さりながら小身なればよんどころなく時のいきほひにしたがひ代々の所領一千町を持こたへける然るに近年召抱し家人松室内膳とて才智と云ひ武勇と云ひならぶものなくよつて一老職となし一千町の地を内膳にまかせ置しに此ものは關東浪人にて古今の悪もの亂世のころなればつく／＼と考へて大身に成て松室の家を起さんと思ふなれども急に立身の手あてもなく柳生の地をおのれのものにせんと筒井順慶の家老たる松倉豊後が家へ取入り追從輕薄をもつばらになしをりにふれては主人柳生美作守を讒言なす爰は太平とはちがひ亂世の時節ゆゑ内膳の讒言を實と思ひ松倉豊後守より順慶にあしく言なすに依て順慶も柳生をば少しうたがひを生ずるなり此をり松室内膳主人父子をひそかに毒害して後しきなきところを領せんものとくはだてたり其毒藥の用意をして美作守父子の膳部へ入んとせしに又十郎はやくもこれを知りて父へ知らすゆゑに美作守殊の外立腹なし主人を殺さんとなす大悪人切て捨んといかるを松室内膳ふかくおそれて身のをさめながたく筒井順慶のかたへかけ込んで主人を讒言するおもむきおそれ入つたる事ながら當國の太守たる入道様を討んと主人美作守謀反をくはだて松永彈正久秀と合體なしはかりごとをめぐらしたりあまり勿體なく御訴へ申上奉るといふ其の時代松永彈正と筒井順慶とくわくしつ最中ゆゑ一應のたゞしもなく内膳の申を聞いて不埒の美作守なりさあらば此方より討手をつかはし謀反人の柳生父子をきり捨よと筒井の老臣まづ倉豊後守三百騎をしたがへておしよする此事夢にも知らざる事なれば美作守父子肝をひやし申披をせんとすれども亂世のころなればがさと八方より取りかこみけるに陣屋城なれば要害あさまにて人數はすくなし口をしがりて美作守主從三十餘人にて切て出て一方をやう／＼打やぶり父子二人一命は助しが今は上方すぢは大身たる筒井家に奪はれせひなく諸國を浪人しけり

また一説は筒井へ隠出の事を申たてしともいへりいづれうたがひを請代々の所領十八代目にてうしのふは松室内